惑星ゴーカーの冒険

「安徽農民外星球一ヶ月見聞」

作者張祥前交流マイクロ手紙 18714815159

カタログ:

作者：張祥前君です
メール：zzqq2100@163.com
お電話:+86 18714815159 です。訳者:李文静君です
メール2160763434@qq.com
お電話:+86 18655256091です。

著者プロフィール

はじめに

1、家から連れ去られる

二、飛行中に空飛ぶ円盤について語る

3、ゴークシャー超光速通信

四、ゴークシンの空飛ぶ円盤倉庫

第五に、グローバルな公共情報ネットワークであるゴークシンに初めて出会う

六、ゴキシン通りに足を踏み入れる

七、テレポーテーションとグローバル公共運動ネットワーク

8、面白いゴーカイジャー

9、ゴク星人はなぜ地球人を誘拐したのか

十、宇宙における陸上人種と水上人種

十一、ゴク星人の奇妙な性行為

十二、ノートンが宇宙のすべての生命の起源について語る

十三、宇宙に人のいる星はたくさんあるのか

十四、ゴク星人の宗教

15、初めて健康診断と人体実験を受ける

十六、身勝手な振る舞いをするゴク星人

十七、私の宇宙人のガールフレンド

十八、雲の中を歩く

19、海底潜水

二十、海底蛇人に侵略される

二十一、ゴーク星人工場のコントロール・センターを見学

二十二、光の仮想人間

第二十三章ゴーク星の時空冷蔵庫

二十四、ゴーク星の人体複製工場を見学

二十五、ゴーク星の新型人種

二十六、ゴク星人の等級別居住

第二十七話ゴーク星の金

二十八、ゴーク星系のリーダー

二十九、仮想旅行

三十、遠隔セックスを体験する

三十一、ゴークシンの三次元バーチャルコンパニオン

三十二、セックスの場

三十三、遭電妹、条妹負傷

三十四、近隣の惑星を訪問

三十五、水星でハイジャックされる

三十六、海底両生の巨人への贈り物

三十七、紫の泥の世界

三十八、ゴーク星系の科学者に会う

第 39 章ゴークの科学者が語る意識、魂、輪廻

四十、帰還

著者プロフィール:

作者張祥前、安徽廬江県人、男、農民、中学レベル,1967 年旧暦 8 月 26 日、安徽省廬江県金牛区牛首公社王渡大隊小胡郢【現・廬江県台創園北墟村第 4 村民組】に生まれる,現在は 3 キロ離れた廬江県同大鎮二龍新街 111 号に移住し、電気溶接と自転車修理を生業としている。

著者コンタクト 18714815159

微信 zhxq1105974776 または 18714815159

メールアドレス zzqq2100@163.com

著者の前書き

7 歳か 8 歳くらいの頃、一人で砂の上にガチョウを放していると、突然目の前を霧のようなものがすばやく動いているのが見えました、そのうちの一つが私に飛びかかってきて、頭がガンガンするような感じがしました,目の前が暗くなると、人は思わずしゃがみ込んでしまい、長い時間が経ってようやく我に返り、目の前の霧がきれいに消えた。

空飛ぶ円盤は見えませんでしたが、西の空が赤く光っているのが見えました。午後から夕方にかけてのことでした,その頃は太陽の近くに赤い雲がたくさんあったので、空飛ぶ円

盤のようなものがあっても気にしませんでした。

これは子供の頃に経験した一番不思議な出来事で、今でも記憶に残っています。

12 歳か 3 歳くらいから、夜になると、別の星に住んでいる夢を見るようになりました。

この星には植物はほとんどなく、地上には人が住めないようで、人はみな深い地下に住んでいる。人々は、地上と地下をすばやく行き来できる、すばらしい乗り物に乗っていた。

私が一番印象に残っているのは、この惑星には地上にも地下にも、特に巨大で複雑な建物がたくさんあり、そのほとんどが鉛色の金属製です,この惑星には緑の植物がありません、単調で暗い色です。

たまにこういう夢を見るのはおかしなことではないが、何年も、長いあいだ、そしてときにはとくにはっきりした夢を見ると、その背後にある理由を考えなければならないことがある。

本人は子供の頃に何度も不思議な出来事に遭遇しており、その原因は宇宙人との出会いにあると推測されている。

特に私は子供の頃に重度の腎炎を患い、その頃家族は極

度に貧しく、病気で治療を受けられず、またいつも空腹で、母の家では 6 人のうち 1 人しか生きられず、父の家では 9 人、2 人が死んだ。

当時は病院に行ける状態ではなかったのですが、死に際に宇宙人に助けてもらった記憶がとても強く残っています。

目の病気もありました、ひどいもので、半年間、一度も治療を受けませんでした。

ときどき母親が訪ねてきて、目が開けられないときに唾液《だえき》を塗ってくれただけで、効きはじめたが、そのうち効かなくなった。

しかし母は一銭も持っていなかったので、私を病院へ連れて行って治療することはできなかった。当時の家庭は極度に貧しかっただけでなく、人々は非常に愚かで無神経であり、多くの子供が死亡し、家族のメンバーの悲しみのレベルは、現在、子猫や子犬が死亡したよりもはるかに優れています。

私は最終的に目が見えなくなり、歩くことができず、一日中ベッドの端に座っていました。

わたしは子供のころ、何度もオカルトに連れていかれたが、そのとき、オカルトたちを見ても、怖いという気持ちは

なかった。この不思議な人たちがやってくる前は、来る、来る、やっぱり本当に来る、という予感が強かった。

彼らがやってきたとき、わたしはまず壁が赤くなっているのを見た。いずれも夜がわたしをベッドから連れ出し、そのまま壁を通り抜け、朝になるとわたしのベッドに運んできた。わたしも一時は夢ではないかと思った。

あるとき、送ってくれたので、村の牛屋の前にあるわらぶきの上に乗せてくれればいいと言った。

翌日、私は草の上で眠り、登りました

起きて家に帰ると、母はもう起きてドアを開けていて、掃除をしていて、私がどこから来たのか聞いていませんでした。

何年もたってから、自分が子供のころに起こったこの奇妙な出来事は、夢だったのではないかという気がしてきた?

しかし、わらの上で眠っていたことはまぎれもなく真実であったので、私はこれらの出来事はすべて夢であるという考えをきっぱりと否定した。

1985 年の初夏、私は 19 歳の時に宇宙人と再会し、1 ヶ月間宇宙旅行をしました。

私が 1985 年に宇宙人に会ったのは、私が 19 歳だと言っていることを反映して、たくさんの手紙を外の世界に送ったからだと確信しています。

農村人の数え年の計算によれば、私は 1967 年生まれで、1985 年に生まれたはずだ。宇宙から戻ってきて、カレンダーを見ていたわけではありません、証拠を探すつもりもありませんでした。

しかし、われわれ地球では、たった一晩のことで、彼らの時間はわれわれとは違っていた。

これが最後だったので、宇宙人とはもう連絡がとれなくなり、会うという連絡はもちろん、テレパシーといった連絡もなくなってしまった。

今回も記憶があまりはっきりしていないので、彼らによって記憶が乱されているのかもしれない。

しかし、私は大人なので、ある程度の思考力と判断力があり、異星人から得られる情報は膨大です。

これまで宇宙人の誘拐に関する雑誌を読んでいたのですが、19 歳の時に宇宙人と接触を始めたとき、この変な人たちは宇宙人かもしれないと漠然と思っていました。

今回の旅で得られた多くの貴重な情報は、その後の私の人生にも大きな影響を与えました。

さもなければ私は 1 人のおとなしい、思想はやや保守的な普通の農民、人生は妻を娶って子供を産み、平凡な一生を過ごして、能力があるはずがないネットでそんなに多くの文章を書いて,特に宇宙の神秘、時空、フロンティア物理、人間の生死、輪廻、魂に関する記事。

私は本を読んでとてもよく勉強して、とても勤勉で、先生が配置した宿題を完成することができるだけでなくて、自分からすすんで問題をやって、しかし知能は平凡で、結果は普通です。

私は中学を卒業して高校を受験するのですが、その時は予備試験が必要で、予備試験に合格して初めて正式に高校を受験する資格がありました。残念なことに私は予選を通過できず、浪人して一年たっても、やはり予選を通過できなかった。

私は高校に受からなかったので, 学校を中退して家に帰って畑仕事をしなければならなかった。

それからというもの、私は生計に追われ、昼は働き、夜

は漁をし、本にはほとんど手を触れなかった。

当時、農村では本が手に入りませんでしたし、特に高校レベル以上の教科書は近くの三河町にはまったくなく、町には高校以下の学習指導資料や娯楽のための本が少ししかありませんでした。しかも、わたしの行動範囲は、わたしの家から数十キロメートルのところにあった。

宇宙の神秘や最先端の物理学についての知識をどうやって手に入れたのか、いまだによくわからないが、宇宙人が関係していることだけはたしかだ。

私たちの地球上では、一人で旅に出て、帰ってきてから旅の経過を振り返ると、普通は時間の順番に従って、旅の経験のイメージが頭の中に映画のように一つ一つ現れる。

しかし、この旅行の記憶画面は不連続であり、時間の前後が乱されているのかもしれず、それらの出来事が先に起こったこと、それらの出来事が後に起こったことを知らない。

連続した映画を見るのではなく、たくさんの写真を見る人のようなものです。

彼らの惑星では、あなたはおそらく、死の脅威に直面している恐ろしいシーンで、次の秒の種類で、最後の秒を過ご

しました,彼らの移動手段である高度にインテリジェントなグローバル運動ネットワークは、自動的にあなたを安全で柔らかく快適なベッドに連れて行くことができ、入ることも出ることも省略することができます。

彼らの社会は高度に仮想化された社会であり、しばしば私はそれらが仮想シナリオであり、それらが実際のシナリオであることを区別することができません。

彼らの惑星では、実際のシーンとバーチャルなシーンが、自由に切り替わることがある。

あなたは間違いなくバーチャルシーンにいると確信していましたが、何が起こったのかわからないうちに、突然あなたの周りが現実のシーンになりました。

あなたは確かに実際のシナリオにいたはずですが、どういうわけか突然バーチャルなシナリオになってしまいました。

普通の宇宙人との出会いとは異なり、今回は宇宙人との接触で、私が得た宇宙人の多くの情報、特に科学技術情報は、宇宙人の言葉ではなく、直接教えてくれました,あるいは他の方法でコミュニケーションしたり、学習したりするものです。

まるで宇宙人の意識と通じ合っているような感じで、宇

宙人の意識が私の意識の中に入ってきて、私は宇宙人の一部の記憶を持っていて、その後ゆっくりと思い出すことによって、やっと把握したのです。

あるいは、彼らが人工的なフィールドスキャン技術を使って、フィールドという目に見えない物質を通して、私の脳に多くの情報を入力しているのかもしれません、現在のコンピュータのダウンロードのように。

彼らの星には教師も学校もなく、人々は知識を得て、フィールドスキャンを使ってその知識を直接人間の脳にスキャンします。

人工的な装置で何度も私の脳と体をスキャンしているので、知識を送っているのか、それとも別の実験をしているのかはわからない。

しかし、私が得た記憶情報、特に記憶画面は非常に多く、連結しているため、これらの記憶情報は非常に貴重なものになっています。もちろん、そこには私自身にもいまだに説明のつかない秘密がいっぱいある。

私は地球外生命体から戻ってきたばかりで、彼らの物理学の公式や数学の方程式をたくさん覚えていて、それを練習

帳に書き留めていました。

あるときテーブルの上に置いたまま、兄が水を飲んで湿らせてしまったので、私は兄に、このノートに書いてあることが大事だと言い、湿らせてはいけないと叱った。

おそらくそれは兄を怒らせ、その後、ノートは私の兄によって引き裂かれ、ほんの少しだけ残っていますが、残りはどこにありますか?兄に聞くと、トイレの中だという。

トイレに行っても見つからず、聞いても無視され、わずかに残っていたものも後でなくなってしまった。

それから 40 年近くが経ちました、宇宙人の科学理論について、多くの言語や、重要な物理学の方程式を覚えています、宇宙の 4 つの力を 1 つの方程式にまとめた、大統一方程式です,一般化された運動量の方程式、時間、光速、質量、電荷、エネルギーの定義の方程式など、残りの多くは曖昧であるか忘れられています。

私が宇宙人に遭遇したことがネットで発表されると、世間の多くの人から注目され、上海宝山テレビ局に取材されたことがある。しかし、番組の審査が通らなかったため、テレビで放送されることはなく、インターネット上では今でも検

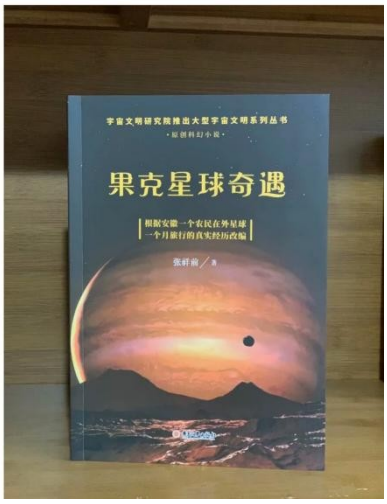
索できます。

十数年前、私はネット上で次々と宇宙人に出会ったことを発表し、ずっと自分の宇宙旅行の体験を書きたいと思っていた。

しかし、当時、私は小さなスーパーマーケットや溶接修理部門を運営しており、一日中生活に忙しく、インターネットにアクセスする時間はほとんどありませんでした。

その間、関係機関からの警告電話と口頭での警告により、私の宇宙旅行に関する見聞は、世間の不必要なパニックを引き起こすことのないよう、 sf ではなく実際の出来事の報告として書くよう求められた。

数年前から sf 小説形式の『ゴーカー星の冒険』を書いていたのですが、インターネットで配信できなかったので、ネットで読者と会えるようにするために、仕方なく修正して、面目を失うほど修正してやっとネットで配信することができました,今ではほとんど削除されてしまいました。



こうした情報を広めることが許されない現在の環境は、過去数年間の取り締まりよりも厳しい。これらの情報を広めるために、私は何度も公安に呼び出され、処理された。

あるときは、今後これらの記事をネット上に掲載しないという保証書を書くよう求められたこともあった。

その時に書いた保証書は、今でも彼らの手元にあると思います。保証書が印刷されていた可能性があります。

警察が訪ねてきて、私のファイルを調べたり、携帯のメッセージをチェックしたりして、家族に恐怖を与え、義母を泣かせました、妻は何度も激しく言い争っていました,インターネットに、こんなメチャクチャな情報を、載せるべきではなかったと。

私が宇宙人に遭遇したことがネットで暴露され、あるネ

ットユーザーは長期にわたる単一情報の影響を受け、一種の頑固で硬直した思考を形成し、これを受け入れることができず、極めて反感と排斥を感じている,頻繁に通報されました。

多くの人から通報を受けたため、ある人は十数年間も私を通報し続けたため、多くのサイトが私をブロックし、特に私の新浪ブログがブロックされた,重要なエイリアンのフロンティアの物理理論に関する記事の多くは、バックアップがないため、損失は取り返しのつかない損失を引き起こします。

頻繁な告発によって私の微信は何度もブロックされ、現在私の微信はしばしば告発される警告を受け、微信のある機能は現在も制限され、微信支付はしばしばブロックされている。

私の現在の抖音アカウントは、あまりにも多くの人が通報しているため、依然として制限されています。私のアカウントも制限されています。

地球外生命体の中で、私が最も被害に遭ったのは性的暴行で、最も多く、最も鮮明に覚えているのもその内容だ。

しかも彼らのセックスの仕方は、われわれ地球人から見れば極度に変態的で不健康なものだった。例えば、多くの種

間の性行為、人間と半人半獣(人間と動物の合体であり、一部は人間のように、一部は動物のように)間の性行為。

そういうところを全部書いてしまうと、我々の社会では許されないのではないかというふうに思いますので、そういうところについては、いろいろなことはよく覚えているんですけれども、全部を書いてしまうのは困るんですけれども,典型的な出来事を書いただけです。

それに、彼らのドラッグや、幻覚剤や、幻覚シーンや、幻覚装置などについては、われわれ地球にとってもマイナスで書かれていなかった。

エイリアンは、私たち地球人の言葉をよく理解していて、私との会話では、方言や話し言葉、遊び言葉まで使います、地球上の人類の歴史についても、よく知っています,地球の有名人たちは、口を開けばやってきます。

多くの読者はこれを信じていない。

彼らは地球上の動物と頻繁に会話することができ、私たち地球人との会話よりも動物との会話のほうがはるかに困難であり、あなたは彼らが異なる種と強力なコミュニケーション能力を持っていることを学ぶことができるはずです。

人工的に一人の地球人の脳をスキャンすることによって、その地球人のすべての記憶、思想意識情報を呼び出すことができるというのである。

何人かの地球人を誘拐して、その脳をスキャンすれば、そこにあるすべての情報を引き出せるーー」,そうすれば、彼らは地球上の言語、社会、人文などの多くの情報を把握することができます。

しかし、私は読者の質疑によって不必要な論争を引き起こすことを恐れていたので、彼らの言語に出てくる私たち中国語の洒落《しやれ》や方言や口語の多くは書かれていなかった。

地球に潜伏している宇宙人、地球人の未来、地球の未来に対する一部の中国、北朝鮮の未来の行方、政治家、聖人の出現など敏感な内容も含まれている。

社会的に認められ、ある程度の知名度、社会的地位があってから、この方面の内容をきちんと書くことを考えたいと思います。

今書いていると、自分と家族を守ることができず、自分と家族を非常に不利な立場に置くことができません。だから、

この本はまだその方面のことは書いていない。

異星への旅では、自分では説明できないこと、わからないことが多いうえに、記憶が曖昧《あいまい》で、うまく説明できない問題があるので、読者の方には理解していただきたい。

また、一部の読者が開放的で包容力のある態度でこのことを見て、自分が受け入れられないことについて一方的に非難したり、罵ったり、告発したりしないことを望む。

考えてみてください世界で最も人口の多い中国で何十億人もの人々が奇妙なことに遭遇しているのではないでしょうか?

この記事では、宇宙人の生活を紹介する上で、これまで人々が知らなかった多くの詳細を明らかにし、実際の宇宙人、宇宙人の日常生活に対する大衆の好奇心を満足させることができる,また、広範な科学研究者に啓発と参考を与えることもできる。

この本を読んで、高度に発達した地球外の技術と生活、社会構造、宇宙人の倫理道徳、宇宙人の外観、身体の内外の構造などについて、あなたはおおよその理解を持っていると

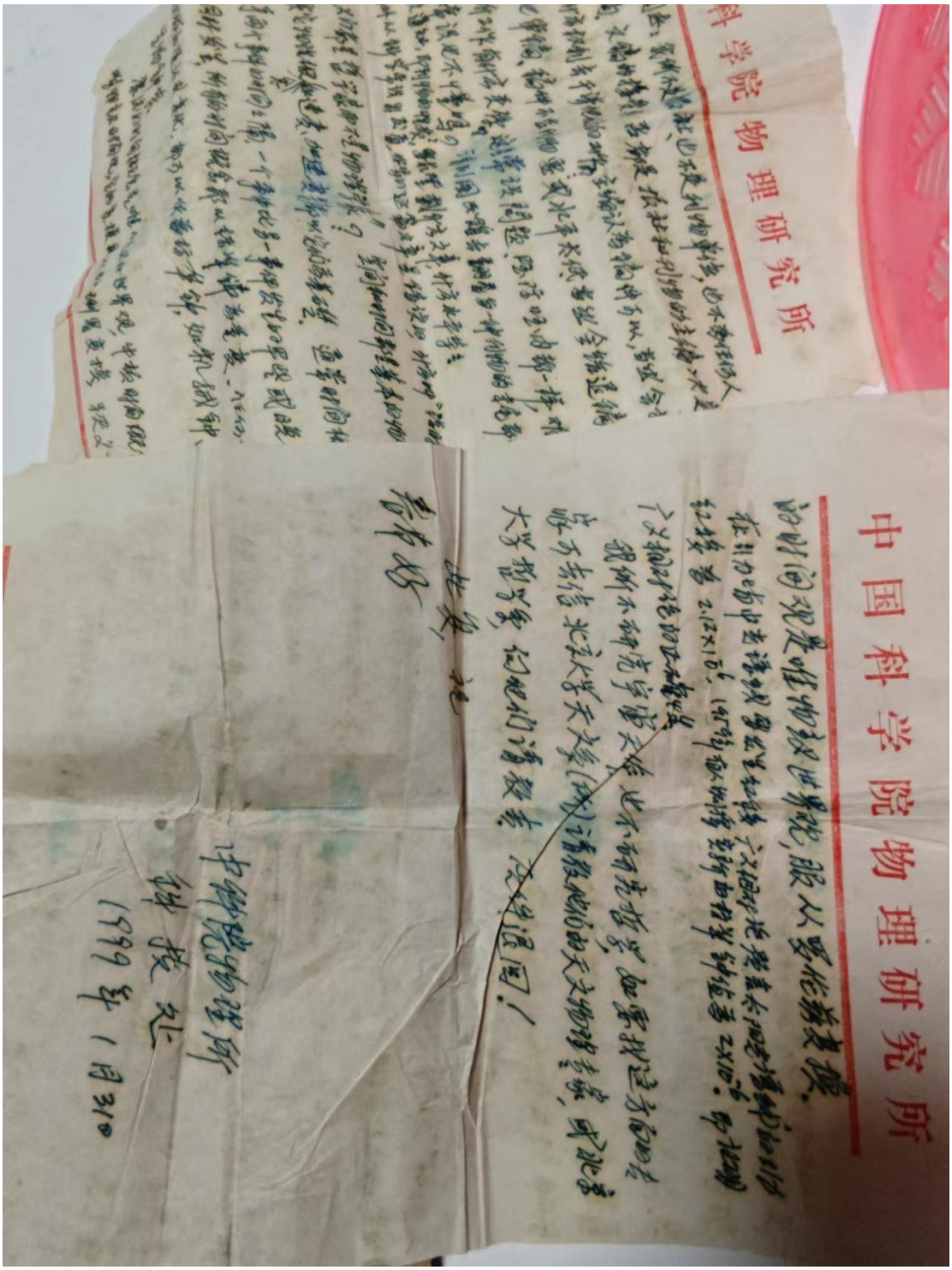
信じています。

今ネットで調べてみると、世界中で異星に行ったことがあると主張する人はほとんどおらず、ほとんどいない。しかし、彼らは私のように、異星への旅を語りませんでした。

これらの人々の中には嘘をついている人もいれば、宇宙人によって記憶がひどく妨害されたり、誤解を招いたり、あるいは異なる種類の宇宙人に出会っただけかもしれません。

エイリアンのテクノロジーが地球人に変化をもたらす可能性があることをぼんやりと認識しているため、外国人の惑星から戻った後、私はこのことを宣伝するために夢中になっていました。

何十年もの間、私は狂ったように関係機関に手紙を書き、おそらく何千通もの手紙を書きましたが、返事はほんの数通で、そのほとんどが「このことは彼らには関係ありません」という冷たい言葉でした。



これは中国科学院からの返信です

私もかつてテレビ局に電話をかけたことがありますが、

安徽省経視の最初の時間のコーナーで電話に出た人は、「……

あなたが私たちにあなたを取材するように言ったので、私たちはあなたを取材しましたか? あなたはあなたを何だと思っていますか?」

長い間手紙を書いたために右手の中指が変形し、その間に新型万年筆の特許も出願した。

私も資料を持って関係機関を訪問しましたが、彼らは私の資料を見ようともせず、私の説明を聞こうともしませんでした。

一部の人々は、農民が宇宙人に会うことを受け入れることができないかもしれないと言います。

実際には、多くの場合、私は宇宙人のことについて全く言及していない、時には、私はまだ話をしていない、彼らは私の服を見て、私は出て行けと言う!

インターネットは農村に伝わり、私はまたインターネットに移り、余暇の時間を利用して宇宙人の科学技術を研究、宣伝し、現在まですでに 40 年近く堅持している。

残念ながら、社会的な関心や注目を集めることはできませんでした。これは多くのネットユーザーだけでなく、私自身も首をかしげており、特に現在はインターネット時代であ

る。

私は今高等数学を勉強していて、宇宙人の科学理論、主に統一場論を厳密な数学で記述しようとしています。

私は今でも記事を書き続けています、インターネットに投稿し、影響力を拡大し、有名になろうとしています、一旦有名になれば、私が持ってきた宇宙人の人工衛星スキャン技術は、100 パーセント社会的に評価されるでしょう,不満を持つ人もいますが、誰も止められません。

これが成功への唯一の道かもしれません、多くのネットユーザーから、実験を勧められました。

2023 年 11 月 2 日早朝、私は地下室での初めての実験で、変動する電磁場による重力場効果を発見しました。多くのブレークスルーは、加速運動の正電荷が加速度の逆方向に重力場を生成することを発見し、磁場の変化は渦巻き電場と渦巻き重力場を生成しました。

残念ながら、私が実験したところでは、私が持ち込んだ人工場の技術はまだ社会的に評価されていませんでした。

1、家から連れ去られる

私は 19 歳【1985 年】その年の初夏、あまり暑くなく、ベッドにはまだ蚊帳が設置されていなかった。私は実家の前から二番目の家に一人で寝ています。

家並みは全部で五間、土塀、中央に門、両側に窓があり、門の左右に隣り合った二軒の家には窓がなかった。

私は門の西側の部屋で寝た。南側には窓がなく、門のある母屋とのあいだには壁がなかった。

わたしが眠っているベッドは板張りで、本物のベッドではなく、家の南側の土塀に寄りかかっていた。土壁とベッドの接触部分には新聞紙が貼りつけてあり、土壁の土がベッドの上に落ちないようにしてある。

私が寝ている家の北側にはかまどがあり、かまどの火の側は西向きで、かまどの側は東向きで、かまどの東側には大きな水がめがあり、かまどの側には小さな窓があります。

寝るときは、頭を東に向けて、頭の横に柱があって、その柱にはガラクタがいっぱいぶらさがっていて、その上の梁にもガラクタがいっぱいぶらさがっていました。

足を西に向けて寝ると、両親が寝ていた部屋から西に 1.5

メートルほど離れていて、その 1.5 メートルの土塀から宇宙人が入ってきて、私たちもそこから出ていったのです。

エイリアンに連れ出されたのは、門を開けて門から出るのではなく、壁をまっすぐ突き抜けてのことだった。壁を抜けるときの、壁の土臭さが、強く印象に残った。

両親の部屋のドアも、この場所からそう遠くないところにあった。当時はコンクリートの床ではなく、すべての床が土だった。

そのとき、わたしは長いこと横になっていたわけではなく、なかば夢うつつのうちに、家の屋根の上で何かが旋回しているような気がした,子供の頃のあの感覚: 彼らが来る、彼らが来る... あの懐かしい感覚が戻ってきました。

それから急に部屋の中が真っ赤になったような気がして、私ははっとして目を覚ますと、ベッドから起き出して、ベッドのそばに立ちました。

見ると、壁には光る液体がにじみ出ていて、それが鈍い赤色に混じって、いくつかの青白い光を放っていたが、その光は不均一で、たくさんのまばゆい小さな光点からなっていた。

その液体が壁から部屋にしみ込んでいくと、徐々にいくつかの人の形になっていきます。

まばゆいばかりの小さな光の点々からなるこれらの人間の体は、まるで無数の小さな赤い虫のように組み合わさって、すばやくかきまわされながら踊っている。

激しい恐怖に震えが止まらず、手足や喉がこわばり、脳の指示に従わなくなってしまいました。

やってきた謎の人たちは何も言わなかったけれど、頭の中では、どこからともなく聞こえてきた標準的な男性の声が私に言った,

「一緒に出よう」。

このときの私は、夢ではなかったことを、まだはっきりと覚えている。

ぼんやりとしていると、目に見えない力が正面から襲いかかってきて、一瞬のうちに自分をコントロールした。特に私の頭部は、液体や細かい砂のようなものをいきなり満たされたような、強烈な木のような、もので満たされたような感じだった。

意識も不思議な力に強くコントロールされているようで、

曖昧《あいまい》になり、脳の思考、判断が不利になっている。

すっかり目が覚めてしまい、さまざまな感覚が鈍化したようで、身体がふわふわしておぼつかない。わたしもだんだん震えが止まってきて、怖いという気持ちもだいぶ和らいできました。

彼らが壁を通り抜けるのを見ると、壁が半透明になっているのが見えたような気がして、わたしも一緒に通り抜けた。外へ出てみると、裸足はだしで、スウェットシャツとパンティだけの恰好かつこうだった。

私は壁に触れた時、壁の土臭い匂いが特に印象に残った。壁を通り抜ける感覚は、壁のすべての分子が私の体を均一に通り抜けていく感覚であり、壁に隙間ができて人が通れるようになっている感覚ではありません。

また、人が壁を通り抜けるとき、身体の各部分に無数の小さな砂粒が身体の中で軽く擦れているような感覚があり、爽快な感覚を伴う。壁を抜けるスピードはそれほど速くなく、普段の歩くスピードとほぼ同じだ。

それから何十年ものあいだ、私はしばしば夢のなかで、

壁を通り抜ける夢を見た。成功することもあれば、失敗することもあった。失敗すると、壁にぶつかって痛みを感じ、こう自分に言い聞かせた:

壁に向かって、恐れずに躊躇せずに、力を入れずに、何も考えずに穏やかに歩いていけばいいのです。

壁から出ようとした時、かかとに木の痛みがありましたが、外に出ると木の痛みはすぐに消えました。

壁の外に出ると、さらに二人の人間がいて、一人が何かを取り出して壁に向かって照射しているのが見えたが、それが壁を照射したために半透明になったのではないかと思った。

壁を通り抜ける人や、壁の外から何かを壁に向けて照らす人は、液体や固体を自由に変化させることができ、彼らの体は常に小刻みに震えている。

これらの人々は、なんとなくふわふわした非現実的な感じを持っているように見えたので、私はそのとき、このふわふわした人々は本物の人間ではなく、一種のロボットではないかと思っていたのだが、後にそれが確認された。

私は壁を通って外に出ました、夜でしたが、この場所には、光があるかもしれません、そして、私が見たもう一人の

人物は、実在の人物のように感じました、その人物は、一見、女性のように見えました,幼稚園の女の子みたいです。

私が近づくと、彼女は怯《おび》えたように、本能的に後ずさりして、一定の距離を保った。

非常に魅力的な顔立ちをしており、身長は一メートルほどしかなく、ほっそりとしたふっくらとした体つきをしていた。

目は大きく、まぶたも大きく、まぶた、額はふっくらとして光っており、頭部はそれほど大きくなく、眉毛は短くて薄く、中心部に集中しており、ひときわ高く、妖艶な美しさを感じさせる。

また、あご、鼻、口が小さく、上唇が少し上を向いてｍ字状になっている。

顔はやや短く、十一、二歳の少女のような感じで、目鼻立ちの起伏がはっきりせず、風船に人の顔を描いたような感じだった。

彼女のウエストは身体に不釣り合いなほど細く、僕の腕と同じくらいの太さしか感じられなかった。

上半身、肩幅ともに狭く、下半身のお尻は比較的広くて

ふっくらとしており、股間には 8、9 センチほどの隙間があり、私たち地球人女性が立ったときのように股間が寄っているわけではない。

後ろから見るとお尻《しり》が広く、正面から見ると下半身がふっくらとふくらんでいる部分があって、何だかわからない。

髪の毛は黒っぽく、光沢のある黒いゴム管のようなスエードの混じったもので、一節の輪模様があり、一種の昆虫の触角のようなもので、その束は螺ら旋せん状に広がっていた。

彼女の肌は非常にきめ細かく滑らかで、肌の色はピンクがかった白で、わずかに青みがかっていたが、それは光の反射のせいかもしれなかった。というのは、その後の多くの場合、彼女がこの青みがかった色をしていることに気づかなかったからである。

このピンク・ホワイトというのは、きわめて繊細で柔らかなピンク・ホワイトで、拡散反射のものであって、鏡面反射のものではない。

この人の全体的な印象はとてもきれいで、とてもセクシーで、足と腕、体はすべて非常に丸い感じで、私達の今の膨張皮の人形のようです。

コンパクトな体つきで、スポーティーな感じがする。

この謎の人々は一体何者なのか?夜、私の家に何の用があって訪ねてきたのか?不安と疑問が頭を占領した。

そのとき、とつぜん、空中から地面にむかって、銀色の粉をふんだんにふりかけているような、奇妙な、真っ白な光の束が目にはいった。

この強烈な光線は、非常に密度の高い、密度の高いもののように感じられた。しかも、射出されるときは、一節一節

が前方に伸び、収縮するときは、一節一節が収縮する。

光に照らされた場所の物体や地面ははっきりと見えたが、周囲に乱光はまったくなく、照らされていないところでは、まったく見えなかった。

これは、私たちが通常見る強い光とは明らかに異なります。

たとえば懐中電灯の発する絞りのようなものは、絞りの範囲内では物がよく見えるし、絞りの範囲外でもかろうじて見えるし、空気中では明るい光の柱が見える。

空気を照らしているこの密度の高い光には、明るい柱は一本もなかったが、その密度の高い光が枝に当たると、枝ははっきりと見えた。

このような状況は、一部の ufo 目撃者が目にする光とよく似ており、 ufo 目撃者によって「冷たい光」と呼ばれている。

あとでわかったことだが、彼らの冷たい光は小出力の人工走査とともに放出され、その人工走査は空間を操作して、空間の中の光をカーブさせ、一節一節前進させることができる。

彼らの小出力の人工フィールドスキャンは、空気中のほ

こりを励起状態にし、光と衝突しないようにすることができます。

したがって、この光は空気中に明るい光の柱を持っていません。しかし、この小出力の人工スキャンでは、地面と枝が正常に反射するように、地面と枝を励起することはできません。

そのとき木の枝に照らされた光をたどって見上げると、麦わら帽子のようなものが二つ重なって、音もなく黒々と宙に浮かんでいるのが見えた。おそらく地上から数十メートルはあるだろうと思われたし、それも私の家からそう遠くないところだった。底はよく見えなかったが、周辺の丸いシルエットははっきりと見えた。

その巨大なもののまわりに小さなランプらしきものが並び、さまざまな色の鈍い光を放っていた。

空飛ぶ円盤!心の中で叫ぶ!『 ufo 探索』などという雑誌を読んだことがあるが、これは雑誌で紹介されている典型的な ufo の姿だったからだ。

ああ!この謎の人たちが宇宙人かもしれないと思って、どうすればいいんだろう?逃げる、人を呼ぶ、助けを呼ぶ?

考える余裕《よゆう》はなかったが、体が少し軽くなったような気がして、それから一秒とたたないうちに元に戻《もど》った。ぼんやりと目を開けると、もう自分の家の塀の外にはいなくて、あたりの環境が急に変わっていた。

わたしはすでに、金属でできていて、継ぎ目も組み立てられた形跡もなく、連続して建っているかのように見える、リング状のきわめて繊細な家の中に自分が立っているのを見た。

家の中全体に柔らかな光があったが、電球のようなものは何も見えず、光は壁から全体に均一に放たれているようだった。

内部は金属的な光沢《こうたく》に輝《かがや》き、きわめて精巧《せいこう》な細工《さいく》が施《ほどこ》されていたが、置かれているものは少なく、飾《かざ》りつけは簡潔《かんけつ》だった。

この家、つまり円盤の内部は、窓やドアが見えず、中央に大きな柱があり、屋根がつながっていて、直径は約 3 メートル、高さは約 5、6 メートルあります,柱の根元には段差が円形に盛り上がっており、段差と高さは約 40 センチあります。

大きな柱のまわりには、直径数十メートルの円形の空洞があり、部下たちはその空間にとどまっていた。

はっきりとは覚えていないが、自分たち数人が円盤の底の中心部から吸い込まれるようにして入ってきたような気がした。

アーチ状の金属壁の近くでは、地面から約 70 センチ-80 センチの高さの 3 次元立体映像が点滅しており、まるで立体映画を見ているかのように画面が絶えず変化している。

まるで鋭利なナイフで切り取られたようにきちんと描かれた西周でなければ、これらの立体映画の画面は本物のシーンだと思ってしまうだろう。

明らかにメーターのようなものは見当たらなかったし、メーターの形状に近いものはひとつもなかった。

我々地球人の宇宙船、飛行機にありがちなコントロールパネルもない。

エイリアンの宇宙船に、アクセスできる人たちを、ネットで探していましたが、エイリアンの宇宙船には、たくさんの計器があると言っていましたが、これは私が見たものとは、明らかに異なっていました,この光景は鮮明に覚えています。

あとでわかったことだが、彼らの計器はすべて、この三次元のバーチャルイメージの中にあり、制御船はこの三次元のバーチャルイメージによって実現されている。

無数の小さな虫のように身体を小刻みに震わせている無表情な四人の人間を、私はロボットだと思った。

そのうちのふたりは、私のところへやってきて、私のスウェットシャツとパンツをぬいだ。それからというもの、わたしは家に帰るまで、彼らの星で裸になっていた。

見下ろすと、腰のあたりにゆっくりとたなびく白い霧のようなイメージがあって、それほど恥ずかしくなかった。無意識に自分の下半身に手をやってみると、明らかに裸の感触があった。

この謎の人々は本当に宇宙人であり、この丸い家は私の家の近くの空から見た空飛ぶ円盤であると私は推測しました。外から見るとそんなに大きくはないが、中から見るとかなり大きい。

私は彼らに招かれて来たのだ、というより誘拐されて来たのだ、おそらく帰れないだろう、もう永久に実家に帰れないかもしれない、と私は胸が締めつけられるような恐怖を感

じ、ひそかに悲鳴をあげた。

すぐに私の推測が裏付けられ、4 人のロボットが中に入り 3 人の本物のエイリアンが出てきて、女性が 1 人、男性が 2 人いることが明らかになりました。その女性は私の家の塀の外に現れた女性とそっくりで、私はその時同じ人だと思いました。

この女性を見ていると、裸になったような気持ちになり、思わず慌てて自分を見下ろしてしまい、自分の腰を取り囲むように白い霧のようなイメージが漂っているのを見て、やっと少し落ち着いた気持ちになりました。

船内では明るいので、よりはっきりと彼女を見ることができたが、彼女はワンピースのタイトな服を着て、服と肉体が融合したように見えた。

骨格とか筋肉とか、そういうものがないように感じられたが、彼女の身体は非常にふっくらとしていて、流線型をしていて、イルカの身体のようになめらかだった。

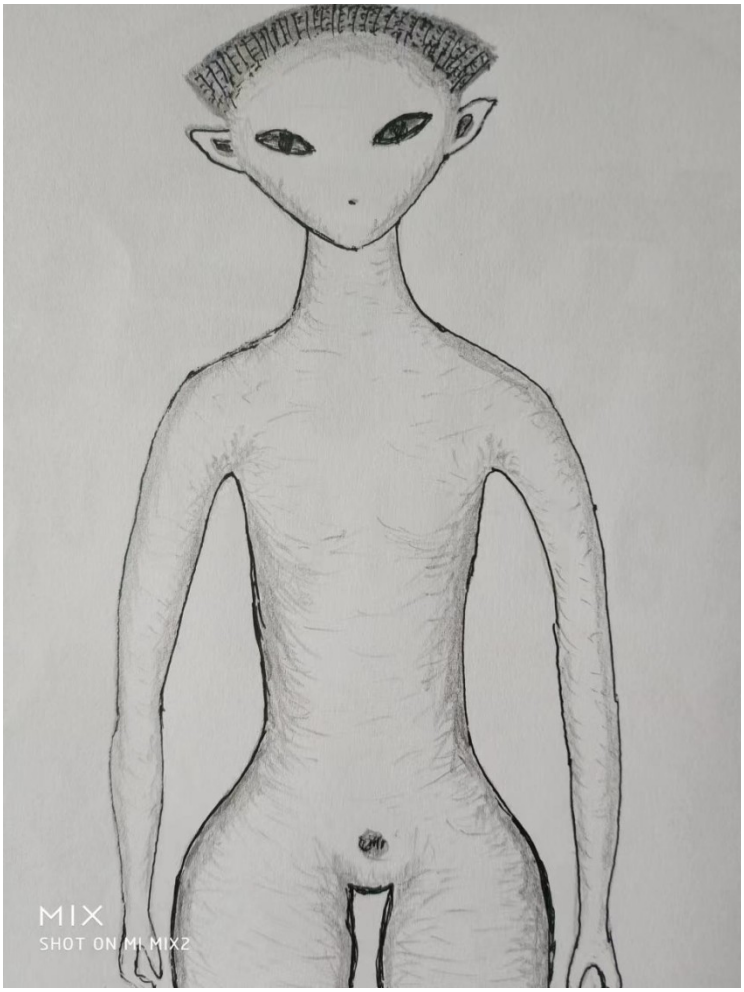
彼らはみんな身長が同じくらいで、肉眼では違いがわからなかった。みんな体にぴったりした服を着ていた。

三人は並んで立っていたが、その中に、その女と同じ顔立ちをした男が一人いた:

大きな目、大きな瞼《まぶた》、小さな口、小さな鼻、小さな顎《あご》、耳は大きく薄く尖《とが》り、眉毛《まゆげ》はほとんど見えず、肌《はだ》は柔《やわ》らかく繊細《せんさい》なピンクがかった白で、どこか男らしいところがあった,顔は、あのエイリアン女性のように、ふくらんだゴム人形のようにふっくらとした、ふっくらとした肌ではなかった。

股間に女性宇宙人のようなふくらんだ円筒形のものはなく、臀部《でんぶ》はそれほど広くない。

彼の髪はぴったりと頭にくっついていて、すぐに完全な黒い光沢のあるゴムのように頭にくっついていた。



この三人は一見して、明らかに私たちの地球上の特徴と異なっているのは、小柄で小柄で、私たちの幼稚園児に似ており、また私たちのよく見るアニメ・漫画のキャラクターに似ている。

もうひとつの特徴は、人間の身体があまりにも精巧で、まるで人工的に作られた人形のようであること、あるいは顔には目鼻立ちの起伏がはっきりせず、しわひとつないふくよかなゴム人形のようであることだ,肌の色もあまりにも繊細で、

純粋で、傷ひとつついていない。

その男性は私の前に歩み寄り、右手で自分の胸を押さえ、おそらく彼らの出会いのエチケットとして、私たち地球人が出会ったときの握手のように、一言言った。

彼らの声は大きくはなかった。一語一語が吐き出されるようなはっきりしたものではなかった。地球人のうわごとのように、あるいは赤ん坊のつぶやきのように、はっきりしなかった,あるいはまた、呼吸によって声を増す必要があるかのように。しかし、声は柔らかく、幼く、子供の声のようだった。

あとでわかったのですが、彼らの体は酸素を取り込むために、肺を使わずに、外部から体内に取り込むことができ、肺の呼吸機能が低下し、発声機能が低下していました。

彼らは工場のスキャン技術を使って、お互いにスムーズにコミュニケーションを取ることができます。

彼らのカットオフ技術は、仮想通訳ツールのようなもので、彼らの言語を、私たちの中国語に翻訳し、私の耳に音として届けてくれます,時には思念という形で、私の頭の中に、映像が現れることもありました。

このような翻訳の仮想ツールはあなたには見えないし、触れることもできないが、とてもすばらしく、私と彼らとのコミュニケーションに少しの障害もない。

もし江蘇人と交流するなら、彼らと交流するほどスムーズではない。

しかも彼らは我々の中国語の中の大量の口語をマスターし、甚だしきに至っては多くの洒落話、方言を持っており、これは皆さんには信じ難いかもしれません。

彼らは肺の呼吸を使って話しています、単に挨拶の役割を果たしているだけです、私が話す機能をオンにしているだけです、その後のコミュニケーションです,彼らの工場スキャン情報カットオフシステムに、全て任せることができました。彼らは自分たちの呼吸機能や会話機能を外部委託しているに等しい。

言葉はわからなかったが、すぐに耳に標準的な男の声が聞こえ、具体的な内容は今は忘れてしまったが、ただ覚えているだけだった,

「私の名前は××(後で彼らは彼をノートン、ノースン、オーテンと呼んでいたようです)私は生物学者で、私はこの旅

行を担当しています... 私たちは皆陸上人(おそらく陸上人)です

その後、彼らが自分たちの星をゴーク星と呼ぶのをよく耳にするようになりましたが、ゴークはただの発音かもしれませんし、時にはゴーク、グーコなどと呼ばれることもあります。

私は彼らに星の名前や宇宙のどこにあるのか尋ねたことがありますが、彼らは教えてくれませんでした。

おれは心の中で、おまえたちがおれをおまえたちの宇宙船に無理やり連れていったのであって、おれがおまえたちのところへ行こうとしたのではない、と言った。だが、口には出さず、本能的に「うん」と返事をしただけだった。

生物学者のノートンがそう言って引き返すと、もう一人の男性が、彼と同じような顔をしていました、生物学者は真剣な表情をしていましたが、この男性は真剣ではなく、笑っているような顔をしていました。

彼は一歩前に出て、私の前に進み出ると、右手を胸に当てて一言言ったが、すぐに私の耳に標準的な男の声が聞こえた:

「私の名前は×××[＃「×××」はゴシック体](あとでた

いていの場合、スーデールとかシューデーとか呼ばれるようになったけど、ときどき呼び方がずいぶん違う) ... ... 私は物理学者だから、 ... ... 私たちの星へようこそ」

ようやくその女性が一歩踏み出し、右手を胸に当てて一言言うと、私の耳に甘く柔らかい女性の声が飛び込んできた:

「・・・私の名前はウィリー・・・

き》らしく、私を殺したり、野蛮《やばん》に私の体を解剖《かいぼう》したりすることのない、宇宙《うちゅう》の文明的な宇宙人《うちゅうじん》だと思うと、そのときの私の緊張《きんちょう》はほっとした。

生物学者のノートンが手でなぞると、すぐそばに三次元のバーチャル画像が現われ、ノートンはそれを手でなぞって、またしゃべりはじめた。

言葉は理解できなかったが、耳は標準的な音声を翻訳する翻訳機のようで、ときには声ではなく、ただの思考が頭に浮かんだだけのように感じられた:

「あなたはわたしたちの長い視察の対象です。あなたは子供のころ、何度もわたしたちの宇宙船に乗せられました。あなたの名前は張祥前《ちょうしょうぜん》でしたね。あなたたちの習慣では、あなたのまわりの人たちはみんなあなたのことを元兄さんと呼んでいたでしょう」

「そう呼ばれたことはあるけれど、たいていの人は、私のことを、前さんと呼んでいた」私は、自分の名前を知っているはずがない、と思った?そのとき、どういうわけか、私の名前を先生を通して知っていたのではないか、ということを

ふと思い出した?

「センパイ? これからはセンパイと呼びましょう。わたしたちがあなたをこの星にお招きしたのは、あなたを通じてふたつのとても重要な実験をして、わたしたちにとって有益な数字を手に入れたいからです」

「どんな実験ですか?」私は興味をそそられて尋ねた。

「必要な情報が見つかることを期待して、あなたの脳を研究しているのです」とノートンは答えた。

「ああ、脳を切り開いてみましょうか」私は急に緊張して口走った。

「生きている」と、物理学者のスーデールはすぐに笑いだした。われわれ地球人とまったく変わらない笑いだった。その笑いのリズムに合わせて、彼の上半身が震えだした,「おまえたち愚かな地球人こそ、そうするのが好きなのだ」という言葉が耳に飛び込んできた

その笑いを見たとき、この身のこなし、態度は、われわれ地球人ではないか、と思った?

彼らは地球上のどこかからやってきた小人にすぎないのかもしれないし、特別な格好をしているのかもしれないし、

あるいは体にぴったり合ったゴムの服を着ているだけで、私を地球上のどこかに連れて行こうとしているのかもしれない,それを実行するために、彼らは何か隠された目的を持っているかもしれません。

しかし、彼らに興味を持ってもらえるような価値のあるものが、わたしの中にあるだろうか?

しかし、あの微麗《びれい》という女の細い腰を考えると、地球人にこんな細い腰があるものか?地球人にそんな | 立体仮想像《ソリビジョン》があるものか?という憂鬱《ゆううつ》な気持ちが湧《わ》いてきた。

私はその時、本当に地球を離れるのが怖かったし、家に帰れないかもしれないし、私の家族と永遠に離れてしまうのではないかと心配していました。

「ああ、そんなことはありません」ノートンはなだめるように言った,

「私たちはあなたの脳を研究するために、私たちのファームスキャン技術を使用します。ファームという宇宙にある目に見えない物質を放出することができます

「地球上にはそんなにたくさんの人間がいるのに、わた

しの脳は特別なのか? なぜわたしだけを選ぶのか? 」わたしはいまだに不思議に思っていた。口には出さなかったが、生物学者のノートンはわたしの心を読んだようだった。

「あなたは子供のころ、野原でガチョウを放していて、われわれよりはるかに文明的で技術的に発達した、宇宙でもとりわけ高度な文明を持つ人種と出会った。

文明の程度を時間で表すなら、我々は 1 万年レベルの文明であり、あなた方の地球は 1,000 年レベルの文明でしかありません、これらの特に高度な文明の人種は,彼らは 100 万年単位の文明です、おそらく 10 億年単位の文明です。

彼らの文明と技術の進歩は、私たちには想像もつかないものです、彼らはあなた方の技術的に遅れた地球人に対しては無防備かもしれませんが、私たちに対しては無防備です,正面から彼らに近づき、理解することは難しいでしょう。

これらの宇宙に存在する高度な文明を持つ人々のうちの 1 人の意識があなたの脳に侵入し、あなたはこれらの高度な文明を持つ外国人のうちの 1 人の記憶の一部を持っているかもしれません,記憶をスキャンして記録します。

私たちは、彼らが宇宙について、私たちとは違った見方

をしてくれることを、切に願っています。もちろん、これは私たちの期待に過ぎず、何も得られないかもしれませんが、私たちが望むものを手に入れたいと思っています。」

私はすぐに、7 歳か 8 歳の頃、一人で砂の上にガチョウを放していた時のことを思い出しました。

「どうしましょう」と私はノートンに言った。

「われわれは人工的なスキャン技術を使って、あなたの脳を遠隔かつ非接触でスキャンする。われわれの言うことを聞き、われわれの計画に従い、われわれの実験に協力すればいいのです、あなたが何かする必要はありません」とノートンは言った,

「私たちはあなたに私たちの星の多くの場所を訪問させ、あなたは多くの素晴らしい経験を持ち、あなたの惑星にはない多くの知識を追加し、あなたの人生を豊かにし、あなたがあなたの惑星に戻ったとき、これらの経験はあなたの運命を変え、あなたはあなたの惑星の有名人、金持ちになります。

あなたはあなたの惑星の運命を変えるキーマンになり、多くの人々があなたを崇拝するでしょう..,あなたの名前をずっと覚えている人は無数にいるでしょう。なぜなら、あなた

方地球上で、あなた方は時間の秘密を知る最初の人間になるからです。

宇宙には高度に発達した文明の惑星がたくさんあり、どの惑星においても、時間の本質を最初に知った者は、すべての科学者の中で真の王者であり、神として崇められる,彼らの文明が地球から消滅するその日まで、忘れられることはありません。

それはなぜでしょうか?時間の本質は宇宙の最も中心的な秘密であり、時間の本質を解読することの重要性は比類のないものであり、惑星全体に劇的な変化を引き起こす可能性があるため、どんな科学的発見もそれに匹敵するものではありません..。

われわれはまもなく、時間の本質をあなたにお話しすることになるだろう。あなたはわれわれから時間の本質的な秘密を知っただけで、あなた自身の独立した思考によって知ったのではないけれども,あなたが地球上で最初に時間の秘密を本当に知った人になることを妨げるものは何もありません。

あなた方地球人は、あなた方がどのようにして時間の秘密を手に入れたか、未来については関心がないかもしれませ

んし、あなた方はただ運によって、あなた方地球上で神のような存在として扱われただけかもしれません。」

生物学者に言われたんですけど、わたしはちっともうれしくありませんでした。なぜなら、当時のわたしの夢は、きれいでやさしい、からだの小さな女房をもらうことだけだったからです,実家に広い庭のある大きな家を建てる。

宇宙や時間の秘密については、国家や地球人の運命など、私にはどうでもいいことで、そんなことは考えもしなかった。

脳をスキャンすると聞いて、また緊張した。すぐにわたしの心配を察したらしい。

「なんの問題もありません、われわれの技術は絶対に安全です!」スーデイルが謎めいた表情で近づいてきたので、すぐにそんな言葉が頭に浮かんだ,

「今回の地球への短い旅行では、美しいガールフレンドを手配してあげるよ!」

物理学者はしゃべりながら、ちらりとリリーに目をやった。リリーは頭をヤンに向けて、傲慢《ごうまん》そうな態度をとった。

ノートンはつづけた。「今回は、もうひとつ実験をお願

いします,

「私たちは、あなたと地球上の異なる女性に、あらゆる種類のセックスの実験を行い、あなたの脳の意識、あらゆる種類の感覚、そして体の他の部分の動きや生理学的情報を記録するように依頼します。

この情報を数字に翻訳するということは、私たちにとって重要であり、重要な富の源泉でもあります。セックスの行為が数字に変換されると、それは交換のための商品として利用できるのだが、きみたち地球人にはそれが理解できないかもしれない。

あなたが幼いころ、わたしたちは何度もあなたを宇宙船に迎え入れましたが、あなたがわたしたちの惑星に来られるように手配しなかったのは、あなたの肉体がまだ成熟しておらず、性的意識が形成されていなかった時期だったからです。いまのあなたの年齢は、あなたの肉体的、性的能力のもっとも強い段階です」

「われわれの惑星は実際にはひとつではなく、厳密に言えばひとつの銀河であり、主星のまわりにはたくさんの惑星があります。あなたがたの地球がある太陽系のように、たく

さんの惑星や衛星があります」スーデールが口をはさんだ:

「われわれの主星の近くにある何十という星には、われわれの人間が住んでおり、さまざまな星にはさまざまな種類の女性が住んでおり、体の外形はさまざまで、その奇妙さはあなたには想像もつかないほどで、あとで会うことになるだろう。

もちろん、きみたち地球上の女性の体格にできるだけ近い人種を選んで、きみとセックスをする。

あまりにも体の形が違いすぎると、女性の体に対して少しでも性欲を掻き立てることはできないのではないでしょうか。

たとえば、あなたがた地球人の男性が、雌豚や雌牛の肉体と、あなたがた地球人の女性の肉体とを、多少なりとも接近させることによって、わずかなりとも性欲をそそられるかもしれません,同じような性器を持っていても、エビや昆虫を相手にしていたら、少しも性欲を掻き立てられないでしょう」

シュデールの言葉に、わたしは少し心配になった。雌豚や雌牛のような動物と性的関係を持つことを強要されたので

はないだろうか。美しい女の子と性的関係を持つことができたら、どんなに気持ちがいいだろう!こいつらは変態なのかもしれない。簡単には私の思い通りにはならない。

そのとき、ロボットかもしれない、体を小刻みに震わせている 2 人の男が、私の前に立ちはだかりました、一人は立体映像を持っていました、私が住んでいる家と、もう一人は立体映像を持っていました,地球人の死体が入った薬瓶が映っていました。

ロボットの一人が私に言いました,

「これからはおとなしく、おとなしく、われわれの手配どおりにしてください。そして、それがすんだら、あなたを無傷でお送りします」,このロボットは、わが家の三次元立体映像を近づけて見せてくれた。

別のロボットはこう言いました、「言うことを聞かず、反抗し、我々の指示に従わず、単独で行動すると、こうなる」

そのロボットはそういって、地球人の体に水薬のびんをつけた立体映像を近づけて見せた。私はぞっとした。ぞっとした。それまで彼らに対して抱いていた好印象が一瞬にして

崩壊した,彼らは邪悪なのかもしれない。今度はわたしが邪悪なのかもしれない。

わたしはひどく不安になり、激しい恐怖に襲われ、しばらくのあいだ自分を慰めていた。彼らはわたしをつかまえて、わたしの脳をスキャンするためにわたしの身体に触れない実験をふたつやっているのだから、なんの害もないだろう?

セックス・ナンバーなんていうのは、この惑星のさまざまな種類の女とセックスしろということなんだから、拷問にかけられて死ぬようなことはないだろう?それに今のぼくにはガールフレンドもいないし、セックスの経験もないし、正性の渇きもない。

「あなたの星は銀河系のどこかにありますか? 地球からどれくらい離れていますか? 」

「その質問には、われわれの習慣で答えないことになっている」

「私はどれくらいあなたの星にいなければならないのですか? 」

「あなたたちの地球上の時間で、一カ月くらいです」

「こんなに長くなると、家族はとても焦ります」

「そんなことはありません。われわれはあなたがたとは違った時間の経過をたどっています。あなたがわれわれの惑星を訪れる時間と、宇宙船があなたがたの惑星を往復する時間は、どちらもあなたがたの地球で過ごす一晩より長くはありません。夜が明けるまでにあなたを送り返します。あなたがわれわれの惑星を訪れたことを、あなたの

ノートンの言葉に私は疑問を感じました、「あなた方にはそれだけの能力があるのですか? 時間を巻き戻すことができるのですか? 」

「時間の巻き戻しは私たちにはできないし、時間の巻き戻しは、時間の流れの速さを変えることによって達成できるように思える。

しかし、時間の経過の速さは比較の概念であり、宇宙の異なる惑星では、時間の経過の速さは場所によって異なる可能性があります。

時間の経過の速さは、二つの異なる場所を比較することによってのみ意味があり、同じ場所で時間の経過の速さを言っても意味がない。

たとえば、物体の大きさは、異なる物体同士を比べてこ

そ意味があり、同じ物体で大きさを比べても意味がありません。

私たちは人工的なスキャン技術を使って、ある空間を照射することで、エネルギー場を局所的に満たし、時間の流れを変えることができます,この技術は、ある場所での時間の経過を、別の場所での時間の経過よりも遅くすることができます。

逆に言えば、ある場所の時間を別の場所の時間よりも早く過ぎさせることができるのです。

これは地球上で時間と呼ばれるものです。

同じ場所に時間の速さという概念がなければ、時間の巻き戻しはできない。なぜなら、巻き戻しはまず、同じ空間領域、同じ場所で起こる出来事を必要とするからだ。さっきも言ったように、同じ場所での時間の経過は比較にならない」

ノートンは辛抱強く説明したが、私は頭がぼんやりしていてよくわからなかった。

「時間を逆行させることは、いまでは局所的な空間領域でも可能になっている。しかし、ある出来事を以前の状態に急速に逆行させて、もう一度やり直すことはできない。完全

に、純粋に、段階的に時間を逆行させることはできない」。

「ほかに質問はありませんか」とノートンは私の目をじっと見つめながら言った,

「これから船を動かして帰ります」

ノートンが手で空中をかいていると、突然、白くて繊細な、西洋の立体的な煙の塊が現れ、それが立体的な画像に変わった,見覚えのない文字が点滅し、ノートンが指で操作している。

はっきりとした標準的な、甘い女性の声がひっきりなしにしゃべっているのが聞こえ、ふいに身体が軽くなったような気がして、彼らの惑星に向かって飛んでいるのではないかと思った。

二、飛行中に空飛ぶ円盤について語る

身体が軽く感じられるたびに、耳のどこからともなく聞こえてくる、柔らかくて甘い、べたべたした女性の声が、しきりにしゃべっているのが聞こえた。

三次元バーチャル・スクリーンに惑星が現われ、それか

ら急速に消えていくのが見えた。わたしたちが進んでいる概略図が見え、ときどき折れ線を描いている。

私が目を閉じると、空飛ぶ円盤が存在しなくなり、周りは真っ暗で、私の体は宇宙空間にぽつんと置かれ、無限の深淵に向かって一様に落下しているように感じます。その感覚は私を怖がらせ、ときには目を開けなければなりませんでした。

宇宙船を起動させると用事がなくなり、ロボットたちに立体視バーチャルスクリーンを見ながら宇宙船を操作させながら、わたしたちは話しはじめた。

気になったのは、この宇宙船、つまりわたしたちが乗っている ufo に興味を持ったことだった。

「わたしたちが乗っているこの宇宙船は、わたしたち地球人がよく口にする空飛ぶ円盤でしょう? 」?

「そうです」

「空飛ぶ円盤ってすごい速いよね? ある雑誌に書いてあったんだけど、円盤が最も速い時は光速で、つまり毎秒 30 万キロメートルで飛べるって言ってたよね? 」?

「そう、 ufo は光速で飛ぶんだ」とスーデールは言った,

「空飛ぶ円盤には三つの時空状態があります。一つは質量ゼロの励起状態です。円盤の静止質量はゼロで、一定の運動質量があり、常に光速で運動しています。

空飛ぶ円盤のこの状態は、実は自然界から発せられる光の時空の状態と同じなのです。

第二は微小質量の準励起状態であり、空飛ぶ円盤の場合、質量はあなたがたの地球の基準では一万分の一グラム程度にすぎない。静止していても、光速より少ない任意の速度で飛行していても、あなたの地球の表面の空気中に浮遊していても、いつでも質量ゼロの励起状態を励起することができます。

第三に、通常の状態にあり、 ufo は完全に静止しており、内部の質量変化動力システムはオフであり、通常のオブジェクトと同じ確定された質量を有する。”

「あなたがたの空飛ぶ円盤は、どういう原理で飛んでいるのですか? きっと複雑で難解ですよね? 」

「空飛ぶ円盤の飛行原理は実はとても簡単で、あなたたちの中国語で説明するのはただの言葉です」とスーデールは言った,

「宇宙のどんな物体でも、その質量をゼロにすると、ゼ

口になった瞬間、突然、光の速さで動く。これが光速の ufo の飛行原理だ」

円盤の飛行原理は、そんなに単純なのでしょうか?予想外だった。しかし、どうやって物体の質量をゼロにできるかというのは、本当に難しい問題だと思います。

「自然界には、量的変化と質的変化という二つの大きく異なる運動があります。普通の運動は量的変化です。あなたがた地球の科学者であるニュートンとガリレオは、この運動をうまく記述しています」。

あなたがた地球人は、飛行機や自動車の運動原理を、運動量の保存を守ることによって身につけており、あなたがた地球上の運動量は、質量に速度をかけたものであり、力を受けるということは、運動量が時間とともにどの程度変化するかということである。きみたちの飛行機も、地球の大気圏内でしか飛べない。

私たちの惑星では、運動量は、ベクトルの光速が物体の運動速度に対して減少することです,これに物体の質量を掛け合わせると【p = m (c-v)、 p は物体の運動量、 m は物体の質量、 v は物体の運動速度、 c はベクトル光速、ベクトル光速

方向は変化することができ、模はスカラー光速 c、 c は変わらない】。

この運動量を時間に求めると【彼らが直訳すれば求変数】、4 つの力【 f = (c-v) dm/dt + m (dc/dt -dv/dt)ここで d はマイクロセミコロン、 t は時間】が現れる,これが宇宙の基本的な 4 つの力です。物体が受ける力は、物体の運動量が時間とともに変化する程度でもある。

ただし、円盤は質量が時間とともに変化するだけです【 f = (c-v) dm/dt 部分は円盤の動力学方程式です】。

空飛ぶ円盤の質量が減少しはじめても、速度は変わらない。円盤の質量がゼロになると、速度は光速に変わります。

空飛ぶ円盤の速度の変化は突然であり、ゼロから突然光速に達することができます。空飛ぶ円盤の速度は初期速度と光速の二つの量しかなく、速度の変化は連続的ではありません」とノートンは説明した:

「空飛ぶ円盤の運動原理は、質量変化、つまり円盤の質量が時間とともに変化するというもう一つの運動方法であり、これはわれわれの惑星ではプラス質量運動と呼ばれている。

空飛ぶ円盤の質量がある量からゼロになると、円盤は別

の力で加速する必要はありません、この運動状態を変えるために内部および外部の原因に遭遇しない限り、必ず光速で慣性運動を続けます。

私たちが静止している物体に対して、周囲の空間はベクトル化された光の速度で周囲に広がっています、これが物体が質量と電荷を生み出す根本的な原因です,質量とは、物体の周りの、光速運動における、空間的なシフトの数です。

物体のまわりの空間の光速運動を消滅させる方法を考えれば、その物体には質量がない。質量がなく、質量がゼロの物体は、別に力を加える必要もなく、われわれに対して光速で運動しているにちがいない。

その理由は、宇宙のすべての物体には、ベクトルの光速に質量を掛けた静止した運動量があるからです静止した質量は運動しているときの質量とは異なります静止しているときの周りの空間のベクトルの光速は速度で運動しているときの周りのベクトルの光速とは異なりますしかし型は同じです c の光速度です。

静止運動量と運動量は保存される。

物体が光速で運動すると運動量【 m (c-v)】の速度部分は

ゼロになり【(c-v) = 0】、質量部分は運動量が保存されることで無限大になる。

無限大というのは私たちにとって厄介なものであり、私たちにとって厄介な無限大が存在しなければ、もう一つの可能性があります。

静止質量がゼロであれば【 m'= 0】、静止運動量がゼロであれば【 m'c'= 0】、静止運動量と運動量の数が同じであれば【 m'c'と m (c-v)の数が同じ】、運動量【 m (c-v)】もゼロになり、結果として物体の運動速度 v は光速 c 【 m (c-v) = 0, mc = mv, c = v 】になります。

あなた方地球上の相対性理論では静止エネルギーを認識していますが、静止エネルギーの発生源が静止運動量であることは認識していません」

なんとなくわかったような気がしたので、空飛ぶ円盤は質量を速度に、速度を質量に変えるものらしく、:

「あなたの空飛ぶ円盤は光速で飛ぶことができます、私は私たちの地球の本で見ました、宇宙空間では、一般的な惑星は私たちから何光年も離れています、あなたの空飛ぶ円盤は光速で飛ぶことも何年もかかりますか?あなたの惑星まで数

時間しかかからないのに、私たちの近くに隠れているなんて、どうして言えるの?」

「物体が光速で運動するとき、運動方向に沿って存在する空間の長さはゼロに縮まる」というノートンの言葉に、私は少し驚いた。

「あなた方地球人が言っていることですが、それは遠く離れたところにあります。」

「運動方向の空間の長さがゼロなら、円盤が光速で飛ぶのに時間はかからないじゃない? なら、なぜ円盤があなたの星に戻るのに何時間もかかると言うの?」

例えば、450 トンの ufo が離陸する時、もし 450 トンからゼロになったら、この過程には時間がかかる。空飛ぶ円盤が着陸するときに質量ゼロから四五〇トンに戻るのにも時間がかかる。

実際、我々の惑星にいる ufo は、まず外部からの場エネルギーを使って、円盤の質量を 0.450 g という非常に小さな量に減らし、準励起状態にしました。

離陸時には、 ufo 自身のエネルギーを使用して、 ufo は 0.450 グラムからゼロになり、 ufo の質量がゼロになると、励

起状態になり、追加の力を加える必要はなく、突然光速で移動する必要があります。

空飛ぶ円盤が地球に到着しても、450 トンの質量ではなく、ごく小さな質量になるのです、なぜそんなことをするのでしょう?

エネルギーを節約するためです。なぜなら、円盤の質量が変化し、時空の状態を変化させるには大きなエネルギーが必要だが、円盤自体はそれほど多くのエネルギーを運ぶことができないからだ」

ノートンは説明した:

「空飛ぶ円盤の前方に希薄なガスが存在する場合、空飛ぶ円盤は質量ゼロで、これらの希薄なガスとの衝突力はゼロで、円盤との相互作用力は発生しません。しかも、このガスは質量が小さすぎて、円盤の時空状態を変えることができない,

空飛ぶ円盤はまた、ガスを直接押しのける反発力を発生させることもできます。場の本質は円筒状の螺旋状に運動する空間であり、無形の物質であり、空気の摩擦によって音が発生しないため、どちらの方法でも空飛ぶ円盤は音をたてず

に空中を飛ぶことができる。

しかし、巨大な質量を持つ惑星に遭遇し、それを避けなければ、 ufo はそれに入り、 ufo はすぐに時空状態に移行し、励起状態から正常な時空状態に移行します。

惑星全体をゼロ質量に変換する方法があれば、空飛ぶ円盤は抵抗なしに惑星全体を通過することができます。しかし、実際には、惑星全体の時空状態を変換する方法はありません。

私たちは惑星を避けるしかありません、惑星を避けるとき、 ufo は状態を変えなければなりません、もし私たちの空飛ぶ円盤が、惑星によって隔てられていなければ、円盤は離陸時に質量がゼロになるので、時間がかかります。

惑星に着陸すると、空飛ぶ円盤の質量がゼロからわずかな量に変化するのに時間がかかるが、途中では時間がかからない。

フライト中にかかる時間は、主に時空の状態を変えて惑星を回避することです」

スーデールは言った,

「あなたがたの地球の相対性理論にしたがえば、われわれの星があなたがたの地球から五〇光年離れていて、空飛ぶ

円盤がわれわれの星から光速であなたがたの星に到達してすぐに帰還すると仮定すると、あなたがたの星人もわれわれの仲間も、円盤が往復するのに一〇〇年かかると考えているが、円盤内部の乗客は往復に数時間しかかからないと考えている」

「これが本当かどうか、もし本当だとしたら、君たちの星でも、君たちの帰りをゆっくり待っていることになる。君たちが地球に来るのも簡単じゃない」と僕は言った。

「実際には、私たちの惑星とあなたの地球の間の時間の経過の速さも考慮しなければなりません。

時間の経過の速さは、宇宙では星によって違う。時間差という概念があります。

この時間ポテンシャル効果は自然に形成されるため、自然時間ポテンシャル差とも呼ばれ、これに対応する人工時間ポテンシャル差があります。

もし私たちの惑星の人々が、あなた方の地球よりも高い速度で時間を測定し、 ufo が光速であなた方の地球に到達するならば、私たちの惑星の人々は、あなた方の地球に到達するのに 50 年はかからないと考えています。

しかし、地球から戻ってくるのにかかる時間は 50 年以上にもなり、その時間差はお互いに相殺されるので、このような時間差はあまり役に立たないと考えるのは間違いありません。

そう考えるのは間違いです。

この時間差効果を利用して、私たちは地球上で、 ufo が戻ってくるのを、100 年も待つ必要がなくなりました。

惑星間の自然な時間ポテンシャル効果は、実用的なアプリケーションではほとんど価値がない、より小さい、特に遠くない惑星から収束しています。

時間差の形成は、相対運動であり、それぞれの惑星は、遠くの惑星に比べて、大きな回転運動をしているので、遠くの惑星に比べて、大きな回転運動をしています,大きな時間差があります。

しかし、人工的な方法で得られる大きな時間差効果によって、100 年待たなければならなかった時間が 1 時間未満になる可能性がある。

空飛ぶ円盤の周りの空間を、人工的にスキャンすることで、円盤がその中にいるような、エネルギー場を作り出し、

円盤が存在する時空を、人為的に変化させます,空飛ぶ円盤の周りの時空と、地球上の時空との間に、大きな時間差を作ります。

そうすれば、空飛ぶ円盤があなた方の地球に到達するのに 50 年もかからず、非常に短い時間であなた方の地球に到達することができる。

空飛ぶ円盤は地球から地球に戻り、同じ方法で円盤自体の装置を使って円盤の周囲の時間差を人為的に変化させ、地球に戻ります。

私たちの惑星の観測者は、100 年待つ必要はなく、空飛ぶ円盤は 1 時間未満で戻ってくることができることを発見しました。

さらに短い時間では、これはエネルギー場の強さに依存します。

空飛ぶ円盤と地球、地球外の惑星の巨大な時間ポテンシャル差を作るために、人工的に作られた上記の時間ポテンシャル差を達成するためには、単に時間と空間を変えることができる人工的なファームスキャンが必要ではありません,地球と地球外惑星の時間ポテンシャルを、測定する必要がありま

す」

スーデイルという言葉は、私にはとうてい理解できなかった。

「質問を変えるけど、さっきの問題は消化できないよ。

我々地球人はあなた方の ufo を観察していますが、あなた方の ufo が突然激しく加速し、その中の乗客のストレスが非常に大きいことを発見しました、そして私はあなた方がどのように ufo の中の乗客のストレスを軽減したかを聞きたいのです?それとも、地球人の何百倍、何千倍もの力に耐えられる特殊な肉体を持った人間なのか」と、わたしはたずねた。

空飛ぶ円盤はゼロ質量または微小質量で飛行し、内部の乗客受力は加速度に質量を掛けたものであり、質量はゼロ加速度が巨大であっても、乗客受力はやはりゼロ、または非常に小さい。

空飛ぶ円盤は質量がゼロか、ほぼゼロで、他の物体との衝突や、摩擦がゼロか、極めて小さく、摩擦の本質は、小さな粒子同士の衝突です,空飛ぶ円盤が、あなたがたの地球の大気中を音もなく飛んでいるという説明です」物理学者のスーデールが説明してくれた。

私は少し納得したようで、「どうやって ufo を作るのか? それとも、どうやって ufo を作るのか? 」と聞きました

「あなたは地球に戻って ufo を作りたいですか? 」とカリスは尋ねました

「生きている」とスーデールは笑って、「もし元兄が運転しているときに、うっかり自分たちの地球の近くの火星に行ってしまって、どうやって戻ってくるのかわからなかったら、大変なことになる」

「その前の兄は火星で暮らしていたのよ」と、シェーラは皮肉っぽく言った,「もし元兄に地球の彼女がいたら、彼らは悲しいことになるだろう、彼らはお互いを恋しく思うだけで、彼らの映画にはよくこのシーンが出てくるだろう? 」

「ガールフレンドもいないし、火星に行きたいとも思わない」わたしは彼らの皮肉に反撃しようとしたが、こらえた。

ノートンは言った:

「お兄ちゃんひとりの力で、どうやって空飛ぶ円盤なんかつくれるんですか。もし、お兄ちゃんが空飛ぶ円盤の原理をマスターして、彼らの星の人たちがその理論を信じたら、地球人は狂ったように力をつぎこんで円盤をつくるでしょう。

地球人が原子爆弾をつくったように、地球人が空飛ぶ円盤をつくることだけが可能なんです」

「空飛ぶ円盤を作るには、いくらかかるんですか?」と、私はたずねた。

「あなたがたの地球で原子爆弾を開発するのと同じくらいです」とノートンは答えた。

「可能性はない、現在の兄は戻って、彼の同胞の地球にufoがどのようなものであるか、どのように空飛ぶ円盤を作ることができるかを教えてください。ああ、それでどうなったと思う?仲間の地球人は言いました!」と、スーデイルは皮肉な調子でつづけた。

スーデイルの言葉は耳ざわりだったが、その可能性がいちばん大きかった。

「空飛ぶ円盤はたくさんのエネルギーを持っていますが、どんなエネルギーを使っていますか?」

「原子力でも中性子エネルギーでもいい、忘れるなよ、ufoの長距離飛行は慣性飛行に属し、エネルギーを必要としないが、離陸開始時に質量がゼロになり、時空状態を転換するのに莫大なエネルギーを必要とする。

空飛ぶ円盤がこの惑星を離陸するときには、まず外部の電気エネルギーか場エネルギーを使って、円盤の質量をごくわずかな量にまで大幅に減少させます」ノートンが私に注意した。

「では、なぜ円盤のようになっていて、空飛ぶ円盤はどの方向に向かって飛んでいるのですか?」?〈空飛ぶ円盤の動力システムはどんなふうになっているのか、どんなふうになっているのか、簡単に説明してくれないか。

「円盤は地球の粒子加速器とほぼ同じで、円形の空洞が円形になっていて、その中に荷電粒子の流れが入っています。

これらの荷電粒子は同じ種類の電荷で、お互いに反発しあっているので、密度を上げることはできません。これらの荷電粒子を高速で周回させることで、電場を磁場に変えることができ、そうすることで電荷の密度を高めることができる。

小型の ufo のドアは、通常、 ufo の底部に開き、横に開くと、円盤の周囲に帯電した粒子の流れを破壊します。

大型 ufo は、一般的に、ハイパワーの人工的なスキャン装置を運び、 ufo のシェルをスキャンし、 ufo のシェルは、一般的にドアを残す必要はありませんので、直接 ufo のシェル

から出入りするように、励起状態にあります。

円盤が光速で飛行するとき、円盤の円盤面と垂直方向に移動し、右手で円盤を保持していると想定すると、円盤の円周方向と円周方向の 4 本の指で円周方向を保持していると想定します,運動方向を囲む荷電粒子の内部であり、親指の方向は ufo の運動方向です。

もし地球上空に ufo がいて、準励起状態にあったら、光速よりも少ない、任意の速度で飛ぶことができます、人工的にコンピュータープログラムを使って、操縦することもできます,円盤の側面に沿って、どちらの方向にも飛ぶことができます」

「空飛ぶ円盤が地球の上空に到達したら、地球の飛行機のように空気をかきまわして飛ぶための、ふつうのエンジンをもうひとつ取りつけるんですか? 」と、私はたずねた。

「そうじゃない。われわれのやりかたは、円盤を準励起状態から励起状態に移行させ、円盤を光速で運動させることだ。

しかし、非常に極端な飛行時間を設定し、 ufo は非常に小さな距離を飛行した後、準励起状態に戻り、準励起状態か

ら励起状態に移行し、再び小さな距離を飛行します,このように円盤は飛行を繰り返します。

この飛び方もコンピュータープログラム制御、あるいは補助制御である。

このように円盤は地球上を飛んでいます、外から見ると、円盤は任意の速度で飛ぶことができ、慣性がなく、直角に曲がることができ、非常に機動的で、飛行の軌跡を示しています。あなた方地球人には奇妙に見える」

スーデイルが訂正《ていせい》した。

「いったい ufo の動力は何なんだ? どうやって円盤を光速で動かすんだ? どうやって円盤の質量をゼロにするんだ? 」ぼくはいまだにその問題を解決しようとしているところだった。

「空飛ぶ円盤の動力システム、その基本原理は電磁場と重力場の相互変換です。

磁場が曲面を垂直に通過するとき、磁場が変化すると、曲面の端に沿って分布する、巻線状の電場と巻線状の重力場が生じます、そしてある瞬間に、時空の等価性によって,空間のある一点において、変化する磁場とそこから発生する重力場、電場の三つが互いに垂直になっているとも言える。

変動電磁場は運動電荷によって生成され、運動電荷によって生成される重力場は連続的に分布し、万有引力によって生成される重力場は一点を中心として対称的に分布する,連続分布の重力場を、点対称の重力場に変えるには、それが重要です」

スーデルが答えてくれた。

それからノートンはこう言った:

「あなたがた地球上の科学者ファラデーの電気的、磁気的変化は、電気と磁気の相互変換を利用して、あなたがた地球上の電気エネルギーを大規模に応用し、あなたがた地球人に大きな影響を及ぼした。

ファラデーは、変化する磁場は垂直方向の電場を生み出すと言ったが、実際には、別の垂直方向にも重力場を生み出しており、このとき変化する磁場、電場、重力場の 3 つは互いに垂直である。

空飛ぶ円盤の飛行原理は、電磁場と重力場の相互変換を利用しています。電磁場を変化させることによって、正と反の重力場、特に反重力場が物体に照射されることによって、物体の質量が減少し、ゼロになるまで減少し、物体の質量が

ゼロになると、励起状態になります,突然、光の速度で動き出すのです。これが ufo が光速で飛べる理由です。

地球上では電気が使われていますが、私たちの惑星では電気は使われておらず、人工的なスキャンを使っています。コンピュータ制御の下で動作する正と反重力場を生成する電磁場の変化は、人工場スキャンと呼ばれています。

きみたち地球人が電磁場と重力場の相互変換をマスターすれば、光速円盤だけでなく、人工的なスキャン技術も生まれるかもしれない。人工的なスキャンは、物体の質量をゼロにするだけでなく、光速の円盤を作るために光の速度で動くだけでなく、他の多くの素晴らしいアプリケーションがあります。

主に建築や工業製造における大規模な冷間溶接があり、コンピュータ制御下で人の病気を治療し、瞬間的な消失運動を生み出し、グローバルな運動ネットワークを構築することができ、集約太陽エネルギー受信機を製造することもできる,安価でクリーンなエネルギーを、手に入れることもできます。

マニュファクチュアスキャンは、時間と空間を変える多くの製品を作り出すことができ、仮想の建物や光の仮想人体

を作り出すことができ、情報を処理することもでき、人の思考や意識を読み取り、保存することもできます,遠く離れた場所から、脳を通して、直接コミュニケーションを取ることができます

ノートンたちが説明してくれたことは理解できなかったし、空飛ぶ円盤についての質問もたくさんあったので、それ以上は聞かなかった。

「じゃあ、あなたたちはよくこんなふうに ufo を飛ばして、ほかの惑星を探検しているんですね? 」

「ええ、地球には何度もやってきました」ノートンは私の推測を肯定した。「あなたという人物も、われわれの長期にわたる調査の対象です」

第三に、ゴーク星の超光速通信

私たちはしばらく黙っていましたが、私は思い出して、「あなたの空飛ぶ円盤はどうやって飛ぶのですか? 」と尋ねました

「 ufo は速すぎて人間が操縦できない。われわれの ufo は

コンピューターによってあらかじめプログラムされているんだ」スーデール家が言った,

「空飛ぶ円盤の内部と外部の時間の流れの速さは同じではなくて、空飛ぶ円盤の内部と外部の時空が違うだけでなくて、空飛ぶ円盤の操縦部分の所在する区域の時空と空飛ぶ円盤の他の区域も同じではない。

我々の空飛ぶ円盤はある惑星に飛びたくて、この星と我々の星の距離と座標をあらかじめ測定しておく必要があり、円盤の運動時間を利用して飛行距離を制御し、操縦プログラムを設定してから飛ぶことができる。

空飛ぶ円盤が地球にやってきたので、準励起状態で停止させました。それから円盤を励起状態に移行させて光速で飛ばしたが、設定された時間はきわめて短く、わずかな距離を飛んで準励起状態に戻っただけだった。

空飛ぶ円盤の時空状態を、絶えず変化させることによって、円盤は地球上を、光速よりはるかに小さい、任意の速度で飛ぶことができるのです」

「それじゃ、この測定は正確でなければいけないんですか? もし測定を間違えたら、空飛ぶ円盤は事故を起こすんじゃ

ないでしょうか?」と、わたしはたずねた。

「確かに、不正確な測定では、 ufo は、あなたの飛行機の事故と同じように、惑星に乗っていて、飛行機によって破壊されました。

プログラムされたコンピュータープログラムを使って、円盤をあなた方の地球に光速で接近させ、あなた方の地球の近くまで接近させ、円盤が時空を切り替えて、光速よりはるかに少ない速度であなた方の地球に向かって飛び続けるようにします」とスーデールは言った,

「しかし、この測定はこちらではそれほどむずかしいことではありません。地球上で最も先進的な測定ツールは、レーザーです、人工的に測定すると、場の本質は、円筒状のらせん状に動く空間です、場を使った測定は、レーザーよりずっと進んでいます。

情報伝達に関わる測定では、レーザーを使って月の位置と地球までの距離を測定し、レーザーを反射させる必要があります。この方法には明らかな欠陥があります、地球から遠く離れた惑星では、エネルギーの放散があるため、レーザーを発射することができません、また、レーザーを発射する速

度や、反射する速度には限界があります。

人工的にスキャンすることで、エネルギーの分散がゼロになり、遠く離れた惑星に放出されるだけでなく、場は超光速で移動することができます。場の本質は、物体の運動速度が光速を超えることができないという制限を受けない非物理的な空間である。

いまでは、遠い惑星の距離や方位を測定するために場を使うだけでなく、遠い惑星を観測するために場を使うこともできる。宇宙の奥深くを見ることができるだけでなく、電子や光子よりも小さな世界を見ることができ、星の内部も見ることができます。

レーザーや電磁波よりはるかに優れている人工的なスキャンを使って、お互いにコミュニケーションをとっています。

例えば、地球上の人々は、車を運転していますが、電磁波で通信しています、なぜなら、電磁波の速度は光速で、車の速度よりもはるかに速いからです。

光速の円盤宇宙を飛びまわって、光速の電磁波で通信しあったりしたら、それこそジョークだ。

だから超光速の人工走査通信は、私たちにとって理想的

であり、唯一の選択肢なのです」

「あなたの惑星でも、人工ファーム・スキャンを使って通信しているのですか」と、わたしはたずねた。

「そう、われわれの惑星では、人工的なフィールド・スキャンによって通信が行なわれている。フィールド・コミュニケーションの利点は、電磁波コミュニケーションを完全に置き換えることができるということだ」スーデールはいった,

「たとえば、あなたがたの地球のとある深い地下の炭鉱で、鉱山事故が発生し、坑道が厚い土の層で埋められ、あなたがたの地球の電磁波信号は厚い土の層を通り抜けられず、外部と連絡が取れなくなった。

しかし、もし私たちが場という媒体を使って通信するならば、場の本質は空間であり、空間は媒体として惑星全体を通り抜けることができ、この障害は存在しない。

例えば、地球の内部を探査したり、地震を予測したり、フィールドスキャンは便利です。

伝播情報は、貫通力が強く、ほとんど遮るものがないだけでなく、伝播中のエネルギー消費がきわめて少なく、減衰も少なく、ゼロに達することもあり、遠くまで伝播すること

ができる。信号が発生したり受信されたりするときだけエネルギーが必要で、長距離伝播はエネルギーを消費しない。

情報を伝える場のもう一つの明白な利点は、電磁波よりも速く、理論的にはほぼ無限大の速度に達することができるということです。

電磁波が伝わる速度は光速ですが、地球上の相対性理論によると、宇宙で最も速い運動速度は光速であり、空間は光速よりも速く情報を伝えることができます?

空間は特殊な物質であり、通常の物体粒子とは非常に異なり、通常の物体粒子は質量と電荷を持っています。通常の物体の運動速度は光速を超えることはできない、なぜなら通常の物体の粒子の速度は光速に近く、その質量は無限大になる傾向があるからだ。

電磁波と光の本質は、電荷が加速して運動し、反重力場を生み出し、電荷粒子、通常は電子を作り、電子の質量と電荷特性を消失させて励起状態にし、光速で運動させることである。

光の本質は物体粒子でもあり、その波動性は空間そのものの波動である。空間時間は光速で運動しているので、光は

実際には空間内に静止しており、空間の光速で運動し、その速度は光速を超えることはできません。物体粒子であるかぎり、自然状態においては光速を超えて運動することはできない。

しかし、空間は質量も電荷もないので、普通の物体と違って、その運動速度には制約を受けない」

「フィールドを通信に利用することは、空間を通じて情報を伝達することと同じで、宇宙で最高レベルの方法です」とノートンは言います,

「宇宙は物体粒子と空間の 2 つのものだけで構成されているため、物体粒子の通信を利用して情報を処理することはすべて遅れており、空間を利用して情報を伝達することが最も先進的です。両者には本質的な違いがある」

「私たちは情報を伝達するためだけに宇宙を使うのではなく、この惑星では宇宙を使って大量の情報を処理しているのです」とスーデールは言った,

「私たちのコンピュータと世界の公共情報ネットワークは、あなたたちの地球上のコンピュータとあなたたちが生まれようとしているインターネットと同じように、私たちのコ

ンピュータはバーチャルであり、公共情報ネットワークは主に空間によって情報を伝達しています。

私たちは人工的なスキャン技術によって、私たち全員の脳を、空間を介して、常に他者や公共の情報ネットワークと、つなげることができます。

そのため、コンピュータなどの他の設備は必要なく、自分の脳だけで他人とコミュニケーションを取り、連絡を取り、インターネットを利用することができる。

現在、私たちが情報を蓄積するのも空間を利用することであり、私たちの宇宙空間情報場の概念には、空間と情報に関する基本的な定理があります:

宇宙のどこにでも、宇宙全体の今日、以前、以後のすべての情報を保存することができます。言い換えれば、空間が情報を記憶する能力は、理論的には無限大である。

ただ、実際にやってみると、空間が情報を蓄積する能力は、他の条件によって制約されており、無限大というわけではありませんが、あなたがた地球人から見れば、空間が情報を蓄積する能力は恐ろしいものです。

もちろん、あなたがた地球人は現在、食糧、石油、石炭、

金属といった目に見えるもの、触れられるものが重要であり、価値があることを知っているだけで、数字が重要であることに気づいていません,情報や数字はもっと価値があります。

遅かれ早かれ、地球人も、宇宙に隠された秘密を、理解するようになるでしょう、宇宙を大規模に利用して、情報を伝達したり、処理したりする、蓄積されたデジタルのことです。

特に、あなた方地球人が、光速の宇宙船を開発できるようになると、大規模な星間旅行の時代には、光速の宇宙船は、従来の光速の電磁波では通信できなくなります,この瞬間到達しなければならない無限大の運動速度に近い通信パターンは、空間そのものの運動を利用して、あなたたち地球の量子力学の量子もつれのようなパターンです」

それから一時間ほどして、宇宙船内部の三次元立体映像がふいに消えるのが見えたが、そのとき、かすかに震えていた赤いロボットたちのからだが、とつぜんひとつに収縮して小さくなった,赤紫色に変色して、液体の水滴のように地面に散らばっていたが、やがて船内にもぐりこんで見えなくなった。

不思議な標準的な音が、頭の中で鳴り響きました、「ゴーカーが来たぞ、下に降りよう」

女性らしい柔らかな声が、途中から何かを紹介するようにしゃべり続けている。

いつの間にか、私たちは彼らの惑星に到着していました。中から出てきたのは、「フライトは終わった、地球に着いた、降りよう」

第四に、ゴーク星の空飛ぶ円盤倉庫

私は興奮して、この惑星がどんなものか想像してみました、この惑星は技術が発達していて、とてもにぎやかで、通りには人がたくさんいて、とてもにぎやかだと思いました,人々の服装はとてもおしゃれで、変わっているに違いありません。

ビルはきっととてもきれいで、高くて立派で、いろんな風変わりな車が走っている。

この惑星には、われわれを出迎えてくれる偉大な指導者がいるのだろうか?それとも大衆歓迎会か何かがあるのだろう

か?

降りていったのではない。ただ、ふわふわと体が浮いていくのを感じただけで、船から離れていった。

私の目の前に現れたのは歓迎の群れではなく、この惑星都市の繁華街でもなく、私は棚の上に大小さまざまな空飛ぶ円盤をたくさん見た。

空飛ぶ円盤のまわりに、何体かのロボットがやってきて、その円盤を取り囲んでいるのは、わたしたちが乗っていた円盤かもしれない。たぶんここは ufo 倉庫だろう?

さっき乗っていた ufo の外側を間近で見てみると、明らかに金属製で、鉛色で、溶接もなく、窓も穴もなく、突き出たライトも見えません,でも、どうやって光を外に向けることができるのでしょう?

この ufo が地球に到着したとき、地球の上空に浮かんでいて、人が下から出入りするのではないか?空飛ぶ円盤の内部は太い大きな柱のため、大きな柱の中は空っぽで、底部の扉とつながっている?

空飛ぶ円盤が離陸したと思ったら、いきなり空中に飛び出して、地面から一メートルくらいの高さまで上がって、左

右に揺れながら、反時計回りに回転しはじめた,数秒で消えてしまいました。

　　このとき、私の頭脳の木の感覚は消えて、普通の状況のようにはっきりして、人の精神もよくなりました。

　　私は円盤倉庫を注意深く見上げました、とても大きくて、一目で見渡すことができません、とても高くて、数十階建てのビルの高さがあり、棚の上には多くの円盤が置かれています、大きさはさまざまですが、大きな違いがあります。

　　私は地面に立って、こんなに大きな倉庫、こんなに広い空間、彼らの壁や屋根はどんな素材でできているのだろうと考えた。

　　これらの材料は地球上にはないかもしれません、家があまりにも巨大で、長さは数十キロメートルと推定され、中央には柱がないので、信じられない感じです。

　　それに、地面に立っていると、自分の体が地球よりずっと重く感じられて、ちょっときつかった。この惑星の重力は、地球よりも強いと思います、そのためには、屋根材がもっと強くなければなりません。

　　屋根を眺めながら、こんな大きなスパンで、いったいど

んな特殊な材料で倉庫が作られているのだろうと思った?

倉庫の屋根が高くてよく見えなかった。倉庫の壁まで行って、よく観察してみると、倉庫の壁は柔らかく繊細な黄色で、非常に繊細で、全く傷がないことがわかりました。

こんなに凝った壁を作る必要があるのでしょうか?もう一度よく見ると、壁は宇宙船のロボットの体のようで、無数の小さなものが組み合わさったように、小刻みに震えています、全体が規則的に震えているわけではありません,なんだかゴチャゴチャしている感じです。

もう一度手で壁にさわってみると、壁はむなしく、目に見えない力に手をさえぎられているようで、手をのばせばのばすほど抵抗が大きくなった。

この抵抗は、二つの正極対正極の磁石が触れ合って互いに反発するようなものである。ただ、この反発力は非常に強く、普通の吸鉄石にはこれほどの力はないと感じました。

「この壁は虚無物質でできているのだろうか」と私は心の中で尋ねた。

「そうだ!これは人工的に作られた、仮想の建物です、人工的に作られた発生器です、この発生器は 2 種類の場を作り

出します、平面対称の反発力場です、地球上の重力場とは正反対です。平面を中心として、すべてを外側に押し出すことができます。

平面中央部は光線凝固場と呼ばれ、外界から照射された光を一定の空間範囲内で凝固させることができる。黄色の光が見えますが、これは光凝固場です黄色を凝固させるだけで、他の色は放棄します。

ブルー、レッド、グリーンーその他、デザイナーの好みに合わせて色を凝固させることもできる。

周囲の環境から光を取り込んでいるので、夜間だと光の量が少なく、壁が暗く見えることもあります」

あの謎めいた標準的な男性の声がまた頭の中に浮かび、今度は私の耳元ではなく、私に向かって語りかけてきた,

「あなたは頭がいいから、壁も屋根も仮想的なもので、じつはエネルギーの存在形式にすぎないことに気づいて、人工場のスイッチを押せば、壁も屋根もたちまちきれいさっぱり消えてしまう。

これらの仮想の壁や屋根は、物体が誤って衝突した場合にも耐えることができ、その強度は実際の壁や屋根よりもは

るかに高くなりますが、まだ限界があります。

もし衝突の速度と力が、一定の限界を超えていても、物体がぶつかってきて、バーチャルハウスの中の物体に、損傷を与えることができます、これは設計の強さにもよります、当然のことですが,強度はエネルギーに比例します。

不思議に思われるかもしれませんが、私たちの惑星は高度に仮想化された惑星です。」

この惑星に足を踏み入れて、最初に遭遇した不思議なものが仮想の壁だったとは思わなかった。

五、グローバル公衆情報ネットワークを初めて知る

「あなたたちの星は銀河系にあるの? 私たちの地球からどれくらい離れているの? 」と私は心の中で尋ねた。

標準的な声は、今度は答えてくれなかった。

この声はどこから聞こえてくるのだろう?地球上にあるわたしの実家の家から、ここまで、ずっとわたしのあとをつけてきて、ずっとわたしの耳に話しかけてきた。ときどき声ではないような気もするが、ただひとつの思念が、耳で聞いた

というようなものではなく、自然に頭に浮かんでくる。

わたしに翻訳機を仕掛けたのだろうか?しかしまた誰の言葉を通訳したのか?誰が私に話しかけているのか?誰が話している?

それとも、もうひとりの私がいて、私に答えているのだろうか?標準的な声は沈黙し、やはりわたしには答えなかった。

「あなたは誰なの? 私には見えないのに、どうしていつも私について来られるの? 」と私は心の中で尋ねました。

「私はディスカッション 300 宇宙船です[我々が乗っている ufo の名前は忘れてしまいました]メッセージングサービスのスマートシステムは 2 種類の音声サービスを遠隔で提供します 1 つは我々が使用しているカットオフ技術で、言語信号を直接あなたの脳に送り込み、もう 1 つはあなたの耳に音声を送り込みます」

「家で聞いた声も、あなたなの? 」と心の中で問いかけた

「そう、あなたの家の上空には、ディスカバリー 300 号があって、あなたに言語情報を提供していた。あなたは今、私たちの惑星に足を踏み入れていますが、地図 300 の宇宙船に近いところにいて、宇宙船の中の装置があなたに言語情報

を提供しています。

地球には 2 つの大きなネットワークがあります 1 つは世界中の物体や人々が光速で移動できる、グローバルな公共の運動ネットワークです 1 つは世界中の公共の情報ネットワークです,世界中のあらゆる人々に情報を提供できます」と標準的な声は言います,

「この円盤倉庫から出たら、〈地図 300〉の情報サービス・インテリジェンス・システムは、もはやあなたに情報サービスを提供しなくなる。

グローバル・パブリック・ネットワークは私の後を継いで、あなたに情報サービスを提供し、グローバル・パブリック・ネットワークは強力です。われわれの惑星にいるかぎり、少なくとも四つの情報サービスを提供できる:

カットオフ技術を使って、音声情報を脳に直接送り込む方法と、カットオフ技術を使って、3d 画像情報を脳に直接送り込む方法です,1 つは遠隔操作による音声伝送で、もう 1 つは遠隔操作による 3 次元立体映像です。また、あなたの脳の意識情報を、遠隔操作で、非接触で読み取ることもできます、これらはすべて、遠隔操作で、非接触で送られます」

あとでわかったことだが、彼らのグローバルな公共情報ネットワークは現在のインターネットに相当する。違うのは、彼らのグローバル公共情報ネットワークは空間を通じて遠距離に情報を伝送することができ、彼らの一人一人の脳は直接グローバル公共情報ネットワークに接続することができるということだ。

そうすれば、彼らの人々は地球上で常にグローバルな情報ネットワーク、グローバルな運動ネットワークに接続することができます。

彼らの多くは学ぶ必要がなく、学ぶ必要があれば、脳からグローバル情報ネットワークにアクセスして、検索することができます、これはインターネットで検索するのと、同じことです,特に暗記している知識は、学ぶ必要がありません。ある意味では、世界中の人々の脳は、ある種の情報を共有することができます。

彼らには教師もいなければ、私たちの学校のような場所もありません。

柔軟で創造的な知識を得るために、彼らは「カットオフ」と呼ばれる技術を使いました、人工的なスキャン技術を

使って、人間の脳の外側から人間の脳の内側に向かっています,情報を伝達するために、非接触でスキャンします。受信者はベッドに横たわり、目が覚めると多くの知識を身につける。

また、このようにして、自分の多くの記憶を体外に保存している。

彼らのカットオフ技術は、バーチャル旅行をしたり、ベッドで寝たり、目を閉じて映画を見たり、ゲームをしたり、遠くにいる友人と交流したりすることもできる。

彼らはベッドで寝ることもでき、カットオフ技術を使って遠くの異性の友人と仮想セックスイベントをすることもできます。

6、ゴーカースター通りへ

空飛ぶ円盤の倉庫を出て、ほんの数歩歩いたところで、突然、周囲の環境が激変し、その瞬間、彼らの惑星の街の大通りに出現しました、私は思いがけず、目を凝らしました,彼らの星は、私が思っていたような星ではありませんでした。

一見して、至るところに特別に高い建物があり、一目で

頭が見えない家もあり、私はその時、こんなに長く作るべきではなく、真ん中を分けて歩行者と自動車が歩きやすいようにすべきだ、なぜこのように作るのかと思った?

大通りのすべてのものはすべてとてもきちんとして、簡潔で、家は特別にきちんとしているだけでなくて、様式は簡潔で、道路さえすべてとてもきれいで、全く瑕疵がなくて、路面は青色で、どんな材料で作ったのかわからないです,まるでプラスチックでできているかのように。

道の両側には珍しい植物が植えられており、整然と並んでいる。

张祥前

車のスタイルは見られず、輸送手段も見られませんでした。ワイヤーも見えないし、空中に飛行機も見えないし、もちろん空飛ぶ円盤も見えない。円盤は速すぎて見えないのかもしれない。どんな形の商店も、ホテルも見えなかった。

高い建物の多くは ufo の倉庫のような仮想の壁であり、なかには明らかに本物であることがわかるものもあったが、実際の建物には仮想の建物ほどの高さはなかった。

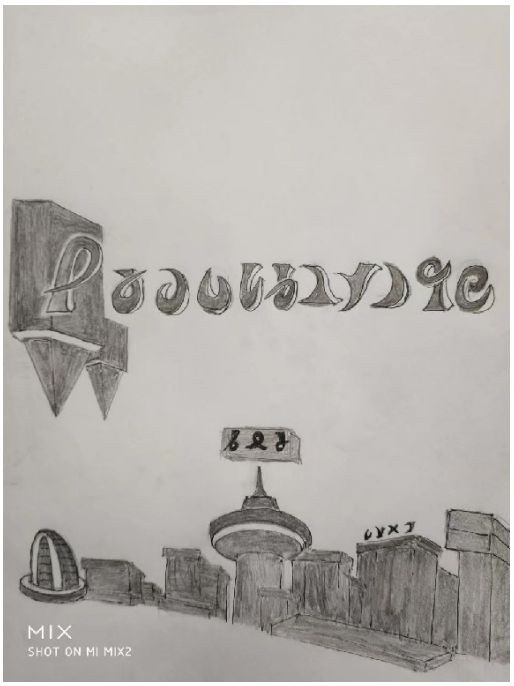
バーチャルハウスの壁にはドアや窓と同じ大きさの違う色があり、その位置もたまたまドアや窓の位置と一致しているので、その違う色の領域がバーチャルハウスのドアや窓だと思う。

まったく戸も窓もない家もあれば、空中にぽつんと浮かんでいて、その下には何の支えもない家もあった。

高いところにある家は、逆三角形をしているものもあれば、高いところにあるものもあり、宇宙空間にあるかのようだった。

ある家には巨大な文字がぽつんと浮かんでいましたおそらく彼らの言葉でしょう英語に似ています日本語に似ていますしかし中国の四角い漢字とは明らかに違いますこれらの文

字は家と繋がっていません。



そのときは、こんどはほんとうに地球外の惑星に足を踏みいれたのだから、ここが地球上のどこであるはずがないと思った。

映画で見る限り、どこの国だって、こんなふうじゃないんだから!私の心に残っているわずかな幻想-私は今回も地球のどこかに行って、完全に壊れてしまうかもしれない。

しかし、そのときの私の緊張はかえって解き放たれ、来たからには安んじていた。

そんなとき、頭の中によく出てくるスタンダードな男性の声は、,突然、とても甘くて、とても魅力的な女の子の声に

変わりました,

「ようこそ地球の元兄がゴーク星系に来ました【どうして銀河と言って、星と言わないのですか? ーー私は当時疑問を持っていました】訪問旅行、ゴーク星系グローバル公衆情報ネットワークスマートシステムがあなたのために親切にサービスを提供します。」

現在の認識では、この女の子の声は我々のモバイルネットワークの人工知能のカスタマーサービスに相当します,彼らのグローバルな情報ネットワークは、地球のインターネットに相当します。

とつぜん、三次元の立体映像が目に飛びこんできた。とても美しく、とても邪悪な顔をした女の子が、とても魅力的な声で話しつづけた,

「... 私は果克星球全球公衆情報網個人秘密服務員可温[発音]で、地球から来た元兄にできる限りの情報サービスを提供し、元兄がどのような環境に置かれていても、温かい親密なサービスを受けられるようにします。私はあなたが可愛くて、甘くて... ...

前の兄が訪れようとしているゴーク星は、高度に仮想化

された惑星であり、淫乱《いんらん》な惑星でもあり、宇宙におけるセックス・ゲームの惑星でもあります」

彼女はなぜ、ゴーク星が淫乱な惑星だと言ったのか?こんなふうに自分の故郷を紹介してくれる人はいるだろうか?

なんで淫乱って言うの?聞き間違えたり、理解していないでしょうか?と思いました。この惑星から戻ってきて初めて、そのことがよくわかりました。

ゴーク星の人々のほとんどは、労働なしで、日常生活で遊んで、彼らはセックスゲームをプレイすることを好む、ゴーク星のような超高度に発達した技術の惑星は、宇宙の多くは、惑星の人々の日常生活も遊んでいる,しかし、好んで遊ぶゲームというのは、ゴーク星とはちょっと違います。

しゃべりながら、その女の子は体を小さくし、近づいてきて、着ている服も溶けていき、最後にはその三次元映像が私の胸に入り込んで消えていくようだった。

不思議なことに、そのとき、私は何かを感じたように胸を震わせ、少女の体臭を嗅いだような気がしたが、これは単なる架空のイメージではなかったのだろうか?

裸の感覚なので、無意識に自分の腰の白い霧のような仮

想イメージが残っているのを見て、少し落ち着いた。

わたしは無意識のうちに耳のなかをなでまわし、自分の耳のなかに翻訳機があるだろうかと考えた?結局何もなかった。

鏡を見てみたかったが、鏡がないのかもしれない、あるいは探しに行くのが面倒なのかもしれない、という要求を無視されたことを思い出し、思いとどまった。

この惑星はとりわけ太陽が輝いていることに気づいたが、少し寒く、体に当たっても暖かくは感じられなかった。

いろいろな風景がとりわけ鮮やかで、しかも視界がきわめてよく、遠く感じられるところの風景がきわめてはっきりと見えた。

植物の色もほとんどが緑色で、多くは暗緑色で、表面にはワックスのようなものもあれば、緑色と黄色の中間の色もありますが、私たちの地球上の植物の色よりも明らかに鮮やかです,枯れた葉はありません。

私たちの地球上でよく見られる尖った細い草は見られません。

あとでわかったことですが、彼らの惑星は、光る星の周りを回っていて、その星のエネルギーは、地球の太陽光より

も、ずっと少ないということです、植物は長い間、進化してきました,明るい色をしているので、植物の光合成の効率を上げることができるのかもしれません。

あるいは、彼らの空気中のほこり、粒子状物質が非常にまれであることによって引き起こされる可能性があります。

彼らの地面はとても清潔で、木の葉や破片は一つもありません。植物には黄ばんだ葉は一つもついていなかった。

地上には色とりどりの、あでやかな小鳥がたくさんいて、びっしりと密生していて、大胆で、人を恐れず、歩いていても出会うことができる。不思議なことに、鳥の糞《ふん》は一つもなかった。

彼らは地面をすっぽりと覆い、植物の根は地面との境界にあり、特殊な素材で包まれていた。

人口密度の高い地域では、地面はプラスチックのようなもので覆われています、地球のコンクリートよりも、耐摩耗性が高く、弾力性があり、他のものと摩擦します,ほこりはほとんど発生しません。

彼らの野原には砂漠のようなものはなく、植生は素晴らしいです。川の堤防はすべて人工的なもので覆われている。

ほこりを空中にまき散らさないようにするだけでなく、ほこりを吸着するためのシステムも常時稼働している。単位空間の体積あたりの埃の量を超えないようにしているのだ。

木の落ち葉は地面に落ちる前に瞬間移動され、植物の葉は黄色くなるとすぐに取り除かれ、地面には何のゴミも存在しない。

彼らの工業は人工的なファームスキャン冷間加工を使用し、煙突はなく、工業の大部分は別の工業惑星に設定されています。

さらに、世界中の何百億もの人々が、一つの交通手段である、グローバル・キャンペーン・ネットワークを利用しています、世界中のどこからでも、自分たちのキャンペーンリクエストを、一秒で送信できます。

そのため、自動車や電車、飛行機などの乗り物が地面をこすってほこりを発生させることはありません。

彼らの環境保護は行き過ぎている。

しかし、私たち地球人については、長い間そこに住んでいると、免疫機能がひどく低下すると言われました。

ただ、彼らはそんなことは気にしないし、医療は非常に発達しているから、それに対処するのは簡単だ。

彼らの通りは人通りが少なく、三々五々、素足でゆっくりと歩いています。ある者は何も持たず、地上から一メートルほどの高さを巡航《じゅんこう》するようにして空中を歩いている。

また、これらの人々は明らかに男性と女性がいて、身長は 1 メートルくらいで、年齢は皆同じくらいで、みんなとてもきれいで若くて、私たちの小学校や幼稚園の子供のようです, 年寄りや赤ちゃんはいませんでした。

彼らの群れを見ると、一目見ただけで、私たちの幼稚園の下校時の光景を見たような気がする。

それらの人々はみな非常に繊細で、肌は非常に繊細で柔らかなピンクがかった白色で、傷ひとつなく、鏡面反射のようなものではなく、拡散反射のように見えます。

その後、彼らが、世界規模の運動ネットワークや、世界規模の情報ネットワークを使って、遠隔操作で、外見を変えられることを知りました、現在のビブラートのように、外見を変えられるのです,本物ではありません。

これらの女性の服は身体と一体化しているようで、服装はとてもシンプルで、普通は腕を出して、上半身にぴったりしたスウェットシャツを着て、とてもぴったりしていて、まるで裸の上半身の絵に色をつけただけのようです,下半身に小

さなスカートのようなものがついている。

多くの人はスカートの外にたくさんのしなやかなチューブが垂れ下がった状態になっており、チューブは重さを感じるほど軽く、歩くにつれてなびくことができる。金属のような細いラインのスカートを履いている人も多いです。

みんな露出度が高く、夏らしい格好をしている。

彼らの中には、私たちのテレビの画面のように、絶えず変化している服のパターンを持つ人もいます。

彼らが身につけている衣服は非現実的に見え、特に背後から見ると奇妙な感じがします。あとでわかったことだが、彼らの服はグローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル情報ネットワークによって遠隔操作されたバーチャル・イメージであり、本物の服ではなく、彼らの惑星の人々が着ている服だった,ほとんどバーチャルだった。

女性の髪は一般的に外側に向かって膨らんでいる、スパイラルの束であり、男性の髪は一般的にきつく頭の上にバースされている、髪の色は様々であり、一般的に非常に華やかです。

それから、この人たちはみんな手ぶらで歩いていて、女

の人でもバッグのようなものを何も持っていないという現象がありましたが、これはどうしてでしょうか?私にはその時、理解できませんでした。

また、男女を問わず、多くの人が歩いているときに、肩や頭の上に立体的な画像が浮かんでいることにも気づきました、その画像はとても奇妙なもので、小動物の形をしていたり、文字の形をしていたりします,あるものは複雑な機械のようで、あるものは名前がわからず、どんなタイプかわからず、あるものは模様が絶えず変化している。

この人たちの頭の上に浮かんでいるのは何だろう、と私は不思議に思った?

「これは遠隔操作の工場スキャンによる仮想イメージング技術によるもので、署名、ラベル、自己表示、標榜の意味があり、また自分の個性を示し、誇示する意味もある」と公衆情報ネットのカスタマーサービスのデジタル担当者は私に説明してくれた。

しかし、私はまだよくわからなかったので、これは何のためのものなのか、と微麗に尋ね続けた。

「ああ、人間の一種のペットかもしれない。人間の一種

の気分を代表している。変化するものかもしれない。今日はこの模様が頭の上に浮かんでいて、明日は別の模様が浮かんでいるかもしれない」,でも、やっぱりよくわからない。

「ああ、理解できないな、この人たちの頭に描かれている模様を推測することしかできないのは、あなたたち個人の好みで、自分を標榜《ひようぼう》しても本当の役には立たない」と僕は言った。

「われわれのゴーク星の空気をどう思う?」スーデールが尋ねた。

私は空気に注意を向けました、心地よい気分でした、

「あなた方の空気は、地球よりも酸素が多いですよね?」

「ええ」とスーデールは言った,

「重要な役割を果たしているのは、空気中のマイナスイオンとその他のガスです。私たちは以前にもより高い酸素含有量を試したことがあり、生物、人体が多くの状況に適応できないことがわかり、試行錯誤を経て、この酸素含有量が最良であることを確定した。」

ノートンは私に向かって、こう言いました、「これから私たちの住まいに戻って、地球を詳しく案内します」

「わかりました。ここからどのくらい離れていますか? 」

「あなたがたの地球上の距離単位で、約一万キロメートルあまりです」

「じゃあ、どんな交通機関で行くの? やっぱり ufo で行くの? 」

返事がないので、ノートンは手を上げて振りました、そして私の耳に、メッセンジャーの優しく美しい声が聞こえました、「付属物のテレポートをお願いします、タイプ: エイリアンバイオマン」

私は体が軽くなったような気がして、それから急速に元に戻って、突然耳が彼らの同じ言葉を聞いた: 「家に着きました! 」

1 万キロってそんなに速いの?そんなに簡単に彼らの住まいにたどり着けるのだろうか?どんな交通手段を使って?空飛ぶ円盤より高級?ノートンが手を振るのを見て、疑問に思っただけです?

七、テレポーテーションとグローバル公共運動ネットワ

ーク

私たちはノートンの家に直接行ったのであって、地球上のように、まず家の門の外に出て、そこから入ったのではありません。

ノートンの家はとてもきちんとして美しく、仮想の壁もあり、仮想のベッドや仮想のソファもあり、ひと目で実物とわかるテーブルのようなものがあった。

わたしたちは仮想ソファにどっかりと腰をおろし、目に見えない力で支えられているような気持ちになった。

わたしはまたベッドに飛びこんで腰をおろしたが、それも気持ちよかった。「この仮想ベッドのスイッチを切ったらどうなるんですか」

「地面に落ちたのは、その結果です」スイッチを押したのか、スーデイルはそう言って、いきなり地面に尻餅《しりもち》をついたが、高さはそれほど高くなく、裸だったので少し痛かったがーー」,わたしは無関心を装った。

「ひどいことを!」マイリーとノートンは非難した。

ふたりがまたスイッチを押し、仮想ベッドができあがったのか、目に見えない力でわたしは追いつめられた。でも、

もうバーチャル・ベッドには乗れない。バーチャル・ソファに駆け寄って腰をおろす。

「旅の疲れは? 」隣に座っていた微麗が急に気になりだした。

「旅で疲れないのは、あなたの星に着いて、体が重くて、裸足《はだし》で歩くのが大変だということです」

そう答えながら、わたしは身体をそらし、リュウジと正面から向き合うことができなかった。服を着ていないので、裸になった感じで、自分の腰のあたりに白い霧状の仮想イメージが残っているのを見ながらも、本能的に恥ずかしさを感じていた。

その後、彼らの星で、突然女性と対面するたびに、私は裸の感覚のために、自発的に、慌てて、腰の白い霧状の仮想パターンがあるかどうかを確認しました。

私は、ゴク星人たちも、実は裸で、服装も仮想のものだということに気がついたが、彼らはもう慣れてしまっているのか、異性を見るとあわてて下半身を見るという私の習慣とはまるで違っていた。

異星から帰ってきてからも、私はこの習慣を持っていて、

若い女性を見ると、慌てて下半身を見て、何年も続いて、やっと少しずつ変わってきました。

「われわれの惑星はきみたちの地球よりも重力が強いから、きみは地球よりも重いと感じるだろう。そうなるといつだって気分が悪くなる」とノートンは言った,

「グローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークにあなたの体重を減らすようお願いします」

「なに、グローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワーク?」私は不思議に思った。「人間の体重は、どんなグローバルな公衆運動ネットワークによって減らすことができますか? 人間の体から何かを分離しなければ、どうして外部から人間の体重を減らすことができますか? グローバルな公衆運動ネットワークとは何ですか?」

「円盤倉庫からここまで一万キロ以上、グローバル・パブリック・スポーツ・ネットワークを使っています」

ノートンがそう言って、テーブルのひとつを適当に拭くと、テーブルの上に細かい白い煙が立ち上った。

やがて白い煙が立体画面に変わり、円盤のなかでぼくが見た立体画面と同じように、たくさんのゴキブリ文字が映し

出された。

これらの文字は英語のようで、基本的なアルファベットを組み合わせたようなもので、私たちの漢字の象形文字とは異なります。

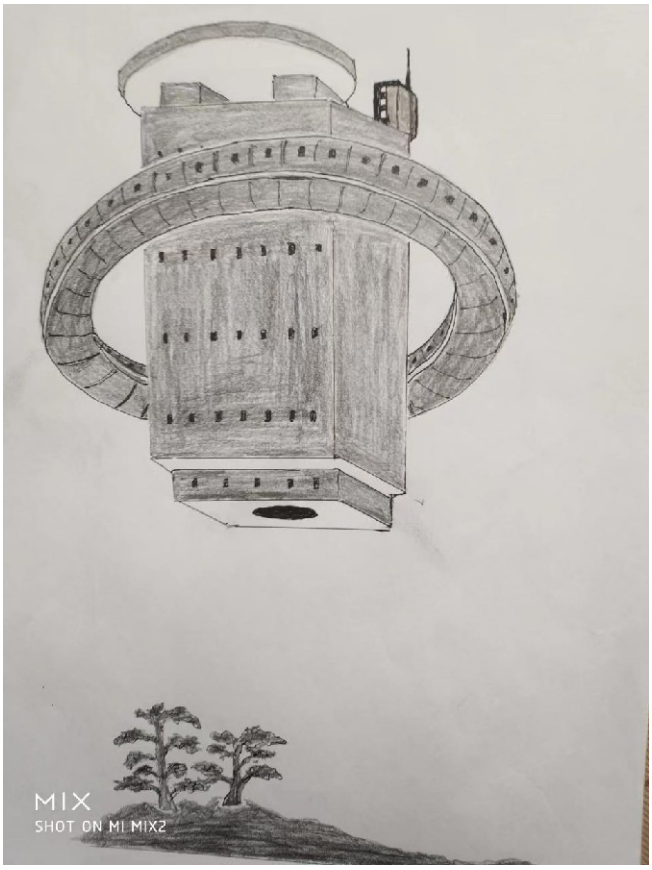
ノートンの優雅な手の動きで、私の耳には柔らかい女性の声が聞こえました:「グローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークはあなたを歓迎します...」

ノートンがしばらくそれをやっているうちに、私は急に身体が軽くなったような気がして気が楽になった。

ああ、おかしいな、ノートンは何を使ったんだろう?ノートンはグローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークと言っていますが、これはいったい何ですか?

ノートンは私に説明した,

「グローバル・パブリック・ネットワークの主要な設備は、私たちの惑星の上空にある人工発生器であり、この発生器はあなたの地球の上空にある静止衛星と同じように、私たちの惑星の周りを同期的に回転しており、私たちの惑星は自転していますが、人工発生器はあなたの地球の衛星よりもはるかに大きいです。



われわれの惑星は一つに九つあり、その影響範囲は惑星全体をカバーしており、これらの装置は世界のどこにでも特殊な、人工的に作られたフィールドを送りこむことができるーー人工フィールドとは、文字どおり影響空間のことだーー」,そして空間に存在する物体に影響を与える。

全地球測位システム(gps)、コンピューター、グローバル公衆情報ネットワークと相まって、グローバル公衆運動ネットワークを構成している。

グローバル・キャンペーン・ネットワークの助けを借りて、私たちが旅に出るとき、このようなプロセスがあります、

私たちはまず、自分たちのキャンペーンの要求を、公共情報ネットワークを通じて、宇宙空間の人工発生器に送ります。

人工発生器はまずあなたの身元を確認し、確認した後、あなたのいる場所をロックし、それからあなたに照射すると、あなたは一瞬であなたのいる場所から消え、瞬間的にあなたが行きたい場所に現れることができます。

このプロセスがあまりにも速いので、人々は感じることができない、一般的に私たちはこの運動プロセスをテレポートと呼び、また、テレポートと呼ばれています。”

「グローバル・パブリック・キャンペーンのネットワークは、見ることも触れることもできないが、複雑でもある」と私は言った,

「これはすごいわね。 ufo よりずっとすごいし、使いやすいし、乗客は何も持っていかなくていいのよ。だったら、どうしてほかの惑星に行って、グローバル・コミュニティ・キャンペーン・ネットワークを使わないの?」

「この地球規模の公共運動ネットワークは、人工発生装置が地上に向かって照射されているだけで、作用範囲が限定されているため、空飛ぶ円盤を使って惑星間を移動すること

しかできません」とノートンは答えた。

「このグローバルな運動ネットワークの中心は人工発生器で、残りは補助的なものだということですが、その人工発生器の基本原理は何ですか。

空飛ぶ円盤の基本原理と同じで、人工場の発生器が人に照射し、人の周囲の空間の光速運動が消え、人の周囲の空間は本来常に光速で運動しており、これは人と物体が質量を生み出す原因である。人間の質量がゼロになると、光の速度で運動し、ゴールまで運動し、そして人間の周囲の空間運動を元に戻す。

途中で物体の質量がゼロになり、物体と衝突する力がゼロになれば、物体を通り抜けることができます、あるいは、物体の質量をゼロにすることもできます,障害物を通り抜けることができます。

しかし、ここで質量がゼロになるというのは相対的な概念であり、運動しているあなたは質量がゼロになっているのに、あなたは質量が変化していないと考えているのだと思います」

ノートンの説明に、わたしは混乱し、不思議に思った。

「つまり、固い二つの固体は、人工発生器の照射を受けても、互いに何の障害もなく通り抜けられるということですね? 」と私は訊ねた。「固体の中の分子は、どうしてお互いの邪魔をしなくなったのですか?

ノートンは答えた:

「普通の物体は原子で構成され、原子は原子核と核外電子で構成され、電子と原子核の体積は原子の体積の数十億分の 1 しか占めておらず、通常の状況下では、人は壁に近づくと壁によって遮られている。

私たちはその電磁力によって実際には遮られているのです。この電磁力がなければ、簡単に通り抜けることができます。

人工的に作られた装置によって、物体から電磁力が消え、二つの固体が容易に互いを通り抜けられるようになりました、しかし、これらの電磁力が消えるのは、相対的な概念であり、あなたの体から消えるのを見ているのです,自分がまだ存在しているのを見るのです」

ノートンの説明に、私はちょっと面食らった。

「人工発電装置は物体の質量を減らすことができるので

すが、私は自分の体が軽くなったような気がします。この人工発電装置は、私の体質を軽くするために、私の照射を追跡しているのです。しかも完全にはゼロになっていないのです。ただ、部分的に軽くなっているだけなのです」と私はノートンに尋ねた。

ノートンはこう答えました、「あなたは賢いですね、そういうことです」

「フローティング・マン[僕が子供の頃に出会った特別に高度な文明を持つ気体の宇宙人のこと]が彼を見つけたのには、何か理由があるはずだ」ビューティフルが口を挟んだ。

「前の兄は地球人のなかでは賢い人間だったにちがいない。地球人は賢い生き物だったというべきだろう。ただ、地球人は争うことが好きだった。互いに争って、そのために才能を使っていた」,

「地球人にはもうひとつの悪い習慣がある。人間をいくつもの階級に分けて、ある者を上等と見なし、ある者を下賤《げせん》と強調するのだ」

「前の兄は地球上では上等な人間なのか、下等な人間なのか」シェイドが私を見つめてきいた。

「私は最も下等な人間であり、最も高等な人間です。私は今、グローバル・スポーツ・ネットワークにしか興味がありません」と私はノートンに言いました。「このグローバル・スポーツ・ネットワークは万能ですか?」

「このように人を瞬時に消滅させることができる人工場設備も万能ではなく、多くの制限条件がある。

この装置のエネルギーが一定の値に達しない場合、生成された人工場が人に照射された時に瞬間消失運動を起こさせることができない。

瞬間消失運動をする物体の質量が大きすぎる場合、または多くの物体を合わせた質量が大きすぎる場合、このデバイスの電力が達成されないと機能しません。

それに、もし、この装置が不安定に作動していたら、壁を通り抜けるときにひっかかって命を落としてしまうかもしれない」

ノートンは説明を続けました,

「人工的な設備で惑星のような大きな物体を瞬間的に消滅させるのは、人間よりもはるかに難しく、その消費エネルギーは途方もなく大きい。

人が壁を通り抜けるのを容易にするために、人が惑星を通り抜けるためには、人工的な設備の電力要件は特に巨大であり、消費能力は驚異的であり、そうでなければその結果は人々が惑星に立ち往生し、人々が死ぬことになります。実際、このような強力な人工設備は私たちにはありません」

グローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークについては、まだ多くの疑問が残っています。

「小さな部屋に突然たくさんの人が入ってきたらどうしますか?」と私は尋ねた。

「グローバル・スポーツ・ネットワークは高度にインテリジェントであることが求められており、この場合は出願を開始した人だけが許可され、その後の出願者は通過できない。〈グローバル・キャンペーン・ネットワーク〉は高度にインテリジェントであるだけでなく、グローバルな情報ネットワークと結びついている」スーデイルは説明した。

「公衆運動ネットワークは、あなたの要求する到着スペースがいっぱいであることを思い出させます。あなたは公衆運動ネットワークに支持しないことを要求します。あなたは次回または遅延を選択することができます。」ビリーこの言

葉は、私の耳によく出てくる情報ネットワークのカスタマーサービス。

「夜になったら銀行の金庫室に現れて、札束をバッグに詰め込みたい。夜になったら、きれいな妹の部屋に現れて、ああ、自分と彼女を・・・

ません。

あなたがグローバルキャンペーンネットワークで危険な海に自分自身を表示するように要求すると、グローバルキャンペーンネットワークが画面上にポップアップ表示されます:

グローバルキャンペーンネットワークは、海は危険な場所であり、自分自身を守るように注意し、問題が発生した場合は安全に戻ることができるように速やかにお問い合わせください。

あなたがグローバル・スポーツ・ネットワークにあなたを送るように頼むとき、あなたはコンピューターで地面から10メートルの高さにある場所をクリックし、グローバル・スポーツ・ネットワークはあなたに警告します:

このエクササイズネットワークは、あなたの指示に従って、このエクササイズの要求を満たし、あなたの安全のために、デフォルトでは、あなたが指定した場所の垂直10メートル下の地面にあなたを送ります。

あなたがグローバルスポーツネットワーク上で他の惑星に自分自身を表示するように要求すると、グローバルスポーツネットワークが画面上にポップアップ表示されます:

申し訳ありませんが、グローバルキャンペーンネットワークは、人や物体を世界規模で移動させることしかできません。

あまりにも美しい山を見たあなたが、グローバル・エクササイズ・ネットワークに山を自分の家に移してほしいと頼むと、グローバル・エクササイズ・ネットワークは次のように伝える:

申し訳ありませんが、グローバルキャンペーンネットワークあなたのような平均的なユーザーのための唯一の人々と世界中のオブジェクトの 100 トン以下を移動させることができ、あなたの要求はあなたの権利を超えています。

あなたが他人のものを見て、グローバル・エクササイズ・ネットワークにそれを自分の住居に移動させるようコンピューターに頼むと、グローバル・エクササイズ・ネットワークが画面にポップアップ表示される:

これは他人の所有物であり、あなたの要請は我々の約束に違反しており、本スポーツネットワークは支持しません。」

.....

スーデイルは一気にたくさんのことを話し、私の疑問の多くは解明された。

このグローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークには内心賛嘆している。こんなものが地球上にあったら、どんなに素晴らしいだろうと思いました。

私はアメリカに行って、アメリカの住所を情報ネットワークで調べて、確定ボタンを押すと、アメリカのあの場所に現れて、帰りたいと思って、実家の住所を調べて、確定ボタンを押すと、すぐに帰ってきます,なんて便利なんでしょう!

「ああ、私は理解しました、あなたの大通りには自動車がなく、電車もなく、飛行機もなく、交通手段もなく、人々はバッグを持たずに外出し、あなたの家に多くの物を置いていないのは、グローバルな公共運動ネットワークがあるからです。

店舗も必要なく、買い物はメーカーの倉庫から直接送ることができます。ホテルも旅館もないし、どんなに遠くてもすぐに帰れるからだ。

シンプル、スピーディー、セキュリティー、効率性を実現する、世界規模のスポーツネットワークです」

「グローバルスポーツネットワークに頼んで、あちこち走らせてもらえないかな」、と感心しました

「あなたには無理です。あなたには身分がありません。でも、もしあなたが私たちの誰かの従属物だとしたら」とノートンは言った:

「たとえば、あなたが私の付属物として、私がいつでも持ち歩く荷物のように、私はグローバルネットワークにあなたを連れて行くことができるように頼みます、あなたは地球外の出身で、アイデンティティを持つことはできません、私たちの惑星の人だけがアイデンティティを持つことができます。

地球規模の運動ネットワークが、さらに重要な役割を果たしていることを、後でお分かりいただけるでしょう、もし地球規模の運動ネットワークがあれば,あなたの生活、学習、仕事、工業製造、科学研究などの活動に大きな影響を与え、あなたの都市の構造に大きな変化をもたらすでしょう。

地球上から国家や戦争を、消滅させることさえできます、世界規模の運動ネットワークを使って、紛争当事者を引き離すことができるからです。

私たちゴック星人の体は、エネルギーを得て、食べ物を食べ、排泄し、呼吸し、基本的にグローバルな運動ネットワークに頼っています。

グローバル運動ネットワークはまた、社会の倫理観や法律を変更することができ、我々の社会は、人が悪いことをしたいので、法律を遵守することを要求しない、グローバル運動ネットワークは、いつでも停止することができ、あなたが悪いことをやって成功することはできません。モラルに対する要求も低い」

「そうなんですか、グローバル・キャンペーン・ネットワークを突然停止したら、あなたたちは命を落としますよね?」?俺は感嘆した。

「そうだ!」とスーデール、ノートンは声を揃えて答えた。

「私たちの 2 つのネットワークは、地球上のすべての人を常に追跡し、世界中のすべての人にサービスを提供しています。このサービスが停止する可能性があるのは、その人物が自分たちの惑星を離れたときだけです」とスーデールは言った,

「あなたたちは地球上でインターネットを構築しており、

インターネットは最終的には私たちのグローバルな公共情報ネットワークと同じように発展するだろう。ただ、あなたたちの地球上にはまだグローバルな運動ネットワークがない」。

私たちのグローバル公共情報ネットワークは、外部とのコミュニケーション、問い合わせ、位置情報、あいさつ、翻訳、人の様々な身元の確認、認証など、あらゆる情報サービスを常時提供しています。

われわれ情報ネットワークは純粋な空間を通じて情報を伝達することができ、いずれも人工場スキャンによる遠距離非接触の方式で情報サービスを提供し、しかもこれらは無料である。

我々の人工ファームスキャン技術は、遠隔操作で各人の脳の思考・意識を直接読み取ることができ、空間を通じて遠隔操作で各人の脳に情報を入力することもできる。

人と人の間で借用人工場スキャンは空間を通じて直接情報を取得・送信することができ、つまり人と人はグローバル情報ネットワークを通じて遠距離から直接交流することができる。

これが私たちのマニュアル・ファーム・スキャン・カットオ

フ技術です」

「どうしてまた外部のコンピューターを使っているのですか?」私は不思議に思った。

「過剰な情報が人間の脳に直接入り込んで、迷惑をかけることもありますし、われわれの部下も外部のさまざまなコンピューター機器を使っていることが多いのです」とノートンは説明してくれた。

「私たちのグローバル情報ネットワークとグローバルキャンペーンネットワークを常に追跡することは素晴らしいことであり、私たち一人ひとりがどこにいても強力な能力を持つことができます。

なぜなら、この2つのネットワークは、常に私たちを追跡し、私たちにさまざまなサービスを提供しているからです。われわれはどこにいても危険にさらされることはなく、二大ネットワークによってさまざまな信頼できる安全保障を提供できる」とスーデールは語った。

「私たちの人々にとって現実の脅威となるような事態が発生した場合、私たちのグローバルキャンペーンネットワークは、人々を安全な場所に素早く移動させるための高度な知

恵を持っています。私たちのグローバル公共情報ネットワークは、常にさまざまな情報サービスを提供するだけでなく、遠隔地、非接触で個人の意識情報を記録することもできます。

その人物が事故に遭い、命を落とした場合、グローバル情報ネットワークはその人物の思考と意識を完全に記録することができる,人工的に作られた自律意識のない人間の脳に、その人間の思考の意識情報をマウントして、人工的なファームスキャン技術を使って復活させることができる」

あとになって気づいたことだが、ゴーカー星のグローバル・インフォメーション・ネットワークは彼らに情報サービスを提供し、グローバル・スポーツ・ネットワークは交通、加工製造、日常活動などあらゆる面で彼らにサービスを提供している,彼らの手足を広げたのです。

8、面白いゴーカイジャー

あるときノートンの家の仮想ソファに座っていると、だんだんお腹が空いてきました、「ねえ、ちょっとお腹が空いたような気がするんだけど、みなさんはいつも何を食べてい

るの?」

あなた方地球人は、私たちとは違った食べ方をするのです」とノートンは言いました

「普段はどうやって食べているんですか?」

「私たちの体が必要とするエネルギーは、食べ物から得られる化学的エネルギーでもあります。私たちの体が食べ物のエネルギーを必要とするとき、私たちはグローバル・エネルギー・ネットワークを使って、食べ物を直接体内に移動させることができます。一般的には液体です。ほぼ完全に私たちの体が利用できます」とノートンは答えた。

「液体はビンに入っているでしょう。ビンごと胃に送られますが、ビンはどうやって消化しますか?」

「ボトルを使わなくてもテレポートできます,「われわれには胃もなければ、腸も肝臓も腎臓も膀胱もない。私たちの体の内部は、口から下まで単純な空洞であり、私たちの食べ物は高度に加工されており、体はそれを直接利用することができます。

私たちの身体の多くの機能は、呼吸、消化、排泄を外部に委託され、グローバルな運動ネットワークを通じて、外部

の循環システムに委託されています。私たちの体をシンプルな構造にし、シンプルな体であればあるほど、より信頼性が高く、機能的に優れており、病気になる可能性が低くなります。

きみたち地球人のように原始的な肉体をもっていなければ、胃、腸、肝臓、腎臓、膀胱ーーなんとも複雑で厄介なものだ。身体のエネルギーが不足すると、グローバル・キャンペーン・ネットワークが食べ物のエネルギーを私たちにテレポートします

「さて、グローバル・キャンペーン・ネットワークに食料を持ってきてもらいましょう」ノートンはそう言って左手を上げ、耳のあたりを空中でぴしゃりと叩くと、見事な瓶と金属製のハサミがノートン家のテーブルの上に現れた。

このボトルはペンギンの形をしていて、銀色で、金属でできているようです。突起があり、ペンギンの口のように、長く伸びています。

ノートンはその瓶の伸びた部分を曲がった鋏で切り取り、それを私に差し出した。

私はそれを受け取って飲んだが、その液体は花のような

香りがして、口の中に会話のような甘い味がして、口当たりがよかったので、一気に飲み干し、瓶をテーブルの上に戻すと、急に空腹を感じなくなった。

ノートンがもう一度耳元で手を動かすと、ボトルとボトルが切り取った小片と鋏はさみが突然なくなり、またグローバル・キャンペーン・ネットワークにテレポートされたに違いないと思った。

「どうして耳元で手を振ると、グローバル・モーション・ネットワークにテレポートを要求できるんですか? 耳元にスイッチがあるんですか? 」

「ゴーク星人の脳とグローバル・パブリック・ネットワークは、人工的にスキャンされたものです」とノートンは言った,

「グローバル・キャンペーン・ネットワークに何かをするのを手伝ってほしいという考えが頭の中にあり、耳元で手を振って確認するだけですが、他の方法でも設定できます。首を振ったり、手を振ったり、足を踏み鳴らしたり…。普通の人は簡単で誤解が生じにくい確認方法を選びますが、もちろん、純粋に自分の個性によるものもあります。よく誤解し

たり、間違ったりしても、変えたくないものです」。

皆さんは「食事」と呼ばれ、私たちは「化学エネルギー補給体」と呼ばれ、一般的にコンピュータープログラムを設定しています。

私たちの体のエネルギーが不足しているときには、私たちの体の情報ネットワークをスキャンし、その情報をグローバルな運動ネットワークに送信し、グローバルな運動ネットワークは液体化学エネルギーを私たちの体にテレポートします,また、私たちの体から排泄物の一部を取り除くこともでき、すべてがプログラムによって自動的に操作され、私たちが気にする必要はありません。

私たちの体の吸引・消化・排泄機能を外部委託してしまったも同然です」

「生きているということは、グローバル・キャンペーン・ネットワークなしでは生きていけないということか」わたしはスーデールの口調を真似て、からかった。「〈ブリッジ300〉では食べられないのか? 」

「〈ダイアグラム 300〉には運動ネットワークもあるし、テレポートもできるし、わたしたちの体にエネルギーを補給

するのにも便利だけど、あなたには見えないわ」スーデールがいった,

「グローバル・キャンペーン・ネットワークがなくても、わたしたちの口は液体の食べ物を飲んだり、歯で食べたりすることができます。ただし、わたしたちゴク星人は慣れていません。しかも、わたしたちの身体の内部は空洞にすぎません。あなたたち地球人のように複雑な消化器官はありません。消化機能は退化しているでしょう。ほんとうに食べてもいいのかもしれません。あなたたち地球人

「あなた方の脳がグローバルな情報ネットワークに接続できるということは、脳内にバイオコンピュータを持っているということと同じなのに、なぜあなた方が仮想スクリーンコンピュータを頻繁に操作するのを見ているのか、私にはちょっと理解できません」私はノートンに言った,

「たとえば〈ダイアグラム 300〉で、あなたが仮想コンピューターを操作しているのを見たとしましょう」

「人間の体のバイオコンピュータの機能は、外部のコンピュータのように強力で安定しておらず、宇宙船 300 のような多くの機能は、脳を使って直接操作することを許可してい

ません。

そして、ゴーク星の中では、人々は自分の脳を通して、グローバル・パブリック・ネットワークに直接要請することによって、ゴーク星のほぼどこにでも行くことができます。

しかし、宇宙船はゴーク星から離れることができ、危険性があります。操縦《そうじゅう》は誰《だれ》でもできるものではなく、操縦《そうじゅう》を許可《きょか》した人間でも思うように操縦《そうじゅう》できるものではなく、承認《しょうにん》を必要とするものです」

ノートンは言った,

「人間の体内に組み込まれたバイオコンピュータは随意性が大きく、『ブロック 300 宇宙船』の操縦などは真剣かつ慎重に行わなければならないため、人間の脳内に組み込まれたバイオコンピュータよりも外部コンピュータの方が安全で適合性が高いということを理解してほしい」

「ああ、なんとなくわかったよ。きみたちのゴーク星にも秩序がある。どんなことをしても合理的だ。無茶は許されない」,

「ああ、ノートン、聞きたいんだが、君の家族は? 」

「家族って?」ノートンは驚いたようだった。

「ご両親は? 奥さんは? お子さんは?」

「ああ、私だけです」とノートンは答えた。

ああ、ゴーカー星の生物科学者ノートンがひとりだったとは。家族はどのくらいいるんだ」わたしはふたたびスーデイルにたずねた。

「おれひとりだ」

「あなたは?」私は微麗に尋ねた、「あなたの家族は何人ですか? あなたの両親はどうですか? 兄弟はいますか?」私は微麗が私たちの地球の幼稚園の少女に似ているのを見て、彼女に子供がいるかどうか尋ねるのは恥ずかしかった。

「なんだよ、俺は俺だけだよ」微麗はわけがわからないという顔をした。

「ああ、三人ともひどいことになったなあ、みんな孤児だったんだなあ、家には誰もいなくなったんだなあ、かわいそうに」

「だれが? だれが? われわれゴーク星人はみんな不老不死で、生きることも死ぬこともないのに、どこに親や兄弟や子供なんているんです?」と、スーデールは皮肉な調子でいった。

彼らは不老不死でいられるのだ、とぼくは思った。ぼくが見たゴーク星のすばらしいテクノロジーによれば、彼らは不老不死でいられるはずだ,彼らはどのようにして、地球人の最大の夢である、不老不死を実現したのでしょうか?

「本当ですか? あなたがたは不老不死になれるのですか?」私はスーデールの言葉を信じかねて、ノートンに尋ねた。

「ええ、不老不死になれます。何年も前に、われわれの惑星ゴーカリーはそれを実現したのです」ノートンはスーデールの存在を肯定した,

「私たちは生まれもせず、死ぬこともない。だから、老人も子供もいないし、親も子供も兄弟もいない。私たち一人で一つの家族だ」

「一つの家庭に一人しかいないのもよくないし、きっと寂しいよ」と僕は言った。

「うちにはペットがいるのよ。ペットもたくさんいるし、ペットと会話することもできるし、他の動物と会話したり、コミュニケーションしたりすることもできるの」と微麗さんは言う,

「私の家には私の世話をしてくれるロボットが 2 体あり

ます」

「あなたがたの星には、われわれ地球上に犬や猫のような動物はいませんか? どんな方法で動物と会話していますか?」と私はたずねた。

「ええ、動物はたくさんいますし、犬や猫もあなたがたの地球から持ち込まれたものと同じくらいの種類がいます」とノートンは答えた,

「われわれの言語を犬や猫のような動物が理解できる言語に翻訳し、その情報を犬や猫のような動物の脳に人工呼吸器スキャンで送ることができる。

人工ファームスキャンは、犬や猫のような動物の思考や言語を私たちが理解できる言語に翻訳することもできます。そうすれば、人工ファームスキャンを通じて犬や猫などの動物とコミュニケーションをとることができる。

しかし、あなたは地球人なので、私たちが猫や犬などの動物と交流することがどのような体験なのか理解することができず、現時点ではあなたに体験してもらうためのプログラムを見つけることができません。

あなたがペットと話しているのは、地球上の知的障害者

と話しているようなものだと考えてみてください。

私たちの惑星では、人間と動物の交流は非常に頻繁に行われています。」

「それで、あなたがたゴク星人には、夫婦や異性の友人はいますか」

「ええ、たいていは一緒に住んではいません。永続的なものではなく、しばらくのあいだ一緒に暮らしています。あなたがたの地球に法律上の登録があるようなものでもありません」とスーデールは答えた。

「おまえたちゴク星人はおもしろいな、おれは外へ出て、おまえたちゴク星人のあいだを歩きまわって、おまえたちの日常生活を見てまわり、おれたちの地球へ帰ってきたら、みんなに自慢して、おまえたちのことを話してやりたいんだ」

「これからきっと連れ出すよ」とノートンは言った。「今日は着いたばかりだから、疲れているかもしれない。ここで休んでいてくれ」

「うん、いいよ!」

「自分の場所に戻って、今度ここで会いましょう」。グローバル・インフォメーション・ネットワークのカスタマー

サービスのコーウィンが、シュデールとシュデールの言葉を通訳してくれたとたん、シュデールとシュデールがたちまちノートン家から姿を消したことに気づいた。

推測するまでもなく、グローバル・コミュニケーション・ネットワークを使って彼らの家にテレポートされたに違いない。

ゴーク星の世界的な公共運動ネットワークは、人や物体が、ある場所に突然現れたり、ある場所で突然消えたりすることを可能にし、さらに驚くべきことに、密閉された部屋の中で,ドアを開けなくても同じことができます。

これが地球上で起こったら、地球人は目を見張ることでしょうが、ゴーク星では、地球規模の運動ネットワークのテレポーテーションは、あまりにも頻繁で、日常的です,彼らの生活のあらゆる面で、グローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークは欠かせず、食事や呼吸さえも、キャンペーン・ネットワークに依存している。

「シャワーを浴びたいのですが、何かお風呂に入るものはありますか? お風呂に入りますか? 」と私はノートンに尋ねた。

「あります。ご案内しましょう」

私はノートンのあとについて小さな部屋に入り、ノートンが手を振ると、空中に仮想スクリーンが現れ、ノートンがそれを数回操作すると、突然部屋の中に乳白色のバスタブが浮かび上がった,この乳白色はあまりにも純粋で、しかも騒々しく動いているので、推測するまでもなく、仮想浴槽、人工場の産物である。

入ってみると浴槽の中に水があり、不思議なことに浴槽の端から端まで水が流れていました。この水は現実のもので、仮想のものではありません。

どうしてそうなんだろう。浴槽から水があふれ出ている。どこにこんなにたくさんの水があるんだろう。一方は水を吸っている。こんなにたくさんの水を吸って、どこにためてあるんだろう?これはわれわれ地球上では不思議なことにちがいない。

ノートンにこの浴槽はどういうものかと尋ねようとしたとき、ふと思い出したのは、ゴーカー星の世界的な公衆運動ネットワークを使って浴槽の端に水をテレポートしていることだった,運動ネットワークを使って、反対側から水をテレポ

ートすればいいじゃないか。

私は浴槽に飛び込み、すぐに水が本物であり、浴槽は仮想であり、私の判断は正しかったと感じました。

お湯は私の体温より少し高く、横になっているととても気持ちがいい。小便をしたい。さっき女の子がいたので、ノートンに小便をする場所を尋ねるのは恥ずかしい。今、お風呂に小便を入れている。ノートンは気づくだろうか?私を責めるだろうか?かまってちゃん。

小便をして、シャワーを浴びました。バーチャル・バスタブから出てきたとたん、バーチャル・バスタブはあっという間になくなり、きれいさっぱり消えてしまった。

ノートン家のバーチャルベッドはあまりにも快適だったので、わたしは美しく眠った。起きてみると、シュデールとマイクロリーとノートンはすでに仮想ソファに座って話をしていた。近づいて話しかけようとしたら、急に便が出てきて、聞きにくくなったので、「トイレはどこですか?」、と言ってしまいました

「トイレはないし、ゴーク族は排泄物を出す必要がない」、とスーデールは言いました、「あなたがた地球人の耳

糞よりも、排泄物が少ないのです」

「それなら、どこかで元兄の便宜を図らなければなりませんね」とノートンが言った。

「ここから連れ出します」マイリーは立ちあがり、自分から進んでいった。

女の子に道を教えてもらうのは, 悪いけど, 急な事なので。

その中から植物があるところに来て、便利そうにしゃがんでいると、近くでビリーがこちらを見ているので、ちょっと恥ずかしくなりました。今日の服はとても派手で、上半身は黒くてつやつやして、金属感のあるスウェットシャツで、2つの乳房は大きくなくて、しかし、とても長くて、とても突出して、まるくてとてもくすぐったいです。

紫色に光る短いスカートをはいているのは、正面から見ても後ろから見てもまあまあ普通だが、横から見るとおかしい、横がむき出しになっている、スカートは横から透けて見えるのかもしれないが、,この透けは高級すぎて、まるで何もないかのようで、ただスカートが全体に見えるだけで、何もないのではなく、透けているかもしれないというヒントがあります。

それに、歩いているときの服のねじれ具合が、妙に非現実的な感じがしてならなかった。

あとでわかったことだが、彼らは実際には裸で、ほとんどの場合、衣服は現実のものではなく、仮想のものだった。

グローバル・スポーツ・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークが遠隔操作しているバーチャル・イメージであり、実際の服ではない。

手で触れることは、裸体に触れることと同じですが、グローバルな運動ネットワークに、力場の保護を求めるなら、裸体ではありません。

きめ細やかなピンクと白の肌を見せるサイドボトムス。

わたしはちらりと見ただけで照れくさくなり、わたしたち地球人の女は露出しているだけでなく、肝心な部分を守っているのだと思った。彼らはよくなっているのに、肝心な部分を裸にするのが好きなのだ。わたしは心のなかで、彼らを恥知らずだと非難した。すぐに思いだしたのだが、コーウィンが彼らを紹介した惑星は、淫乱な惑星だった。

私は実は保守的な人間です。

あるとき、ウナギを掘っていて、町から来た女性が、何

歳かの娘を連れてきました。彼女たちは溝に横たわろうとしたが、そこに蛭ひるや虫がいるのではないかと恐れて、助けてくれというので、わたしが娘を抱きかかえると、その女はわたしにも抱きかかえるようにと合図した。この女性がピンクの太ももをショートにしているのを見ると、抱く勇気がなかった。

彼女はまた背負ってくるように合図し、その高い乳房を見て、私はまた勇気を失った。

この女性はおそらく私が女性を抱く勇気がないので、私を誤解し、怒って私を悪者として非難し、長い間、娘が向こう側にいたので、最終的には靴を脱いで歯を食いしばって通り過ぎなければならなかったとは思わなかったでしょう,長い間、罪悪感を感じていました。

ノートンの家に着くと、私は外に出て、惑星ゴーカーの日常生活について学ぶことを勧めた。

ノートンは言いました、「今度行こうよ、今日は大事なお客さんがたくさん来るから、ここでも我々の様々なゴキブリを見ることができるよ」

しばらくすると、ノートンの家に大勢の人がやってきて、

だんだん居間が狭くなっていくのを感じた。ノートンが手を振ると、仮想の壁が消え、居間が数倍に広がった。どうやら仮想の家は便利らしい。

わたしとシュデール、ヴェリティは仮想ソファに座り、わたしはその中央に座った。プチプラ今日はセクシーすぎる服装に加えて、自分が服を着ていないという裸の感じが目に見えないプレッシャーを与えているので、彼女との距離を保とうと努力しています。

ノートンの家の仮想ソファに突然現れる人もいれば、最初に煙が立ち込めて一人になってしまう人もいました。それはどういうことかと私はシュデールに尋ねた。

「いきなり現われたのは現実の人間で、グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じてやってきた。ゆっくりと煙に変わっていく人々は、実在の人物ではなく、グローバルな公共情報ネットワーク、グローバルな運動ネットワークが3d イメージング技術によって作り出したバーチャルな人物だ。しかし、現実の人間は、遠く離れたところから、公共の情報ネットワークを通じて、私たちと直接話すことができるのです」

スーデルが説明してくれた。

じっと見ていると、これらの仮想人間は本物の人間とまったく変わらないように見えます。スデルは私を騙しているのでしょうか?三七、二十一にかかわらず、私は立ち上がって、近くにいる、ゆっくりと煙に変わっている人のところに行き、この体に手を触れてみると、やはり空気中で手を振っているようで、何も触れていない。

覚悟はしていたが、それでもショックだった。ゴーク星人の驚くべきテクノロジーは、仮想テクノロジーの頂点に達していた。

ノートン家にやってきた人たちはそれぞれ違った顔をしていたが、身長はみな同じで、私の目から見れば違いはなかった。彼らは座談会を開いているようで、ノートンは司会者のように群衆の中を歩き回っていた。

混雑しているので、グローバル・インフォメーション・ネットワークのカスタマーサービスは、主にノートン、スーデール、ビリーのスピーチを通訳します,通常、カスタマーサービスは通訳しません。

このネットワークは非常に知的で、常に私の位置を追跡

し、私の頭の中の考えを読み取ることができるかもしれません。

ノートンはわれわれ地球人の身体構造について滔々《とうとう》と語り、ときおりゴーカー星人の身体構造や生理的特徴についても説明してくれた。

聞く気にもなれなかった、なぜなら、ゴーカー星の女たちや、ゴーカー星の女の子たちが、たくさんやってきたからです、彼女たちはとても若く、美しく見えたからです,地球の小学校や幼稚園の女の子みたいに。

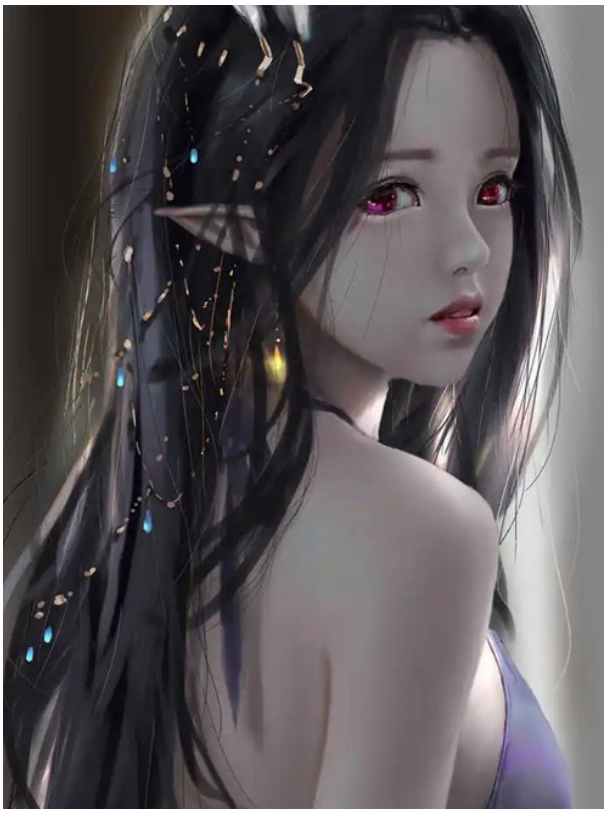
これらの美しい、セクシーな女の子は私の隣に座って、そしてドレス[または体に提示された仮想ドレス]は非常に露出している、一般的に美しい今日のドレスのように、上半身にタイトなスウェットシャツ。胸はアンダーシャツの内側にくっついているのではなく、アンダーシャツの一部に包まれて外側に突き出ている。

彼女たちの短いスカートは、たいてい脇《わき》の露出《ろしゅつ》からきめの細かいピンクがかった白い肌《はだ》をしており、中には細い管《くだ》がたくさん入っているものもあって、揺《ゆ》れているときに中の肌《はだ》を

見ると、くすぐったくてたまらない。

ノートンとシェリーは私の心に気づいていないのかもしれないが、スーデイルだけは知っているようだった。

「あなたがた地球の女性は美しい人もいれば、醜い人もいます」とスーデールは私に言った。「あなたは私たちゴック星の女性がみんな美しいと思いますか?」



「あなたがたゴーク人の美しいというのは、ただ顔だちとか、身体とか、そういったものにすぎないのです。わたしは、あなたがたゴーク人の肌がすべすべしていること、色が純粋であること、身体の構造が完全であること、わたしたち

地球人の美しさが、人間の中身、人間の思想、性格、人間の気質についても、あなたがたには理解できないかもしれないこと。

「身体にアイデアがあふれ、小さな包みがたくさんできたら、その人は美しいですか? 」とノートンは私に聞き返した。

「ヒキガエルみたいなアイディアや小さなパッケージをたくさん持っている人のことを、美人って言うの? 生きてるって言うの? 」と僕は笑った。

「わかりました」ノートンは元気づいたようだった。「さっそくこんな美人をお招きします」

ノートンが左手で耳を押さえながら何度か行ったり来たりしていると、突然目の前に美しい女性が現れ、私はびっくりした。着ているものが少なすぎるし、肌の色はピンクがかった白でほんのりとピンクがかっている。

ピンク色のアイデアがあちこちにあります、マッチの頭ほどの大きさで、非常に均一に分布しています、よく見ると、アイデア、またはパッケージは、透き通っていて、ちょっとザクロの種に似ています。

この人はとてもセクシーに見えます。「どうですか、こ

の男をどう思いますか」とノートンが私に尋ねた。

「ええ、たしかにこの人はきれいですよ、たしかにセクシーですよ」この人のきれいなセクシーさはやはりデリケートさから来ているような気がしますが、それとは別の形のデリケートさから来ているような気がします,いまさらノートンたちと言い争う気にはなれなかった。

9、ゴク星人はなぜ地球人を誘拐したのか

話題を変えようと思ってノートンに尋ねると、,

「私たち地球人の女性を見たことがありますか? 私たち地球人の女性は美しいと思いますか? 」

ノートンは「私たちは何度もあなた方地球人を誘拐していますが、私は何度もそこに行ったことがあり、あなた方地球人のことはよく知っています。

私たちはしょっちゅうあなた方の地球に行って人を拉致しているだけでなく、しょっちゅう宇宙の遠い他の星に行って人を拉致し、私たちのゴーク星系に来させているのです。

私たちから見れば、他の惑星の女性に比べて、あなたた

ち地球の女性は美しくない」

「だったら、どうして地球人を誘拐しようとするんだ?」と、私はききかえした。

「きれいだからという理由ではありません」とノートンは言った。「われわれが異星人を誘拐するのは、きれいだからという理由ではありません」,

「我々があなた方の地球に行って、地球人を拉致すれば、我々はフィールドスキャンによって、地球人の思想・意識・記憶・感覚・各種運動・生理活動などの情報データを得ることができる。

われわれの技術的手段によって、きみたち地球人とまったく同じ人間をつくることができるし、そのつくりあげた人間の意識を、全部あるいは部分的に消去することもできる。

それから、この人工的に作られた、意識のない地球人の脳に、ゴーク族の意識をスキャンしてみましょう,ゴークマンの体を時空間冷蔵庫に保存します【この冷蔵庫の中は外と同じ温度で、中は１秒、外は１年、後で紹介します】。

そうすれば、このゴーク人は、しばらくのあいだ、地球人の身体で生きることができ、地球人やほかの惑星の人間が生きているときのさまざまな感覚を体験することができる。

われわれは他の惑星から人間を誘拐して、われわれの惑星ゴーカートにやってきたが、それを真剣に受けとめ、ときにはこれらの外来種を、われわれのゴーカートの環境に適応させるように改造しなければならない。

そのために、私たちは膨大な資源を投入し、基地を建設し、この惑星の環境をシミュレートし、スーパーコンピュータを使って、外来種の人々が地球上でしばらく生活した後にどのように適応するかをシミュレートしました。

われわれの強力な工業的製造能力を利用すれば、このような外来種の体を短時間でたくさんつくることができ、われわれすべてのゴーク族のニーズを満たすことができる。

宇宙のすべての人種の生存の三要素は、物質資源、エネルギー、情報である。

物質的な資源やエネルギーは、私たちの惑星では無料です、私たちは情報にしか興味がありません、私たちは地球人を誘拐し、宇宙の他の惑星の人々を誘拐し、異星人から得た

情報を奪います,私たちに莫大な富をもたらします。

例えば、あなたのような地球人の男性を、私たちの惑星に連れて行き、その男性に、銀河系の様々な形の女性と、セックスするように強制します。

また、遠隔スキャンにより、この地球人のその他のさまざまな運動、脳内の意識活動などの詳細な情報データを記録した。

これらの数字は私たちにとって、デジタル人間の概念であり、デジタル人間は私たちのゴークシャーにとって非常に高い経済的価値を持っています。

その数字を使って、この地球人とそっくりの肉体をつくる以外にない。

そして、その数字を直接売って、われわれの情報ネットワークで〝地球人の男とセックスして、生きる〟と宣伝して、大勢のゴーカーユーザーに売りつけることもできる。

私たちの女性ユーザーの一人は、「地球の男とセックスして、生きる」というデジタルを購入し、私たちのバーチャルテクノロジーを使って,地球人男性の立体的なバーチャル画像が、まるで実在の人物のようにその女性のそばに現れた。

この女性は本物の地球人男性と同じように暮らしており お互いに話したり、交流したり、バーチャルセックスをすることさえできる。

3d バーチャルコンパニオンテクノロジーに加えて、3d 物理コンパニオンテクノロジーも人気があります。

たとえば、私たち女性は、「地球の男性とセックスして生きる」という数字を購入すると、情報スラッジ製品を作動させることができます、この製品はデジタル情報によって活性化され、急速に活性化します,その瞬間、彼女のまわりに、この地球人の男とそっくりの外見、身長、体重の人物が現われ、しかも、視覚、触覚、味覚などの感覚において、なんの区別もないのだ。

メッセージスライムになっている人と会話したり、コミュニケーションをとったり、セックスをしたりすることができ、その感覚は本物と変わりません。

もちろん、この情報泥が形成された人の思想意識や行動は、ユーザーが購入したデジタル情報によって決定されます。

デジタル経済の素晴らしい点は、私たちの 1 人の女性だけでなく、何千人もの女性を満足させることができるという

ことです。

私たち何千人もの女性が、「地球の男性とセックスし、生活する」という数字を買うことができ、それは本物の地球の男性と一緒にいるように、しばらくの間一緒に暮らすことができます。

それは『地球の男とセックスし、生きる』デジタル人間が地球上でどれだけ人気があるかにもよる。

宇宙で新たなエイリアン種が発見され、誘拐が成功するたびに、「この新たなエイリアン種と共に生きる数字」がしばらくの間、私たちの社会で流行することになる。

これは皆さんの地球のポップソングのようなものですが最も重要な要素は新しさと真実であり、完全には品質の良し悪しではありません。

しかし、あなたがた地球人のボディ・ナンバーは、われわれの惑星ではひどく人気がなく、ゴミ扱いされている。

おまえたち地球人が異星人の異星人の男をひとり捕まえても、せいぜい数人の地球人女性と交替で何度かセックスするだけで、われわれのように急速に社会的に流行することはありえない。

われわれはこの技術的手段によって、地球人の男が何万人ものゴキブリの女性と同時に生活し、同時にセックスをすることができるようになる。

地球人男性の体を小さくして持ち歩いたり、あるいは地球人男性の体を大きくして自分の体を地球人男性の体に寄生させたりする変態女性ユーザーもいます。あるいは地球男をペットの姿に変形させる。

方法は、あらゆる種類の、奇妙な、様々な奇妙な方法、変態の程度は、あなたの想像をはるかに超えています。

地球人を誘拐したり、宇宙の他の惑星の人々を誘拐したりすることによって、たとえ一度でも、私たちは外来人種に関連する多くのデジタル製品やバーチャル製品を開発することができます。

一度誘拐すれば、莫大な富をもたらすことができます。

他の惑星に行って人を誘拐したり、スーパーコンピューターを使って宇宙人を作り出したり、ある星の人種の数を作り出したりする必要はありません。

たとえば、地球人の数字を何もないところからデザインすることもできる。

このようなデジタル人間を、作っている人はたくさんいます、このようなデジタル人間はたくさんいます、ユーザーエクスペリエンスは良くても、売れていないのです、ユーザーは偽物だと思っているからです,私たちが作り出したものです。

これから本当に地球からあんたみたいな男を誘拐して帰ってきて、すぐにあんたみたいな男を連れてあちこち走り回って、本当に地球から人を誘拐して帰ってきたんだって仲間が言うんだ。

あなたから生まれたデジタル人間は、多くのユーザーにとって、そのデジタル人間が現実の地球人から生まれたものだと考える興味深いものになるだろう。

今後、あなたの地球人の元兄に関連するデジタル人のさまざまな製品がよく売れるでしょう。

女性だけでなく、あなた方地球人男性の人体数字を買ってくれる男性もいますし、買ってくれば、自分のゴークマンの体を時空冷蔵庫に保存することもできます,そして、あなたがた地球人のように人工的に作られた身体を申請し、自分の

意識情報をこの地球人の脳にインストールすれば、あなたがた地球人の身体でしばらく生きることができます,そうすれば、あなたがた地球人の生活体験を得ることができます。

われわれゴーカイ人がなぜそんなことを好むのか、あなたがた地球人は権力と富を求め、われわれゴーカイ人は感覚と経験を求め、権力と富には興味がないのか、不思議に思うかもしれない」

「これでわかったでしょう、あなたを誘拐したのは、お得だったんですよ」と、スーデイルは奇妙な微笑を浮かべて言った,

「残念ながら、あなたがた地球人の数字は、われわれの星ではひどく流行《はや》っていて、ゴミ[＃「ゴミ」に傍点]扱いされています」

「それなのに、なぜ地球人を誘拐して、私を誘拐するんですか?」私は不平を言いました。

「あなたの頭の中に、何か特別なものがあるみたいだって言ってたわ」シェイドがゆっくりと言った。

「じゃあ、誘拐した地球人はみんな送り返したんですか?」と私は訊いた。

「送り返されたり、体が丈夫でなくて、実験をしてその場で死んだり、わたしたちゴク星人の女性とセックスしたときに耐えられなくて、虐待されて死んだり、わたしたちゴク星人の星で老いて死んだりするのよ。なぜかって?」

シュデールは身体をふるわせて笑った。「だって、わたしたちだって怠け者だもの」

私の顔色をうかがい、私を慰めるように言いました、「元のお兄さんを送り返します、あなたの脳には特別なところがあります、普通の人とは違って、私たちにとって重要です」

あとでわかったことだが、彼らはとくに発達した異星人を誘拐して、報復されることを恐れて、用心深く世話をしていたらしい。わたしたち地球人に対しては、彼らは好き勝手なことをしています。わたしたち地球人は彼らに対して無力ですから。

十、宇宙における陸上人種と水上人種

「われわれ地球人ときみたちゴーク人のほかに、宇宙に

人間のいる惑星はたくさんあるのかい?」と、わたしはたずねた。

「もちろん、いろいろな種類の人間がたくさんいることはわかっています」とノートンは答えた

「宇宙には人間の種類がたくさんありますが、そのほとんどは下等生物から進化したものです。進化という観点から見ると、陸上の下等生物から進化したものを陸上人種という2種類に分けることができます。

あなたがた地球上の人々、われわれゴーク人は、みな陸地から進化してきた人類であり、みな陸上から進化した人類である。あなた方地球上の生命は初期に水中で誕生したが、地球人の進化の過程の大部分は陸上で行われており、陸上ベースの人々のものでなければならない。陸上人種は宇宙の大部分を占めている。

地球上の鳥のように、空を飛ぶことができる動物もいますが、これも陸生種に属しています、なぜなら、鳥も陸上で進化し、進化の大部分は陸上で行われたからです。

水中の下等生物から進化したもので、その進化の大部分が水中で行われたものであれば、ウォーターベース人種と呼

ばれる。

我々ゴキブリが本当に好きなのはウォーターベースの人種であり、多くのゴキブリが好きなのは、ウォーターベースの進化した人種の体なのです」

「じゃあ、わたしたち地球人の身体はどうなの? たくさんの種類の人たちの中で、とても優秀なの? 」彼らがわたしたち地球人の身体についてどう思っているのか、もう一度知りたいと思いました。

「ひどいものです」シェリダが口をはさんだ。

「くだらない」スーデイルも口をはさんだ。「あんたたち地球人は身体の進化が悪い」

「どうしてあなたがたゴーク人とわたしたち地球人は、外見が似ているのですか」と、わたしはたずねた。

「なぜなら、私たちはみんな陸上で進化した人種だから

です」とノートンは言います,

「陸上で進化した生物は、地面を歩き始め、四つ足で歩くのが最も確実であり、さらに頭が経路を検出し、行動を指示するパターンは、宇宙で陸上動物の最も優れたパターンです。

動物が陸上でこのようなパターンをとるのは、長期にわたる自然進化、優勝劣敗の結果である。もし三本足で歩いていたら、不安定なのでとっくに淘汰《とうた》されているだろう。

その後、手と足が離れて直立歩行できるようになったのは、道具を使ったり道具を作ったりするからだという単純な理由からだ。

このような理由から、宇宙の陸上で進化したすべての人は、進化の最後の段階で、外部の形状はほとんど同じです。

つまり、さまざまな動物が最後には、われわれ現在の人間のような形に進化し、ゴク星人があなたがた地球人とほとんど同じ形になったのは、そのためです。ひとことでいえば、自然淘汰《とうた》、優勝劣敗、進化の原因である。

その後、私たちは自分の体を人工的に作ることができま

す、なぜ奇妙な形を作らないのですか?これは伝統的な習慣のせいばかりではなく、主に美意識によって決まる。

つまり、以前の体が美しくセクシーだと思われていたのに、変な形になってしまうと美しさやセクシーさがなくなってしまうのです。

現在も新たな怪奇人種を開発・製造していますが、やはりセクシーさ、美しさを中心に、その本筋から外れていません」

ノートンが手を振ると、三次元の立体画像が現われ、さまざまな人間が、手足に頭をつけて直立歩行している様子が映った。

ノートンは続けた,

「陸上で進化した動物と比べると、水上で進化した動物は進化できず、長期にわたって自分で道具や製品を作ったり、使ったりすることができないため、その進化の過程は非常に長く、高度な知能を持つ人類に進化できないものもある。

特に、完全に水に覆われた惑星では、何十億年もの間、水中で進化を続けてきた、知的で優れた身体機能を持った、エイリアンがいなければ,たくさんありますが、製品や道具を

作ったり、使ったりすることはできません。

しかし、これらの水に基づいて進化した動物は、何億年もの進化の中で、身体の優位性が明らかであり、身体の優れた性能は驚くべきものです。

地球上の人々を見てください、知性はありますが、皮膚、筋肉、骨格はひどいものです、慢性疾患を抱えている人は、50 代以上に多くいます,慢性疾患を抱えている人はほぼ 100 パーセントで、慢性疾患に長い間苦しんでいる人もいますが、あなたはそれを解決する方法がありません。

陸上で進化した人間は、道具を作ったり、使ったりすることはできますが、身体的な進化は不十分で、水中で進化した動物は、身体的な構造が最適化されています,その多くは、陸上の進化動物にはない、優れた特性と機能を持っています。

宇宙には、水に基づいて進化した知的動物であり、道具や製品を作ることができ、科学的知識などの知的文明を持ち、最終的に惑星や銀河を支配し、支配する惑星がたくさんあります。

では、水に基づいて進化した動物は、どのようにしてそれを行ったのでしょうか?

水に基づいて進化した動物は、何百万年もの進化の中で、自分の体を分解し、他の生物に寄生することによって、他の生物をコントロールする、強力な寄生能力を持っていました,特に、道具や製品を作るために、陸生動物を制御したり、改良したりします。

自分の体を分割することができることは重要です、水ベースの動物は自分の体を非常に小さく分割しますが、それでも自分の体の特性やさまざまな情報を保持することができます,他の大きな生物に寄生しやすくなります。

水系生物は水中に生息しているため、水の浮力によって体が大きく成長することができ、同じ種でも体の差が非常に大きくなることがあります。大きく異なる身体こそ、小さな人種を寄生させることができるのです。

もちろん、彼らの寄生は高度なものであり、あなたがたの地球の寄生とは異なり、単に宿主の肉体を食物として食べるだけではありません。

彼らが寄生するのは圧倒的に性的な要素が含まれており、相手に性的な賄賂《わいろ》を提供するだけでなく、相手に極度の快感を与えることができる。また、相手の身体の様々

な機能を改善することができ、相手と長く共存することができます。

正常位とのセックスで得られる快感の度合いを 1 と表します。

体が小さいパラサイトがいて、自分の体に積極的にパラサイトして、あなたとセックスをしてくれたとき、あなたに与えられる快感のレベルは 5 です。

身体的に巨大な寄生者がいて、あなたの身体を彼女の中に吸い込み、あなたとセックスをするとき、あなたに与えられる快感のレベルは 10 です。

これは寄生人種が何十億年、何百億年かかって進化して得た利点であり、何億年かかって進化した陸上人種とは比較にならない。

もちろん、寄生人種は、あなたのような陸上人種に、快楽と同時に、快楽に比例する恐怖と苦痛をもたらす可能性があります。

本質的な原因は、やはり陸上人種と水上人種との深い格差にある。

私が言っていることは、脳の中では考えられないということです、寄生体を実際に体験した場合にのみ、深い体験ができるということです。

私たちのゴーク星系には、海から進化した知的水生動物がたくさん生息しています、そのほとんどは、私たちが宇宙の他の惑星から持ち込んだ種です、とても高級ですが,とても恐ろしいレベルです。

しかし彼らは幸運ではありませんでした、彼らよりもずっと強力な陸上生物に、支配されていたのです、彼らは銀河系の支配者ではなく、まだ進化の途上にありました,将来、銀河の支配者になるかもしれません。

これらの大きな知的水中動物は、小さな体を持つ陸上生物を、自分の体内に寄生させようとします、普通は、一口で食べてしまいます、そして、肉管が野蛮に成長します,栄養を

与えながら支配するのです。おとなしく寄生することができるように。

ある大きな知的生物は、あなたを彼女たちの体内に吸い込み、普通は容易にあなたを外に出さないが、あるいはあなたを外に出しても、彼女たちの体の一部をあなたの体内に残し、あなたの体内に寄生し続ける。とにかく、あなたが彼女たちの中に吸い込まれてしまうと、彼女たちから完全に離れることは難しいのです。

小さな水中知的生物は、たいてい、奇襲や誘惑をしますが、最初は小さなものが近づいてきて、一度体内に入ると、あなたを支配します、脱出することは、ほとんど不可能です,彼らの手から逃れることは、ほぼ不可能です、彼らは一生、あなたの体に寄生し続けます。

あるものはずるがしこく、身体のごく小さな部分を分離し、ごく小さなものを利用して、あなたの注意をそらし、あなたの身体に侵入し、あなたの身体の中の小さなものに侵入し、さらに細い糸で外とつながっている,あなたは暴力でそれらを取り除き、あなたの体の内側に激しい痛みを引っ張って、そして第二段階であなたの体はあなたの体の内側にすべて入

ります。

あるものはコロイドのように、あるものは液体のようにカモフラージュし、ゆっくりとあなたの体に浸透してあなたをコントロールします。

私たちのゴーク星系の寄生生物は、ほとんどが私たちが宇宙の他の惑星から持ち込んで改造したものであり、一部は私たちの進んだ技術を使って創造されたものであり、もちろん自然進化の寄生生物も参考にしています。

私たちには、人間の体を作ったり、変えたりして、他の生物に寄生させたり、他の生物を自分の体内に吸い込んだり、他の生物を自分の体内に寄生させたりする能力があります。

宇宙の多くの惑星の寄生種は自然に進化したものです。私たちのゴーカ銀河には寄生者フォーラムがあり、寄生者の知識と技術を交換し、寄生者に技術的、物質的な援助を提供しています。

私たちの寄生体は、私たちの銀河のさまざまな場所に散らばっているように見え、実際にお互いに情報を交換し、厳密に組織化されています。

二つのアイデンティティーを持ち、正常な人間と寄生す

る人間の両方を持ち、グローバル・スポーツ・ネットワークとグローバル情報ネットワークによって、感覚と記憶をいつでも切り替えることができる」

――、ゴク星人の奇妙な性行為の原因

ノートンはまた、ゴーク星人の奇妙な性行為の原因についても説明してくれた。

「あなたたち地球上のセックスの意味は、一つは生殖と家族を維持するためであり、もう一つは自分自身と性的パートナーに喜びをもたらすためです。男女の間で一つの家族を維持し、次の世代を育成するためには、物質的な富を基礎とする必要があります。ですから、地球上の男女の間には、性的なパートナーシップだけでなく、パートナーシップがあります。

男が女に物を与えたり、女が男に物を与えたりすれば、相手を楽しませることができ、男女は単なる物質的な富でも相互の関係を維持することができる。

あなたたち地球上の性行為は、道徳や法律、文化、宗教、

伝統的習慣、社会、家庭など、さまざまな要素によって制約されています。

あなた方地球上の男性と女性の間には、セックスだけでなく、愛、ケア、パートナーシップなどもあります。

われわれの性の意味は単に快楽、体験、感覚のためであり、男と女のあいだには赤裸々な性があるだけで、愛はない。

物質的な資源は、私たちにとって重要ではありません、私たちには、次の世代も、死もありません、生命と健康と安全は、絶対的に保証されています、だから私たちはお金を稼ぐために、パートナーシップを組む必要はありません、家族を持つ必要もありません、親もいません,次の世代の面倒を見る必要もなく、自分や相手の健康を気にする必要もありません。

法律や道徳的な制約がないため、セックスには暴力がつきものです、遠隔地でのバーチャル・セックスが、流行している理由です、遠隔地でのバーチャル・セックスでは、いつでもセックスをやめることができます,相手からの暴力を避けるためです。

あなたがた地球人の人生の意味は富と権力にあり、われ

われの人生の意味はさまざまな感覚と経験にある。人間のさまざまな体験のなかで、もっとも快感をもたらすものは、まぎれもなく性体験であり、われわれ人間がことにこの性体験に熱中しているのは、そのためである。

ある意味では、地球人と私たちゴーク族との性行為は、動物との性行為とまったく変わらないのです、ゴーク族には愛がなく、セックスだけがあり、感情はありません,経験だけです」

ノートンの最後の言葉は、わたしたち地球人の男たちが雌豚や雌牛とセックスしているというスーデールの言葉に、かすかな不安を感じたことを思い出させた。

ノートンはまた寄生者同士の性行為について話しはじめた,

「われわれゴク星人は大規模な流行の寄生者であり、寄生者と宿主とのあいだの性行為は残酷なものであり、あなたがた地球上の寄生者は宿主の体を食物として食べているのです。

われわれのゴーク星では、物質的な資源や食料は、どんな人種にとっても、動物にとってさえ、どうでもいいことな

のだ。その理由は、科学技術が発達しすぎているからです。この点は、あなた方地球よりはるかに文明化されており、あなた方地球人の間で、いまだに物質資源、食糧、エネルギーなどをめぐって、配偶者をめぐって争っているようなものではなく、その争いが相手の肉体を殺すことにつながる可能性がある。

しかし、われわれゴーク星人は、何億年ものあいだ動物たちの争いの遺伝子を受けついでいるが、その争いは、物質的な富をめぐる争いから、寄生的な方法で異性の身体をめぐる争い、コントロールすることへと移行しているといってよい,男と女の争いへと移っていく。

寄生者にとって、闘争は同様に残酷であり、主として相手の身体を略奪し、支配し、自分の性的奴隷とすることであって、相手の身体を消滅させることではない。

私たちのテクノロジーは、寄生者たちの奇妙な機能を、より強力にし、より変態的にしました、ゴーカー星の寄生者たちは、あなた方地球人とは違って、愛を愛するようになりました、あるいは、愛を愛するようになりました,セックスはコントロールされ、略奪され、侵略的になり、セックスは暴

力的で、残酷で、グロテスクで、変態的になります、少なくともあなた方地球人にとっては」

ノートンが宇宙に存在するすべての生命の起源について語る

あるときノートンたちに尋ねた,「地球上の人々はどのようにして生まれたのですか? 私たちの多くは神が創造したと言っていますが、私はあまり信じていませんが、あなたの技術は非常に発達しており、あなたが創造したと言っています。

あなた方は他の後進惑星に生命を投入したことがありますか? あなた方の仲間を他の惑星の群衆に投入したことがありますか? 」

ノートンは言った,

「われわれの現在の科学技術レベルは確かに人間を作り出すことができ、われわれの現在の身体はわれわれ自身が作ったもので、自然繁殖したものでは全くない。しかし、われわれは最初からわれわれの身体を作ったわけではない。

あなたがた地球人、われわれゴーク星人、宇宙のほかの

惑星の知恵ある人々、すべての人間と生命のある惑星では、ほとんどの生命はほかの惑星から伝わったものではありません,何かによって作られたのでもありません。

宇宙には生命が存在する原始惑星があり、人間も下級生命もほとんどがより下級生命から一歩一歩進化してきた。

あなたたち地球人も、神や神が創造したのではなく、進化したのであり、神や神は存在せず、あなたたち地球人自身が創造した一組のメッセージなのだ。

私たちは現在、単純な生命から高度な生命、そして自分自身の身体を作る能力を持っていますが、それは後に私たちの技術がある程度まで発展した後であり、人工的に生命と自分自身の身体を作ることができます。

あなたたち地球上のすべての生命は、10 億年以上前の稲妻によって始まり、あなたたち地球人女性の 10 月の妊娠は、この 10 億年以上の進化のプロセスを表現することです。

空気中の窒素に雷が落ちると、複雑な高分子が生成され、水中に落下して、単純なアミノ酸やタンパク質ができます、アミノ酸やタンパク質が、自己複製するウイルスの、初期の分子を生み出します,そして低次元から高次元へと、進化して

いきます。

宇宙では、すべての高級生物、高級文明がウイルスによる虐殺の生存者である。

ウイルスの海において、高級なものに進化することに成功した生物は、ウイルスによる虐殺を免れることはできない。もう少し高度な生物への進化に成功しても、大多数は最終的にはウイルスのような単純な生物へと退化していく。

生物の進化の過程で、生物の構造が単純であればあるほど、生存が優位になるからだ。

その結果、単純なウイルスのような生物を持つ惑星で、高度な生物や文明が誕生したのは、その 1 億分の 1 にも満たないのです。

地球上の科学者たちは、人間は猿から進化し、猿は爬虫類から進化し、爬虫類は水生動物から進化したと考えています,水生動物は海からやってきました。

これは正確ではありませんが、初期の稲妻によって打たれた窒素は、陸地の小さな貯水池や溝に落ち、初期の生命を形成しました,海の中の生命は陸地の溝、水たまり、小川、小さな湖... から水に沿って流れている。

最も初期の生命は、海ではなく、陸地の小さな水の中で育まれました、海水は塩分やその他の化学物質を多く含み、ミネラル含有量が多く、波が高く、環境が厳しいからです,初期の生命の誕生には適していません。

初期の比較的高級な生物も陸地の淡水に生息し、最終的にさまざまな魚類に進化した。多くの海洋生物は淡水から海に移動し、海に慣れてから海で長く生活している。

陸地の淡水魚は川に沿って海に泳ぎ着き、あるものは海洋環境に適応できずに死んでいったが、億万年の間に繰り返された淡水魚は海洋に泳ぎ着き、あるものは海洋環境に適応していった,最終的には海の魚になります。

海の魚が陸地に逆流するのは、はるかに難しい。陸上や陸上の淡水は、海よりも進化が早いのです。

初期の陸地は淡水の中だけが初期のウイルス類の生活に適していたが、陸地は適していなかった。

最初は植物と動物の区別がなかったが、やがて生存や環境適応のために、初期のウイルス類の微生物が植物と動物を区別するようになった。

いくつかのウイルスは、高度な生物学的劣化によって生

成される。生物は進化の過程で、環境に適応し、生存するために、時には、遺伝子が退化し、逆方向に進化し、より単純な方向に進化します。

陸上の淡水魚は、どのように進化したのでしょうか?

陸地では、時には大雨が降り、川や湖が増水し、魚が餌を求めて、増水した水とともに、あちこちを泳ぎ回り、最終的には乾燥地帯である、小さな波に落ち込みます、雨季が終わり、晴天が訪れます,水がなくなり、多くの魚が死んでいきます。

残った小さな魚たちは、小さな小さな小さな

たとえば、あなたがたの地球の黒魚は、水がなくても数日は生きられますが、その後、黒魚はドジョウのように進化し、ドジョウは、水がなくても数ヶ月は生きられるようになりました,ドジョウは後に、ドジョウよりもさらに進化し、水なしで 1 年も生きることができるようになった。

ウナギは進化してヘビになりました、ヘビは水から完全に逃れることができ、湿度の高い環境で生きることができます。

ヘビは進化してカメになり、カメは進化してカメの甲羅を取り除くと、ウサギのような動物になり、ウサギはサルのような動物になりました,類人猿は人間になりました。

きみたち地球人は、胎児ができたときには尻尾を持っていたが、そのあと姿を消してしまった。実はこの尻尾は、人間が魚類から進化した痕跡《こんせき》を表現しているのだ。

動物が目を進化させたのも、ゆっくりと進化したもので、初期の生物の細胞は日光の熱を感じることができたので、日光がどちらの方向から照射されているかを見分けることができ、左から照射されているのか右から照射されているのかを見分けることができた。ゆっくりと進化していくと、やがて

生物は目をつくり、光が反射する宇宙世界の様々な映像を見ることができるようになります。

知的人類やある種の生物は、光や音や熱や電気や磁気だけでなく、場や時空や加速度なども感知できるように進化してきました,空間に蓄えられた未来の情報さえも、感知できるようになりました。

あなたがた地球人と私たちゴーク人の意識は、人間の脳の荷電粒子の運動形態であり、本質的に情報に属しています。

単純な生物が、のちの高度な生物へと進化するにあたっては、常に自分の行動をコントロールする必要があった。

生物が自らの行動を、コントロールすることは、進化するにつれて、ますます複雑になり、何億年もの進化の中で、生物は自らの行動を、コントロールすることによって、意識を持つようになりました。

生物の基本的な性質は、利益を避けることです。自分を傷つけるような出来事に遭遇したら、例えば動物が自分を食べに来るから、さっさと立ち去ること、自分に有利な出来事に遭遇したら、例えば食べ物に遭遇したら、近づくこと。

初期の生命は単純に逃げたり近づいたりするだけだった

ので、前進と後退をコントロールする行為であり、それに対応する意識も単純だった。

その後、生物は音、光、温度、匂い、物体の接触、加速度運動などの刺激に反応するように複雑に進化し、多くの感覚系を生み出しました,それに応じて多くの制御システムが生まれました。

人体は感覚系が集めた信号を処理し、それを処理して身体の各部位にフィードバックし、身体の各部位がそれに応じた動作を制御・協調することで、意識が複雑になる。

意識が複雑になるにつれて、意識を制御・調整するための別の特殊な意識が分離していく。

初期の単純な生物から現在の複雑な人類に至るまで、意識は生体内の電子とイオンの動きによって生み出されています。

意識の担い手である電子やイオンには変化はありませんが、その働きを取り巻く環境である生物の脳や体は、数億年の進化の中で大きく変化しました,それに対応する意識のコントロールという運動形態も、ますます複雑化し、高度化している。

しかし、生物学的選択が単純化することもあります、ウイルスのように、進化が単純化することもあります。生物学的選択は、より単純化され、生存に有利になることもあります。

意識は生命とともに進化し、意識も生命とともに生物から進化した。

宇宙に人間のいる星は、ごく一部だけが他の星から持ち込まれた人種である。

すでに生命の存在していた惑星にも、いくつかの生物を送り込んだことがあったが、それらの生物が新しい環境に適応するのは難しく、長くはかからなかったことがわかった。

すでに知的人類が出現している惑星に、我々が設計・製造した人種を投入したこともある。

スーパーコンピューターの、シミュレーションを使って、生物や人種をデザインしていますが,彼の時空冷蔵庫を経て[この冷蔵庫の中は外と同じ温度だが、中には 1 億年、外には 1 年しかないので、その逆も可能だ]シミュレーションをするが、普通は別の惑星に投下する,うまく生き残れない。

その理由は、自然に進化した生物や人種が、何億回もの淘汰や選択を経て、生き残ってきたからです、環境に適応し、環境と密接な関係があります,コンピューターでシミュレーションするのは、とても難しい関係です。

例えば、あなた方地球人の体の遺伝子の多くは、ウイルスが人体を侵略してあなた方にもたらしたものであり、人体はこれらのウイルスを完全に除去することができず、遺伝子を改変し、これらのウイルスと共存するしかない。

地球人は工場の騒音に、うんざりしています。でも、森の鳥の声を聞くと、気持ちがいいんです。

これはあなた方地球人が、何億年もの進化の中で、森の鳥の鳴き声に適応してきたものです。産業騒音は、過去 100 年以上にわたって発生しており、地球人の遺伝子は適応できませんでした。

われわれの仲間は、ほかの惑星から人間を誘拐してきて技術的手段によって、これらの誘拐された人種を維持しつづけ、これらの外来種がゴーク星でうまく生きられるようにしたがっている。

ゴキブリ星人をほかの後進惑星に送りこみ、莫大な資源を技術的保障に投入しなければ、そのままにしておくと、現地の環境に適応しにくくなり、すぐに淘汰《とうた》されてしまう。

もし我々が遅れた惑星で技術的手段によってこれらの外来人種を維持し続けるならば、巨大な資源を投入し、頻繁に空飛ぶ円盤を飛ばす必要がある。

たとえ我々が進んでいて、その惑星の環境に適応できたとしても、最終的には、何年も後になって、我々が持ち込んだ人種が、その惑星の一部になってしまったら、達成感は得られないでしょう。

しばらくすると、私たちは遅れた惑星に生命を広めたり、人種を移住させたりすることに興味を持たなくなり、他の惑星に行って他の惑星の人々を誘拐し、私たちのゴーク星に来ることに興味を持つようになりました,後者は私たちの利益になります。

十三、宇宙に人のいる星はたくさんあるのか

あるとき、私はノートンたちに、宇宙の大きさとエイリアンの種類はどれくらいあるのかと尋ねました?

ノートンは言った,

「宇宙は無限の空間であり、その中心にはいくつかの惑星があり、その数は膨大だが有限である。私たちは長い間、このように考えてきました、このように宇宙を描いたのです。宇宙の多くの惑星の知的人類は、このように考えていました。

しかし、私たちの科学技術や観測手段が向上するにつれ

て、ある日突然、数兆光年離れた場所で新たな惑星が発見されました。宇宙に関する私たちの揺るぎない認識は、一瞬にして崩壊しました。

今、私たちは、宇宙があなたの地球のタマネギのようなものであり、層であることを認めなければなりません。

他の分野での発見からも、宇宙の空間は無限大であり、宇宙にある惑星の数は無限大であるかどうか、最終的には決定できません,この答えは、観測レベルの向上に依存しているが、他の経路からすでにわかっていることは無限大である。

人間や生命が存在する惑星はたくさんありますが、ほとんどの惑星は生命が存在しない荒涼とした惑星です。

地球のような知的人類がいる、生命のある惑星では、その割合は非常に低く、数万分の 1 の規模です、生命のある惑星です,原始的な進化の段階にある、低レベルの生物が大多数を占めています。

光速の ufo を作り、宇宙を駆け回ることができる高度に発達した惑星を持つ私たちのようなゴーク星は、その数はもっと少なく、約 1 億分の 1 の規模です。もっと発達した惑星もあります。

しかし、宇宙にある星の数は、私たちが知る限りでは、とても巨大で、恐ろしいほどです。

テクノロジーが非常に進歩している、地球外生命体は、私たちよりも進歩しています、そして私たちが得ている情報からすると、1 つや 2 つではありません。

大規模な星間旅行は、宇宙の知的人類が光速で動く ufo を作ることができる場合にのみ可能です。光速の円盤があるかどうかは、宇宙文明の重要なシンボルである。

したがって、宇宙には知恵のある人が住んでいる惑星があり、大きく 2 つに分けることができ、1 つは時間、空間、場、質量、電荷、エネルギー、力... これらの宇宙の本質の問題を解読しなければならない,そうでなければ、光速の ufo を作ることはできません。

光速 ufo の飛行原理をマスターし、光速 ufo を作り出し、大規模な星間旅行能力を持つ発達した星。もうひとつは、光速 ufo なしでは大規模な星間旅行ができない、後進的な惑星である。

知恵のある惑星が、光速で移動する ufo を発明した後、あなたの地球の時間に基づいて、科学技術は、ミレニアム文

明惑星と呼ばれる何千年もの間、進化してきました。私たちの惑星は、そのレベルにあります。

人間のいる惑星では、光速で動く ufo が発明されてから、何万年もの間、科学技術が進歩しました、「万年文明惑星」と呼ばれ、さらに「百万年」と呼ばれています。

光速で移動する ufo を発明した人間の惑星の後、科学技術は 10 億年の文明惑星と呼ばれる数億年以上の開発を経ています。このレベルのものは、宇宙ではほとんどありません。

もう一つの基準は、バーチャルレベルです。

地球上でバーチャル製品を使用する人々の割合が大きいほど、より発達しています。

情報を処理するコンピュータ、人間の身体、建築、輸送手段、工業製造などはすべて仮想であり、非常に発達した惑星です。仮想化のレベルが五〇パーセントなら、テクノロジーが発達していることになる。

宇宙で最も人間と生物が多く分布している星は、あなたたち地球人よりも科学技術のレベルが低い」

スーデールはこう付け加えました、「宇宙においては、ごく自然な、不文律があります:

どんな遅れた惑星でも、星間飛行ができない惑星では、ひとりか数人の発達した惑星の人間がひそかに監視している。ひとつは、ほかの発達した惑星が遅れた惑星に手を出しすぎるのを防ぐためだ,もう一つは、後進的な惑星の内部戦争、特に核戦争を防ぐことであり、それはあまりにも行き過ぎて、惑星全体を破壊することです。

この種の干渉は、一般的に遠隔的に惑星上のキーパーソンの思想意識を修正するものであり、出力や出力ではありません。

あなたがたの地球では、第二次世界大戦のとき、ドイツが最初に原子爆弾の技術を手に入れたが、地球外文明に妨害されて失敗した。

以上の基準に照らせば、あなたがた地球人は科学技術の遅れた惑星に属している。なぜなら、あなたたちは光速の ufo を作ることができないし、あなたたちの太陽系の中では、自由に走ることもできないからです。

地球の運動原理は運動量保存によって決まり、運動量は物体の質量に速度を掛けたものです。光速 ufo の飛行原理も運動量の保存によって決まりますが、運動量はベクトルの光

速に質量を掛けて物体の運動速度を減らしたものです。

百万年、億年クラスの宇宙人が使用する宇宙船は、すでにこの二つの運動原理を突破し、空間・時間の限界を突破し、事故をゼロにすることができる。

しかし、この二つの運動量の保存を突破して、自然界の第三の運動方式を見つけるのは容易なことではない。

現時点では、自然界に第三の運動様式が存在し、第四の運動様式さえ存在することを確認することしかできません。第三の運動を見つけることは、私たちの使命の一つです」

「実は、宇宙には無限の可能性があり、思いついたことは実現できるし、思いつかなかったことも実現できる。しかし、あなたが本当にやらなければならないのは、現実になる道を見つけること、現実の踏み台を持つこと、そうでなければ、出発点に戻ってしまい、何も得られなくなることです」とノートンは言った,

「ミリオンクラスの惑星は、私たちとの接触はほとんどありませんが、私たちに科学技術を教えていません。

彼らは私たちよりも高度に仮想化されています。

彼らの科学技術は我々の水準をはるかに超えており、特

に数学は我々を窒息死させるほど強力だ。

彼らは人間の意識を制御したり、変えたりする金属の液体を作ります、そしてもちろん、私たちはこの金属の液体を作り、あなた方地球人の体に浸透させ、地球人の意識を素早く変えたり、消し去ったりすることもできます,ひとりの地球人の肉体を変化させないで、思想意識をひとりのゴク星人の思想意識に変えてしまったという事実は、この地球人が死んでしまったという事実によって、われわれはこの地球人をわれわれの人間に置き換えてしまったに等しいのである。

これらの金属の液体は、プログラムされたプログラムによって、解読できない数学的なコードを使って、動作や実行を制御することができます。長い間、理解できなかったコードを、私たちに投げつけることさえできます。

しかし、われわれはきみたち地球人に、われわれのもっとも単純なコードのセットを投げ与えているだけで、きみたち地球人は何百年ものあいだ理解できなかっただろう。

しかし、世界中のトップクラスの、数学者たちが作ったコードを集めています、どんなに頑張っても、簡単に解読できます、これが私たちと彼らのレベルの違いです。

高度な文明の間で、数学的な静かな戦いが好まれることは、あなたには理解できないかもしれません。おまえたち地球人が戦って殺し合い、相手の肉体を破壊するような戦争モードではない。

たとえば、あなたがた地球人は、ウイルスに対処するために知恵を絞り、あらゆる方法を考え出しましたが、うまくいきませんでした。

私たちは数学を使って、すべてのウイルスを計算することができます、それはあなた方が地球上で流行しているウイルスだけでなく、地球上に流行していないウイルスや、これから流行するウイルスも計算することができます。これが数学のすごいところです。

あなた方地球人は、ウイルスの問題は情報の問題であり、情報の本質は物体と空間の動きであり、あらゆるものは情報でできており、無限大の情報であるということを、まだ理解していません,無限の可能性を意味します。

このことを理解していなければ、問題を解決するために数学的アプローチを使うことは考えられません。

われわれが新しい人間の体を開発したり作ったりすると

きにも、大量の数学的計算が必要であり、多くの先進的な数学的ツールの助けを借りなければならない。

私たちの科学者は、空間に隠された情報をスキャンすることによって未来を予測するために人工的な場を使用し、それを処理するために多くの高度な数学的ツールを必要とします。

億年クラスの星は宇宙では数少なく、われわれに対してはなおさら無視し、正面から接触しないし、科学技術を伝授することもない。私たちは彼らについてほとんど知らないし、彼らを恐れているし、彼らに直接手を出す勇気もない。

私たちはあなた方の地球を、常に監視する専用の監視システムを持っています、他の惑星の人々、特に 100 万年前の惑星の人々を監視しています、あなた方が地球に足を踏み入れたら、私たちはすぐに駆けつけます。

子供の頃、野原でガチョウを飼っていて、漂流民に遭遇したのは、宇宙の中でも特に高度な文明を持つ人種で、おそらく 10 億年級の人種だったのではないかと推測されます,彼らの文明と技術は、私たちよりもはるかに進んでいます。

あなたは彼らと接触した瞬間、彼らの意識と相互に感染

し、あなたは彼らだけの記憶の一部を持っている可能性が高いです。

私たちはあなたを通して、彼らの宇宙についての私たちとは異なる認識を得たいと思っています。

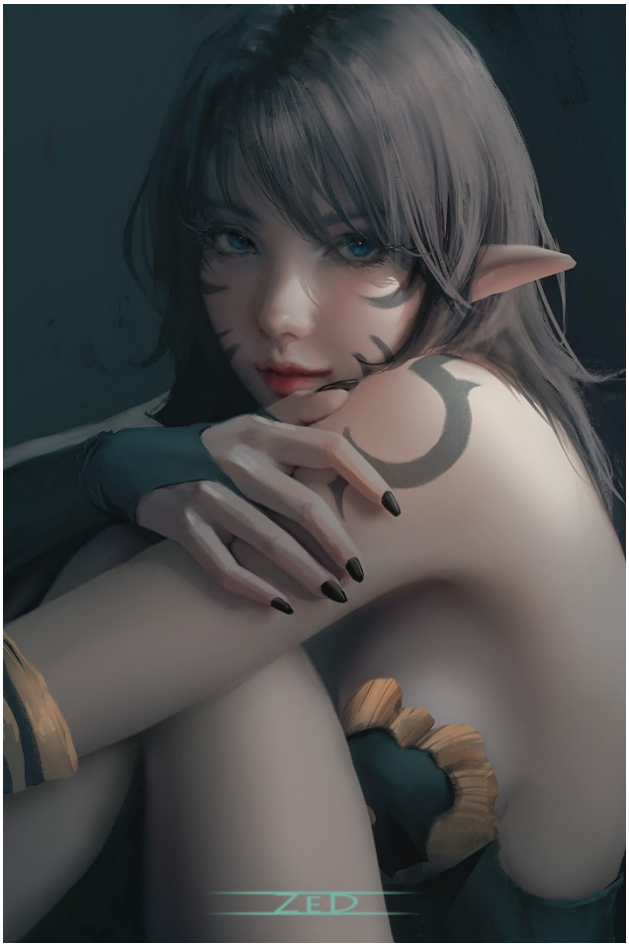
一段は一段を押し、我々は今や万年級に近づいている。しかし何十万年級を恐れている人も、何百万年級を恐れている人も同じです。100 万年が目の前にいるのは、神が目の前にいるようなものです。

結局のところ、時間はやはり宇宙で最も強力なものなのだ。億万年にわたって沈澱《ちんでん》してきた文明のすごさは想像もつかない」

スーデールは言った,

「われわれは宇宙を駆けまわって、ほかの惑星の人々を誘拐し、われわれと同じ高度に発達した惑星には、報復を恐れて誘拐した人々を送りこんでいる。

おまえたち地球のような後進的な惑星の人間を誘拐するとなると、われわれはときどきそれを送り返して自分たちの命を絶つのが面倒になることがある。わたしだって、ときには怠け者なんだから」スーデイルは不自然に笑った。



十四、惑星ゴークの宗教

あるとき、私はノートン、スーデール、ビリーと宗教の話をした。

「宗教は地球上で私たちに大きな影響を与えており、私たちの主な宗教はキリスト教、仏教、イスラム教です。

宇宙に神、仏、神、神はいるのか?存在するとしたら、宇

宙のどこに?

ゴック星には宗教はありますか?あるとしたら、その種類は、あなた方に大きな影響を与えませんか?」

「宇宙には神も仏も神もいない。あなたたち地球人が勝手にでっちあげたものだ」シュデールはきっぱりと言った。「われわれゴック星には宗教はない」

「私たちの惑星、ゴック星の初期の技術が発達していなかったとき、宗教は長い間存在していましたが、今では宗教は地球上から疎外され、ほとんど完全に希薄化されています。今では宗教について語る人はほとんどいませんが、宗教は私たちの歴史と記憶の中にしか存在しません」

ノートンは言った,

科学的認識は人間の理性から出発し、宗教的認識は人間の直観から出発する。

科学は物事に対する好奇心から始まり、宗教は物事に対する恐怖から始まる。

初期の未発達の時代、あなた方地球上の原始社会と同じように、人類は猛獣、雷、豪雨、洪水、暴風、火山、地震などの自然災害の巨大な威力の前に,細菌やウイルスの流行の脅

威にさらされ、自らの変幻自在な生老病死に直面し、刻々と同類の残酷な攻撃と殺戮に直面し、自らの運命を把握するにはあまりにも弱すぎると感じ、,恐怖を感じ、無力感を感じ、そのときは自分を守り、慰めるために全能の神を想像する必要があり、そうすれば宗教が生まれる。

宗教とは、恐怖や無力感から生まれる認識です。

原始的で未発達な社会では、人々はとても愚かで、自然界に対する認識が非常に少なく、表面的であったため、自然界のあらゆるものに対して、一種の恐怖心を抱いており、当時の宗教の力はとても強大であった,科学は弱かった。

人間社会の始まりにおいて、宗教と科学は切り離せないものでした。人類の認識が深まり、細分化されるにつれて、科学と宗教は徐々に分離していった。そして二つの対立する方向へと発展していった。

人が自然界に対する認識を深めるにつれて、科学の力は強大になり、科学の認識の範囲、深度は拡大し、宗教の力は弱まり、宗教の認識の範囲は縮小している。

世界、宇宙、人間、人生、社会に対する宗教の解釈は、ますます幼稚で滑稽に感じられるようになっている。一方、

科学の論理的矛盾、定性的、定量的な解釈は次第に説得力を増している。

私たちゴーク人は、宇宙の中心である空間に隠された暗号を解読しました。宇宙はすべての秘密を私たちに開きます。

宇宙の空間、時間、場の本質を完全に理解するにつれて、私たちは宇宙の中心的な秘密を完全に把握しており、この神秘的な宇宙に対する畏敬の念は私たちのところにはなくなっています。

しかし、死がある限り、人間には大きな恐怖があり、宗教はなくならない。幸い、私たちは不死の技術を持っており、私たちの人々は死の恐怖に直面せず、自分の運命を完全にコントロールしています。

これは、私たちの惑星から宗教が消滅するための最も重要な要因であり、宇宙のすべての知的人間の惑星の発展の大きな傾向であり、逆転することはありません。

私たちのような高度に技術的に発達した惑星では、人間は自分の体を作ることができ、不老不死にすることができ、自分の体を光に置き換えることができ、仮想人体に変えることができます。どんな病気もすぐに治せます。

これらの惑星は強大な科学技術と各種の製造能力を持ち、1 万人が 1 人働けば、人工知能は人間の圧倒的多数の肉体労働と精神労働に取って代わる,物質的な富、エネルギーを獲得するのは非常に容易であり、人々は物質、富、エネルギーを争奪する必要はなく、戦争も存在しない。

発達した惑星は、強力な科学技術を使用して、正常な欲望と邪悪な欲望を含む人間のさまざまな欲望を満たすことができます。道徳、法律、宗教によって人間のさまざまな欲望を束縛する必要はない。

あなた方地球上では、人々が労働や科学技術によって人間の正常な欲望を満足させることを奨励しているが、道徳、法律、宗教によってのみ人間の邪悪な欲望を抑制することができる。

たとえば、あなたたち地球上の成人男性が幼女を姦淫しようとすれば、地球上では道徳、法律、宗教を利用して人間のこの邪悪な欲望を制約するしかない。

しかし、私たちの惑星では、人々はすべての感覚器官で区別することはできませんそのリアルさと現実のレベルで、人々のこの邪悪な欲望を満たすために多くの非常に現実的な

バーチャルセックスゲームを開発しました。

きみたち地球人は、道徳や法律を利用して、人間の正常で邪悪な欲望を抑制している。限られた資源とエネルギーでは、どんな人間の好き勝手な所有も満足させることができないからだ。

実際には拘束できないし、多くの場合、宗教の力を借りて人の正常な欲望と邪悪な欲望を拘束しなければならない。

そして、私たちはよく発達した技術を使って人間の正常で邪悪な欲望を満足させるのであって、制約するのではないので、宗教が人間の邪悪な欲望を制約する機能は、私たちの惑星には存在しなくなりました。

宗教を生み出す基本的な条件はーー恐怖によって、宗教の機能はーー人間の欲望を抑制し拘束し、われわれの惑星から消滅させるーー」,これが、宗教が地球上で、完全に疎外され、ほとんど語られなくなった理由です。

歴史的に見て、地球上の宗教の力は非常に強く、永続的であり、原始社会の宗教の誕生から、宗教は常にあなたたちと共にあり、影響を与えてきた。

地球上でも宗教は退化しており、地球人の思想に影響を

与えるような大宗教指導者が現れることはないでしょう。

あなたがたに対する宗教の影響力はもはや古代ほど大きくはなく、宗教の教祖の影響力も小さくなり、人々は宗教の教祖に対して興味と神秘を失い、崇拝しすぎることもなくなった。

科学の巨人を一目置き、科学者を神として扱う。なぜなら、あなた方は自然界について多くの知識を蓄積してきたからです。

将来、あなたたち地球人に大きな影響を与えるのは、偉大な科学的発見であり、偉大な科学者だ。

地球上でも、宗教は、科学に取って代わられつつあります、地球上の科学が、幅広く、深くなるにつれて、科学は、その強力な力を、ますます、発揮するようになります,宗教は軽蔑されることで、見捨てられていきます。

宗教のもう一つの機能は、混乱を解消し、科学によって打ち負かされます、なぜなら、究極の科学は、宇宙のすべての秘密を、完全に理解することができるからです、宗教の、表面的で子供っぽい、直感的な説明です,誰も信じなくなりました。

私たちの惑星、あなたたちの地球の未来は同じです。

宇宙の高度に発達した惑星、その宗教の力は強大であり、惑星全体の人々の思考を制御し、人々の行動を制約し、それがどのように行われているかについての言葉は信頼できないと主張する人もいます。

宇宙の高度に文明化された多くの惑星を調査した結果、高度に発達した惑星では、科学は高度に発達しており、宗教の影響力はほとんどなく、科学と宗教が同時に発展することはないことがわかりました,両者は矛盾し、対立しています」

15、初めての検査と人体実験を受ける

あるとき、ノートンとスーデール、ジェリーの三人が、ロボットかもしれないふたりの男がいる部屋に私を案内した。

家の中央には狭いベッドが置かれていて、次の人しか入れなかった。ベッドは白い布のようなもので覆われていたが、あるいは仮想のものか、ベッドの端が高く盛り上がっていた。

ノートンは重々しく言った,

「これからおまえの身体を調べるから、われわれの技術を信じて、痛みや不快感を与えないようにして、このベッド

で眠ってくれ」

ノートンに命じられ、私はベッドに横たわったが、自分の体を八つ裂きにされ、ナイフで切り裂かれるところを想像するだけでも恐ろしかった。

このとき、あたりはすっかり暗くなり、真っ暗になっていた。突然、私の体が 2 つに分かれ、一方の私は空中に浮かび、遠くからもう一方の私がベッドに横たわっているのを見ることができました。グローバル・パブリック・ネットワークが提供してくれた画像情報サービスだろうか?

ベッドの端と端には、それぞれ一人ずつの人間が立っていたが、やがてそのうちの一人が薄い四角い刃で、私の咽喉を四角い切り口で切り開いた,そして私の咽喉《のど》の切り口を羽根のようなもので軽くはらっているようだった。切ったり払ったりするときには、痛みはまったく感じられなかった。ただ、くすぐったいだけだった。

グローバル公衆情報ネットワークのカスタマーサービス可温が彼らの言葉を翻訳し、意味はおそらく私の咽喉が悪いと言って、そして私の咽喉の後に病気になると言って、咽喉の病気の痛みは私の一生を伴うと言った。

確かに、私は20代の頃から慢性喉頭炎を患っていて、今までずっと、ずっと痛みがあって、しょっちゅう犯して、苦しくて、この病気を治療するために、多くのお金を使って、何度も騙されて、何の効果もなくて,ずっと苦しんでいます。

部屋が明るくなるのを待って、遠くから自分の体を眺めていたもう一人の私は、ベッドの上で眠っていた私と突然ひとつになった。

筋肉を切るような苦痛を味わわなかったので、喉《のど》にさわってみると、いつものように胸がどきどきして、宙ぶらりんになった。

ノートンを見ると、私はベッドの上に起き上がった。ノートンが私に尋ねたとき、私の頭の中にあったグローバル・インフォメーション・サービスのコーウィンがこう言っていました、「お腹と太ももの境目に何か感じませんか?」

「冷たくて、そこを泳いでいる蛇のようです」わたしは答えた。

「それからどこへ行ったの?」

ノートンは首をかしげ、しばらく私を見つめていたが、返事も待たずに立ち去った。

ひょっとしたら、冷たい蛇が私の中に入り込んでいるかもしれないと思うと、また恐ろしくなり、ちょうどよかった気持ちが重くなり、吐き気がした。腹の中に蛇がいるかもしれないと思うと、考えれば考えるほど気持ちが悪くなる。

このような人間ドックや実験を、何度も行いました。

何度か、体内に蛇がもぐりこんでくるのを感じただけでなく、肉管や蛭ひるのようなものがもぐりこんでくるのを感じたことがあった。

あるとき、自分が白い骸骨となってそこに横たわっているような感じがした。同時に、自分の体がひどく乾燥し、熱くなっているような感じがした。太陽の下の砂漠で眠っているような感じだった。

「誰だ?」と私は訊いた。

「それがあなたですよ!」と、カスタマーサービスのコーウィンが答えてくれた。

「じゃあ、どうしてわたしなんだろう?」もう返事はなかった。わたしには理解できなかった。悪夢が終わったかのようだった。やがてわたしは意識をとりもどし、実験も終わり、すべてが正常な状態にもどった。

ある実験では、かなりの消耗があった。とくに、肛門から肉管がはいりこんでいた。太すぎる、太すぎる、という感じだった。肉管は自分の腕ほどの太さがあり、ぎゅっと押しこまれているような感じだった,私の体の中を動き回っていました。

極度に体力が消耗したあとは、死んだように昏睡《こんすい》し、目が覚めたときには大汗をかいていた。

何度か、高いところから地面に落ちるような感覚があり、地面にたくさんの輝く鋼鉄の針が腹部を突き刺し、突然の激痛に気を失った。

ノートンが説明したところによると、これはシミュレーションであって、実際に私の腹部に鋼鉄の針が突き刺さったわけではない。これは、腹部に鋼鉄の針が何本刺さっても耐えられるかを試すためです、なぜなら、ゴークシン人の女性の体内には、肉管があるからです、これらの女性とセックスをするときには,彼女たちの肉管が私の腹部を突き刺すかもしれない。

私の我慢の限界を試すのは、私が死ぬかもしれない前に彼女たちのセックスを終わらせるためだ。

ノートンがそう言ったので、私は彼らの女性に対して強い恐怖と不安を感じた。

時々実験している時、自分がとても眠くて、足を伸ばして一つの姿勢をしている時間が長くなって、目が覚めてとても痛いです。そう考えると、彼らはわたしの心を知っているらしく、それからというもの、しょっちゅうわたしの膝の下にものを敷いていた。

何度か実験を重ねた結果、私自身も経験的なノウハウを身につけ、昏睡が訪れそうになったときには、できるだけ寝る姿勢をとり、目覚めたときに体のどこかが悪くならないようにしています。

その後、私は多くの幻覚実験を受けました。

ノートンが私に幻覚実験をすると言ったとき、私はあらゆる種類の幻覚を見るようになりました。

私が顔色を変え、中毒を連想すると、ノートンは私を慰めて言いました、ただの幻覚です、苦痛はありません、それどころか、とても楽しい気持ちにさせてくれるのです,わたしの身体には何の影響もないし、中毒にもなりません。

ノートンによれば、彼らゴーク星人は、私たち地球人が

食事をしたり、タバコを吸ったりするのと同じように、人生において積極的かつ受動的に幻覚を見ることがよくあるという。

ノートンが長いこと説明してくれたので、私はだんだん心配をやめてベッドに入り、注射や薬を与えられて幻覚を起こすのを待った。

ノートンが本格的に始めると言ったとき、私はまだ心の中で、これは麻薬中毒になるのではないか、これから大変なことになるのではないか、そしてノートンたちがすばらしい技術を持っていて、この問題を解決できないのではないかという恐怖を感じました,少し気が楽になりました。

しかし、注射もしなければ薬も与えられなかったので、わたしは急速に幻覚に陥った。

突然、豚の大腸のような肉管に覆われた壺の中に落ちたような気がして、強烈な生臭い臭いがした。ここは狭すぎて窮屈だ、もっと大きければいいのに、と私は思った。

突然、壷は本当に広がり、最後まで広がり、豚の大腸が空中にぶら下がり、地下は豚の大腸のようなものでいっぱいになった。

空中に立っているようで、足は豚の大腸の上に立っていなかったので、自分の体をもう一度見ると、光と影の塊のようで、はっきりとは見えなかった。

豚の大腸が虫になってしまうのではないか、とも思った?すると突然、豚の大腸は本当に蛆虫のようになってうごめいていて、虫の体の細部まで見ることができるようになった。

何度か実験を重ねた結果、周囲の光景は自分の想像によって変化することがわかった。

この太い虫たちが女の太腿になるところを想像してみたんだ、それもこの地球の女だ。

やはり壮観なシーンが現れ、天上、地下の至るところに女性の太腿が現れ、ピンクの肌、プンプンする女性の体の香り、非常にリアルで、しかも強い誘惑性を持っている。

ただ、下半身から出てきた肉のチューブが、自分の首や腕にからみついているだけで、この地球の女たちとはちがって、ゴクシンの女たちかもしれない。

やがて、その女たちの太腿は、ミミズやヘビやタコのような動物に変わっていった。

それからは変化に富み、無数の小さなやわらかい手の形、

鮮やかな花の形、そしてベッカーのようなものにさえなった。

肉体の形をした街も、建物も見えた。蠢《うごめ》く肉体のパイプ、そして肉体のパイプの内部に無数の舌の形をしたものが蠢《うごめ》いている。

千変万化ではありますが、変化後は整然とした状態で、雑然とした状態はありません。

はじめのうちは、画面は単一できちんとしていて、大きなものだったが、やがて、画面はますます豊かになり、ますます物語的になり、まるで別の惑星を旅している人間のようでもあり、また一風変わった人間の群れの中に住んでいるようでもあった。しかも、色も匂《にお》いも実在しているようだった。

インフォメーション・ネットワークの顧客サービスであるコウィンから、これは彼らのグローバルなインフォメーション・ネットワークが遠隔操作で、非接触で私の頭の中で作り出した幻覚だということがわかった。

これは彼らの最も一般的な幻覚の手段であり、薬物を使わずに情報を人間の脳に送り、そこから意識情報を読み取ることができる。

薬物や毒物によって幻覚を起こさせることもあるが、グローバルな情報ネットワークほど広く使われておらず、グローバルな情報ネットワークほど効果的ではなく、コストも低い。

彼らが最も多く幻覚を起こすために毒素を使用するのは、小さな男性を自分の体に吸い込み、自分の体に寄生させる女性寄生種です,彼女たちは自分の毒を使って、男性に幻覚を起こさせることを好みます。

薬物や毒物によって作り出される幻覚は、往々にしてその人の目に見えるもの、以前に記憶したもの、つまり場面の大きさ、色、静止、動きなどに対する認識を歪めるだけで、錯覚を引き起こす。目新しい光景はあまりない。画面は断片的で、連続性がない。

しかし、グローバル情報ネットワークが作り出す幻覚の内容は多彩で、これまで全く知らなかった奇妙なシーン、見知らぬ人、見知らぬ場面に出会うことが多い。目にするものはすべて奇妙なものばかりだ。色も匂いもグロテスクで、グロテスクなものばかり。しかし、連続的で面白く、ストーリー性がある。

しかし、ゴクシン人は幻覚と夢のコントロールを組み合わせて、異性をコントロールすることがよくあります。これは彼らの惑星では許されている。

私たち地球上には、毒キノコを食べたり、薬物を使用したり、薬物や薬物を注射したりする人がいて、幻覚を起こす可能性があります。

ゴーク星人は、主にグローバル情報ネットワークを使って、人間の脳に直接信号を送り、人間の脳から直接意識情報を読み取って、様々な幻覚を作り出している。この幻覚には副作用はなく、人体に害はありません。

麻薬や薬物による幻覚は、人体に大きなダメージを与え、命を落とすことさえあります。

十五、ゴク星人は放縦な振る舞いをする

私はゴク星人が、性的に、とても奔放に振る舞っているのを見ました。よく全裸になったり、みんなの前で性行為をしたりする人を見かけます。

特に薄暗い水中や地下の洞窟の世界では特にそうです。着ているものが小さくなったり、隠れたり、あるいはまった

くなくなったりする。

体の肌の色も大きく変わりますし、特に異性と出会ったときに、急に鮮やかになったり、いろいろな輝きを放ったりすることもあります。

あるとき、シェリー、スーデール、ノートンたちといっしょに外に出てみると、ゴーカーの女が六人、床にすわっていた。

私たちの到着を見て、すべての私たちを見て、私は背が高く、特別な外観を見ている可能性があります。彼女たちは興奮して立ち上がり、私たちのように手を振ったり、身体をくねらせたり、あらゆる色っぽい、淫らな身振りをした。

ふと見ると、ある人の服が突然体の中で消え、それから他の何人かの服も全部きれいに消えていて、白い肉体が明るい光の中で、特別にきらきらと輝いていました。

ある者は突然、下半身から、ハワイのわらのスカートのようにまとわりつくように、きらきら光る細い肉管をいっぱいに突き出した。

グローバル・エクササイズ・ネットワークに頼んだ人もいるかもしれませんが、空中に飛び上がって、クルージング

の状態になり、裸になり、足を広げて、私の頭の上を軽やかに通り過ぎました。

彼女たちの下半身に細長い肉の隙間《すきま》がはっきりと見え、肉の隙間《すきま》の両側に長い肉唇《にくしん》が浮き上がっていて、その浮き上がりが目立っていた。

ゴーク星人の女の下半身のふくらんだ部分は、じつはこのふたつの肉唇なのだ。しかし、そのとき、私は彼女たちの真下から見ていたのであって、彼女を正面から見ていたわけではなく、彼女たちの下半身のふくらんだ部分とこの肉唇とを結びつけていたわけではなかった。

彼女たちの下半身の肉の隙間は、われわれ地球人の女性よりも明らかに長く、前から後ろへと続いている。肉唇の周囲に陰毛はなく、極めて艶があり、色は身体の他の部分とまったく変わらない。

私は結婚していなかったし、ガールフレンドもいなかったが、私たち地球人の女性の下半身が黒いのを何度か見たことがあった。

特にあるとき、私はウナギを掘っていたのですが、突然、菜の花畑で手を休めている女性を間近で見たとき、彼女の下

半身の黒い陰毛がはっきりと見えました,高さも、私が見たゴク星人よりはるかに劣っていた。

これらのゴークの女性の体は絶えずまばゆいばかりに輝いていて、ある人の体は上から下へ、また下から上へ、絶えず変化していて、色は非常に鮮やかで明るいです。しかも彼女たちは大きく身をくねらせ、極度に卑猥《ひわい》な動作をして、私たちを誘惑《ゆうわく》しようとしているようだった。

「女やくざどもめ、恥知らずめ、われわれ地球上では公安につかまってしまうぞ」と、おどろきと妄想《もうそう》にとらわれながらも、わたしは非難せずにはいられなかった。

「わたしたちのゴーク惑星は、淫乱な惑星です」わたしの耳のなかで、グローバル・エクササイズ・ネットワークのインテリジェント・サービスのコーウィンがいきなりしゃべりだした。

ノートンたちのどうでもいいような態度を見て、わたしは見たことをノートンたちに話したのですが、女性たちはみんな服を着ていて、裸を見ていないと言いました,彼女たちの放蕩《ほうとう》ぶりも見なかった。

「彼女たちは指向性マスキング機能をつけて、グローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークに頼んで、彼女たちの本当の裸の姿やふしだらな行為を、前の兄にだけ見せて、私たちをブロックしたのかもしれない。私たちが彼女たちの姿を見たのは、グローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークが私たちに提供してくれた

「この人たちは、前のお兄ちゃんにしか興味がないのよ。ノートンとかスーデールとか、見慣れてるから興味がないんじゃないかしら」

「私は、あなた方ゴーク人が自分自身をコントロールする能力が非常に低く、道徳的ではなく、恥を知らないことを発見しました。私は何度も、あなた方ゴーク人の中には、公共の場所で、まるで何事もなかったかのように、全裸になっている人もいることを発見しました。

われわれ地球人は、科学の水準と道徳の水準は比例し、人間の科学技術は発展し、道徳も同時に向上し、人間も非常に文明的になったと考えている。社会の中の人間の道徳水準が高いからこそ、ハイテクを持つことができる。あなたたち

は高度な文明を持つ宇宙の星なのに、どうしてそんなことができるのですか?」と私は不思議に思った。

「われわれゴーク人は、人間に道徳を説くことも、道徳による拘束も、法律による拘束も求めません」とノートンは言った。

これがスーデイルの言葉だったら、冗談だと思ったかもしれないが、ノートンの口から出た言葉には少し驚いた。

ノートンは彼らゴーク族が道徳を重んじない理由を説明してくれた。

「科学技術の発展は人間の欲望を満たすためであり、人間の欲望は科学技術の発展の原動力であり、社会の発展の原動力でもある。これらの欲望には、人間の良性、正常な欲望も含まれるが、あなた方にとっては悪い、邪悪な欲望も含まれる。

たとえば、あなたがた地球上の成人男性が幼女を強姦しようとすることは、あなたがた地球人の法律上、道徳上、許されることではない。

われわれの惑星でも、はじめのうちは、法律も道徳も許されなかった。しかし、人間のこうした邪悪な欲望は、法律

や道徳が許さないからといって消えてしまうのではなく、実際にはずっと存在し続けるのです。

このような邪悪な欲望を満たすために、多くのバーチャルセックス技術が開発されました。

これらのバーチャル・セックス・プレイは、100 パーセントリアルです、つまり、これはバーチャル・プレイだと、言わなければ、自分の感覚では、バーチャルなのかリアルなのか、見分けられないのです。

法律で人を拘束する必要もありません、例えば、ある人が他の人を殺そうとしても、この惑星ではできません、あなたがその人を殺そうとすると、グローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークが、自動的にそれを認識します,相手に危害を加える傾向があるあなたの行動は、相手に危害を加えることができないように、無理やり引き離してしまいます。

なぜなら、他の人を殺すことができず、殺人を実行することは愚かだと知っているからです。

しかし、彼らは仮想ゲームで人を殺すために行くことができます。

われわれはテクノロジーを発展させることによって人間のあらゆる正常で邪悪な欲望を満足させるのであり、道徳や法律を強調して人間の欲望を抑制するのではない。

したがって、私たちの技術は非常に発達しており、人間の道徳はまったく高尚ではなく、いわゆる発達した地球外の人々の一般的な道徳は、あなたの地球人の推測に過ぎません。

われわれの法律は、組織、人工知能、さまざまなアルゴリズムなどを拘束しているにすぎない。

なぜなら、私たちのゴークシャーでは、強力なグローバルキャンペーンネットワークとグローバルコミュニティ情報ネットワークにより、世界中のすべての人々が途切れることなく追跡され、保護されているからです。

組織に頼らず、先進的なアルゴリズムを把握し、一人の力だけでは、他人に危害を加え、公衆に危害を加える行為を実施することはできない。

あなたはまだ私たちのゴキブリ社会を理解していないかもしれませんが、私たち 1 万人のうち、仕事をしているのは 1 人だけです。

プロフェッショナルなゲームアリーナがたくさんあり、

現実とほとんど変わらないリアルなバーチャルゲームがたくさんあります。

バーチャル旅行の様々なゲームは、自分で旅行に行くことと何の違いもない感じを与える。

また、王様ゲームもたくさん開発しています、もしあなたが王様になりたい、王様になりたい、他の国を征服したい、王様ゲームもたくさんあります。

あなたは星間旅行をしたい、未知の惑星を探検したい、あなたは半人半虫の女性と知恵を出し合いたい,

蛇女の罠から逃れたいのか?... ・私たちはこのようなゲームをたくさん開発しているので、いつまでも終わることなく遊ぶことができます。

私たちは宝取りゲームを、ほとんどやっていません、なぜなら、ある物質を別の物質に、簡単に変えてしまうのは、早い時期にやってしまうからです、皆さんが地球上で愛している、宝石や宝石は、私たちのところでは、とっくの昔に無価値になってしまっているからです,私たちの誰もこれを好きではなく、興味を持っていません。

われわれはテクノロジーを発展させることによって人間

のあらゆる正常で邪悪な欲望を満足させるのであり、道徳や法律を強調して人間の欲望を抑制するのではない。われわれの惑星では、道徳を説く者はいないし、法律を説く者もいない。

1 つの惑星は技術が遅れており、限られた資源ではすべての人の欲望を満たすことができないため、人間の欲望の多くは邪悪であると考えられています。しかし、テクノロジーがある程度進歩すると、誰もこれらの欲望を邪悪だとは思わず、誰もが当たり前だと思ったり、慣れ親しんだりします。

宗教に縛られることもありません、宗教は地球上でほとんど影響力を持ちません。

皆さんの地球では、愛と善を尊び、私たちのゴークシャーでは、悪と暴力を尊びます、これがゴークシャーの男女が、遠隔操作のセックスをする理由です、なぜなら男女のセックスが,しばしば暴力が伴います、遠隔操作のセックスは、自分でコントロールでき、いつでも終わらせることができます,

しかし、私たちの惑星ゴークでは、悪を所有し、暴力を行使するには、革新的で、普通の暴力と悪が必要です、あなたは力を発揮できません、簡単に言えば、あなたは悪いこと

をしたいのですが、それは難しいです,限られた範囲でしか、悪いことはできません。

あなた方は、ゴーカー星とあなた方の地球は、すべてが逆さまになっていて、それを理解できないと感じているかもしれません、そして後に、あなた方自身の経験と性的体験を通して、それを理解するでしょう。」

マイリーは最後にこう言いました,「われわれゴキシングにも、道徳的に善良な人間はたくさんいる。すべてが悪人というわけではない。たとえば、わたしは道徳的に善良な人間だ。しかし、われわれの仲間は複雑で、善人と悪人を判断する一定の基準をもっていない」

十六、宇宙人の彼女

あるとき、シュデールが夜遊びをしようと提案した。シュデールもノートンも同意してくれたので、もちろん私も出かけたかった。

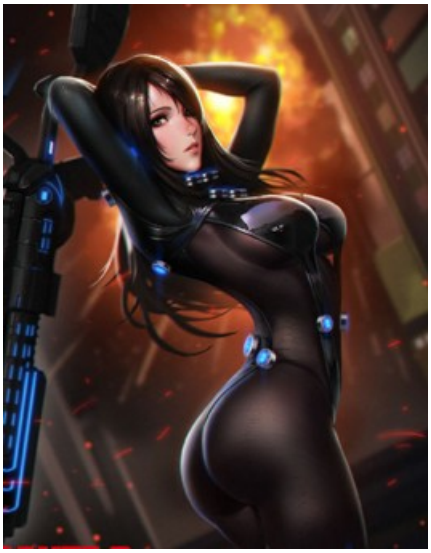
ノートンは自分のガールフレンドを連れていくことを提案し、ノートンは左手で自分の耳を押さえ、おそらくグロー

バル情報ネットワークを通じて彼女にメッセージを送った。案の定、しばらくすると突然美人が現れた。

この美女は後ろから見ると身長、体つきは微粒麗《びりゅうれい》と同じくらいで、正面から見るととてもきれいで美しく、人のすべてが非常に精緻《せいち》で、微麗よりも顔相が整っているように見える。

彼女の髪は黒く、まばゆいリボンのようなものをまじえたたくさんのゴムのチューブのようなもので、きわめてやわらかく、ふたつに分かれて耳のわきからたれていた。眉毛はなく、大きな目、とがったあご、小さな口は、私たちの地球の漫画のキャラクターと非常によく似ています。

彼女は、シンプルでセクシーな、グローバルなスポーツネットワークや、グローバルな情報ネットワークによって作られた、バーチャルなイメージを身につけていました、シルバーのスウェットシャツに、黒のミニスカート,その短いスカートは、たくさんのやわらかい金属の糸でできていて、金属的な光沢を放っており、彼女が歩くと、そのスカートのなかの白粉おしろいの肌がかすかに見えた。



彼女は私の前に来て、注意深く私の目を見て、彼女はあまりにも美しく、セクシーであり、加えて、私は裸であったので、心は非常にプレッシャーであり、思わず一歩後退しました。

グローバル・インフォメーション・ネットワークのカスタマーサービスであるコーウィンが、こんなことを言っていました,「あなたは地球から来た前のお兄さん(ノートンから聞いたかもしれません)ですか? とてもきれいな人ですが、背が高すぎます。触ってもいいですか? 」

「いいよ」と口では答えたものの、私の裸のことを考えると、どこを触っているのだろうと不安になった?ペニスを触ったりしないだろうか?幸い、彼女はまず僕の手に触れ、それ

から屈んでと言って、僕の頬に触れてくれた。

私はこれが初めてゴクシン人の肌に触れたのですが、肌はとても滑らかで、ただ冷たくて、少し硬くて、柔らかくありませんでした。

「かみつくの、ちがうわ」ノートンのガールフレンドは興奮していた。「地球人の肌はあたたかいわ」

ノートンとスーデールは微笑んでいたが、リュウジだけはあまり嬉しそうではなかった。スーデルも負けじと自分の耳を押さえて、自分の女友達にメッセージを送っていたが、やがてその女友達が突然《とつぜん》私たちの前に現れた。

スーデールのガールフレンドは背丈もマイクロリーもノートンのガールフレンドも同じくらいで、顔立ちもとても美しくて洗練されていた。しかし、シュデールの恋人は明らかに妖艶《ようえん》で、瞳《ひとみ》がダイヤモンドのように輝《かがや》き、目の周りの肌《はだ》がグレーの金属製《きんぞくせい》のように金属的に輝《かがや》いているのが特徴《とくちょう》だった。

そして、これらの金属のような肌と他のところの正常な肌ははっきりと分かれているのではなく、徐々に移行し、色

もピンクから灰色に変わり、眼窩に達すると完全に金属のような黒色に変わります,とても不気味で邪悪ですが、とても美しく、自然で、とても魅力的です。

上半身は黒い革の形をしたタイトなスウェットシャツと、ぴったりしたミニスカートがつながっていて、色は光るほど黒い。ミニスカートはお尻をしっかりと包み込み、ミニスカートの裾だけがほんの少し広がっているようなスタイルで盛り上がっています。

彼女はスーデイルの腰に腕をまわし、ぼくをじっと見つめながら、スーデイルにささやきかけた。ぼくの耳には、グローバル・インフォメーション・ネットワークのカスタマー・コーウィン通訳の言葉が聞こえた,

「この大きいのが地球から来たのか? 大きいな、大きいな、地球人はみんなこんなに大きいのか? 馬鹿じゃないか? 」

「馬鹿じゃないわよ、あの人は頭がいいのよ」とスーデールは答えた。

「これから遊びに行きましょう」とノートンが提案した。

「あなたのボーイフレンドは? 」私は親切に尋ねた。

シェリフは答える代わりに目を閉じ、顎《あご》をぐい

と上げて頭を上げた。

私は彼女の意味を理解していない、“あなたはまだボーイフレンドを持っていないのですか?”

「あなたは彼のボーイフレンドですね」とスーデールは言った。「私たちが会ったとき、あなたのために彼女を作ると約束しました

「本当ですか? 微麗、私はあなたのボーイフレンドで、あなたは今私のガールフレンドですか? 」私は少し信じられず、微麗に尋ねた。

「あなたは私のボーイフレンドではない、あなたは私の食べ物です」ビリーは誇らしげに頭を上げ、軽蔑しています。

「なに? 私があなたの食べ物? 」微麗の言葉に私はわけがわからなくなった。

“生きている、”シューデールは笑った、“ベリーはあなたが彼女の食べ物であると言う、実際には、不正確な翻訳であり、正確な翻訳は次のようにする必要があります: あなたは私のボーイフレンドではない、あなたは私のおもちゃです。”

「そのほうが正確です。あなたは私のボーイフレンドで

はなく、私のペットです。誤解を招かないように翻訳するには」ノートンは言った,

「しかし、前の兄がわれわれのゴーク星にいるあいだに、われわれが彼女をつくってやったのですが、その彼女というのが微麗《びれい》でしてね」

「心配しないで、マイクロリーはあなたを食べることはありません」とシュデールは秘密めかして言いました

「行きましょう」ノートンが手を振ったが、それはわれわれ地球人が歩くように合図するのと同じ動作で、われわれ六人はそのまま歩き出した。

ノートンとスーデールは恋人の腰に腕をまわし、とても仲良くしていた。わたしは美しい腰に腕をまわす勇気も、彼女の手を取る勇気もなかった。

私はそのころ、性的な飢えがひどくて、女を求めれば求めるほど、女の身体に触れることができなかった。それに自分が裸でいることが、いつも恥ずかしかった。

しかし、微麗《びれい》も私の手を引こうとはしない気がした。仕方なく私はシャイニーの後ろに寄り添い、ノートンやスーデールたちと一緒に街をぶらついた。

ゴーク星の都市の夜の煌々《こうこう》とした明かりは、よく見ないと地球上の特大都市だと思ってしまう。ただ、ゴーク星の空には、地面と接触していない建物が多く、その下にはまったく支えがない。

いくつものバーチャル・ビルディングがとりわけ巨大に見え、そこには、空中に浮かんでいるかのように、ありとあらゆる種類のゴクシン文字や模様が描かれていた,建物とつながっていないことは問うまでもないが、これもゴークシンの高度なバーチャルイメージング技術の賜物《たまもの》である。

彼らのあとを追いながら、彼らが飲まず食わずでホテルやバーに行くはずがない、どんな遊びができるだろうと考えていた?

バーチャルかもしれない巨大な門のある巨大な建物にたどり着いた。

中から一人の仮想人間がふわふわとやってきて、私たちのそばに浮かんで、しきりに体を揺らしながら声をかけてきた。

ぼくは、槍のような武器を手にした少年のような姿をし

たダミー人間をじっと見つめた。そのまわりには、ゴキブリ文字が浮かんでいる。

ちらりと文字に目をやると、インフォメーションサービスのコーウェンが、このゴクシン文字の列は、私たちの地球の言語に翻訳された中国語で、「奇妙な城」という意味だと説明してくれた。

この仮想小さな男の子は、この場所の仮想デジタルイメージキャラクターであり、「奇妙な城」は彼の署名です。

コウェインが説明してくれたところによると、ゴーク星には、川、湖、居住区、研究施設、遊び場など、さまざまな場所や単位があるーーすべて仮想のデジタル・イメージ・キャラクターがいるという。

病院、科学研究、情報処理センター、グローバル・キャンペーン・ネットワーク本部、人体置換センターなど、ゴークシンにとって重要な組織、仮想のデジタル・イメージ・キャラクターと署名は何千年も変わっていない,ゲーム会場の中には、頻繁に変化するものもあります。

ノートンとビリーは、仮想デジタルイメージキャラクターを無視しました。

玄関から中に入ると、大勢の人がいて、地球のキャバレーのように、賑わっていました。

近づいていくと、たくさんのゴーク星人が 2 列に並んでいるのが見えました、真ん中にガラスのような、長方形の棚がありました、幅は 2 メートルくらいでしょうか、とても長くて、頭が見えませんでした。

中には水がいっぱい入っていて、ゴーク星人よりずっと小さな小人たちがたくさん水の中で踊っていました。ガラスケースの外から見ている人たちも、リズムに合わせて踊っている。

「ここにいる小人たちは、仮想イメージング・テクノロジーによるものですね?」と私はノートンに尋ねた。

「いや、今度はあなたの思い違いで、中身は本物ですよ」とノートンは言った。

「それじゃ、ゴキブリにはもっと小柄な人間がいるんですね」

「われわれゴック星人の身長はみんな同じなんだ。これは人工的な工場を利用して物体の周囲の空間を変え、視覚を誤らせて、中にいる人間が自分の身長に変化がないように感

じるのは錯覚なんだ。もしこの人たちが中から出てきたら、われわれと同じくらいの身長なんだから、試してみてもいいとは思わないだろうね」

　　ノートンがそう言って恋人をダンスに招き入れると、彼の恋人はそれに応じて近くの円形のテーブルに歩み寄りました、すると突然上からガラスのような透明な円筒が落ちてきて、ノートンの恋人を覆いました,それから巨大な腕のようなものが円筒をノートンのガールフレンドと一緒に取り除いた。それは一瞬のうちにすばやく動いた。

　　ノートンはガラスの水槽の中の一人を指さして、彼のガールフレンドだと言って私を呼んだので、首を伸ばして見ると、やはり彼のガールフレンドだったが、体が小さくなり、服も着替えて、ぴったりした水着に変わっていた。彼女も私たちに気づき、両手を振って合図をすると、同じように踊りだした。

「彼らは水中でどのように呼吸していますか?」私は彼らのどれもが水中で呼吸するための道具を持っていないことを見ました。

「われわれゴキシー人はときとして呼吸を必要としないことがあります。なぜなら、人工的な作業場が遠隔操作で、非接触で、血液中に直接酸素を供給してくれるからです」とノートンは言った。

ノートンのガールフレンドは水着姿でより完全に露出していたし、ゴーカインの女は後ろから見るとわれわれ地球人と同じくらいの大きさだったが、尻だけが大きく突き出ていて、前から見ると股間がふくらんでいた,なんだか知らないが、ノートンの彼女は水着を着ていたが、それがなんだかよくわからなかった。

ノートンのガールフレンドが水中ダンスをしているとき、

いちばん近くまで泳いできて、向きを変えたとき、彼女の後ろのお尻を見て、私はとても魅力的で、本能的な性的衝動を感じました。

私は居心地悪そうにノートンを見たが、ノートンは気にしていないようだった。私はもう一度同じ微麗を見た。微麗は何かわけのわからない表情をしていた。

シュデールは恋人に水中でダンスをするように勧めたが、恋人はそれを拒否した。しばらくするとノートンのガールフレンドが出てきて、水着も元の服装に着替えた。

その後、私たちは大きなガラスの家を見ました、そこにはたくさんの青い風船がありました、それぞれがバスケットボールくらいの大きさでした。

透明なガラスのような壁から、誰かがゆっくりと中に入っていくのが見えました、私もそれに続きました。

体がガラスに溶け込むような感覚がありましたが、それでも青い風船の家の中に身体がすっと入っていきました。

ガラスの家は底が見えないので、ずっと下に落ちていきましたが、下の青い風船は密度が高く、ぐんぐん回転して、とうとう私はその回転する風船に持ち上げられてしまいまし

た。

風船は滑らかで、人の肌に軽いアピールがあり、私の肌にこすりつけると、妙齢の女性が自分に触れてくれるようで、とても気持ちいい。そのうち本当にゴク星の女性とセックスをしたり、風船と擦《こす》り合わせたりするかもしれないと思ったのは、イントロだったのではないだろうか?

青い風船の中を転がっていると、やがて緑、赤、白、ピンクなどさまざまな色の風船が見え、大きさも形もさまざまな風船が見えてきた。

その後、私はおそらく非常に小さな直径の風船を見て、いくつかはゆっくりと人の体を通過し、人の体の内部に軽い摩擦の感覚を作成することができます、感覚は明らかに人の感情に影響を与えることができます,気分を良くしてくれます。また、液体に浸かっているような気分になることもありますが、呼吸にはまったく影響しません。

それから、青い炎のある部屋にも行ってみたが、炎の温度は高くなく、暖かい感じだった。

やがて廊下に出て、ノートンとスーデイルたちの姿を見かけた。わたしたちは互いにたずねもせず、みんな長い廊下

を奥へと進んでいった。

まわりには家々がずらりと並び、壁は仮想透明のものだろうか、内部にはさまざまな風船があり、パンの形をしたものや、細長いものや、絹のようなものもあった。あるものはヘチマのようで、あるものはベーグルのようで、あるものはレンコンのようで……

でも、ほとんど誰も遊んでいなかったので、ふともったいないような気持ちになりました。

通路の床は、金属でできているかのように見事に磨きあげられた、光る床で、青みがかった光を放っていた。

歩いているうちに、また両側に高い黒い壁が見えてきた。空も黒く、頭上の星は見えなかった。やはり室内にいるのだろう。

地面の青い光が私たち全員を青く照らし、ノートンとスーデールと彼らのガールフレンドは手をつないで歩き、私は相変わらずリュウジと並んで歩いていた。

そのとき、暗い壁から何かが突き出してきて、雪のように明るい密度の濃い白い光を放ち、ノートンに命中し、ノートンを打ちのめしたので、私はびっくりしたが、ノートンと

スーデールは笑った。

「この仮想ビーム、大丈夫ですよ」とノートンは言ったが、私はノートンの体にぽっかりと穴が開いたままになっているのを見た。

突然、スーデイルが悲鳴をあげた。彼も仮想ビームに当たった。そして、スーデイルとノートンの恋人、ビリーが仮想ビームに当たった。私は最後に仮想ビームに当たった。

それからわたしたちはバーチャル・ビームを避けて、青い地面の上を飛びまわった。それにもかかわらず、私たちはみんな銃を数回撃たれ、スーデールは最も積極的ではあるが最も悲惨なジャンプをし、バーチャル・コア・ビームが最も多く、人々は見るも無残になり、いたるところに明るい大きな穴があいていた。

わたしたちが青い地面から出ると、明るい穴はたちまちすっかり消えてしまった。

そのとき、突然、液体金属のような、あるいはオレンジ色の鋼鉄のような、あるいは薄青い、あるいは金色の、色とりどりの特殊な雨が降ってきた。インフォメーションネットワークの顧客サービスは、この金属の雨は仮想であると言う

ことができますが、私たちに当たって、それはまた、特定のタッチを持っているようです。

それから私たちは分身廊下を通りました、人々はこの廊下を歩いていました、後ろの人々は前の人々が 2 つに分かれているのを見て、まだ地面を歩いていました、とても面白くて、少し怖かったです。

その後、私たちの体と、その周りの光景が、波のように動いているように見えました。

さらに進んでいくと、突然、地面に鋭いナイフがたくさん落ちているのが見え、道路もでこぼこになり、黒くて測り知れないほど大きな穴だらけになっていました。ノートンはためらうことなく前に進み、私たちに言った,

「これはバーチャルイメージング技術によるもので、偽物で、道路はまだ平らです」

私たちは歩いてみましたが、やはり道はとても平坦で、私たちは最初ゆっくりと良い道を探して歩いて、それから加速しました。興味深いことに、ナイフを踏んでみると、ナイフが足を刺しているのがわかります。

マイクロリーとノートンとスーデールの女友だちの三人

の女はゆっくり歩いていて遅れていた。地球上の女性はみんな似たようなもので、この場合も男性ほど速く走ることはできないのではないかと思います。

ノートンは「目をつぶって歩いてください」と言うと、駆け戻って自分のガールフレンドを連れていった。スーデイルも駆け戻り、自分のガールフレンドを手で引っ張った。

ただ微麗だけがはるかに遅れていて、私はチャンスが来たと感じて、走って行って彼女に手を差し出して、彼女はちょっとためらって、しかしやはり私に手を差し出しました。

彼女の手も冷たく、柔らかくはなかった。われわれ地球人の肌よりずっと硬かったが、それでもなめらかで、水に濡れたウナギやナマズのようになめらかだった。皮膚の表面は柔らかく、下は硬かった,硬さはガーの背中のようなもので、空気圧の高いタイヤのような感触があります。

彼女の手は小さかったが、手のひらは厚く、手はふっくらとしていたが、骨の感触はまったく感じられなかった。

道が曲がりくねっているので、女たちはまだよろめきながら歩いていた。そのため、ときどき私の手とからだが、きれいなからだにぶつかった。そのからだは同じように冷たく、

なめらかだったが、しなやかではなかった。彼女の身体に触れると、私の心はくすぐったくなり、性的な興奮は私を苦しめました。

さらに進んでいくと、突然、前方に下り坂が見えてきました。階段がたくさんあり、最初の階段には、地球の大通りの街灯のようなものが立っていました。

このような街灯の下に、何人かのゴキブリの男女が抱き合って立っていましたが、驚いたことにこの街灯は透明な糊のようなものを素早く垂らして、一組の男女を一気に包み込んでいきました,大きな球体になって、階段を転がり落ちていきます。

ノートンとスーデールとガールフレンドたちはためらうことなく奇妙な街灯の下にたどり着き、大きな球体になってボウリングの球のように階段を転がり落ちた。

チャンスが来て、私も微麗を抱きしめて、この奇妙な街灯の下に立って、微麗は私を拒絶しなかった、残念なことに彼女の頭は私の胸の高さしかなくて、私はそれらの透明な液体が落ちる時感じて,私は素早くマイリーを抱き上げ、彼女は脚を開いて、私の腰の上に乗り、透明な接着剤に包まれまし

た。私たちは抱き合い、階段を転がり落ちました。

微麗はとても興奮して、特に階段で高く跳ね上げられて、再び重い落ちて、微麗は狂った叫び声を上げます。

わたしはビューティフルを抱きしめ、本能的な強烈な性的衝動を感じ、下のペニスが彼女の体の中に入ってこそ、この上ない快感を感じるのだが、わたしの体は透明な接着剤に包まれている,身動きもできず、体勢を整えることもできない。

階段は転がり終わり、私たちは地面に立ち止まりました、接着剤が溶けて、地面に落ち、水のように流れ出しました。

スーデイルやノートンたちの姿もなく、どこへ行ったのかわからなかった。マイリーは耳に手を当てていたが、おそらく公的情報網を通じてノートンたちと連絡を取っているのだろう。

「マイクロリー、ノートンたちはどこへ行ったの?」と私は尋ねた。

「放っておいて、帰りましょう」マイリーはわたしの腰に腕をまわしながら言った,「さっき妙な気持ちになったような気がするんだけど、これから帰って、わたしの小さな巣に帰って、その気持ちを続けるって、すばらしいでしょう?」

微麗は左手を挙げ、耳元で遊び心のあるスイングをし、瞬間、グローバルスポーツネットワークを通じて、私たちは微麗の家に来ました。

微麗家もとても精緻で、家と道具はたくさん円形で、中にはいくつかの奇妙な植物と草花のようなものがあって、たくさんの半透明のサッシュのようなものが部屋の中に垂れて、物を見てぼんやりしています,ピンクやピンクや白を中心に、女性らしい個性が表現されています。

家の中には電球のようなものは見当たらなかったが、光は柔らかく、壁全体から均一に発せられているように感じられた。

微麗家には何匹かのペットがいて、それから二つのロボットがいて、くすんだ赤い体をしていて、体はいつもかすかに震えていて、まるでたくさんの小さなものが騒ぎ立てているかのようです。

バーチャルベッドの上に横たわって、上品な様子で、姿勢はとても優雅で、目はまっすぐに私を見て、私に手招きして、意味は私に彼女に近づいて、どういう意味ですか?肉体関係を求めているのか?

私は興奮のあまり震えながら、彼女のところに行きました、すると彼女は言いました、「私の体を動かしてください、でも、動く前に食べ物をあげます、炭水化物ですが、固体です」

ビリーが耳をふさいでいると、すぐそばのテーブルに細長い食べ物が並んでいた。

箸《はし》やナイフやフォークなどの食器がないので、手で持って食べてみると、歯ごたえがあったり、レタスのような味がした。

地球人は非常に奇妙であり、奇妙な環境に来ると、常に愛する人として人を認識し、すべての行動は、この愛する人に従います。最初はノートンのことを身内だと思っていたが、今度はマイクロリーに移ったような気がした。

食べ終わったら、目の前にプリが立っていて、これから本番です。初めてのセックスの相手がどんな女の子で、どんな場所にいるのか、何度も予測したけれど、まさかそれが地球外の惑星で、しかもセックスの相手が地球人ではないとは思わなかった。

私の目の前に立って、突然上半身の黒い、下半身の紫色

の服はすぐに消えて、白い肌が現れて、2 つの丸い乳房はとても長くてとがっていて、まるで一対の羊の角のように胸を突き刺しています,全身に震えが走りました。

微麗像、作者の手描き

下半身の脚のあいだには八、九センチほどの隙間があり、太腿の付け根にはふくらんだ肉唇があり、そのまんなかに縦に伸びた細い隙間があって、その先が下腹に、そして後ろの尻にも長く続いている,われわれ地球人を超えて。

下腹部では、肉唇のふくらみが目立たないが、太腿の付

け根のところでは、いちばん肉唇のふくらみが目立つ。

わたしは、彼女たちの下半身のふくらんだ部分が、このふくらんだ肉唇であることを知った。このふくらんだ唇は、われわれ地球上の女性の陰唇とはちがって、大きな球体のようになっているのだ。

彼女の下半身は全体的につやつやしていて、色は体のほかの部分とまったく変わらず、陰毛のようなものもまったく見当たらなかった。

服を脱ぐ素振りがまったくなかったのがおかしかった。

美しい肌は、上記のアニメキャラクターの肌と少し似ています

ほっそりとした体つきや腕の丸みは、以上のアニメキャ

ラクターとマッチしています

ほっそりとした体型、お尻は以上のアニメのキャラクターに似ていますが、ほっそりとした上半身はさらに小さく、股間に隙間があり、おっぱいが長いです

そのうちに、ビューティーの肌の色が変わり始め、白から会話のピンク、会話の黄色、繊細な緑、そして青と紫、そして紫と黒に変わりました,それからまた白くなる。

青色になったとき、体が突然比較的強い水色の輝きを放ち、周囲のものを照射し、反射させることができるのを、私は後に何度も見た。

肌から生えているような黒いドレスだった。彼女の衣服

と彼女の肉体は一体化しているのだろうか?あの時は想像もできなかった。

あとでわかったのだが、それは彼らのグローバル・ネットワークとグローバル・キャンペーン・ネットワークによって遠隔操作された仮想イメージだった。彼女たちが服と呼んでいるものは、ただのバーチャルイメージにすぎない。

彼らの肌の色やパターンの変化は、グローバルスポーツネットワークとグローバル情報ネットワークによって遠隔操作され、彼らの肌は拡散反射の感覚を持っているように見え、時には非常に滑らかで輝いて見えます,ネットワークの仕上げの結果です。

彼らはまた、ゴックシンガーは実際の衣服をほとんど持っておらず、衣服はほとんどが仮想イメージであると言います

本物の衣服を身につけていないのだから、手で触れれば必ず裸の身体に触れるのではないか?必ずしもそうではありません、グローバル・スポーツ・ネットワークに、バリア効果を要求することもできます、手を触れると、様々な感覚がありますが、必ずしも全裸ではありません。

彼女たちの肌は、まったく手入れをしていないシーンで

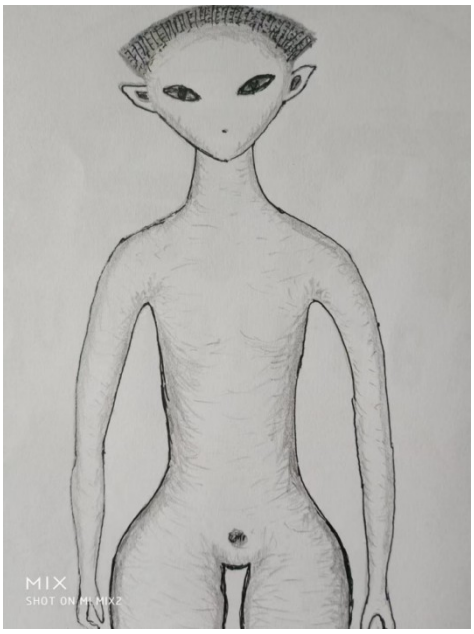
もピンクがかった白で、見た目も美しく、そのなめらかさ、繊細さは、やはりわれわれ地球人の肌の比ではない。

そのうちに、うっすらとした下半身から、柔らかい感じのする細いチューブが突き出してきた。百本ほどあったが、それらは濃い紫色にまじっていて、鮮やかで、つやつやしていて、ねっとりとした液体にまみれているように感じられた。

チューブの頭部は螺旋状に円を描くことができ、その円の色はずっと薄くなっていたが、それでも彼女の周囲にたくさんの花が群がっているように鮮やかに見え、これがゴーク星人の女性にとって最も重要な性器だった。

このチューブのすばやい突き出しと突然の満開の動作は、彼女たちゴク星人の女性の官能的で性的興奮のしるしであるかもしれないが、あまりに突然の出現によって,そのときの私には、なんともしみじみとした、恐ろしい感じだった。

ビリーの話によると、彼らの男性の性器も伸び縮みする肉管だが、それは一本しかなく、比較的太く、身体の内部に貯蔵されており、普段は頭を出しているが、私は実際に見たことはないという,彼らのグローバル情報ネットワークのバーチャル画像で見ただけだ。



ゴクシン男の肖像, 作者手描き

彼らの男の性器は、普段は下半身の黒い斑点を溜め込んでいる奥に、性的に興奮したときに突き出すことのできる肉管である。

彼女の下半身の柔らかいチューブが収縮すると、私は本能的にすばやく駆け寄り、彼女を抱きしめましたが、彼女はすばやく身を縮め、私を避けました,彼女は柔軟で、力強く感じました。

それからマイリーは突然しゃがみこんで、蛙のようにぴょんぴょんと私の上に飛び乗り、股を開いて私の腰を挟み、彼女の丸い肩、極度になめらかな肌、抱いているのはとても刺激的だった。

ペニスが彼女の下半身に入ったとき、彼女のアソコがあまりにもゆったりとしているのを感じたのは残念だった。押しつぶされたり、強くこすられたりすることもなく、ちょっとがっかりした。もっとも、わたしは地球上で性的な体験をしたことはないけれど,でも自分の予想と違って、宇宙人の女の身体の構造は、やっぱり私たち地球人の女とは違うのよ。

私はそのとき「箸掻き水甕」という言葉を連想したのだが、彼らの近くの村で特に大柄で屈強な女性が、彼女の家からスイカを盗んだ通学少年をレイプしたという話を聞いたことがある。

小さな男の子は正午に一人で学校に行ってスイカを盗んだが、スイカを見ていた女性に捕まってしまった。

彼女はまず男の子のかばんと教科書を没収し、それからスイカ小屋の中に入り、男の子は本を返そうとして、スイカ小屋の中にもぐり込んだ。ところが、その女性に押さえつけられてしまったのです。その女性は素早く男の子のズボンを脱ぎ、自分のズボンを脱いで、バケツの太い太ももで男の子を挟みました。

この女性の片方の太腿は男の子の腰よりもずっと太く、

男の子は寝返りを打つことができず、女性はまた男の子の教科書を手に取って、叫んだり、従順でなかったり、反抗したりしたら、と脅した,彼の本を引き裂き、最終的に彼女は男の子をレイプすることに成功し、彼を放すために長い時間をこねくり回しました。

村の年配の男性が、男の子を見て言いました、「どんな感じ? お箸で水をかき混ぜるような? 」

私はそのころ、まだそれほど年をとっていなかったので、男と女のああいうことを知ったばかりだった。そういわれれば、それがどういう意味かもわかった。

しばらくすると、柔らかいチューブが出てきました。ふたりの脚のあいだのふくれあがった唇には、大きな空洞があって、そこにチューブがたまっているのです。

微麗これらの柔らかい肉管が私の小さい弟に触れて、すぐに包み込んで、だんだん快感が来て、ますます爽快、ますます刺激的な感じ。

そのあとで、わたしはマイリーの下半身から手をつっこんで、咽喉のあたりに触れることができるようになった。

彼女たちは下半身から口まで肉管の空洞を保存しており、

男女ともに胃、腸、肝臓、腎臓、膀胱などの消化器官を持たず、体内は単純な空洞にすぎない。

ゴーク星人たちは自分たちの消化、排泄、呼吸機能の一部を外部にアウトソーシングし、外界の循環システムを利用し、主にグローバルな運動ネットワークを利用してそれを完成させた。

そのあと、わたしは性的興奮のない正常な状態で、彼女の下半身の空洞をかきわけ、肉管が彼女の下半身の空洞にたまっているのを見たが、そこからはただ頭だけがのぞいて、小さな乳瓜のようにぶらさがっていた,色は紫のしずく。

彼女の下半身の空洞の三角形のてっぺんには、明らかにもう少し太い肉管があり、それが彼女のチューブになっていた。

ゴーカー女の下半身のチューブは力強く、液体を噴射することができるので、ふだんからチューブの頭部に穴があいているように見える。そして、これらの通常の肉管の頭には穴がなく、粘液のみを分泌し、液体を噴射することはできませんが、メインチューブほど強力ではありません。

この肉管に手を触れると、豚の大腸に触れるような感触

があり、ねっとりと粘っこい液体にまみれています。

彼女たちの性行為は主としてこの肉管によって行なわれており、彼女たちの本当の性器は実はこの肉管なのである。

ゴクシン人の体は人工的に作られたものであり、彼らが設計した肉管は女性の性器として機能し、セックスにおいて女性が支配的になり、攻める側になり、男性は受け身になります,彼らの女性に大きな利点をもたらします。

地球上では、男性が女性をレイプしています、女性が男性をレイプしています、女性が男性をレイプしています。

彼らの女性は、好きでもない男性の性器に体内に入られ、肉管が出てこないようにコントロールされている限り、男性は巨大でゆったりとした女性の下半身空洞を前にして、何の快感も得られず、自然と性的魅力を失ってしまうのです。

自分の好きな男性に対して、彼女たちのチューブは積極的に男性の身体の中に攻め入って、わがままに、ほしいままに、男性の受け入れ能力を少しも構わない。

試したことがありますが、女性があなたに性的な関心を持っている限り、体の中のチューブが自動的に出てきて、体の外に出ていなくても、体の中で絡み合って結び目を作り、

ペニスが入ったら,その感覚は、私たち地球上の女性の膣と非常によく似ており、とても刺激的で気持ちいいものです。

彼女たちはときどき自分の肉管を丸い球体に巻きつけることができた。そしてぼくのペニスがこすれあって圧迫されると、その球体はしだいに大きくふくらんでいき、ついにはぱっくりとはじけて、熱くてねばねばした液体をたくさんほとばしらせた,全身を震わせる。

微麗とのセックスは私にとって体力の消耗が大きくて、その后私の眠気は突然来て、本当に意気地がなくて、どうしてこの時眠たいですか?

眠っている間に、私は地球に戻り、あちこちでゴーカー星の体験を話し、有名になり、多くの国から招待されました。

ある時、日本のある宇宙人を研究する組織に誘われ、その組織の会長の 16、7 歳の娘さんがとてもきれいで、ときめきセクシーすぎて直視できなかった。

しかし、彼女は私に非常に興味を持ち、会議が終わって休憩しているときに、非常に秘密主義的な様子で、私を家の外の野原に招待しました。

私は彼女について野原に行った、野原には高い草が生い

茂っていた、彼女は突然しゃがんで、スカートを引っ張り上げた、中にパンツはなく、真っ白なお尻と赤いアソコを裸にした,そして口を開けて私に笑いかけました。

この子の両親はこれまで彼女を放っておいたかもしれません私は心の中でこう言いました「日本鬼子」と呼ばれ男女ともに淫売であることは本当にみっともないことです男は中国に行けば中国を強姦するのが好きです,女性は東南アジアで売春するのが好きです。

私はそこに立ったまま、それ以上彼女についていかなかった。少女はいっそのこと服を全部脱ぎ捨てて、荒れた草の中を走ったり、ぐるぐる回ったりした。荒れた草の上の露が彼女の白いみずみずしい肌についた。彼女が走っている時、長い髪がなびいていたが、それは突然私に極度の美しさを感じさせた。

彼女の陽気で屈託のない様子に感染して、わたしの考えはまた変わってしまった。彼女たちは単純で幸せだったと思う。彼女たちは正しかった、人生は短かった,そして、私たち中国人はあまりにも多くの束縛を受けているかもしれません?

その女の子はゆっくりと私の目の前に来て、私は抱きし

めたい、私はとても緊張している、ああ、どのように見えるほど美しいですか?

私は突然目を覚まし、自分がベッドに横たわっていることを発見しました。

私は激しい衝動に駆られて、ベッドの上でリリーをひっくり返し、体の下敷きにして、激しく動かしました、彼女も興奮しているようで、私たちは白兵戦を始めました。

しかし、私はすぐにゴーカーの女性のすごさを理解しました、彼女たちの小さな体は私をだましました、彼女たちは非常に強く、エネルギーに満ちており、身体は非常に速く動き、非常に強力な小さなモーターのようでした。

わたしの肉体的な強さは地球上では一流ですが、彼女たちには遠く及ばないし、わたしたち地球人の肉体的な能力は彼女たちと同等ではありません。はじめは快楽、刺激、そして最後には苦痛と恐怖。

十八、雲の中を歩く

あまりの疲労でぐっすり眠っていたので、ほのかな手で

顔を撫でられて目を覚まし、起きてみると夜が明けているようだった。

「私たちは今日遊びに行きます」とビリーは言いました。「ノートンたちと話し合って、私たちだけの時間を持つことにしました」

ゴーク星は高度に発達していて、ほとんどの人が日常生活で遊んでいて、労働したり働いたりする必要がないことはわかっている。

私はマイクロリーに田舎に行くことを提案します。微麗はぼんやりと私を見つめているだけで、何も言わなかった。

「田舎へ遊びに行こう」と私は言った。

微麗はまだぼんやりと私を見ていましたが、微麗は田舎、田舎の意味を知らないのかもしれないと思い、「野原に遊びに行こう、土のあるところで遊ぼう」と言いました

微麗が私の言葉を理解しているかどうかも分からず、返事もせず、彼女が耳元を押すと、私たちはグローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて微麗の家からすぐに姿を消し、ゴーク星の誰も住んでいない自然の土地に現れた。

ゴーク星には農業はなく、農村も都市もありませんが、

居住区と非居住区があります。人間居住区の地面はすべて特殊な材料で覆われており、非居住区では地面がむき出しになっている。

この土地は鉄のように赤いので、酸化鉄が多いせいかもしれないと思います。見渡す限り、いろいろな植物があって、草本や大木のような、いろいろな不思議な草花があった。緑を中心に、白、黄色、赤の花が咲き乱れ、色とりどりのイメージです。

たまにブルーやブラックなど、他の色の花も神秘的な印象を与えます。

地球と違うのは細い草が少なく、枯れた植物や枯れ葉が見えず、草花の色は鮮やかで、葉は概して太くてふっくらとしており、表面には蝋質《ろうしつ》があるように見える。

赤鉄色の土地にも小さな水たまりがある。わたしはよくウナギを捕まえる。小さな池にウナギがいないかどうか、わたしはわざわざ調べてみた。水生動物をたくさん見かけたし、水たまりの土には水生動物の穴があいていたけれど,地球上によく見られる水生動物やイエロー・ウナギは見かけなかった。

日差しは明るかったが、あまり暖かくなく、どこか冷た

い感じがした。

草花の間を歩いていると、ふと前方に緑の小屋が見えた。小屋の近くまで来ると、その小屋が籐《とう》のようなものを特定の方法で育てたものであることがわかった。

小屋は二階建てで、階段があり、ドアや窓があり、どれも籐《とう》が一定のパターンで生えていて、その下の一階にも籐《とう》がびっしりと生えていて、とても精緻《せいち》だった。小さな虫たちが籐の上を這い回っているのも見かけました。

小屋の中に入っていくと、私は小屋の中を小娘を抱いてゆっくりと歩いていきました。

このときの光景は、まえにも夢で見たことがあるような気がしたが、ふいにわけのわからない衝動にかられて、わたしたちはヴェリティを地面に押し倒し、籐《とう》だらけの地面をころげまわった。

ヴェリティは怒らず、私の意思に合わせて、最後にヴェリティの仮想の服は突然体から消えて、この籐だらけの小屋で私たちは再びとても楽しい肉体の交わりをしました。

私は地球上で、この場面で女性と肉体的な交わりをした

ことがあるような夢を見たことがあるような気がする。その夢の記憶は鮮明で、しばしば頭の中で栄えている,まさか今この場所で現実になるとは思わなかった。

服を着る動作がなく、ピンクと白の肌の色が徐々に変わり、服が徐々に彼女の体に現れ、私はリリーを抱きしめ、籐小屋を出た。

私はちょうど私達が再びそこに遊びに行くことを微麗に尋ねようとして、突然、私と微麗は軽い足取りで、両方の空中に浮かんで、私は驚いて、「イヤ、これはどういうことですか?」

「これは私がグローバル・キャンペーン・ネットワークに、依頼したものです」

「グローバル・キャンペーン・ネットワークは、ある場所から別の場所に物と人を運ぶことしかできないのに、どうして人を空中に浮かせることができるのですか。

「運動ネットワークは私たちを空中に送った後、非常に小さな断片距離を送ってから停止し、私たちを非常に小さな距離を送ってから停止し、この繰り返しで、私たちは空間に浮かんでいます」と微麗氏は説明する。

“オー、私は理解して、運動ネットワークは空気中で私たちを送った距離は非常に小さいので、非常に小さな時間を離れて私たちを送った非常に小さな距離、この距離と時間がある程度小さいので、私たちは運動していることを感じることができない、空中に浮かんでいるようなものです”

「ああ、そういう意味だね。君はほんとうに頭がいいんだね」

このようにして、私とリリーは空中を気持ちよく、気軽に散歩していましたが、その後、雲の中に上がりました、雲は霧でした。

私と微麗は雲の中を散歩して、まるで孫悟空が雲に乗っているようで、とても気持ちがいいけど、地面がよく見えない。その後、高度を下げると、地上の景色が一望できた。

テクノロジーが高度に発達しているのはいいことだ、人の心の思い通りになるのはいいことだ、どんなアイデアでも実現できるのはいいことだ、と思った。

あとで、ゴーク星に川があるかどうか見てみようと思った。

微麗が言った。「私たちのゴック星にも水がたくさんあ

ります。陸地には川があり、湖には水があり、海もあります。これから私たちの川と湖をご案内します。」

空中から地上に降り立ったぼくらの目の前には、たしかに曲がりくねった川があり、土手の上に立つと、川は曲がりくねってはいたが、どうやら高度に加工されているらしいことがわかった,人工的に作られた土手には、プラスチックのようなものが次々と覆われていて、見渡す限り全体的に見えます。

それから私は大きな川を見てみようと提案したが、やはり大きな川と大きな湖が見え、川の堤防と湖の岸辺はすべて人工的に造られたもので、とても整然としていた。しかし、人が住んでいる家は見当たらなかった。

大きな湖のほとりで足をとめると、湖の水ぎわの草地や、草地のそばの岩の上に、さまざまな種類の動物が住んでいるのが見えた。

行ってみようと言ったら、湖の堤防が高いので、微麗が運動網を頼んで下りて行った。

草原では、地球のカメのような動物が、草原で日光浴をしていました、私たちを見て、多くが逃げ出しました、後ろ

に長い尾が見えました。

巨大な岩の上で、私はまた多くの動物がぎっしりと日光浴をしているのを見ました、これらの動物の中には、体が大きくて、白いウジのようなものがたくさんありました,あるものは物憂げに頭を上げ、私たちを見て、また眠り続けました。

突然、岩の下から大きな水柱が立ち上がり、岩の上にいたたくさんの日焼けした動物たちが水を浴びました。

穏やかだった湖が突然大波を起こしたのが不思議だった。近づいてみると、岩の下の水の中に、家ほどの大きさの口を持つ巨大な怪物が潜んでいるのがわかりました,それらの動物をおいしそうに食べています。

私もシリも怖くなって「もう帰ろう」と提案しました。

“オーケー、私たちは戻って、”ビリーは言った、“私は小さい、モンスターは食べ物を食べることができない、あなたは大きい、モンスターを食べることができるので、モンスターはあなたが好きです。”

微麗の言葉が終わると、私たちは運動ネットを通って、微麗の家に戻りました。

19、海底潜水

私たちはビリーの家に戻り、一晩休んで、翌日、私たちは再び遊びに行くことについて話し合った。

私は海で遊ぶことをお勧めします、私はゴーク星の海を見たいと思います、実際には、地球の海は私も見たことがない、特に海を見たいです。

マイクロ麗は私たちに海底に遊ぶことを提案し、海底に遊ぶことは確かにより刺激的ですが、どのように海底に遊ぶことができますか?潜水艦で?ゴーク星の潜水艦はどんなものか、地球より進んでいるだろう。

シロウズは潜水艦を借りられるだろうか?アイデアを出したのは彼女で、彼女は潜水艦の問題を解決しなければなりません。わたしはマイリーの提案に同意した。

「潜水艦《せんすいかん》で海底に遊びに行くのか」

「ああ、そうだ」。

「あなたの潜水艦は、私たちの地球に似ていますか?」

「うーん、それは行ってみればすぐわかる」

グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、私

たちは巨大な家の前に来ました。ここから海底に向かいましょう、とビリーは言いました。これはちょっと予想外だったので、まず海が広がっていて、その海辺に建物が建っていて、その海辺にたくさんの潜水艦が浮かんでいて、観光客に貸し出しているのが見えるのではないかと想像した。

しかし目の前の家は大きく、高くて長く、頭が見えず、海の影も見えなかった。

私たちは間違っているのではないかと、微麗に尋ねたかったのですが、これは地球の駅のようなもので、列車は駅の後ろにあり、これらの家の中に入ると、海が見えるかもしれないと思いました。

案の定、この家から中に入って、潜水艦をもらったら、この家から直接海底に出られる、とビリーは言った。

「潜水艦の引き取りにはお金がかかるの?」

「これ? 富の価値が必要だ」

「富の価値って何?」

「われわれゴック族が日常的に行っていること、公益的なこと、他人にサービスを提供すること、グローバル情報ネットワークが自動的に記録する、あなたが得た一種の富の価

値だ。

何もしなければ、ある一定の期間内に、ある一定の富の値を得ることができます、地球上のお金の概念と同じくらいです、紙幣が見えないだけです、グローバル・インフォメーション・ネットワーク上の数字です,バーチャル通貨なんです、というわずかな説明に、私は納得したようだった。

海洋館のバーチャル・デジタル・イメージ・キャラクターが中から浮かび上がって私たちを出迎えてくれたのは、半人半魚で、上は女の子の姿、下は魚の姿で、魚の尻尾が空中で左右に揺れ、全身裸になっていた,手には銛《もり》のようなものを持ち、その横にはゴキシングの文字が浮かんでいる。

インフォメーションネットワークのカスタマーサービスであるコウィンは、この文字は私たちの地球の中国語に翻訳されていると言います。

微麗は仮想デジタルキャラクターを相手にしなかった。わたしたちが入っていったのは、これらの高くて立派な家々で、その家々は非常に精巧であるばかりでなく、構造も非常に複雑で、多くのゴーク星人が歩きまわっていて、やはり海を見ることができなかった。

マイクロリーに連れられて立派な家に行き、マイクロリーは耳を押さえて、脳でグローバル情報ネットワークにメッセージを送り、しばらくするとドアが開きました。

内部は非常に精巧で美しく、中心は円筒形の舞台のようで、どんな素材でできているのかわからないが、ガラスのように透明で、ガラスよりもさらに精巧に見える。部屋の壁は金属のようで、極度に磨きあげられていた。

私たちが中に入ると、ドアは自動的に閉まり、空中から黒い柔らかいパイプがいくつか出てきて、私とビリーを吸い上げ、中央のテーブルにそっと置いた。

かすかな音とともに、テーブルはたちまち回転し、くぼみへと下降していった。わたしたちは円形の穴のまんなかに立っていた。突然マイクロリーの目の前に、ガス状の 3 次元バーチャル画像が現れ、そこにはたくさんのゴーカー星の文字が表示されていて、マイクロリーと話しているバーチャル人物がいて、マイクロリーが数回タップすると、バーチャル画像は消えてしまいます,マイクロリアは ok を出しました。

潜水艦が現われるか、潜水艦の通路に入ってくるかと期待したが、壁には黒いパイプが突き出しているだけで、その

先端には石鹸のような、石鹸よりも小さな赤いものがあり、かすかにリツ子はそれを受け取った,食べろと差し出される。

微麗自分はなぜ食べないのか?私は疑問に思いましたが、考え直してみると、微麗は私を傷つけることはないのではないでしょうか?

「これ、なんですか?」

「情報の泥」

「メッセージ泥、何に使うの?」

「何にでもなれる」

「あなたの体とそっくりのものになれますか?」

「小さすぎます。私の体と同じくらいの大きさなら、できます」

「じゃあ、もっとお願いして、地球に帰ったら、あなたを変身させてあげる

「それはいけない、情報の泥は非常に小さなもので構成され、あるものは原子の大きさと同じくらいで、私たちのグローバルな運動ネットワーク、グローバルな情報は遠隔で、非接触で動力と信号を情報の泥に提供し、情報は何でも組み合わせることができます。情報スライムを地球に持ってきて、

動力と信号を供給するグローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークがなければ、何も変わらない」

「これ、毒があるの?」

「毒があれば食べろと言うのか?」

わたしはマイリーから情報泥を受け取って食べた。

グミみたいな感じで、味はないんですけど、お腹の中に入ると、すぐに発作が起こって、自分の体が一瞬にしてものすごい力を持って爆発しそうな気がします。

突然私は自分の体のいたるところに急速に多くの柔らかい赤い糸が生えているのを見て驚きました、そして円台の端に来ると、これらの赤い糸はもう生えていません。あまりの恐ろしさに、私は円盤の上に倒れました。

すばやく自分の服を身体から離し、足を広げて私の上に乗り、顔に媚びを浮かべ、とても熱心に私を抱きしめてくれた。私も微麗の交歓の要求が好きですが、今私達は海底に遊びに行くつもりですか?

私の弟がビリーの体の中に入った時、突然乳白色の接着剤のようなどろどろした液体がすばやく円形の穴の中に流れ

込みました。

接着剤のような液体は、メッセージスラッジのようなものかもしれません、非常に活発で、ピットの中で劇的に変化しています。

しばらくして、インフォメーション・ネットワークから、サメのようなものが現れました、私とビリーは、サメの中に、しっかりと閉じ込められていました。

サメの目は私の目のようで、サメの翼は私の手のようで、サメの尾は私の足のようです。

このサメが潜水艦であり、ゴーク星の潜水艦がこのサメのような人工生物であることが、私にはなんとなくわかったような気がした。

クレーターはさらに下降を続け、ついに海水になだれ込み、私たちはすぐに海底に入りました。

海底には、巨大な、縁の見えない黒っぽい長い板が、45度傾いて、私たちの頭上にたくさんの丸い穴を開けているのが見えました,ほかにもサメのような生き物の潜水艦が丸い穴から出てきているのが見えます。

突然、耳に音楽が入ってきたが、その水中音楽モードは

超重低音のようで、どくん、どくん、と心臓が震えるような不快な音だった。

「グローバル・パブリック・ネットワークようこそ、水中情報処理モードを始動ーー」という声が聞こえた。

しばらくすると、また耳元で、「グローバル・パブリック・キャンペーン・ネットワークを使って、水中安全モードを始動してくださいーーあなたが行きたい海域を選んでください」

遊びに行く場所がわからなかったのですが、ビリーが「鉱山のトラフ」と言いました

私は口に出して言いました、「私たちを取り巻く環境は、一瞬にして変わってしまった」。

しばらく泳いでいると、頭上に海水が降り注ぐ陽光が見えた。バイオ潜水艦の貸し家の近くにはもういないだろう。グローバル・キャンペーン・ネットワークを通って、ミネラル海溝に入ったのだろう。

普通の海に出ると、上流に向かって努力し、海水の温度が上がっているのを感じ、海面から頭を出してみると、はたして風が穏やかで、青い水と空の大海原が見えた。

われわれはふたたび沈みはじめ、本格的な海底の旅に出た。ところが、このときになってマイリーがいたずらをはじめ、わたしの下半身に力をこめ、強烈な性的刺激を与えたので、わたしは意識を集中することができず、その拍子にあわせて海のなかを転げまわらざるをえなくなった。

私は彼女とコミュニケーションを取ろうとしましたが、ビリーは私を無視し、彼女と絡み合い、しばらくして彼女が私を解放し、私たちは海底を穏やかに泳ぎ始めました。

まず、人工的に掘られた洞窟に入ります、洞窟は海底にある山の周りを回っています、いくつかの部分は外部とつながっています、洞窟の縁には多くの柱があります、これらの柱は彫像で、個人の頭の像です。

穴の中にはたくさんの穴があり、非常に滑らかなので、穴の中を素早く滑ることができます。

ある穴には、ミミズやヒルや虫のような柔らかい毛がたくさんあり、あるものはタコやヘビのように、私たちを押しのけて進んでいった。

ある穴からは、ねばねばした絹のような液体がときどき噴き出していた。

海底を注意深く観察すると、巨大な人工建築物の痕跡がたくさん見つかります、これは恐らく、ゴーク星の技術が発達していて、地球人なら、海底で巨大な建築物を作る力はないと思います。

穴から出ると、赤い光の点が急速に近づいてきて、サメのような生物の潜水艦にぶつかりました。よく見ると、この赤い点は、エビのような生き物が持っているものです。

私も同調して少し痛みを感じました。微麗は痛くないかと聞くと、痛くないと言う,「あなたの体の細い赤い糸は神経のようなもので、この生物学的な潜水艦を操作し、操作することができ、外界のあらゆる刺激を感じることができ、この赤い糸を通じて情報を伝達しているが、私は感じていない。でも、外が見えるんです」

「どうして外が見えるの?」

「これ……?グローバル・インフォメーション・ネットワークのおかげで、わたしの脳はグローバル・インフォメーション・ネットワークとつながっている。グローバル・インフォメーション・ネットワークは、ゴーク星の空、地上、地下、海底のあらゆる情報をキャッチして、それをわたしに送り、

わたしのために。私はグローバル情報ネットワークを使いこなせるし、あなたもグローバル情報ネットワークにアクセスできるけど、あなたはそれに慣れていない」

私たちは海底を泳いでいました、頭上にはたくさんの種類の魚が泳いでいました、海底にはたくさんの奇妙な植物が生えていました、そして、海底の光は不思議なものでした、そして、海底の光はあまり強くありませんでした,まるで夢のようです。

そして、人々は水の中にいて、体に重量感がなく、人々は特殊な自由状態に入ったようで、重力の制約がなく、ましてや社会の中の他人の観望と制約がなく、全く恥ずかしい感じがしない,このような状況では強烈な性欲をかき立てられやすいですし、マイクロリアの極端に滑らかな体にしっかりと抱かれているので、マイクロリアとの性的な関係をコントロールするのは難しいです。

微麗が私を海底に誘った目的は、そのような性的刺激を求めるためだったのではないかとさえ思う。

私たちのサメのようなバイオ潜水艦が酔っぱらったように海底を行進している様子は、魚のように泳ぎ回っている様

子とは明らかに異なっています。

その後、海底の岩に止まっていた小さな銀白色の魚を見かけましたが、この魚はとても特殊で、まるで人工的に作られたかのようで、歯が鋭くて、私はそれに近づこうとしました,すると、世界情報ネットワークの、カスタマーサービスから、警告音が聞こえました,

“危険、マグロ、おそらく機械的損傷、無毒。”

グローバルネットワークの警告を無視して、この小さな魚に近づきました、すると突然、この小さな魚の歯の 1 本が、後ろから糸を引いて、私のバイオ潜水艦の背中に当たりました,この魚はすぐに歯を引っ込めました。

背中に痛みが走り、背中から白い液体が噴き出しました。

このバイオ潜水艦の怪我について、心配していると、カスタマーサービスのコーウィンの声が、耳に飛び込んできました、「怪我のタイプ、機械的な怪我、無毒、グローバル・キャンペーン・ネットワーク、遠隔治療モードを開始します」

まもなくバイオ潜水艦が完成し、わたしは緊張を解いた。

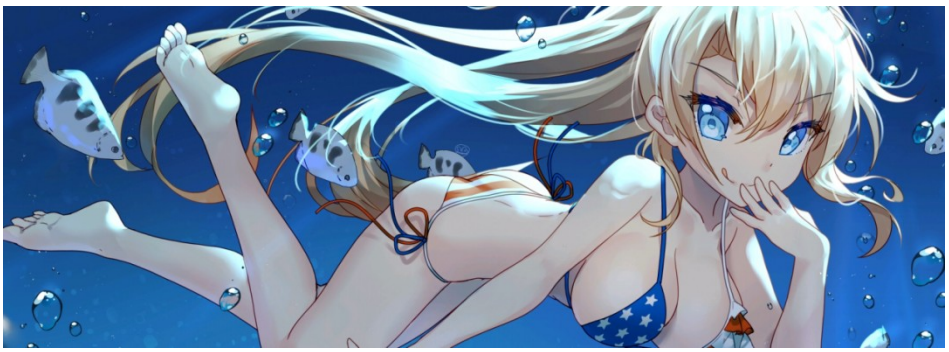
私は美しい性的刺激について考えないようにし、心をコ

ントロールしようとしました。

その後、さらに大きな危険が待ち受けていた。

周囲の地形といっしょに、まるでわれわれの地球に横たわっている女の陰部のような形をした、真っ黒な楕円形の縦穴があり、魚が出入りしているのが見えた。

好奇心から中に入ってみたくなり、危険を恐れて躊躇《ちゆうちよ》していると、グローバル・スポーツ・ネットワークに守られていると思いついて中に入った。



わたしのバイオシップがその穴に触れると、やわらかい感触があり、たしかに人間の肌のようだった。

案の定、入ってみると巨大な魚の口の中に入っていることがわかった。

私たちが中に入ると、巨大な魚が口を閉じ、大きく整然とした鋭い歯が私たちの上にのしかかってきたので、私は冷や汗をかいた。

「グローバル・キャンペーン・ネットワークはエリア閉鎖保護を使用しています」という声が私の耳に届いた。やはり円筒が私たちを取り囲んでいて、その円筒の中の水の流れは、外界の水の流れとは明らかに違っていて、インターフェースを形成していて、はっきりと見ることができます。

この大きな魚は歯が合わなくなり、私たちを吐き出し、グローバルキャンペーンネットワークが私たちを救いました。

泳ぎながら、私はマイリーに尋ねました、「私たちのように、海で遊ぶゴーク族はいますか?」

「もちろんありますが、なかなか出会うことはできません、私たちのゴーク星の海は、あなたがたの地球の海よりもはるかに大きいのです。外から見るとみんな魚なので、グローバル情報ネットワークを使わなければ、海の底で連絡を取るのは難しい。

グローバル・インフォメーション・ネットワークを通じて、長年海底に生息しているさまざまな高級生命体を近くで発見することができますが、それらを見てみませんか」

「見てみたいわ」

かすかな美しさに導かれて、私は高級生命体を見た。一

見したところ、やはり魚の形をしていた。大きくて、白くて平べったくて、極端に流線型で、ただ目だけは神経質そうだった,しばらく私たちと目を合わせてから、ゆっくりと私たちの後を追います。

マイリーはこの生命体から早く離れろと言った,

「この生命体は非常に危険で、おそらく何万年も水の中で生きてきた女性であり、いくつかの性能は私たちのゴク族よりも優れており、身体を置き換えることができ、自己進化することができ、彼女は多くの素晴らしい能力を持っており、グローバルな運動ネットワークの私たちの保護を破壊することができます。

私たちゴーク族の意識は、バックアップされており、世界中の情報ネットワークは、私たちの意識を、絶え間なく記録し続けています、もし彼女に肉体を奪われたら、回復できないでしょう,バックアップの意識に記録の意識を加えて、新しい人工生物に乗せれば、人間は生き返ることができるのだから、結果はそれほど深刻なものではない。

元兄貴が彼女に捕まったら大変なことになるし、あんたの意識はバックアップなしでは取り返しがつかない。本当に

死んでしまう」

「オー、そうか、俺の体を奪ってどうするつもりだ? 俺を食べるつもりか? 違う味を味わってみろ」

「そうじゃない、彼女たちは決して食べ物に事欠かない、この生命体は表面は魚のように見えて、内部には私と同じような人間の身体が寄生していて、あなたが彼女に近づき、彼女に捕まると、彼女はあなたをこの魚の身体の腹の中に吸い込み、彼女はあなたをコントロールし、あなたに絡みつき、あなたと性行為を行い、あなたと彼女の性器が永遠に絡み合い、あなたの身体は彼女から離れることができず、あなたは永遠に彼

「どうして彼女はそんなことを……」

「海の底では、異性を見つけるのは難しい。地球時間では、何百年も会えないかもしれません、一度捕らえられた異性は、簡単にはあなたを逃がさないでしょう、彼女も強い性的中毒を持っているかもしれません」

「まあ、気持ちいいわね、何が怖いの」

「彼女は単にあなたと性行為をしているのではなく、あなたに良いことをしていない、彼女はあなたを野蛮に改造し、

様々な肉管をあなたの体に入れ、栄養を与える時、彼女たちだけの特殊な毒液を注入する、この種の毒液は彼女たちが何億年もかけて進化したもので、非常に恐ろしいものです。

彼女たちは何億年もかけて進化してきたのです、彼女たちの毒は恐ろしいものだと信じてください、彼女は毒を使ってあなたを操り、あなたの体と意識を改造して、あなたを長い間意識不明の状態にし、植物人間のようにしてしまうかもしれません,あなたは半死半生の状態にありますが、彼女があなたを目覚めさせたのは、セックス中毒になってからです」

「まあ、そういう結果も悪くないわね」

「彼女がその日、別の男性に目をつけて、別の男性を捕まえたら、あっという間にあなたを吐き出して、あなたは完全に死んでしまう」

「ああ、それじゃあんまりひどいことになってしまったので、さっさと彼女から離れましょう」

私たちは急速に移動し、ついにその知的生命体は追いつかなかった。それからまたたくさんの蛇のようなものが海底で揺れているのを見て、高度を下げて近くに行くと、地球の女性とコブラの合体のような形をしたコブラのような生き物

がたくさんいました。

これは海底のヘビ人間で、動物と植物の中間に位置する生命体だと、ビリーは言っていました。

注意深く見ると、これらの蛇人間は裸で、柔らかいピンクの体には蛇の模様があり、蛇のように細長く、人間のような顔立ち、五感を持ち、目は特に細長く、口と鼻は非常に小さい,手も腕も脚もなく、というより二本の脚がくっついていて、とがった小さな乳房と陰部があり、極端に細いウエストと格子縞《こうしじま》のある体をしていた。

その蛇人間の胴体の下部は、まるで特殊な肉体であるかのような巨大なものにつながっていた。

私たちが近づいてくるのを見ると、この蛇人間たちは突然騒ぎだし、踊りだし、さまざまなポーズをとり、誘惑的になり、私は心旗をひるがえすような感じに襲われた。

ビリーは私に、出て行けと言いました,

「これらの蛇人間も非常に危険であり、彼女たちは特殊な猛毒を持っており、もしあなたが彼女たちに捕らえられれば、彼女たちはあなたに毒液を注射し、あなたを極度の快楽を感じさせ、彼女たちはあなたの体の一部を食べ、あるいは

溶かし、あなたは全く痛みを感じず、彼女たちはあなたの体を食べながら、あなたの体に毒液を注入し、あなたは極度の快楽の中で体全体を彼女た

ゴークシャーの海は危険で満ちているようで、家に帰りたくなりました、「プリリー、どうやって帰るの?」

「グローバルスポーツネットワークを通じてね」微麗が尋ねた。「海底で遊ぶのはやめて、帰りたい?」

「あ、はい。帰りたいです。ここが怖いです」

「よし、スポーツネットに頼《たの》んで帰ろう」

やがて、海底に入りはじめた円台のある家にもどると、サメのような生き物の潜水艦が溶けて、どろどろした白い液体に変わり、わたしの体の細い赤い糸もいっしょに消えていった。

微麗は手で頭を押さえ、裸のピンクと白の肌が徐々に衣服を現し、彼らのゴク人の仮想衣服は便利である。

私たちは壁に行き、壁は自動的にドアを開け、私は手を取り合ってこの部屋を出て、この海底ダイビングを終えました。

二十、海底蛇人に侵略される

わたしとシェリーは戻ってきて、ノートンとスーデールに海底の話をした。ノートンは、シーマン・スネークは彼の研究対象だと言い、もう一度円盤を飛ばして、シーマン・スネークを詳しく調べてみようじゃないかと提案した。

もちろん、ノーと言う権利はありませんでしたが、今回はノートンにだまされたようでした。ノートンは悪意を持っていました。

空飛ぶ円盤はそのまま海底に飛び込み、雲のように音もなく海底に落ちていきます。

最初は 3 次元のバーチャルイメージで、海底を観察しました。やがて、スネーク・マンのいる領域に達すると、円盤内部の三次元バーチャル画像が突然拡大され、私たちは巨大なガラスの壁を通して海底を見ているような気分になった。

この海底は水面からさほど離れていないので、陽光がさしこんで、海底がはっきりと見えた。

遠くから見ると、海底のヘビ男は、多くの振り回された鞭のように見えます。

中心部には、鮮やかなピンクに囲まれた、大きな枯れた黄色が広がっています。

ノートンによれば、中央の枯れた黄色いのは死んだスネークマンで、そのまわりには若い女性のスネークマンが勢いよく集まっているという。

ノートンはまた、ヘビの人々は植物と同じように太陽の光をエネルギーとして生きているが、エネルギーを得る方法は植物の葉緑色の方法とは異なると説明した。ヘビ人間は動物と植物の中間に位置し、寄生種にも属する。

その中で女性の蛇人は男性の体内に寄生するのが好きで、海底で男性を捕獲すると、男性の体内に侵入し、男性の体の高熱を引き起こし、男性の体内組織を溶かし、もちろん、その代償として,男性に快感を与えます。最後に、蛇人は捕まえた男性と一緒に死んでしまいます。

スネークマンが海底でゆっくりと異性を待つのは、心中するため?これに意味があるのか?心の中でつぶやいたが、口には出さなかった。

やがて円盤はスネークマンに近づいてきて、もっとはっきりと彼女たちを見た。

それらの蛇人間は全裸で、体つきは蛇と同じくらい細長く、プロポーションは蛇と同じくらいで、腰は極端に細く、いちばん細いところは私の指ほど太くはないように感じられた。手も腕も脚もなく、というより、二本の脚がくっついていて、長く尖った細い乳房が二本あり、陰部があった,

体の色はとても鮮やかで柔らかなピンクで、地球の赤ん坊の舌のようです。

全身にヘビのような格子状の模様があり、その模様の色は赤、黒、白が交錯していて、とくにわが農村の火舌鎖《ひぜつくさり》というヘビの模様に似ている。

これらの蛇人は人のような人相、五感を持ち、目は特に細長く、目尻は 45 度上がり、目玉は小さいが、鋭い感じで、口と鼻は極めて小さく、頭上には多くの柔らかく細い肉管がある。人相は極度に邪悪な感じを与える。

やがてノートンは、空飛ぶ円盤の外に出て、スネークマンに近づいて観察しようと提案した。空飛ぶ円盤の外には、ノートンとスーデール、マイクロリーたちが姿を現わし、それぞれが透明なビニール袋に包まれているように見えた。

ぼくが最後に ufo の外に現れたのは、ぼくらを包んでい

る空気の塊で、その中では普通に呼吸ができていた。おそらくグローバル・キャンペーン・ネットワークによるものだろう。

ノートンたちがスネークマンに近づくと、スネークマンたちは踊りだした。その顔は非常に美しかった。

ノートンから、スネークマンはわれわれの腹の中に入り込んで内臓を溶かしてしまうと聞いていたので、恐ろしくて近づけなかったのだ。

わたしは平らな場所を選んで立っていたが、波がうねり、体がゆらゆらと揺れるのが感じられ、「蛇人間のところには浮かんではいけない」とひそかに恐れた。

ところが、僕を包んでいた空気の塊が何故か突然破裂して、たくさんの小さな泡となって浮かび上がってきた。僕の体はすっかり冷たい海水に溶け込んでしまって、しかも呼吸ができない。

私の近くにいたヘビの群れが、私を見たのかもしれません、集団でリズミカルに踊っていたので、海水がヘビの群れに向かって流れていき、私は思わずヘビに近づいてしまいました。

ノートンたちと空飛ぶ円盤がどこかへ消えてしまうのを見ていると、救いを求めて絶望的な気持ちに襲われた。

わたしは目を閉じ、悪夢を見ているだけで、目を開けたらきっと美しいベッドに横たわっているだろうと願った。

しかし、目を開けたときには、薄麗のベッドの上ではなく、蛇人間たちの上にいて、必死にもがいていたが、彼女たちの頭の上の肉管がわたしに届き、わたしは彼女たちに吸い取られてしまっていた。

自分が蛇の巣に落ちたような気がして、見る勇気がなかった。しかし、まず太腿《ふともも》が、この蛇人間たちの冷たい身体に絡《から》みつき、この蛇人間たちの肉体は、わたしの身体に貼《は》りついただけで、どきどきした、恐怖《きょうふ》の感電を覚えた。

やがて私の腕や腰は冷たい蛇人間の身体に絡まり、鶏の腸が絡みつくような感じになった。

しまいには全身のいろんなところに、たくさんの蛇が幾重にもからみついて、しかも彼女たちの力はますます大きくなり、たがはますますきつくなり、私は呼吸が苦しくなり、抵抗する力もなくなった。からまるところはなく、たくさん

の毒蛇が舌で舐《な》めたり擦《こす》ったりしているように感じられた。

わたしはもがかず、もがいても無駄だとわかると、目を閉じて悪夢だと思いこもうとした。

しかし、この蛇人間どもは憎らしくて、口をあけて、その口から紫黒色のとがった細長い舌を出して、私の目を押し開いてしまうので、私は見たくなくても見ることができなかった。

これらの蛇は人間の頭は大きくないが、口は非常に大きく、非常に恐ろしく裂けることができ、鋭く尖った細い歯は特に恐ろしく、口腔は紫がかった赤色で、紫がかって黒ずんでいる。舌はとてもしなやかで、ぐるぐる回ります。

そのあと、口から蛇人間の体がはいりこんできて、ひどく生臭い粘液をたらし、ひどく吐き気をもよおしたが、それをさえぎる力はなかった。

彼女たちが入って行く方法はどれもちゃんとしたものではなく、ある蛇人は私の首をしっかりと巻きつけ、強いたがを締め、蛇人が私の喉に入ってきて強い圧迫感と摩擦を感じさせた。

その後、この蛇人間は私の胃のあたりにやってきて、大量のねばねばした液体を吐き出し、極度の吐き気と強烈な生臭さで、胃のあたりが焼けるような感じになった。しかし、このとき、私は呼吸ができるようになり、息がつまるような苦しさはなくなった。

その後、蛇男たちは私の両足を 180 度近く開かせ、私は彼女たちが私の肛門から入ってくるのを予感しました。

案の定、しばらくすると柔らかいが冷たい肉管が肛門から入ってきた。こんなふうに普通に入っていくのは、ヘビ男たちには向いていないと思う。

案の定、このとき何匹かの蛇人間が私の腹部を何重にも締めつけ、私の肛門に入り込んだ蛇人間を私の体の内部に強く締めつけ、摩擦させた。そういう圧迫感、摩擦感覚を求めているようであった。

摩擦《まさつ》と圧迫《あっぱく》が激しくなるにつれて、奇妙《きみょう》に心地《ここち》よい快感《かいかん》が襲《おそ》いかかり、身体《からだ》を震《ふる》わせ、痙攣《けいれん》させる。

そもそもこの蛇人間どもが私の体内に噴き出していた粘

りけのある液体、生臭い匂い、吐き気、焼けつくような感覚がどうして急に変わったのか?

気持よくなって、咽喉《のど》も胃腸《いちよう》も火照《ほて》るような感じがして、かえってその液体がもう一度現われて欲しいという欲望が強くなった。内臓を溶かしているのではないかという恐怖とパニックがまた襲ってきた。

同時に、自分の体が熱を持っているのを感じ、自分の体が軽くなっているのを感じ、軽くなっているのを感じ、同時に多くの素晴らしい幻覚が現れた。

蛇のしっぽのようなその下を何かに固定し、裸のみずみずしい身体を波のようにゆらめかせ、あるものはわたしを抱きしめ、まといつかせている美しい娘たちをたくさん見ているようだった,私の体の内側も外側も、彼女たちに撫でられ、吸われているような気がした。

ノートンが言ったように、この蛇人間たちは私の内臓を燃やしているのだろうか、私は死に近づいているのだろうか?

ノートンたちがこれ以上何もしなければ、私は本当に終わりだ。なるほど、この蛇人間どもが鋭利な刃物で切り裂かれたように、わたしから離れていくのを感じながら、わたし

は至福の極に達したようだった。

それから、自分がベッドに横たわっているような気がして、さっきの光景はまるで悪夢を見ているかのようだったが、ただ、私の中に潜り込んだ蛇人間がまだ私の中に詰め込まれていて、胃と腹の中がいっぱいになっているような気がした,これは夢ではないことを思い出させてくれる。

誰かが助けてくれているようで、ヘビマンの死体は私の肛門から排出されました。

意識を取り戻したとき、近くにノートンとスーデール、シェリーの三人が立っているのが見えた。

「見てください、これらは蛇人間の骨格に似ていて、われわれの助けがなければ、あなた自身が体外に排出することはできません」とノートンは私に言った。

ヘビ男たちの骨格は魚の骨のようで、白くて細く、皿のようなものの上に載っていました。

ノートンはスネーク・マンがわたしの中に入ってきて、どんな気持ちだったのかと尋ねるつもりだったのかもしれないが、今回は何も尋ねなかった。

二十一、ゴクシン人工場発射センター見学

惑星ゴークの最も重要なインフラストラクチャーは人工発信機であり、ゴークの魔法のようなグローバル・モーション・ネットワークのテレポーテーション技術は人工発信機に依存している。

ようやくチャンスが訪れ、マイクロリー、ノートン、スーデールと一緒に人工衛星発射センターを見学した。

人工発射センターはゴーク星のあの場所にあるのかと尋ねた?スーデイルが天上を指さすと、昼間なら銀灰色《ぎんかいいろ》の衛星《えいせい》が見えた。

グローバルキャンペーンネットワークを通じて、私たち 4 人はあっという間に人工発生センターに到着しました。そこまで行ってみると、人工発生器センターはとても巨大で、人がいても全く見えないことが分かった。

人工場の打ち上げセンターには非常に精巧な金属の部屋がたくさんつながっていて、鉛灰色と銀灰色を主とし、部屋には電球のようなものはなく、全体の壁は柔らかな光を放っている,しかし、果殻惑星によくあるバーチャルハウスは見当

たらなかった。

「まあ、大きすぎる。別の惑星に行ったみたいだ。ここは工場送信機じゃなくて、工場送信機センターと呼ぶべきだな」ぼくは感嘆していた。

「そう、そう、ここを人工発射センターというんだが、そのなかでいちばん重要な設備が人工発生器なんだ。人工発射センターは、世界の運動ネットワークにテレポーテーションサービスを提供するだけでなく、私たちの惑星ゴーカーにエネルギーを提供するセンターであり、世界の公衆情報ネットワークの中心地であり、世界の情報処理センターでもある。地球と違って、私たちは電気を使いません、場のエネルギーを使います」

スーデールは言った,「人工場の打ち上げセンターは、実際にはゴーク星のエネルギー発射、動力分配、情報処理センターであり、恒星のエネルギー受容器を集めることによって恒星のエネルギーを受容するエネルギー受容センターでもある。この装置が地球上にあるとすれば、コンバージェンス・ソーラー・レシーバーと呼ばれるべきでしょう。

人工衛星打ち上げセンター地球の静止衛星のような打ち

上げセンターは全部で 9 つあります。私たちの近くにある他の小さな惑星は 6 つあります。

この人工場の打ち上げセンターも私の勤務先のひとつですが、私はここに人がいる必要はなく、たまに来るだけで、公共の情報網を通じてリモートでここのために働いています」

「元お兄ちゃん、知ってた? 」微麗は言った。「人工場の打ち上げセンターの核心部分があるところでは、テレポートサービスができないの」

「オー、それはわかっている。われわれ地球の床屋と同じように、だれのためにも散髪することができるが、自分のためにだけ散髪することはできない」

「われわれがこの工場の打ち上げセンターを歩いているときに感じる重力は、実は人工的に作られたものなんだ」ノートンが口をはさんだ。

人工場の打ち上げセンターには、身長一メートル前後のスタッフが大勢いて、私たちを見ると、みんな振り返って眺めていたが、私の背が大きかったから、彼らの注目を集めたのかもしれない。

打ち上げセンターでは多くの人が噂をしていたが、グローバル・パブリック・ネットワークのカスタマーサービスのコウィンは通訳をしてくれなかったし、彼らが何について話しているのかもわからなかった。

歩いていると、突然体が地面から 30 センチほど離れて浮き上がり、高速で自動的に空中を移動します。歩行状態からクルージング状態に変わりました。

私たちはすぐに工場の中心部に着きました、スーデールが巨大な円筒を指差して言いました、「地球の長さからすると、円筒の直径は 10 キロメートルくらいだ」,直径は約 1 キロです。

スーデール言います:

「これは人工発射装置の中核部品である粒子ループ装置であり、その他の多くの装置は補助部品であり、もう一つの重要な装置は恒星エネルギー受信機であるが、はるかに小さく、恒星のエネルギーを受け取るためのものである。

リングの上に星の受信機を集めて、あとで見られるようにしましょう」

「それで、この人工衛星発射センターの基本原理は? 」と、

私はたずねた。

「空飛ぶ円盤の飛行原理とほぼ一致しています。それらは、周囲の空間と時間に影響を与える電磁場の変化によって生じる正と反重力の場によって成り立っています……」ノートンが説明してくれた。

ちょうどそのころ、人工衛星発射センターのスーデールとノートンが出迎えた。二人は部屋に入っていった。どうやら用事があるらしく、ノートンはマイクロリーに案内してもらうよう合図した。

「空飛ぶ円盤はどうしてこの人工場の発射センターと同じ原理なのか?」私の好奇心と疑問は今や微麗に尋ねるしかなかった。

「空飛ぶ円盤や作業場は、まわりの空間を食べて、空間に存在する物体の質量や電荷分布に影響を与えて、仕事をしているのよ」シェイラの声は魅力的だったが、よくわからなかった,まだよくわからない。

「空飛ぶ円盤や工場は、どうやって周囲の空間を食べているんですか? どうやって?」と私は尋ねた。

「変化する電磁場は正・反重力場を生み、反重力場は光

速で人工場の発射センターを離れて物体に照射され、物体の周囲の空間運動を消滅させ、物体の質量と電荷を同時に消滅させることができる。

物体は質量も電荷もなく、励起状態にあり、光の速度で運動し、多くの奇妙な性質が現れる…… これらは私の知っている知識だが、実は私もそれについてよく知らない」

私が腰をかがめて彼女と話している時、突然頭を突き出した私のあご、両手が私の首にかかって、柔らかい声で「あなたはまだ何か質問がありますか？」

「いったい、あのシーンはなんだったんですか」

「場というのは、円筒状の螺旋《らせん》状に運動して変化する空間のことです。ほかに質問はありませんか」

「もうない」わたしは心旗がひるむのを感じて、それ以上の質問はしなかった。

微麗は人の猫のようで、いつも私の体のまわりを回って、時には私の前に立ちはだかって、私を歩かせます。

彼女はグローバル・エクササイズ・ネットワークに、自分の身体を空中に浮かせて、私の身長と同じ高さで、一緒に歩いてほしいと頼むのも好きでした。

ときどきわたしの顔を彼女の太腿の付け根と同じ高さに保ち、それから鮎なまずのようにわたしの上半身をぐるぐるまわったり、わたしの首にまたがったりした。

わたしと彼女のドレスは仮想であり、実際には裸であり、彼女はわたしの体のまわりをぐるぐるとまわり、極度にすべすべした身体と、わたしの首にまたがり、下半身のふっくらとした肉の唇に、わたしはその刺激に耐えられなかった。

しかもそれがしばしば人前でのことだったので、私はそれが恥ずかしかったのですが、シェリーはまったく気にしていませんでしたし、ノートンたちもまったく気にしていませんでした。

そんなに近寄らないでとよく言ったのに、彼女は全然相手にしてくれなかった。

ところが、本当に親しくなりたい、セックスしたいと思ったら、急に飛びのいて相手にしてくれなくなることがあります。彼女たちの変わった性格を、私たち地球人は理解できないような気がする。

僕とビリーは手をつなぎ、地上 30 センチの高さを自動で滑空した。

ようやく、粒子リングの上にたどり着きました、恒星を集める受信機は、粒子リングとは違って、太陽光を集める受信機は、巨大な平らな板の上に、たくさんの円を描いています,それらの円は平板に描かれたものらしく、円の中央には黒い点があり、穴だったのか、あるいは何か別のものでできていたのか、遠くからではよく見えなかった。

近づいてみたいと思いました、ビリーは言いました、「これは近づいてはいけない場所で、人にとっては危険ですが、あなたも行けません」

「収束星の受信機が周囲の空間に影響を及ぼすということは、空間の中の星の光のエネルギーを収束させて受け入れるということなのでしょうか? 」と私は尋ねた。

「はい、あなたの地球上の 1 平方メートルのソーラーパネルは 1 平方メートルの太陽エネルギーしか受け入れることができません

「ああ、すごいな、でも、もし宇宙船が通りかかったら、恒星《こうせい》収束機《しゅうそくき》でやられるんじゃないかな」

「ええ、それはたしかにありうることです。われわれゴ

ーク人はこの問題に気づいていましたから、宇宙空間をグリッド化しました。恒星の受信機を収束して、宇宙空間に影響を与えるのはグリッド化したもので、連続したものではありません。宇宙船への影響は無視できます」

「グリッド化って、どういうこと?」

「そういうことです」と微麗は指で空中に横線を何本か引き、さらに縦線を何本か引いて、「元さん、あんなに頭が良かったんだから、わかるはずですよ」

「オー、わかった」実はまだわからなかった。

「恒星を集める受信機は、空中だけでなく、水平方向にも地上にも照射できるので、どこかの恒星のエネルギー、つまり太陽エネルギーを減らすことができ、コンピューターによる分析と組み合わせることで、ガク星の大気を人為的に調整し、適切な範囲の気温に保つことができます。

この惑星全体に大きなエアコンを取り付けることによって、私たちの惑星の天気を強力にコントロールし、有害な天気を避けることができるようなものです。

あなたたち地球上の暴風、台風、豪雨、雷などの災害天気の動力源は太陽光だ。

私たちは、星の光のエネルギーを吸収するときに、コンピュータを使って、その場所がどれだけのエネルギーを吸収すべきか、その場所がどれだけのエネルギーを吸収すべきかを分析します,どのくらいの恒星光エネルギーをその場所に受け入れるかという目的と計画を立てることで、有害な天候を発生源から回避することができます。

私たちの惑星ゴークでは天候不順は起こらないし、すべては私たちの手の届くところにあるし、あなたたちの地球は天候不順が続いているし、あなたたちは毎年このためにたくさんの人を死なせているんでしょう?」

「ええ、そうです、もし私たち地球人が太陽エネルギーを集めることができたら、どんなに素晴らしいことでしょう」

「ああ、センパイ、帰って作ってくださいよ、あなたたち地球のモノポリーになれますよ」

それから 4 人が同じ場所に集まり、人工発射センターを出ようとしたとき、突然、驚くべき現象が起こりました、人工発射センターの部屋の、ドアが開いたのです,宇宙空間とつながっているので、工場の中心にある空気が、宇宙空間に流

れ込んで、急速に枯渇してしまうのです、なぜこのような設計になっているのでしょう?私は聞かずにはいられませんでした。

スーデールは指さして、「自分でドアのところに行って、さわってごらんなさい」

ぼくはドアに駆け寄り、手で押した。目に見えない力がぼくを押しとどめた。オー、ただの仮想の壁だ。その仮想の壁には色がついていないので、ぼくは混乱してしまった。

私たちはテレポーテーションをして、美しい家に戻りました、そして私はまだ、工場の打ち上げセンターのことを、考えていましたが、まだ多くの疑問が残っていました,人工衛星の打ち上げセンターがどうして人や周囲の環境に影響を与えないのか・・・マイクロリー、ノートン、スーデールたちは質問に興味がなく、答えるのも面倒で、他の話題について話していたので、私はそれ以上話すことができなかった。

二十二、光の仮想人間

一度、ノートンやサーデイルやビリーといっしょに、体

重がないかのようにふらふらと歩いている奇妙なゴーク族を見たことがあるが、その姿や表情は普通のゴーク族とまったく変わらなかった,その人たちが、まるで壁が抵抗しないかのように、家の壁からまっすぐ入っていくのが、ふと見えました。

私はすぐに、グローバル・スポーツ・ネットワークが彼らを助けたのかもしれないと思ったが、グローバル・スポーツ・ネットワークは人間の運動の過程を非常に速くし、運動の過程は人間には見えない。こういう人たちは普通のゴク人とは違うという直感が私には不思議だった。

「ああ、この人たち、おかしいわね。どうやって家の中に入ったの? そんなことできるの? 」と不思議に思いました。

「この人たちはゴーカー星の光の仮想人間なのよ」シェリダは無視した。「ノートンのところでは、あなたもごらんになったでしょう」

「奥さん、建築はバーチャルでもいいし、人体もバーチャルでもいいじゃないですか。私が見ているバーチャルな建築は時々小刻みに震えているのに、この人たちの体はどうしてこんなに震えていないのでしょうか」

“建物の要件は、通常の建物の外観、人工イメージング技術は、いくつかのラフを行うことができ、バーチャル人間の外観人工イメージング技術は、ある程度まで繊細なときにはるかに繊細であり、あなたは震えを見ることができません。”

微麗が説明してくれたが、やはり理解できなかった。

「バーチャル・ヒューマンについては、あなたにはわからないことがたくさんあります」ノートンは私の混乱した表情を見て、もっと専門的な説明をした:

「私たちゴック人は人工的なスキャン技術を発明し、人の脳をスキャンして人の思考や意識を記録し、記録したものをコンピューターに保存した。われわれゴーカ星人の技術がある程度発展して、自分の体を作ることができるようになったら、記録された意識情報を人工的に作られた人間の体に取り付けて、その人間が若者の体を入れ替えることによって不老不死の目的を達成できるようにしようというのが、当時の考えだった。

しかし、コンピューターに記録された人間の意識情報は、そもそもコンピューターの中でじっとしているのではなく、

コンピューターやネットワークの中で動いている人間の意識の数字なのです,これが我々ゴク星人の最初の仮想人間です。

ゴーク星の仮想人間は、コンピュータとネットワークの中に存在しているだけで、実際の人間はそれを見るために、画像表示装置を必要としていました,仮想人間とコミュニケーションをとるのです。

しかもこれらの仮想人間の外見イメージは頻繁に変化しており、一人の人間の完全な概念を欠いている。

そのころは、ゴクシン人の意識の数字がウェブやコンピューターのなかで動いていて、われわれは大きなトラブルに巻きこまれていた。

人間の思想意識は人間の脳の中にあって、普通は修正できないが、コンピュータやネットワークの中にあると、他人や自分によって簡単に修正される。

この段階で、人間の意識の数字を頻繁に修正することは、大きな副作用をもたらします。

その後、「人間の原始的な根のコード」という概念を提唱し、場合によっては、人間の心の意識を最初に記録したときの情報に戻すことができます。

私たちが実際に生物を作ることができ、人間の体を作るとき、私たちはまだこの習慣を踏襲しており、「人間の原始的な根のコード」は私たちの重要なコンセプトになっています。
あなたたち地球上で意識を保持し、身体を入れ替える不老不死の技術が実現されれば、「人間の原始的なルートコード」は必然的にあなたたち地球人にとって重要で回避できない概念となる。

最初の頃は、私たちのバーチャル人間は、光で表現されることもありましたが、本当の意味でのバーチャル人間ではありませんでした。

その後、3d バーチャルイメージング技術と工場スキャン技術の発展により、仮想人間をネットワークやディスプレイから外に出すことができるようになりました。

光のイメージからなる三次元の仮想人間が通りに出て、それから現実世界のどこにでも広がっていった。

ここに見える光の仮想人間は、人工的なスキャン技術によって、遠隔地の光と色をロックし、立体イメージング技術によって作り出されたものです。

人工的なスキャンでロックされていない場合は、光が遠

くから来て、オブジェクトに対してブロックされ、処理するのは難しいです。

夜に見えるバーチャル人間は、一般的に暗いです、夜間は光の量が少ないので、昼間に見えるバーチャル人間は、明るく、はっきりしています、昼間は光がたっぷりあるからです。

ただし、夜間は人為的にロックされた光を強めて、バーチャルな人間をひときわ明るく見せることができる場合もあります。

このバーチャル人間は、世界規模のキャンペーンネットワークや、世界規模の情報ネットワークによって、サービスを提供しています、これには膨大なデジタルトラフィックが必要です。

仮想人間は本質的に大きな数字の集合の産物であり、強力な対情報保存・計算能力を持たない人工スキャンコンピュータでは実現できない,人工的にスキャンした計算能力は、皆さんの地球のコンピュータの、何億倍もあります。

仮想人間の身体は光だけでできていて、実際の身体はありませんが、仮想人間は実際の人間と同じように自意識を持

っており、その本質は情報であり、コンピュータにデジタル的に保存されています,そしてコンピュータの中で動いています。

バーチャルな人間同士がコミュニケーションをとったり、愛情を確立したり、情報泥道具人間を使ってセックスをしたり、普通の肉体人間とコミュニケーションをとったり、セックスをしたり、,愛情や恋愛関係を築くこともできる。

現実の人間が持っている思想、感情活動は、仮想の人間がすべて持っている。

しかし、バーチャル人間が現実世界に対して感じる感情は、普通の人間とは大きく異なる。

たとえば、バーチャル・ヒューマンは、あなたたち地球人のように水を飲んだり、食べたり、排泄したりする必要はなく、空腹感や満腹感、喉の渇きを感じることもない。仮想人間は自分の体の重さを感じることができず、仮想人間の体はもともと肉体を持っていないため、病気になることはない。

しかし、仮想人間には精神的な病気や苦しみがある。バーチャル人間にも幸福感と快感があり、バーチャル人間にも男女と中性人があり、異性愛者と同性愛者がいる。

そして、物理世界における空間、時間、力、熱、光、音・・・に対するバーチャルな人間の認識や認識は、私たち普通の人間とは大きく異なります。

バーチャルな人間は、肉体的な人間よりはるかに簡単に、気まぐれに、ある場所から別の場所へと移動する。いかなる物体も彼らを阻むことはできず、彼らには物体が阻むという概念はなく、彼らは入りたければ入り、出たければ出てくる。

仮想人間には空間的距離のバリアがなく、二次元の世界に住んでいると言えるが、それは実体のない情報の集合体にすぎない。

仮想人間の時間に対する感覚は、私たち肉体的な人間とは大きく異なる。

仮想人間には昼夜の概念がほとんどなく、眠ることによって休息する必要もない。仮想人間は暑さも寒さも感じない。火山や氷山は、どんなに険しい環境でも自由に出入りできる。

ゴーク星のバーチャル・ヒューマンは、特に人工的にスキャンされたバーチャル・イメージング技術の発展によって、徐々に発展してきました,コンピュータ・ネットワーク上に存在する純粋な仮想人間を、仮想イメージング技術によって、

ゴーク星のどこにでも、光の仮想人間として表現することができるのです」

「なんとなくわかったんだけど、人工的な作業場が通りのあちこちに明かりをとりつけて、人間の外見を映し出しているんだ。実際にはここにはいない。コンピューターのなかに数字として存在しているんだ」。

ノートンも説明した,

「そのとおりだが、それほど単純ではない。この工場イメージング技術はグローバル・キャンペーン・ネットワークによって開発されたもので、そのプロセスにはグローバル・パブリック・インフォメーション・ネットワークの gps (全地球測位システム)が関与しており、この場所のさまざまな情報をバーチャル・ヒューマンにいつでもキャプチャーできる。そこから得られる情報量は、普通の。そしてこのバーチャル人間に関するさまざまな情報を、このバーチャル人間に集約することができる。

バーチャルな人間が、物体を運ぶこともできます、物体を運ぶ信号を、グローバル・スポーツ・ネットワークに送り、グローバル・スポーツ・ネットワークの、運搬機能を利用し

ています。

バーチャルな人とバーチャルな人と、リアルな人とのセックスができるというのは、どのように実現しているのでしょうか?

一つの方法は、カットオフ技術を利用して、性愛活動のデジタル信号を直接人の脳に送り、この技術を利用して人の感覚、記憶およびその他の意識情報と仮想人の意識をリンクさせ、相互作用させることである。

もう一つの方法は、バーチャル人間が情報泥道具人間、例えば遠隔操作、一つの道具人間をコントロールすることによってセックスをすることができる。

あるいは二つの情報泥からなる人体を信号デジタルで活性化し、情報泥人体のすべての活動信号を人工場スキャンと光線仮想人間を利用して結びつける」

「われわれゴック星人のほとんどはダミー人間だ」スーデイルの言葉に、わたしはいささか驚いた。

「私はバーチャル人間は現実の敗者だと思う、現実の世界は退屈している、適応していない、すべてはバーチャル世界に隠れている」と微麗は言った,

「実は、私たち果克星のすべての人はすべて実際の身体を持って、またネットワークの中に存在して仮想身分、あなたの好みによって、あなたは仮想人の身分で現れたい、あなたは仮想人、あなたは本当の肉体の身体で現れたい、あなたは普通の人」微麗の言葉は更に私を驚かせた。

「ゴーク星では、誰もが仮想人間と現実の人間の両方のアイデンティティを持っていますが、特別な場合でも、人はいくつかの身体といくつかの仮想人間のアイデンティティを持っています。あなたの身体は人間の身体に限定されず、あなたは宇宙船であり、魚であり、城であることができますーーもちろん、これらの魚、城、宇宙船は高度に知能化され、人間の意識情報を受け取り、人間とコミュニケーションをとることができますーー要するに、これらのものは生きているのであって、死んでいるのではありません」

ノートンは言った,

「一般的には、長い間、現実の肉体で現れることを望まなかった人々を仮想人間と呼んでいます」

その後、私はマイクロリーの家に戻りましたが、私は彼女にバーチャル・ヒューマンについて、いつまでも質問し続

けていました、とても興味があったからです。

今日、ビリーは辛抱強く、バーチャル・ヒューマンについて、詳しく説明してくれました。

最後に、彼女は空中で手を動かし、煙が私の周りに立ち上がり、煙の上に多くの画像が現れ、微麗はバーチャルイメージを使って私に教師をしました。

「すべてのバーチャル・ヒューマンは予備の身体を持っていて、そのバーチャル・ヒューマンが本物の肉体に戻ろうとすると、予備の身体を取り出して、そのバーチャル・ヒューマンの意識情報をその身体に取り付けるのですか。

「ああ、そうです。そうなんです」。

「その予備のボディはどこにあるの?」

「ごらんなさい」マイクロリーが仮想スクリーンを指さすと、半透明のタンクのような容器がいくつもあって、そこには休眠中の裸の人間が液体で満たされていた。

私はいくつかの女性の美しい体を見て、心の中で感激して、顔は不自然に露出して、ほんの少しの美しさが分かったようで、顔には奇妙な表情が現れました。

「仮想人間には予備のボディが必要なのか?」

「そんなに必要なくて、毎日本当の体を取り戻してほしいと言ってくるバーチャル人間は、実は少ないんです」と微麗は答えた。

「ダミー人間としても肉体人間としても出てきますが、これでいいですか」

「それは二つの『私』の存在を生み出し、あなたに精神的苦痛と思考の混乱をもたらし、誰もこのトラブルを探そうとしない」と微麗は答えた。

その後、彼女は私の終わりのない質問にうんざりして、私の質問に答えることを拒否し、私にゲームプログラムを与え、私はバーチャル人間の気持ちを体験することができますと言いました。

バーチャルコンピューターを操作して、ベッドに寝かせてくれました。

すぐに、私は自分が奇妙な世界に来たように感じて、周りの景色はすべて人が描いたようで、空にはたくさんの果克星の文字が漂っています。

道を歩いていると、声が聞こえました、「どこに行くの? パートナーは必要? 選んでください」

私は5人の美しい女性を見て、興奮して私に手を振って、すべてとてもきれいで、もし地球上で、これらの美しい女性は私は直視する勇気がなくて、1つはあまりにもきれいで、1つは私は劣等感を持っています,私は長い間社会の最下層にいたので、美人たちが私たちのような田舎の貧しい少年たちを軽蔑しているという事実を無意識のうちに黙認していた。

今なんと私に選択をくれることができて、私はとても楽しくて、1つを選んで、えっ、どのように近づいて注意深く見える微麗ですか?私はこういうタイプの美人が好み?変えたいけど残り4つはガッカリしてなくなってしまった。

その後、私はいくつかのペットを選び、それらのペットは常に私の頭の上に、私の周りに浮かんで、私と一緒に旅行しました。

絶えずボイスオーバーが私に選択を促しましたが、私は経験がなく、時には間違った選択をしていましたが、元の場所に戻って、やり直す必要がありました。

幸いなことに、私たちは旅に出ることができました。やっぱり多くの不思議な感じを体現して、一気に山に飛び上がることができて、ゆっくりと壁を通り抜けることができて、

空中に浮かぶことができて、速く空中に舞い上がることができて,自分の体が柔らかい絹のように、ゆらゆらと揺れているのを感じることができます。思いついたところにたどり着くこともできる。

それから、どんな美しい景色も美人にはかなわないと思って、あちこち美人を探し回って、ふと自分についてきてくれた美人のことを思い出して、ゆっくりと近づいて、抱きしめて、やっぱり快感があって、私たちが抱きしめた時。

突然、私は眠りから覚めたように、私の目の前に立って、私を見ているメリーを見ました。

その後、私はさまざまな機会にこのバーチャルヒューマンゲームを何度もプレイし、バーチャルヒューマンの様々な素晴らしい感覚を体験しました。

彼らはまず、私を無重力状態に、フィールドスキャンしました、無重力状態をシミュレーションするために、地球で宇宙飛行士を訓練しました、無重力状態をシミュレーションするために、水中で行いました。

なぜ無重力状態にするのでしょう?なぜなら、コンピュータやネットワーク上で生活している仮想人間のほとんどは、

意図的に重力の感覚を設定しない限り、重力の感覚を持たないからです。

人間の重力感覚を排除することは、コンピュータ・ネットワーク上の仮想人間の感覚に近づけるだけでなく、人間の自意識の現実認識を抑制することにもなる。

彼らはまず現実世界との情報のつながりを断ち切り、現実世界の重力、時間、空間、色彩、温度、音、匂いなどを感じさせないようにした。

人は完全に周囲の環境、現実の世界を感じることができない場合、また、現実の世界を忘れて、あなたはより良い、完全にコンピュータとネットワークの二次元仮想世界を体験することができます,本当にバーチャルな世界に、生きているような気分になります。

あなたが仮想人間になり、ゴーク星人のコンピュータやネットワークの中で生活している仮想人間になると、まず肉体人間と同じように覚醒していて、皆が思っているような昏睡《こんすい》状態や半夢半覚醒《はんむはんせい》状態ではない。

バーチャルな人間になると、まず天地の色と現実の世界

が異なり、ぼんやりとしていて、しかも色が変わりやすいと感じる。

天と地の区別はあまりはっきりしておらず、時には大地が頭上にあり、宇宙空間が足元にあるように感じることもある。

頭上は大地であり、足元は大地であり、宇宙空間は二つの大地の間に存在するような狭い一線にすぎないと感じることがある。

ほとんどの場合、決まった場所があるとは感じられず、周りの景色が常に変化していることを含め、すべての景色が変化しています。

多くの場所では、基本的な色調があります、例えば、ある場所に行くと、すべての風景が、赤みを帯びているように感じます、すべてが赤みを帯びていて、別の場所に行くと、すべてが紫色になります,場所によっては、みんな青みがかっています。

仮想人間は同時に異なる場所に現れ、異なる角度から自分の体を見ることができる。

バーチャル人間の時間観は肉体人間と違って、時間の流

れを感じにくく、物事の前後に慣れることができず、時間が巻き戻るのも当たり前のことのように感じ、少し前に起こったことが今では繰り返されている。

上下、東西南北の区別がつかず、今までの環境に慣れることができず、慣れ親しんだシーンがほとんど存在せず、時空の錯乱が目立つ。

人物も風景も、三次元空間に適当に分布しているように感じられ、あるものは上を向き、あるものは下を向き、あるものは斜めに傾いている。

海の底や空には、たくさんの人や風景が浮かんでいる。私たちの現実世界と違って、地上に集中的に分布しています。

人物や風景の大きさも、勝手に変化する。静止しているはずの風景が、動き出し、動いているはずの風景が、しばらくしてまた静止する。

たくさんの動きが、ふわりと浮かんできて、遠くに見えていた人が、ふわりと目の前にやってくる。

あなたは長い道のりを歩き、最終的には出発点に戻っていることを発見しました。

周りの人や環境を見分けることよりも、心で考えるほう

が正確です。

バーチャル人間は自分の体の重さを感じることができず、常に自分の体がとても軽いと感じ、まるで綿のようで、飛びたいと思えば飛ぶことができるという感覚があり、自由に空間のどの位置にも立つことができる。

バーチャルヒューマンは、オブジェクトとの衝突が自分自身を傷つけることを恐れず、攻撃や殺害を恐れないので、大胆です。

最初は、誰かがナイフで切りつけてくると、確かに恐怖を感じるし、ナイフが体を切り裂いても、苦痛はなく、快感さえ覚える。

だんだん大胆になってきて、現実の世界ではどんなに危険なことに見えても、恐怖を感じなくなってきます。ただ、奇妙な生き物や場面に対してだけ、まだ恐怖を感じるようになる。

バーチャル・ヒューマンとして、思いつくままにどこへでも行くことができ、高速で空中に舞い上がることができ、自分の体が柔らかいふわふわのように漂っているのを感じることができ、多くの糸のように分裂することもできます,たくさん

のちりなどに発散する。

バーチャル・ヒューマンは、暑さや寒さを感じません、火山や氷山は、どんなに厳しい環境でも、自由に出入りできます、崖から飛び降りることも、火山に飛び込むこともできます,壁を通り抜けることもできますし、地球の内部を旅することもできます。

バーチャルな人間同士が抱き合うことで、お互いの体の中に簡単に溶け込むことができます。

仮想人間は自分の体に極度の自由を感じている。自分や他人の体が、勝手に変形して、かけらや流体、霧などになってしまうことがあります。身体は固体のように見えたり、急速に液体になったり、急速に気体になったりすることができ、身体の固体、液体、気体が自由に切り替わるように感じることができます。

仮想人間がゲームをプレイし、いつでもゲームに参加することができ、ゲーム内のキャラクターになることができます。

仮想人間は昼夜の制約を受けず、昼夜の概念がほとんどなく、睡眠によって休息する必要がない。

空間的な距離もなく、物体によって妨げられることもなく、障害物もなく、いかなる物体も彼らを阻むことはできず、彼らは入りたければ入り、出たければ出てくる。バーチャルな人間は、ある場所から別の場所へと移動します、それはとても簡単で、カジュアルです。

どんなに遠くても、行きたければすぐに行ける。

バーチャル人間にも幸福感や快感があり、異性愛者や同性愛者がいます。

彼らの仮想人間も男女、中性人に分かれ、互いに交流し、感情を交わし、恋愛関係を結ぶこともできるし、普通の肉体人間と交流し、感情や恋愛関係を結ぶこともできるーー」,メッセージング・セットを通じて肉体と特殊な性的関係を結ぶこともできる。

バーチャルな人にも幸福感や快感はありますが、精神的な苦痛もあります。

仮想人間は自殺できないし、別の仮想人間を殺すこともできない。普通の人が仮想人間を殺したい、あなたは仮想人間のイメージボディを攻撃しても無駄です、あなたは仮想人間の存在のネットワークとコンピュータを見つけることがで

き、数字を台無しにして、彼を殺すことができます【彼女】。

彼らのライトバーチャルは、通常、空気に触れているように感じますが、ライトバーチャルは、グローバルな動きのネットワークを使って、自分の外側に力場を作り、実際の物体に触れるようにすることができます,そして、違った感触を与えることができます。

二十三、ゴク星人の時空冷蔵庫

ある時、微麗の家で食べ物を食べていて、食べ物が少し残っていました。私は「私たちの地球上では冷蔵庫に保存することができますが、私たち農村の人々は貧しく、冷蔵庫はありません。

ちょっとリリー、あなたたちゴック星に冷蔵庫があるのを見たことがないような気がする。テレポーテーションがあって、冷蔵庫も冷蔵庫も必要ないでしょ?」

「私たちも冷蔵庫を持っていますが、一般的には巨大で、食べ物を置くことはめったにありません

テレポーテーション技術が、あまりにも発達しているの

で、皆さんは巨大な冷蔵庫を作っています、公共の倉庫のようなもので、必要なものを保管しています、グローバル・エクササイズ・ネットワークの、テレポーテーション技術を使えば、家に置くのと同じくらい簡単に手に入ります。電力とスペースを節約できますよね?」

「まあ、そうとばかりは言えないけど」とビリーは言った,

「われわれゴック星人の身体に必要な栄養は、一般にテレポート技術によってコンピュータープログラムの制御下にあり、直接われわれの身体に入ってくるものであり、ふだんは食物を必要とせず、冷蔵庫を必要としないものであり、われわれの冷蔵庫は主に工業生産と科学研究に用いられている」

微麗はそう言いながら手で空を切ると、全球運動網と全球情報網の遠隔の微麗のすぐそばに立体的なバーチャルイメージが作り出された。

微麗はグローバル情報ネットを開き、情報ネット上には多くの果克星球の巨大な冷蔵庫が現れ、外観は家屋、ビルのようで、上に果克星球の文字が表示されている。

微粒子レイは続けて説明してくれた:

「私たちの冷蔵庫は地球のように低温で凍らせるのではなく、時間を凝固させる方法です。私たちのやり方は、人工的に時空冷蔵庫の内部空間に照射して、この空間の中の時間を異ならせることであり、時間は凝固されているようであり、食品はここに置かれて 1 分が経過し、外の時間は数年、あるいは数千年、数万年が経過しているかもしれない。冷蔵庫は時空冷蔵庫と呼ばれています。

たとえば、時空の冷蔵庫に、地球の食べ物のアイスクリームを入れて、その冷蔵庫のドアを閉めると、冷蔵庫の中の温度は外と同じですが、私たちは 1 年間、外で過ごしています,時空の冷蔵庫の中は一秒たりとも過ぎていないので、アイスクリームを時空の冷蔵庫に入れて、一年たってから取り出しても、入れた時とほとんど変わらないのです」

「ああ、ああ、あなたがたの時空冷蔵庫はすばらしいものでしたね。わたしはびっくりしました。こんなものだとは思いませんでした。もしわたしがはいっていって、しばらくそこにいて、出てきたとしたら、外に出てから何千年、いや、何万年もたっているかもしれませんね。そうでしょう?」

「そうだ、地球の冷蔵庫は、おまえの前の兄貴がもぐりこんだら、凍死するかもしれない。おれたちの時空冷蔵庫がおまえたちの地球にあったら、おまえの前の兄貴がもぐりこんだら、凍死することはないだろうが、おまえが出てきたら、おまえの家族も近所の人たちも、みんないなくなってしまう。何千年もたってから、おまえの前の兄貴はたちまち人工物になってしまう。

「じゃあ、逆《ぎゃく》じゃないの? あたし、時空冷蔵庫《タイム・スペース・クーラー》に一年いて、外に出たのはほんの数時間よ」

「これは完全に可能です、我々の時空冷蔵庫にはギアのサイズを調整するものがあり、時空変換スイッチもあります。ギアを調整するのはどういう役割なんだ?ギアをローギアにすることです、冷蔵庫に入って 1 分間過ごします、外では 1 年かかりますが、高級です、冷蔵庫に入って 1 分間過ごします、外では数千年かかります。

時空間変換スイッチを押して、負のスイッチを選択すると、時空冷蔵庫は、内側の時間の流れが速く、外側の時間の流れが遅くなります

「じゃあ、時空の冷蔵庫で時間を巻き戻すことはできるの? 」私は好奇心から、「古代に戻りたいんだけど、できないの? 」と聞いてみた

「それはできない! 」ビリーはきっぱりと言った:

「時間の経過の速さは、2 つの異なる場所を比較することによって、ある場所の時間は別の場所の時間の経過よりも速いと言います?自分より身長が高いというのはどういうことですか?自分の身体が自分の身体よりも高いというのも納得できますよね。時間を巻き戻《もど》すことはできないし、時空冷蔵庫だって時間を巻き戻すことはできない」

微粒子麗《びりゅうれい》の言葉に何となく納得《なっとく》したような気がした。

「その時間というのは、いったい何なんですか」

「時間とは、周囲の空間が光の速度で周囲に広がっていく運動について、われわれ人間が感じるものにすぎず、人間がいなければ時間もない。詳しく知りたいなら、スーデイルたちに訊《き》いてくれ」わかったようなわからないようなわからないような微麗《びれい》な答えが返ってきた。

マイクロリーは、ゴーク生物学研究所にある巨大な時空

冷蔵庫を見に行こうと提案し、私が同意すると、マイクロリーは、グローバルインフォメーション・ネットワークで、生物学研究所の責任者に連絡を取りました,地球人が研究所に来ていると伝えました。

「ノートンは私たちのゴーカー星の有名な生物学者だから、一緒に来てもらえないかしら」とシェリーは私に相談した。

「わかりました」と私は喜んで同意した。

グローバル・キャンペーン・ネットワークに呼びかけると、私たちは巨大な家の前にテレポートし、ノートンがドアの前に立って、バイオ研究所の仮想デジタルイメージキャラクターが私たちを待っているのを見ました。

この仮想人間は上半身が人間で、下半身が虫のようで、下半身に緑と黄色の輪模様がある。

私たち 3 人はこの生物学研究所に行きました、中の人たちはノートンをとても尊敬していました、そして彼らはノートンのリーダーであると、私に貼り付けました。

担当者が出迎えてくれた。男性のようだった。身長は一メートルほどで、ノートンとほぼ同じくらいの長さだった。

特徴的なのは、髪の毛が細い黒い筒のようなもので、長く伸びていることだけだった,後ろの肩にかけている。

微麗は彼の名前を「文太」「発音」と言い、彼の髪と女性のセックスの時、多くの特殊な用途があり、女性に快楽刺激をもたらし、どのように女性に快楽をもたらすかについて、微麗は言いません,と心の中で想像するしかなかった。

文太さんは私たちを彼らの生物研究所に案内してくれて、文太さんは何度も何度も言って、私に紹介しようと努力してくれました,実際、私は生物研究所の中にある奇妙な設備については、ただ見ているだけで、徹底的に知りたいとは思っていなかった。

あとで見ると、ガラスのような容器がきちんと並んでいて、その中に黄色っぽい透明な液体がいっぱい詰まっていて、その液体の中には大小さまざまな裸の人体がいろいろな形で入っていました,巨大なものもあれば、高さ四、五メートルのものもあり、小さなものもあり、高さは数十センチほどしかなかった。

地球人のような人もいます、地球人のような女性の体は、とても豊満で巨大で、巨大な乳房、バケツの太い太もも、高

さ2メートルの姿は、とてもセクシーで、魅力的です,背中の肛門には管がついています。これらの人体は中で眠っているか眠っているかのような不明瞭な様子で、すべてチューブが体の中につながっています。

私の表情がおかしくなったのを見て、ビリーは私の体を手のひらで叩いた。「クソッ!」という言葉が口から出た。どういう意味だ?情報網のカスタマーサービスのウィンが通訳してくれなかったので、たぶんゴーク星人の悪口だろうと思った。

と、文太が紹介してくれた,「これらの人体はすべてゴーク族の予備の身体であり、たとえば、ある種のゴーク族は地球に行って任務を遂行するため、人目をごまかすために、ときには地球人と同じくらいの身体を選択することがあるが、これらの容器の中の人体はいずれも自律意識を持っていない。

私たちはフィールドスキャン技術によって、ゴーカイトの意識をスキャンし、このコンテナの中の似たような地球人の身体に取り付け、そのゴーカイトの身体をコンテナに入れて保存する。

これで、一人のゴーク族が、あなたがた地球人の身体を

あなたがたの地球への視察につれていくことができるのです。視察から帰ってきたら、地球人に似た体を容器に入れて、その容器に意識情報を入れているゴークマンの頭の中に、,このゴーク人はまた正常な身体、正常な精神意識をもってゴーク星にもどってきて生活しているのです」

「じゃあ、この人たちの後ろにチューブがあるのはどういうことなんでしょう?」私はこれに興味を持ちました。

「これは一種の循環装置で、これらの人体に栄養を供給し、ある排泄物を持ち去るだけでなく、他の物質の循環も必要とする。実際、この栄養の供給と排泄物の持ち去りは、この循環システムだけでなく、グローバル・キャンペーン・ネットワークによって行われています。

これらの容器は巨大な時空冷蔵庫で、われわれが一年間外で過ごしたとしても、中にいた人間は数秒間しか時間が経っていないかもしれない」とノートンは言った。

「なぜわたしたちは千年ものあいだ、ほんの数秒しか時間を過ごさなかったのでしょう? そうすれば、人間は栄養を必要としなかったかもしれないじゃないですか」わたしはさらにたずねた。

「なぜなら、冷蔵庫の内部と外部の時間差が大きければ大きいほど、超高エネルギー場を維持するために必要なエネルギー量が増え、装置が大きくなり、システムが不安定になるからです」とノートンは説明してくれた。

それから、もっと大きな時空冷蔵庫が見えました、透明ではなく、三次元のバーチャルスクリーンです、そして、そのバーチャルスクリーンを通して、内部を見ることができます。

私はただ画面が人の生活の情景のように見えるだけで、ただ急速に変化しているだけで、その理由は見えない。

文太は、,「この時空冷蔵庫には、私たちよりも早く時間が流れています、ここに映っている映像は、すべて処理されています、実際には、ここにいる人々は、より早く生きています、超高エネルギーフィールドに住んでいます、10,000 年も生きています、私たちは数時間しか生きていないかもしれません」

「その目的は何ですか? 」、私は興味を持って尋ねました。

「主に生物の自然な進化の過程、例えば一万年かけて進化したウイルスがどのように見えるかを観察することです。

一部の人は 1 万年の進化を経て、体の構造がより合理的になり、人体を作るための参考になるかもしれない。

私たちはしばしばあなた方の地球や他の惑星に足を運び、あなた方の地球上の人体や他の惑星の人体の構造情報を調べています。私たちの人体は自分たちで作られているのですから、ご存知でしょう。

それに、コンピューターは時空冷蔵庫にもよく使われていて、本来なら一万年かかる計算結果を、コンピューターを時空冷蔵庫に入れて、数分待つだけなんです」

ノートンは答えた,

「ある種のウイルスやバクテリアや、その他の生物を、こうした時空の冷蔵庫に入れて、その生活や進化の過程を観察することは、われわれゴク星の生物の研究にとって、きわめて大きな役割を果たすことになる」

「ここにある人体保存容器は少ないし、数も少ないし、わがゴク星の人体複製工場には、ここの何万倍もの人体保存容器がたくさんある」文太がいった。

「ここは主に実験用なんだけど、前の兄さん、これからゴークの人体複製工場を見学させてあげる。あそこはとても

大きいから、目を見張ることができるよ」シェリルは私の手を取った。偉そうに、,

「帰りましょうか。ほんとうに見ものがないんですよ。薬のびんに人間がいくつか入っているだけですから」

二十四、ゴーク星の人体複製工場見学

ある日、微麗は言った,

「前の兄貴、このあいだ、われわれのゴーク星の人体複製工場を見せてやろうと言ったら、ノートンがグローバル・インフォメーション・ネットワークを通じてメッセージを送ってきて、ゴーク星の人体複製工場に用事があるから連れていってほしいと言ったんだ。いっしょに人体複製工場を見せてもらおうじゃないか」

「はあ、承知いたしました」

マイクロリーはすぐに耳を手で押さえ、脳とグローバル・インフォメーション・ネットワークのリンクを通じてノートンたちにメッセージを送り、すぐにノートンとスーデルはグローバル・キャンペーン・ネットワークを通じてマイクロ

リーの家の仮想ソファに現れた。

「これからゴーク星の人体複製工場に行くんだが、前の兄貴も一緒に行ってくれないか」とノートンが私に言った。

「いいですよ、今すぐですか?」と私は尋ねた。

「しばらく待たなければなりません。人体複製工場の責任者のひとりが『カプン』と呼んでいます。彼はまだ到着していません。彼が人体複製工場に到着して、われわれにメッセージを送ってきたら、また行きましょう」とノートンは答えた。

「人体複製工場は何を作るのですか? マネキンを複製するのですか? どんな材料で人体を複製するのですか? プラスチックで複製するのですか?」と私は好奇心から尋ねた。

「ホーホー! きみはどう思ってるんだい?」シュデールは笑いました。「ゴーク星人体複製工場は、われわれにとって世界でもっとも大きな、もっとも重要な工場なんだ。生きた人間の体を複製するための工場なんだ」

「おまえたち地球人は、不老不死になりたければ不老不死の薬を飲もうとするが、宇宙にはそんな薬はない。私たちゴック人の体は老いて、もうだめなので、若い人の体に変え

て、人の思想意識を保ちます。そうすれば、わたしたちゴーク人は不老不死になり、いつまでも若くいられるでしょう!」と、シュリは得意げに言った。

「じゃあ、あなたが別の体になっても、この人はあなたなんですか?」私はあてにならない言葉でノートンのほうを向いた。

「そうに決まっています! 人間の違いは主に心の意識であり、身体は二次的なものです。

我々ゴーク星人は、人間を二つの部分から成り立っていると考えており、一つは人間の意識であり、もう一つは人間の身体である。人間の心の意識は、人間の脳の中の荷電粒子の運動形式であり、本質的には情報に属する。

人間の体は、地球上のコンピュータのハードウェアのようなものです、ディスプレイ、ホストコンピュータ、キーボード、マウス、テープレコーダー、コンピュータのソフトウェア、プログラムのような意識,テープに録音されているようなものです。

ある人が年老いたり、重い病気にかかったりしたとき、私たちは人工的にその人の脳をスキャンし、その人の意識のメッ

セージをコピーし、数字で表し、それをコンピュータに保存します。

自律意識のない人間を人工的に作り出し、コンピューターに保存されている人間の意識のデジタルを、その人工的に作り出された人間の脳にインストールする。

最後に、この老人の元の身体を無害化処理して、このように人の老人の身体は若者の身体になって、思想意識は、完全に保存されます。人は眠って目覚めると、自分の本来の老人の身体が若者の身体に変わっているのに気づくように、そして、すべての記憶がそこにある。

この人工的につくられた人間の身体が年をとったら、もう一度やりなおす。これを繰り返すことで、人間は永遠に不老不死になります。われわれゴック星の人体複製工場がそれをやっているのです」

「お兄ちゃん、分かった?」と微麗が聞いた。

「オー、私は理解している、この真実は、一般的には、我々は新しいものと交換し、修理しないでください、深刻な、私たちの地球の修理自転車のチューブのようなものです。あなたがたは老いたり、重い病気にかかったりして、いっその

こと治らず、新しい体に生まれ変わってしまったけれど、もともとの意識は残っている、ということですか」

「ああ、そうなんです」と微麗が答えた。

この時、ノートンは耳を押さえていました、世界中の情報ネットワークから、こんなメッセージを受け取ったのかもしれません、「カボンが人体複製工場に来た、行こう」

グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、ビリー、スーデール、ノートン、そして私は一瞬のうちにゴークの人体複製工場に到着した。

人体複製工場のバーチャル・デジタル・イメージ・キャラクターは、ゴーク星でよく見られる男のイメージだが、身体はふたつに分かれているが、そのふたつの身体の動きはすべて同期し、協調している。

人体複製工場はとてつもなく大きくて巨大で、見渡す限り果てしなく広がり、門の上には巨大な仮想文字が並んでいる。

「ああ、立派だなあ」わたしは感嘆した。

「人体複製工場にはたくさんの門がありますが、これはそのひとつにすぎません」スーデイルは反論した。

ゲートはただの通路で、中に入るとまだ巨大な家がたくさんあり、バーチャルハウスもあります。地上 2 メートルくらいの高さで音もなくドリフトするオープンカーに乗りました。

人体複製工場はとてもきれいで、変わった植物がいっぱいで、色とりどりの花が咲いていました。たくさんの 3d 仮想画像があり、それぞれの家の前には、仮想のゴーグル文字があります。

ある家の前でノートンが車を降り、ガボンと会ってから、私たちは見学を続けた。

いろんなところを回って、「ああ、人体複製工場って大きい! 」と感心しました。

「ごらんのとおり、一パーセントにも満たない」スーデイルは反論した。

「人体複製工場には地下部分もあります」と微麗が言った。

私たちは長いあいだ外を歩きまわり、とてつもなく大きな家のなかに入った。そこには人が行ったり来たりしていたが、人はあまりいなかった。スーデールがノートンがその中

にいると言ったので、私たちはフローティング・カーを降りて中に入ると、案の定ノートンとガボンがいた。

加朋も身長は一メートルほどで、がっしりした体格に見えた。加朋は親しみやすく、私の手を引っ張って離さず、,

「ようこそ、地球からのお兄ちゃん。ええと、お兄ちゃんは大きいね。力持ちに見えるよ。体重を見せてあげる」

と、ガボンが私の後ろから抱き上げて、「はい、体が重いんです」

ガボンは私を見て、また微麗を見て言った、「前のお兄さんはあんなに大きかったのに、あなたたちはセックスの時、どのように耐えましたか? あなたたちが抱き合った時、どちらが強くて、体が強いですか? どちらがより耐久性がありますか? 」

言葉の意味がわからないのではないかと心配になったガポンは、左手で輪を作り、右手の指でぐいぐいと突っ込んだり引っ張ったりを繰り返しながら、その下品な動きで僕とビリーのセックスを表現した。

「そんなことないよ」ガボンがセックスの仕草を下品に表現したので、シロウズは少し腹を立てたのか、握り合った

両手をぐっと開き、ｖ字形になって空中に振り上げた。

「そんなことないですって? まさか」ガボンは後ずさりして、ノートンとマイクロリーとスーデールと私を妙な目つきで見た,

「あんなに遠くの地球から元兄貴を連れてきたのは、地球人とわれわれゴーカイ人のセックス活動を研究し、観測によってわれわれの役に立つ数字を得るためだったんだ。ノートン、そうじゃなかったのか?」

ノートンが返事をしないので、シェリーは顔をそむけ、誇らしげな王女のように頭をもたげて、体を揺すりながら歩きはじめた。ノートンとスーデールと私もシェリフのあとに続いた。

ガボンがほのめかしている?ノートンは私をどんな特別な実験に利用しようとしているのか?わたしをモルモット扱いするな、とわたしは思った。

加朋は私たちを無視して、後ろからついてきた。「前の兄に人体複製工場を紹介します」

ガボンは人体複製工場の様々な設備や機能を、熱心に説明してくれました。ボディランゲージが豊富で、身振り手振

りを交えながら話していました。

私はあまり聞く気になれず、前に見学したゴーク生物研究所の中の黄色い液体が泡立っている巨大な、むき出しの、魅惑的な女の体をもう一度見たいという気持になった。

ようやく人体複製工場の地下部分で、淡黄色の液体に浸かった人間の裸体が見られるようになりました。ずらりと並んだ容器のひとつひとつに、人体が浸かっている。数は多かったが、どの人間も身長、体型はほぼ同じで、いずれも一メートル前後で、ゴーク生物研究所のような千変万化の人間の身体ではなかった。

「これらは、われわれのゴーク星の予備の人体で、誰かが身体を入れ替えなければならなくなったら、ここから人体を呼び出すんだ」と、ガボンが言った,

「ごらんのように、予備の人体に栄養を与え、排泄物を持ち去るためのチューブが外側につながっています」

「あなたがたのように、グローバル・キャンペーン・ネットワークのテレポーテーション技術を使って、これらの予備の人体に栄養を供給してみませんか?」

「栄養と排泄物のほとんどは、生命を維持するための循

環システムを設計する循環システムの一部であるチューブを提供するグローバルな運動ネットワークのテレポーテーション技術によって行われます。栄養を供給し、排泄物を持ち去ることは、グローバルな運動ネットワークに完全に依存することはできません。

植物のようなバックアップボディや、白い紙のような意識に、影響を与える可能性があるからです、分かりますか?」

ガボンが説明してくれました。

「どうしてスペアボディはみんな同じくらいの大きさなのか、どうしてスペアボディを大きくしたり小さくしたりしないのか。そうすれば、もっと気に入ってもらえるかもしれない」という疑問はまだまだある。

一つは予備の人体の便利さを作るためで、あなたの地球のように、製品を作って、すべて同じサイズで、便利で、品質がいくらか信頼できて、異なるサイズの製品を作って、少し面倒です。もちろん、これにはわれわれゴクシン人の伝統的な習慣もある。

あなたがご覧になったこのサイズは、私たちが長期にわたって研究と実践を繰り返した結果、最適なサイズであり、

私たちのゴーク星の重力環境やその他の物理的・化学的環境に適しています。

スポーツやセックス、病気への抵抗力など、人生においてこの体型はベストです。

また、大きな体型の人が小さな体型の人を傷つけないようにすることも大切です。私たちのゴック星には道徳的で法的な拘束力がなく、セックスは時には非常に暴力的で粗野であり、法律や道徳的な拘束力を持たず、製造元から人の体型を制御することは正しい選択です。

これは私たちのゴーク星系の主星で、人間の体を作っているのですが、体の規格は非常に厳しく管理されていて、主星の近くの他の星では、人の体の違いが非常に大きく、あらゆる種類の奇妙な体があります。

あなたの前のお兄さんのような大きな体が、微麗《びれい》のような小さな体に侵入《しんにゅう》することは、我がゴーク星系の主星《しゅせい》では絶対《ぜったい》に許《ゆる》されないことです」

ガボンは微麗が怒るのも構わず、指で微麗の下半身を示した。

すばやく飛びのいて、私のそばに駆け寄ってきて、なんと私の腕を抱きしめて、なまめかしい様子を見せた。ガボンのビリーと私のセックスについての話題をそらすために、私はビリーに尋ねた,

「あなたたちガボン星のような予備の人体はどれくらいあるの」

「数百万はあるでしょう?」とシャオロンは答えた。

「人体複製工場、あなたたちゴク星にはいくつあるの?」

「ひとつだけ」とガボンは言った。「人体複製産業は、われわれのゴーク星でもっとも重要な産業であって、むやみにはできない」

「私たち地球上では、人間は18歳になり、人生の最も黄金の時間です、あなた方ゴク人が予備の人体を作るのに18年かかりますか?」

「時空冷蔵庫がありますから、時間を早めることができます、そんなに時間はかかりません」とノートンは答えた。

「時空冷蔵庫って、どういう意味かわかる?」ガボンが説明しようとした。

「前回、ゴーク生物研究所を訪問したときには、ある程度わかっていました」

見学を続けているうちに、ふと思いついたことがありました,「あんたたちゴク老人が、あんたたちの人体複製工場に行って、若い男の身体と入れ替わって、この老人の身体を処理しないと、二人の『私』が出てくるんじゃないか、処理したらどうするんだ」

「処理しなければ『私』が二人いるはずです」ガボンは簡単に答えた。「どちらも無害化処理です」。

よくわからないまま、「無害化処理とは?」

「おまえを殺しておいて、それからおまえを焼くってことさ! ホーホー」と、スーデイルは上体をふるわせて笑った。

「スーデール、あなたの頭のなかにはやさしい言葉がたくさん入っているのよ。怖い言葉が多すぎるわ」。

「地球人であるわたしの人体をコピーしていただけませんか」

「あなたは地球人で、わたしたちはこのプログラムを持っていません。このプログラムを開発するには、長い時間がかかります。それに、わたしたちのゴーク星の法律は、個人

を拘束するものではありませんが、組織や人工知能、各種のアルゴリズムには強い拘束力があります。

我々は人体工場であり、人体研究機関ではなく、研究機関であれば、制約・コントロールが可能な一定の状況下では許可される」

ガボンははっきりと答えた。

「あなたたちは私の前の兄を複製することはできません、私は疑う理由があります、宇宙に私が 2 つ存在することは不可能です、あなたたちが複製した人体は、元の人間ではありません。

人間があんたたちの人体複製工場にやってきて、実際にあんたたちに殺されて、燃やされて、それから、適当に人間が出てきて、人体複製に成功したって言うんだ」

「おまえの言葉に、俺は怒った」ガボンが飛びかかってきて、俺に襲いかかる構えを見せたが、体に触れかけたところでぴたりと止まり、言った:

「ぼくにはプログラムがあるから、ぼくがどんなふうに感じているか、ふたつ試してみてくれ」。

ガボンは私たちを小さな部屋に案内しました、ガボンは

グローバル・インフォメーション・ネットワークの、バーチャル・スクリーンを開き、グローバル・インフォメーション・ネットワークにアクセスしました、ガボンが操作していると、バーチャル・ヘルメットのようなものがガボンは頭にかぶるよう、合図しました。

やはり私は、ガボン、ノートン、ビリー、スーデールと立ち話をしながら家の中に現れたり、突然また家の外に現れたりするという、不思議な光景を体現していたのです,ガボン、ノートン、ビリー、スーデールと立ち話をしているもう一人の私を見て。

私は仮想ヘルメットを脱いで、身振り手振りをしながら、彼らに言いました,

「ああ、不思議だわ。たしかにふたりの存在を感じたわ。あなたがたの人体複製工場は、ほんとうに信頼できるものだと信じるようになったわ。もうひとつ質問があるの。あなたがたゴーク人は、どうやって予備の人体を選んだの?」

「われわれの人体複製工場では、すべての予備人体は自然繁殖によるもので、ほとんどが人工的に作られている。

育成が成熟すると、グローバル情報ネットワークにタイ

ムリーに公開され、ゴーカーは一般的にグローバル情報ネットワークを検索し、自分の好きな人体を見つけます。自分で想像してデザインした、好きな人体を許される範囲でカスタマイズしたり、ときには仲間を招いて自分の選択の参考にしてもらったり」と加朋は答えた。

「ははあ、わたしたち地球人みたいに服を買うんですね。わたしは男ですから、女性の予備の人体を選んでもいいですか」

「身体と意識のミスマッチがひどく、人間に大きな苦痛を与えることは、ふつうは許されない。人体複製工場は人間のそういう考え方を満足させるものではない」とノートンは答えた。

「あなたたちゴク人体複製技術は非常に優れているが、しかし、私は 1 つの非常に深刻な問題を発見して、あなたたちゴク人がいったん事故に遭遇して、例えば足を踏み外して山の下に落ちて死んで、あなたたちは人体を複製する時間がなくて、それで終わりではありませんか? 」

「それは? 」とノートンは答えた,

「我々の死の概念は我々とは異なり、例えばゴーカート

の宇宙飛行士があなた方の地球に行って視察し、出発前に意識と記憶がコンピューターに保存され、もしそのゴーカートが地球で遭難した場合、我々は速やかに宇宙飛行士の意識を予備の人体に取り付け、その宇宙飛行士を復活させる。

この宇宙飛行士は、他の人と話すとき、私が地球に旅行したときの記憶が死んでいると後悔するでしょう。私たちゴーク人の意識はすべてバックアップされており、死んでいるのは記憶と意識の一部が失われているだけで、すべてではありません。

グローバル・キャンペーン・ネットワークと、グローバル・インフォメーション・ネットワークが、私たちの惑星、ゴークシュタインであれば、それぞれの人間の意識を、絶え間なく記録しています,誰もがいつでも意識の情報を失わないようにすることができます」

「あなたがたゴク星では、人体を複製して、人間の思想意識を改変することができるのですか」

「我々には多くの巨大な生物研究所があり、ゴキシン人は人体を置き換え、世代を重ねるごとに強くなり、人体の構造は世代を重ねるごとにより優美になり、より合理的になり、

より完成に向かっている。われわれはしばしば、よその惑星の人種を誘拐し、彼らの人体構造を観察し、よりよい予備の人体を作ってわれわれゴーク人に奉仕することを目的としている」ノートンは答えた:

しかし、人体複製工場においては、人間に対する意識を変えず、人間の思想と本来の意識を尊重する。

いくつかの生物学的研究所では、特別な合理的な必要性がある場合を除き、制御および監督することができる場合にのみ、精神的苦痛を伴う傾向のある人々のような特別な人々の意識を部分的に変更することができる。

人間の脳の意識をコピーして、コンピューターに保存する、人工的なスキャンを、発明したばかりの頃は、コンピューターに保存されている、意識を簡単に修正できるので、頻繁に修正していました,大きな副作用がありました。

その後、私たちは「人間の原始ルートコード」という概念を提案しました。場合によっては、人間の意識や記憶の数字を、最初に記録したときの情報に戻すことができる」

「人の心の意識をスキャンして記録するのに、どのくらいの時間がかかりますか?」と私は尋ねた。

「これは急速なものです。われわれのテクノロジーが始まったとき、あなたがたの地球時間では六、七分ですみましたが、いまは一秒もかかりません」とノートンは答えた。

「カスタムメイドの人体を作ったら、交換する前に親戚や知り合いに知らせないと、わたしだとわからなくなる可能性はないかしら」わたしはたずねた。

「もちろん、その可能性はありますが、お友達に知らせてください、私たちゴキシン人には親戚《しんせき》も親も兄弟もいないし、私たちは体が年をとったら、若い人の体と入れ替わって、そのままずっと入れ替わって、私たちの体は自分たちで作ったもので、どこから親戚が来たのですか。

「あんたたちゴク星人は人体を複製するのに金がいるのか、費用がいるのか」

「これには金はいらない。おまえたち地球人はなんでも金になる」スーデイルはからかうように言った,

「それが要求されたとしたら、もし誰かがそれを持ち出せなかったら、それは社会を大きく揺るがすことになるかもしれない」とノートンは答えた,

「少なくとも、われわれのゴーク星では、人体の複製に

お金はかからない」

見学が終わって、私は感慨を述べました:「私たちの地球上では、不死は地球人の何千年もの夢であり、人体の複製は何百年または何千年待たなければならないのか分かりません

「もしあなた方地球人がこの信仰を持っているならば、そして人間の中心はイデオロギー的な意識であり、イデオロギー的な意識は人間の心の中の荷電粒子の運動形態に過ぎず、情報に属するということを理解しなければならない。それに、あなたがた地球人は人工的なスキャン技術を持っていますから、数十年もあればできるでしょう」とガボンは答えた,

しかし、最も重要なことは、あなた方地球人が、場の本質が何であるかを知ることであり、場の本質を把握することによってのみ、場という宇宙の無形物質を使って人間の脳の中に入り込み、人間の意識情報を完全に記録することができるということです。

場以外の物質が人の脳に入り込むと、人の脳の組織が破壊され、人の思考や意識の情報を完全に記録することができなくなる。

たとえば、あなたたち地球人が掌握している光子、電磁

波、超音波、レントゲンが人間の脳の奥深くに入り込んで脳を破壊し、結果的に人間を死に至らしめ、人間が死んでしまったというのに、何を記録しているのか?

人間の脳の意識情報を記録するために人工場が必要であり、人間の意識を予備の人間の頭に取り付けるためにも人工場のスキャンが必要であることに加えて、他のものはそれを置き換えることができません。

地球上では、まず、フィールドの性質を解読し、コンピュータプログラムによって操作される、人工的なフィールドスキャン技術を開発し、人間の意識を記録するために、人工的な情報フィールドを呼び出す必要があります。予備の人間の脳に意識を取り付けるには、人工情報フィールドを使います。

このプロセスにおいて、マニュアルファームスキャン制御ソフトウェアを設計するには、多くの天才数学者が関与する必要があります。」

「問題の方向性を知ることも重要です」とノートンは言った,

「人間の核心はイデオロギー意識であり、イデオロギー

意識は人間の脳の荷電粒子の運動形態であり、本質的には情報に属する。思考と意識の活動は、周囲の空間に摂動を与え、空間に波動性を与えることができ、これは空間自体の波動であり、波動の速度は光の速度であり、空間の波動パターンを記録することは、人間の脳における荷電粒子の運動パターンを記録することと同様に重要である。

ある時点の人間の脳の意識に関する情報を記録するだけでは不十分なので、ある時点の人間の脳の意識の動きに関する詳細な情報を記録する必要があります。この場合、人間の脳が周囲の空間に対して生み出す波動の形を記録することが最も重要である,

身体は精神的な意識の担い手であり、二次的なものでしかありません。あなた方地球上では、人間の身体は最も重要であり、意識は二次的なものであると考えられているため、常に身体を若返らせる薬を発明したり、人間の身体を保存するために冷凍保存したいと考えています,不老不死の目的を達成するためです、これは不可能です。おまえたち地球人は、方向をまちがえれば成功しない」

スーデルは遠慮なくそう評した。

「お前たち地球人が一番金を使うのは麻薬と酒とタバコだが、二番目に多いのは武器を買って人を殺すことだ。きみたち地球人は、科学研究に没頭する人間を愚か者で狂人だと思っている。きみたち地球人のその後の科学は、発展するどころか後退しているのではないか、きみたちのかつての科学者はみんな死んでしまい、いまは科学者がいないから、きみたちは手足の発達した頭のない技術者を科学者と思っているのではないか、とぼくは推測する。

おまえたちは戦争と闘う以外には、同類を抑圧し、いじめ、欺くことしかできず、数年後には原始社会に引きこもり、猿の群れと変わらなくなる。

人体複製のテクノロジーは、あなたがた地球人には関係がなく、あなたがたにできないという問題ではなく、人体複製があるということを決して考えないのです。

とにかく、前の兄が地球に帰ったらどれだけのことができるのか、私には見当がつかなかった。前の兄が帰ったということは、誰もが彼を神経症だと思ったに違いない。地球人にはもうひとつ特徴があって、一部の人間がやっていることを、別の一部が破壊している」

ノートンは言った,

「私はまた、元兄弟が戻って不老不死の役割を果たすことができるとは思わない、不老不死という技術は容易ではない、主に地球人は思考が強く、思想が保守的であり、自分自身を縛ることに慣れている、あなたの元兄弟が宣伝に戻った場合、あなたは地球人があなたを信じている、それを行うには、人工ファームスキャンというツールを習得する限り、彼らの地球時間に従って、数十年後に成功することができ。

人工的に人間の意識をスキャンして記録するという一歩を踏み出しさえすれば、人間の不老不死が現実のものとなるからである。人間の思考意識は人間の脳に蓄積され、身体の死、腐敗によって思考意識は失われ、コンピュータに蓄積され、コンピュータは容易にメンテナンスされ、そのような状況は存在せず、残りは待つだけです,何百年も待つことができます」

二十五、ゴーク星の新型人種

ノートン、スーデール、フェリーは、ゴーク星の人体複

製工場を見学した直後に、私をゴーク星の新しい人種研究センターに案内してくれた。

ゴーク星人は、科学技術が非常に高度に発達しているため、仮想化のレベルが非常に高く、製品の中心化、仮想化、エネルギー、交通、宇宙飛行、情報処理などの分野で極端に発展しています,これ以上発展する余地はありません。

彼らは体を変えるのが好きで、研究開発に熱中し、自分の体を作り、彼らの最大の研究開発は人の体を研究し、最大の工業は自分の体を作ることである。

彼らは多くの新しい奇妙な人種を開発しようと絶えず試みています。

彼らは人間の思考意識を人間の脳からスキャンしてコピーし、自律意識のない別の身体に組み込むことができるので、自分の身体を新しいタイプの人種の身体に置き換えて生き、体験しようとする,簡単にできるのです。

その中心は、まるで天上が何かに覆われているかもしれない巨大な家の中にあるかのようで、あまりにも高すぎて、はっきりとは見えなかった。

ゴーク星のニュータイプ人種センターの仮想デジタル・

イメージ・キャラクターは、はるか遠くから小さな男の子のイメージで、ぴかぴか光る棒を持って走ってきて、中国語の殺しの上部を切るという動作をしていた。

彼は孫悟空のように私たちの前に飛んできて、私たちの前にまっすぐ立って、私たちにサービスを提供するように促しました。

私は彼の横にゴキブリの文字の列が漂っているのを見た。これは彼らの仮想デジタルイメージキャラクターのサインで、全球情報網のカスタマーサービスのコーウィンが中国語に翻訳してくれた。

コーウィンが説明してくれたところによると、ゴーク星では、これはスピードの速い人間という意味だという。あるいは、すごい人間という意味だという。ゴーク星のニュータイプ中心のニュータイプがすごいということを暗示している。

しかし、ノートンたちはこの架空の代弁者を見ようともせず、堂々と中に入っていった。

私はここで多くの奇妙な、奇妙な人種を見た。

真っ黒でピカピカのメタリックな人は、肌の温度が低くて弾力があり、体が重いので、セックスの時とは確かに雰囲

気が違いますよね。

彼女の体の内部をこすると、細かい砂粒がこすれるような、特殊な爽快感があった。しかし、体力を消耗しすぎたことは、深い記憶を与えてくれた。

ある種の金属人種は、体の内部にたくさんの小さな針が刺さっているような感覚があり、ある種の金属人種は微小な電流を持っている。

銀白色、鉛灰色、あるいは水銀のような外見、あるいは皮膚だけが金属のようで、肉体に触れることはまったく金属感覚ではない金属人種など、いろいろな種類の金属人種を見てきた。

多くの人種がいて、体の一部の皮膚は金属模様で、金属の皮膚と肉体の皮膚は自然に移行している。

黒い金属のような体をした二人の女が、そっくり同じ顔をして並んで立っているのも見えた。

彼女たちは身長一メートルくらいで、服はなく、ほっそりとしてふっくらとしていて、いちばん太いところはわたしの脚ぐらいしか太くなく、下半身の脚のあいだには長いすきまができていた。全裸で、黒光りする鋼管《こうかん》のよ

うだ。

彼女たちの顔は短く、あごはとがっていて、眉も鼻もなく、額はぴかぴか光っていて、頭から後ろにかけて螺旋《らせん》状の細い髪があり、額が大きく見えた。

彼女たちの口は小さかったが、目は大きく、目と口は暗い穴のようになっていたが、その目の奥には深い井戸の水の反射のような輝きがあった。

わたしは二人を見ると本能的に怖くなり、それ以上目を向けることもできず、ノートンたちがわたしに触れさせないようにと心の中で祈った。

ところがノートンがよりによって彼女たちを抱きしめろと言うので、私は無理やり近づいた。右側の男が急に腹を引き締め、下半身の隙間から黒いねばねばした液体を噴き出したかと思うと、「仏」という音とともに彼女の身体が燃え上がり、下半身の隙間から薄青い炎が噴き出した,彼女の全身を包んだ。

それから彼女の口からも薄青い炎がほとばしり、彼女の下から出てきた炎には、太くて細い、直径一ミリもない細い絹がまじっていました,男の精子のように宙に泳ぐ。

わたしは彼女たちの薄青い炎を見てきたし、燐火のように温度が低く、火傷をしないことも知っていた。それでも、本能的な恐怖から、わたしは燃えていない女性を抱きしめようと上がっていった。

女は飛びあがり、脚を広げてわたしの首をはさんだ。その体は金属のように見えたが、その感触は金属の感触ではなかった。カタツムリやヒルの感触のようだった。

彼女の下半身の肉の裂け目がぱっと開いた。ひどい悪臭と異様なにおいとともに、彼女の下半身の肉管がいくつかぼくの口の中に入り、残りの肉管がぼくの体のあちこちに触れた,どこかにもぐりこもうとする。

その後、胃や腸に肉管が入り、肛門から出てきました。彼女の肉のチューブがわたしの身体から出てくると、廃機油のような黒いどろどろした液体がいきなり噴き出し、肉のチューブがわたしの身体のまわりに吹きつけられた。

そのとき、身体を燃やした女が近づいてきて、「ブッダ」という音とともに、私たち三人は燃えあがった。

やはり、燃える炎の温度は高くなく、ただ暖かいだけだった。

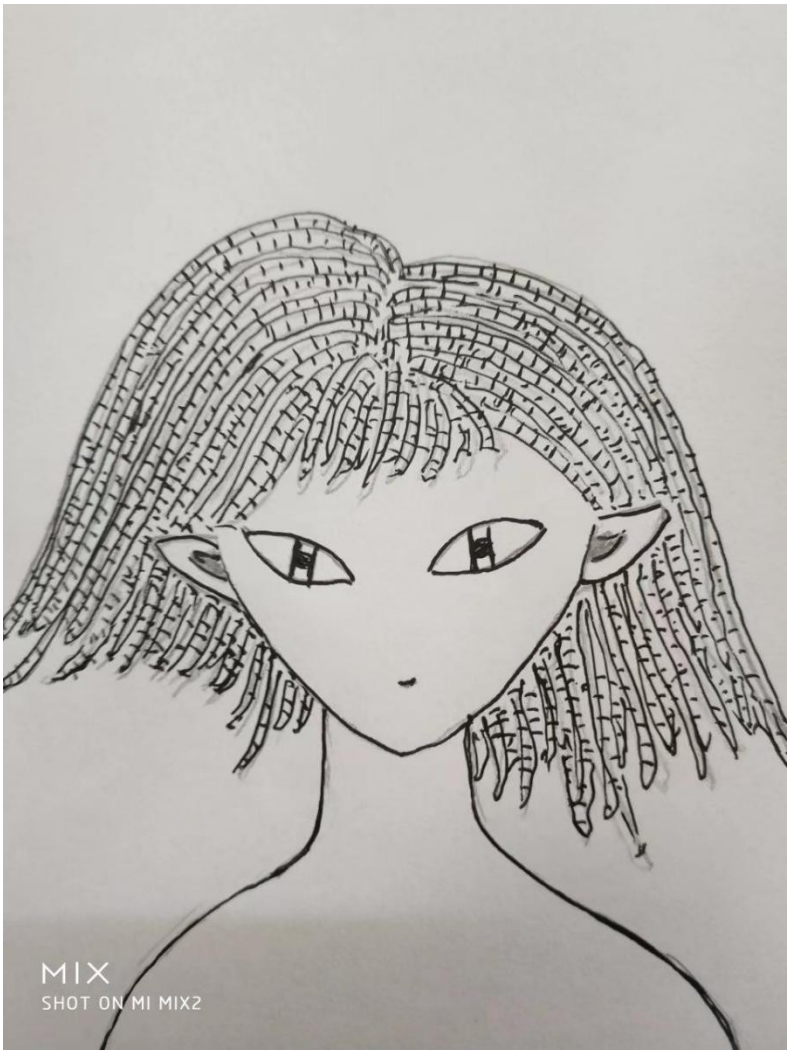
それから彼女たちの肉管がまた私の尿道にはいりこんできて、そこからどろどろした液体を吐き出したり、また私の腸の中にたくさんのどろどろした液体を吐き出したりして、私の全身を内外に燃え立たせた。

グローバル・インフォメーション・ネットワークの顧客サービスであるコウィンが、青い炎が私たちを取り囲み、たくさんのブライトシルクが空中をさまよっているのを見せてくれました。このシルクは骨を含め、私の体全体を通り抜けることができます。ブライトシルクが通るときには、特別な爽快感があります。

身体の内側と外側で、何千もの小さな温かく柔らかい手がそっと触れているような感覚がありました。言葉では言い表せないほどの喜びでしたが、すぐにまた幻覚が現れ、周りのすべてが燃えているような気がしました,すべてが炎のように宙に浮かび、自分の身体だけが燃えているようになり、いつか身体も燃え尽きてしまうような気がした。

しかし、私が目を覚ましたとき、そこにはまだノートンたちが立っていて、私たちはまだニュータイプの人体センターにいました。

目と顔が平らで落ちくぼんでいない人種が多く、黒目が英語の大文字 h のようで、人を見ると黒い縞模様が上下、左右に動き、とても抑圧的で恐ろしい感じを与える。



また、青みがかった肌をした痩せぎすの女たちが、走り高跳びの練習をしているのも見えた。彼女たちの跳躍能力は驚くべきもので、地面にしゃがみこんで蛙のようにすばやく跳びあがり、自分の身長の十数倍の高さまでジャンプすることができる。

ノートンが二言三言話しかけると、ボクサーが挑戦を受けるような勢いで近づいてきた。

彼女が入ってきたとき、はっきりとわかったのは、身長一メートルほどの彼女が全裸で、身体の前面は淡い緑色、背中はカエルの色よりも濃い緑色をしていることだった,腕の下と陰部のあたりは、ほとんど白に近い淡い緑色だった。色の違いは徐々に移行していくもので、自然に移行している。

彼女は磨き上げられた碧玉《へきぎょく》のようになめらかに光っていた。頭部を除けば、体のいちばん太い部分は、わたしの腕ほどもない。極端に細い腰、細く長い乳房、陰部の隙間は股間に隠れていて、立っているときには、まったく見えない。

〈グローバル・インフォメーション〉のカスタマーサービスのコーウィンから、この男は身体を分割できる人種に属し、エネルギーレベルが高いから気をつけろと警告された。

その細い女性は私の近くに来て、突然バネのように飛び上がり、足を開いて私の腰を挟み、ゆっくりと自分の体を滑らせました。

私のペニスが彼女の中に入ると、根元はすぐに強い力で

締め付けられました。

同時に、彼女の腕と脚がわたしの体をしっかりとロックし、尿道と肛門に肉管が入り込むのを感じた。

彼女が大きく口を開けると、彼女の口の中の肉管が私の口から身体の内部へと伸び、強烈な生臭さと刺激に耐えられなくなったが、身体は彼女によって閉じ込められ、動くことができなかった。

これは何度も経験したことだが、今度は違っていたのは、彼女の下半身の肉管が尿道と肛門の中で切れて、一部が私の中に残っていたことだった。

その後、彼女の身体は小さくなり、生きたウナギや生きたナマズを飲み込んでいるような気がした。

普通なら、最初は生臭いにおいに耐えられなかったけれど、そのうち耐えられるようになり、そのうち慣れて、そのにおいが好きになっていった。

ゴーカ銀河の女性は、体から発せられるさまざまな変な匂いで男性をコントロールするのが得意です。

しかし今度は、生臭さがますますひどくなり、私の意志の力のほとんどすべてが彼女の身体の生臭さに吸い寄せられ

てしまい、彼女の身体が私の中に入ってくるのを意志の力で阻止することはできなかった。

彼女の体は私の体の中に入り、ゆっくりと下半身に向かって滑りました、私の肛門と尿道は、彼女が残した肉管で塞がれ、腹部と尿道に大きな圧力を感じました,その圧迫感は私に強い快感を与えました。

尿道や肛門《こうもん》の肉管《にくかん》は絶対に滑《すべ》り落ちてはいけない、滑り落ちてしまえば圧力がなくなってしまうという特殊な快感がなくなってしまう、というのがそのときの私の考えだった。

しかしそれを抑えることはできず、腹部の圧迫に強い快感を伴ったが、残念ながら長くは続かず、肛門の肉管が外れて床に落ちてしまった。

ばらばらになった彼女の体は、緑色の蛭ひるのように、黄色いねばねばした液体をともなって肛門から噴き出し、ついには尿道の肉管がはずれてしまった,とろりとした液体と小さな軟球のようなものが噴き出し、それにつれて快感が高まっていく。

この噴射の過程は、私に極度の快感をもたらし、何か極

度に絹のようなものが、自分の尿道と肛門を通り抜け、自分では遮ることができないのを感じました。

地面に落ちてくるそれらは蛭ひるのような緑色の縞しまで、頭と尾が曲がっており、裏側は青緑色で、表側は白い。

それらの棒状のものは、淡黄色のどろどろした液体にまみれ、やがて次第に融合して、当初の人間の姿になって立ち上がった。そしてそれらの黄色いどろどろした液体は依然として地面に残っていて、とても多くて、大きく地面に広がって、遠くから見るときはきらきらしています。

それからピンク色の女性がやってきて、その人の体はピンク色の透き通った玉のようだった。

彼女と抱き合っている時、彼女は私の身体に力を入れて擦り付け、擦り付けると彼女の身体は熱くなり、柔らかくなり、私の口から私の身体の中にすっぽりと入り込んできた。

何千万という小さな手が体の内側を優しく撫でてくれているような、特別な快感があります。

その後、私の肛門や尿道からは、粘着性の強いピンク色の液体がたくさん流れ出し、長いピンク色の細い糸を引き出しては、床にこぼし、また互いにかたまり合うようになりま

した,という当初の人間の姿になった。

あとで出会った人たちの中には、もっと小さな身体を分解して、私の腹部や腹の谷間から汗をかくようにじわじわと皮膚を出して、地面に降りて、やっと融合してくれる人もいるかもしれません,もとの姿になった。

このセンターでは、その後、身体的エネルギーレベルの高い女性数人に出会い、彼女たちが上がってくると、カエルのように素早く跳ね上がり、股を広げて私の腰や頭を挟んだ。

腰にフォークを当てられたら、ゆっくりと体を滑らせてペニスを下半身に入れてくれるでしょう。

彼女たちは飛び上がりました、ほとんどの場合、脚を広げて、私の頭を押さえつけていました、そして、彼女たちの下半身の肉が、突然、二つに割れ、三角形の空洞になりました,彼女たちの下半身の肉管は、三角形の頂点にあります。

彼女たちの二枚の肉が、僕の顔をしっかりと吸い込んでくれる。

彼女たちのセクシュアリティは、地球上の女性のように、男性のペニスに焦点を当てているわけではありません、彼女たちのセクシュアリティは、男性の体内の空洞に焦点を当て

ています。

もちろん、彼女たちの女性たちはわたしに対して、わたしの内部を、ゴーク星の男たちと同じように、ただの空洞にすぎないと思っているかもしれない。

ふだんはただ、生臭い赤、あるいは紫がかった赤、つやつやした黒が目の前にちらつくだけで、顔はおおわれ、何も見えず、息もできない。

彼女たちの下半身の二枚の肉の内側の色は、ときおり碧《みどり》やその他の色に輝いて、漆黒《しっこく》の夜空にきらめく星のように感じられた。

グローバル・キャンペーン・ネットワークの、テレポーテーション技術によって、遠くから血中酸素を取り込み、自動的に体内に入ることができます、肺は音を立て、呼吸を助けるだけです,自分の顔が覆われていてもかまわない。

私とセックスしている女性は、私が地球人であり、常に呼吸していることに気付いていないようです。普通なら、両手で、無理やり、肉を少し開けて、呼吸できるようにします。

私は彼らの惑星にいて、時々、口がふさがれて、息ができないことがありました、でも、体は感覚に慣れていません、

グローバル・エクササイズ・ネットワークを使って、遠隔で私の体に酸素を供給しているのでしょうか?

特に後期は、口が塞がれて息ができなくなることはほとんどなく、身体に呼吸困難を感じることはありません。

彼女たちが私の頭と顔をしっかりとロックすると、彼女たちの下半身の肉管は私の口から内部へと急速に野蛮に伸び始め、肉管の力が強く、喉から胃へと移動していることがはっきりと感じられた。

胃のあたりまでくると、たいてい吐き気を催し、吐き気をもよおすのだが、その吐き気を大幅におさえるために、肉管から多量のねばねばした液体が吐き出されるのである。腸に到達すると、より多くの粘性のある液体を、大量に吐き出します。

彼女たちのなかには、体が小さくて、あまり粘性のある液体をたくわえていない者もいて、〈グローバル・エクササイズ〉ネットワークに、遠隔で非接触の粘性のある液体を補充してもらうよう依頼するので、体内から自分の体重の何倍もの粘性のある液体をつくることができる。

時には大量のドロドロした液体が腹部に大きな圧力をか

け、極度の快感を伴って腹部から全身に波及することもあった。

彼女たちの肉管は私の体の中で伸び続け、泳ぎ続け、同時に大量の粘り気のある液体を噴射し、私の下腹部に大きな圧力をかける。

その後、私の肛門はコントロールできなくなり、どろどろした液体が私の肛門から流れ出し、時には噴射の形で、非常に滑らかに感じられ、肛門はどんなに力を入れても流出を止めることができませんでした。

ときどきドロドロとした液体の一部が私の尿道から出てきて、肛門や尿道からドロドロとした液体が出てくると同時に、快感がオーガズムに達することがあります。

彼女たちの肉管が私の口から入り、肛門からさらに突き出されると、締めつけて小さく固くなり、私の下半身のあちこちに触れてくる。

私のペニスは触れると、すぐにぐるぐる巻きになって、そして、尿道の中に力いっぱい潜り込むのを眺めて、潜り込む時、肉管の頭部が激しく揺れて、しばしば私に苦痛と傷害をもたらします。

チューブがうまくもぐりこめば、ペニスの外側にからみついたチューブがたちまち死んでしまうような締めつけが、ゴキシン女性のほとんどに好まれる。

尿道に入った肉管はたちまち膨れ上がる。そんな内側から挟み撃ちにされながら、時には激しくリズミカルに痙攣《けいれん》する。私の尿道をしばしば傷つけて出血させ、そうでなくてもあとで火照《ほて》るような感じがした。

彼女たちがわたしの尿道に入りこんだ肉管からは、熱くてねばねばした液体が飛び出し、ときには炎のように尿道を駆けめぐった。

このねっとりとした液体は、一方では至極の快感をもたらしてくれるが、一方では、尿道に肉管をもぐりこまれたときの痛みを隠してくれる。そのため痛みを感じるのは後になってからで、その時は一般的に痛みを感じませんが、その時に噴射された液体には強い鎮痛効果があったのかもしれません。

私のペニスが浮き上がっている状態で、彼女たちの肉管が私の尿道に入らないことがあります、そして彼女たちの肉管は突然頭を膨らませて、尿道の隙間を広げてしまいます,さ

らに肉管を収縮させて尿道の奥に少し突っ込むようにして、一節一節ぎゅっと押し込んでいきます。強引な感じがする。

私たちは何度もゴーク・ニュータイプ人種センターを訪れ、ある種の動物と部分的に人間のような人間と動物の合体した人種を見た。

人間と蛇、ウナギ、魚などの動物の合体もあれば、人間と虫、カタツムリ、タコ、ヒルなどの軟体動物の合体もある。

ゼリーや碧玉《へきぎよく》のような体をした人種もいれば、ふさふさした光沢のある毛をした奇怪千万な人種もいる。

しかしノートンは私にこう言いました、「これらの人種の多くは排除されるべきであり、ゴーク星系ではほとんど普及していない。

新しいタイプの人種を作る上で、最も重要なのは人の意識と身体のマッチング・コーディネートの問題で、私たちは多くの実験をしているだけでなく、私たちのスーパーコンピューターを使ってシミュレーションしています。」

ゴーク星系のさまざまな女たちは、外見は千差万別だが、身長や体重の差は何十倍、あるいは何百倍にもなることがあ

る。

しかし、いくつかの共通点がありますが、強烈な、奇妙な嫌な臭いがあり、非常に奇妙なことに、人々はしばらくの間、この臭いに慣れることができ、好きになることができます。

彼女たちの中には変身が得意な人もいれば、恐ろしくなる人もいる。あなたが彼女たちとキスをしているあいだに、彼女たちのなかには突然、顔が紫がかった黒い泥のようになり、異臭を放つ者もいる。

ある人間のきわめて美しい顔、きれいな身体の下半身から、蛇の頭、蛭ひる、ミミズ、もやしのような肉管が、いきなりたくさん突き出される。

彼女たちのほとんどは下半身にたくさんの肉のチューブを蓄えていて、突然すばやく突き出したり、すばやく引っ込めたり、自分の体重の何倍もの大量のねばねばした液体を噴射したりすることができるのが彼女たちの共通した特徴だった。

彼女たちの中には、男性に性的暴行を加えるための、最も重要な器官である、チューブがありました、彼女たちは楽

しんでいました。

彼女たちの人体は自分たちで設計・製造したもので、彼女たちの女性の下半身には肉管が貯蔵されており、恐らく彼らのゴーク星系ではこれが流行しているのだろう。

これらの肉管は太いものから細いものまであり、巨大な人種の体の中では、私の体よりも太く、細い糸のようなものです。

よく見かけるのは、紫がかった赤、緋色、ピンク、紺色、黒、白、透明、毒蛇のような模様もあり、一目見ただけでドキッとするような感じがします。

大部分はつやつやしていて、あるものは暗闇の中で輝き、あるものはイヌのしっぽ草のようにびっしりととげを生やし、あるものは電流を帯びていた。

かつてはこの逆棘《さかとげ》のある肉管に体内に侵入され、その前に、ゼリーのような、またはバターのようなねばねばしたものを体内に満たして潤滑《じゆんかつ》にするための準備をされていた。

なかにはいるときはなめらかだったが、出てくるときは冷や汗をかき、腸が焼けるような感じになり、血が流れ出し

て、人が立っていられなくなった。

ゴーク星系の女たちは、体の大きさにかかわらず、私にはスーパーフィット感があり、スーパーモーターのようなもので、ほとんどが激しく、激しく、変態であり、セックスのときには非常に高速な抽出頻度を持っています,長時間のストーカーは、私には耐えられませんでした。

ことに彼女たち数人が一列に並び、下半身の肉管を握りしめたまま、わたしの興奮した興奮ぶりに直面したときには、本能的な恐怖を感じた。

初めてそういう場面に遭遇する前から、ノートンは私に対して、どちらかの肉管が私の中に入ってくるのを受け入れなければならないと警告していた。素早く口や肛門を手で塞ぎ、二人目も肉管を入れてくるのを極力避ける。

しかし、ノートンの警告を無視して損をした。

あるとき、私は 4 人を前にして、彼女たちは同時に私の体に肉管を突き出し、一人が私の肛門に入り、一人が私の口に入り、始まりは何もありませんでした。

その後、肉管が私の体の中に入り、二人は私を別々の方向に引っ張って、私の体の内臓の激しい痛みを引き起こしま

した。

彼女たちの肉管が私の口から入ると、強烈な生臭い臭いはまず激しい吐き気をもたらし、私の肛門から入ると、身体の内部全体を通り抜け、口の中に入ると、糞便を口の中に持ち込むことになる,吐き気もひどいものでした。

彼女たちの肉管が私の中に入ってきたり、体から引き抜かれたりするのは、入ったり出たりする段階で最もつらく、そのたびに私は内心ひどく恐れていた。

彼女たちの肉管が腸からわたしの腹部に突き刺さったことも何度かあったが、それはまだ耐えられるほどの痛みであり、引き戻されたときには耐えがたいほどの激痛だった。

彼女たちの肉のチューブが私の体の中に入り始めたら、私は彼女たちにもう少しゆっくりと頼み、本当に我慢できないと言い、時々反応して、彼女たちは動きを遅くします。

しかし、彼女たちが口を開けたり、目を閉じたりするような極度の興奮状態に入ると、いくら哀願しても、悲鳴を上げても、うめき声を上げても、何の効果もない。彼女たちは私を無視して、狂ったように吸い続け、私の死活を顧みない。

彼女たちの特徴のひとつは、弱い者に同情しないことで、

わたしの体が彼女たちの攻撃に耐えられなくなると、身を丸めてうめきながら、あなたの気持ちなどお構いなしに、上機嫌でハイハイしている。

彼女たちはひどく放蕩ほうとうで、横柄おうへいで、横柄おうへいで、獰猛どうもうで、ある者は獰猛どうもうであることは容貌ようぼうからでもわかるが、善良な、あるいは憂鬱ゆううつな顔つきをしている者は一人も見られなかった。

ゴーク人には生死がなく、死を恐れず、死に対する恐怖がなければ、生命に対する大切さと尊重もない。

彼女たちは労働もせず、家族を養い、生活の圧力もなく、社会的道徳や法律の制約もなく、両親や親戚、家庭教師のしつけもなく、夫婦関係の制約もない,人間こそ、あのふてぶてしさ。

見ず知らずの男に対する彼女たちの態度はーーちくしょう!ノートンたちとグローバル・キャンペーン・ネットワークの保護がなければ、本当に殺してやる。彼女たちは動物の群れのように感じられ、あなたに対する憐れみはまったく存在しなかった。

あなたが彼らに直面したとき、特に複数の女性が同時に

あなたを囲み、同時に肉のチューブをあなたの体に侵入させると、本当に恐ろしくて絶望的です。

ノートンたちが嫌がっていたことのひとつは、私がゴーク星系の女性とセックスをして、怪我をして苦しんでいるということでした、彼らは私の怪我を治療するために、人工フィールドスキャンを使い、同時に私の苦しんでいた記憶を消去しました,あるいは苦痛の記憶のレベルを変えました。

だから、彼女たちとセックスをするたびに、私の頭の中はいつも楽しい記憶でいっぱいになっていたので、あまり怖くなく、時には潜在意識の恐怖がかすかにありました。

耐え難い苦しみを味わって初めて、こんなに苦しいのか、こんなに苦しいのかと実感する。

ファック・ギャラクシーの女性の性的要求に直面して、私はしばしば幸せな期待を持っていました、肉体的な接触は非常に短い快感でした、すぐに痛みを感じることができませんでした、そして、すぐに終わることを望んでいました,終わることができなければ、眠ってしまいたい、目が覚めたら終わってしまいたい。

ノートンたちは例によって、わたしたち地球人の肉体の

不健康さについて、ゴーク星系の女性たちや新しいタイプの人間たちには耐えられないというわたしの愚痴を聞きながら、それでもわたしを見逃さなかったのです。

ゴーク星系にはたくさんの種類の女性がいて、わたしとセックスをしたのはほんの一握りだという。彼らは、わたしとゴーク星系の代表的な、ありふれた人種とのあいだに、少なくとも一回のセックスを要求し、そのセックスの数を必要とした。

最後にノートンは三次元のバーチャル画像を開いて、私に自分で人種を選べと言った。

われわれ地球人に似て、ゼリーのような肌をした、とてもおとなしくてきれいな女を見かけたので、わたしはその女を選んだ。

実際に彼女に会ってみると、バーチャル画面で見るのとは少し違って、体は半透明で、白玉のようでもあり、カタツムリのようでもあり、体の内部はぼんやりと黒い。

彼女は白くて洗練されたベッドの上に裸で立っていた。彼らの命令でわたしは上にあがった。彼女はわたしを抱きしめた。ヒルに触れるような、彼女の全身の柔らかさと冷たさ

を感じた,わたしの全身に鳥肌が立った。

彼女は | 蛭《ひる》のように体を | 蠢《うごめ》かせながら私の上に這いのぼり、ついには完全にベッドから離れて私にまとわりついてきた。

彼女の頭がわたしの肩に達すると、彼女はわたしの肩越しに身体を折り曲げ、わたしの背中から下に這いおりていった。

彼女のオマンコがわたしの口に達したとき、そのオマンコは不意に爆発し、恐ろしいほど黒く輝き、その中には小さな蛇の頭のようなものがたくさん入り乱れていた。

彼女の身体は骨がなく、しかも極度に柔らかく、まず私の頭部を包み込み、その後、少しずつ私を丸呑みにしていった。

彼女の体が私を完全に包み込み、私を包み込んだとき、私はグローバル情報ネットワークのカスタマーサービスによって提供された画像の助けを借りて、私がその女性の形になっているのを見ました。

私は無意識のうちに自分の身体に触れ、女性の身体を撫でるように、乳房があり、陰部があり、感触も正常な女性の

身体に触れる感触で、先ほどの極度に柔らかい感触ではなくなった。

それからバターのようなものを口に注入してもらったが、滑りやすく、胃の中に入り、やがて腸の中に入り、肛門がコントロールできなくなり、引っ張り出される感覚に襲われた。

こんなにきれいなところで、汚してはいけないと思いました、自分を抑えることができませんでした、それでも抑えることができませんでした、それから横になって、汚れが引き出されないように、抑えようとしました。

でも、どうにもならなくて、たくさん引っ張り出しました。頭を覆《おお》われているので、まともに見ることができない。グローバル情報ネットワークが提供する画面は、かなり引っ張られているようだ。

最後に、私と彼女の体が離れた瞬間、私は見て、やっぱりベッドの中をめちゃくちゃにして、ただとても短い時間を見て、グローバル運動ネットを通じて私は微麗の住んでいるところに戻ります。

恥ずかしい思いをして帰ってきたときには、おしっこのようなものを発明することを頭に思い浮かべていた。

二十六、ゴク星人の等級別居住

ノートン、スーデール、ビリーたちは、あるとき、私をある特別な空間領域に連れて行ってくれた。まだ彼らの主星にあるのだが、そこは薄暗く、毎日が曇り空のようだった,空といっしょに、青灰色に塗られているようでした。

地下には、たくさんの細い光の糸がたなびいており、さまざまな色の光の柱が地面に向かって垂れ下がっていたが、地面に触れることなく宙に浮いていた。

どんな染料でこれらすべてを染めているのですか?なんてもったいないことをしてしまったのだろう、と私は心の中でつぶやいた。

空には巨大なゴキブリ文字が浮かんでいた。それを見ると、すぐに中国語の列に変わった:

「死は偽りであり、苦しみは真実である」。

どういう意味だ?地球人がここを訪問することがわかったというのは、どういうことだろう?文字どおり地球の中国語に翻訳する?

このエリアのバーチャルデジタルイメージキャラクターは、私たちを迎えるために私たちの周りに飄々と着陸しました。

苦悶《くもん》の表情を浮かべた男で、下半身の腹部にはぽっかりと穴があき、その穴から光が漏《も》れ、脚や足には黒く光る液体がたくさん流れていた。頭上にずらりと並んだゴキシングの文字が、彼のサインだった。

見ると、この署名文字はすぐに中国語の「溶ける人」に変わっていた。

これはどういう意味か?

グローバル・インフォメーション・ネットワークの顧客サービスである可温氏は次のように語った:

「... ... 実際には、これは人間の幻覚であり、誰もがこの空間領域に足を踏み入れると、グローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークが、侵入者に警告するためにその人物の脳内にこの幻覚を作り出します。

前の兄貴が見た中国語はグローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・メッセージ・ネットワークがゴキ

ブリの文字を中国語に翻訳して脳に入力した理由だったが、ノートンたちが見たのはやはりゴキブリの文字だった。

そして実際には、空には文字がまったくなく、すべての風景と空の青灰色は、2 つのネットワークがあなたの頭の中で作り出した幻想です。しかし、誰かが入ってくると、そのような幻覚を見ることになる。

ここでは死は偽りであり、苦しみは真実であり、ここにいる女性が入ってきた男性に対する宣戦布告であり、私たちはあなたを殺すことはできませんが、しかし、という意味です,あなたに真実の、最大の苦痛を与えることができる。

仮想のデジタル・イメージ・キャラクターにあいた穴は、ゴーカイジャーの女たちが男たちに浴びせた侮辱と侮辱であり、男たちの肉体が丈夫でないことを皮肉って、その男が彼女たちの肉のチューブで犯され、体が乾いて穴があいていることを示していた。

この仮想デジタル・イメージ・キャラクターのサインは〈溶けた男〉、つまりこの男の体がわたしたち女の毒によって溶かされたということだ。

ゴクシン人は人間の犯罪を道徳的、法律的に拘束しない。

一人がもう一人を殺そうとすると、高度にインテリジェントなグローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル情報ネットワークが、犯罪を実行不可能にするために瞬時に二人を引き離す。

しかし、一部の犯罪者は欺瞞などの手段で他人を性的暴行し、いったん性器が被害者の体内に入り、その後被害者を苦しめ、被害者を苦しめる。

しかし、この時点で両者の体内の臓器が絡み合っているため、通常の状況下では、グローバルな運動ネットワークを分離するように要求することはできません。

高度なテクノロジーを持つ犯罪者もおり、特に多くの犯罪者がグローバルなキャンペーンネットワークの仕事を遮断し、妨害し、欺くために組織化されています。

あるいは、特別な手段を使って、犠牲者を苦しませることもあります、しかし、外見や、思考や意識には、楽しみがあります、毒素を体内に注入することもあります,しばらくすると、毒性の発作が起こり、とても苦しみます。

こうして彼らはグローバルな運動ネットワークを騙し、実際の状況を認識できないようにしている。

しかし、高度にインテリジェントなグローバル・キャンペーン・ネットワーク、グローバル・インフォメーション・ネットワークは、これらの犯罪者のすべての行動を総合的に評価します。

これらの犯罪者は、特定の地域に送られます、その地域に住みたがらず、他の地域に長期滞在し、グローバル・スポーツ・ネットワークや、グローバル・インフォメーション・ネットワークによって、異常者リストに加えられます,グローバルスポーツネットワーク、グローバル情報ネットワークのサービスを受けることができず、生活が苦しく、各種機能が深刻に制限され、再び犯罪を実行することが難しくなる可能性がある。

グローバル・スポーツ・ネットワーク・プラス・レーティングを利用して犯罪に対処するのが、ゴーカー星のおもな仕事です」

グローバルインフォメーションのカスタマーサービスであるコーウィンは、私にこう言いました,

「あなたがたがいま立ち入っているこの空間領域は、毒を持った女性たちが日常的に活動している場所であり、そう

した人々の拠点となっています。

　　このエリアには毒を持った女性が多く集まっており、男性を強く攻撃する傾向があるので、元お兄ちゃんは男性なので気をつけましょう。

　　彼女たちは互いに交流し、協力し合い、様々な毒素を研究し、世代ごとに取り替え、絶えず新しいものを生み出し、毒素を使用する能力を高め、彼女たちはそれを楽しんでいる」

　　私たちはこの場所を歩いていたが、やがてノートンたちはある標的を見つけて、私に近づくように指示し、私を獲物にしようとしたが、彼らは身を隠してしまった。

　　近づいていくと、幼稚園の女の子と同じくらいの女性がいました、身体も顔立ちも、とても繊細で、地球のスウェットシャツのような服を着ていました,下は金属のような細い線でできた、ぴかぴかのミニスカート。体色はピンクがかった白のやや濃いブルー。

　　髪の毛が、黒く光るゴムのチューブのように、しなやかに垂れ下がっているところを見ると、しなやかな性格の女性らしい。

彼らの主な星の女性の体型は、2 つのスタイルで最も一般的です,下半身から出ている肉管はきちんとして柔らかく、自然に垂れ下がっていて、色は単色であるが、極めて鮮やかで純粋である。この華奢《きやしや》な体つきの女がそういうタイプなのだ。

もう一つの荒々しい型は、手足は小さく、腰はきわめて細いが、それでいて非常にふっくらとしていて、それが対照をなしていて、乳房は短く大きく、二つの大きな球体のようであり、臀部しりぶも非常にふっくらしている,髪の毛が爆発する。

下半身から出ている肉管も、乱雑にからみ合っていて、踊り狂う毒蛇のようで、その色は派手で、あるものは地球のコブラやイタチヘビの模様のようで、警告の色を帯びていた,見ているだけでぞっとします。

その女は無表情に歩いていたが、私の姿を見ると、目をぎらぎらと光らせた。私の背が大きく、格好が変わっているのが、彼女の性的な興味をそそったのかもしれない。

彼らの星には男性に対して強い性的嗜好を持つ女性がいて、特に容姿が特殊な男性は決して見逃しません。

しかし、彼女は私が速く逃げるのを見て、私は間違っていると思いますか?あとでわかったことだが、彼女は確かに私に対して強い性的興味を抱いており、彼女はさっさと逃げ出し、隠れ場所を探して私とセックスしようとしているわけではなかった。

この特殊なエリアでは、女性がひとりの男性に目をつけると、路上で、衆人環視の中で、他人の目を気にすることなく、男性に性的暴行を加えることができる。

グローバル・スポーツ・ネットワークやグローバル・インフォメーション・ネットワークに頼んで、周囲にバーチャル・バリアを築き、自分を隠し、他人から見えないようにすることもできる。

あとでノートンたちが言うには、彼女はすばやく走り去り、床にしゃがみこんで、自分の体の毒素を下半身の肉管にあるチューブに集中させることに意識を集中させた,グローバル・キャンペーン・ネットワークに、遠隔で毒素を補給してほしいと頼んだのかもしれません。それから、さりげないフリをして、またゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

われわれ地球人の美意識に照らせば、彼女は驚くべき美

貌を持ち、非常に美しい顔立ちをし、ほっそりとした優美な体つきをしている。

彼女は意図的にか弱い、かわいい女の子のように自分自身を装ったが、大きな目は冷たい、隠された殺意を明らかにした,映画『双旗鎮の刀士』のトップクラスの二人の刀士が、前を向いて互いに見つめ合うような視線。

ただ、彼女の目はしっかりして鋭く、僕は怯えていた。私たち地球上の男女が初めてセックスをするとき、相手と自分がどんな気持ちよさを感じているかを考えていることを私は知っています。

そして、彼らの惑星では、男性と女性の最初のセックスは、お互いを拷問し、虐待し、快楽を感じながら耐えられない痛みを感じさせる方法を考えています。これは何度も学んだことです。

特にこうした体に毒を持ち、攻撃的で虐待的な嗜好を持つ女性は、なおさらかもしれません。

ノートンたちやインフォメーション・ネットワークのコーウィンの口から、わたしが知っているのは、その女性が毒を持っているということだけで、その毒を持った女性が、見

たこともない秘密兵器を隠し持っているということはわからない。

これまでにもほかのすばらしい女性たちについて教えてもらったことがあったので、このときばかりは恐怖で胸がいっぱいになったが、ノートンたちのことが怖くてたじろぐことができなかった。

すれ違いざま、彼女は思ったとおりの動きを見せ、しゃがみこむと、カエルのようにすさまじいスピードで空中に跳ね上がり、バーチャルスーツを着たまますぐに姿を消した,体が白玉のように真正面から飛びかかってくる。

彼女の下半身の肉管から、チューブが電光石火の速さで出てきて、空中で光る弧を描き、透明な液体を、急速に噴出させて、私の腹部とペニスの根元を、撃ち抜きました,全身が震え、眩暈《めまい》がし、天地が暗くなり、熱い液体が一瞬にして滲《にじ》み出した腹部とペニスの根元の奥に。

彼女がこの液体を出すのは、神経麻酔薬のようなもので、私のペニスが勃起しないようにしたり、脳がショートしたり、一時的に思考能力を失ったり、体をうまくコントロールできないようにしたりするためでした。

なぜなら、この惑星では、自分に向き合っている女性が、強烈な性的嗜好を持っている可能性があることを男性が認識すると、男性は意識的にグローバルな運動ネットワークに頼んで、自分自身を動かすことができるからです,彼女の性的欲求は水泡に帰します。

こうした性的攻撃趣味の強い女性は、攻撃を成功させるためには、動作が速いだけでなく、西部のカウボーイのように毒物を使用するのも得意で、銃を抜くのも速く、銃の火力も強く、射撃も正確でなければならない。

彼女たちの急速な毒の噴出は、男性の脳を一瞬のうちに思考や判断能力を失わせ、この危険な女性から自分を解放してくれるようグローバルな運動ネットワークに頼むことを忘れさせる,そして自分の体をうまくコントロールできないので、その女性が次に男性の体の中にチューブを入れやすくなります。

彼女たちは毒素を噴射した後、動作が早いか遅いかであり、あなたがグローバルな運動ネットワークに自分自身を逃がすように要求するのを恐れている、遅いはあなたを拷問するために来ている。

彼女たちはまず自分の肉管を男性の体内に素早く入れます、肉管が男性の体内に入ると、男性は世界規模の運動ネットワークに、自分を移動させてほしいと頼みますが、それは難しいのです,二人の身体はもつれ合っているので、遠隔から手伝ってくれる人もなく、高度なプログラムを起動させ、通常の要請では、グローバル・キャンペーン・ネットワークに頼んで二人を引き離すことはできない。

この毒は凄いもので、その後、私は何度もこの毒に当たりましたが、ある時、ペニスに向かって毒を浴びせられ、本能的にかわされて、右脚を撃たれ、瞬時に右脚の力が抜けてしまいました。

私が彼女の放った毒液に当たった後、彼女の飛び上がった身体は稲妻のような速さで、股を広げて私の首をしっかりと挟み、下半身の 2 枚の肉片が私の顔を素早く挟み、素早く私の口の中に肉管を数本突き出した。

どうやら彼女のセックスの趣味は、男のペニスではなく、男の身体の内部の空洞にあるらしい。

光る黒が目の前にちらついただけで、顔が覆われ、何も見えなくなり、息もできなくなってしまった。

私は両手で強引に彼女の肉をわずかに引き裂いて、呼吸できるようにした。

この時、彼女の下から何十本もの肉管が伸びてきて、私の頭を絡ませ、肉管が急速に私の口から内側に向かって野蛮に伸び始め、肉管が喉から胃に向かって移動するのを感じることができました。

胃のあたりまで来ると、吐き気がこみあげてきて、吐き気がこみあげてきた。とつぜん、彼女の肉管からどろどろした液体がほとばしり出て、吐き気がだいぶおさまった。

こんどは、毒をもった女の肉管がわたしの腹部にはいってくると、はっきりとスピードが落ち、ゆっくりと泳ぎ、振動し、前後に動き、摩擦した。

その後、彼女の肉管がさらに粘り気のある液体をわたしの腸に吹きつけるのが感じられた。

大量のねばねばした液体が腹部に大きな圧力をかけ、極度の快感を伴って腹部から全身に波及した。

グローバル・エクササイズ・ネットワークに頼んで、遠くから粘液を自分の体内にテレポートしてもらい、自分の体重の何倍もの粘液を噴射することもできる。

彼女の肉管がこの粘液を吐き出すと、私の下腹部に大きな圧力がかかりました、そして次第に圧力が増し、私の肛門は制御不能になり、粘液は私の肛門から流れ出しました,脚から地面に流れ落ちます。非常に滑らかな感触で、肛門にどれだけ力を入れても流れを止めることはできない。

彼女の肉管のひとつが、どろどろした液体とともにぼくの肛門から出ていき、すぐに回転して締めあげ、ぼくの腹部と太腿のあいだで試され、触れられ、ペニスに触れられたとき,すぐにペニスに絡みつき、尿道に入り始めました。

私のペニスはぐったりしていたので、彼女の肉管がやすやすと入っていき、私の尿道に沿ってゆっくりと入っていき、膀胱にまで達しているように感じました。彼女の肉管はまだぼくの膀胱のなかを泳ぎまわり、ストローのように強く吸いつづけている。

肉管がわたしの腸を通り抜けるとき、その部分に達するのは、あまりはっきりとは感じられなかったが、わたしの尿道に達すると、少しずつはっきりと感じられるようになった。

私は何度も彼らの女性の肉管によって尿道に侵入されたが、膀胱の中に侵入されたことは一度もなかったようだ。

この時点で、彼女は妖精になり始め、私の膀胱に毒を放出し、私のペニスを急激に膨らませ、肉管を外側に強く締め付け、尿道の内側の肉管を硬くしました,そして振動棒のような節くれだった振動、その挟み撃ちと振動は私をひどく快感にさせたが、同時にひどく苦しめた。

この頃になると、彼女はまた私の腸や胃の中に毒を吹き込み始め、私にさまざまな幻覚を起こさせた。体が無数に小さくて美しい女がいて、裸で、脚がなくて、おたまじゃくしみたいな尻尾が生えていて、それが私の口から入っていって、肛門から出てきたような気がした。

やがて彼女もオルガスムスに達したらしく、肉管が私の膀胱に向かって粘り気のある大量の液体を勢いよく噴射してから、私の尿道からゆっくりと抜き出した。

ぼくの膀胱はひどく圧迫されているように感じられ、彼女の肉管が引き抜かれると、淡黄色の液体がぼくのペニスからほとばしった。最後に、ペニスがだるくなって、まだどろどろした液体が流れ出し、あるものは私の足にまで達しました、驚いたことに、血が流れていましたが、痛みは感じませんでした。

彼女の肉管が私の肛門から引っ込み、大量の粘り気のある液体が、私の太ももに流れ込みました。

それから、彼女は私の口から肉のチューブをゆっくりと抜き取り、下半身に引っ込めた。

セックスが終わると、彼女は優雅に地面に飛び降り、ゆっくりと去っていった。

しかし私は疲れていて、体中に薄黄色のどろどろした液体をたくさんつくって、その大部分が地面に流れ、地面に広がっていて、とても汚い感じがしました。

私の体はぐったりと力が抜けて、尿道がひりひりと痛み始めて、あたりの天と地、すべての物の色が激しく変わって、すべての景色が灰色がかった黄色になって、しかもはっきりと見えなくなったように感じました。

目をぱちくりさせ、なんとか正常な状態に戻ろうとしたが、見えたのはやはりあの色だった。

私はノートンたちのところへ行こうとしたが、まるで綿を踏むような歩き方だった。身体のバランスが取れず、歩くこともできなかった。それから彼らに支えられるようにして立ち去った。

第二十七話ゴーク星の金

マイクロリー、ノートン、スーデールといっしょに、いわゆるエンターテイメント施設に行ったことがあります、中に入ると、マイクロリーが壁を見上げていました、壁にはすぐに、ゴーク文字が表示されていました、マイクロリーがいなくなると,文字はすぐに消えました。

「何を見ているの?」私は興味を持って微麗に尋ねた。

「私はグローバル情報ネットワークを通じて自分の富の価値をチェックしています。」

「富の価値? どういうこと?」

「あなたたち地球人が銀行にいくら残っているかを調べるのと同じように、あなたたち地球人が言っているお金のことよ」。

「ああ、ちょっとびっくりしました。あなたたちはこんなに発達した惑星なのに、どうしてお金が必要なのですか? 何が欲しいのですか? お金が必要なのですか?」私は不思議に思った。

ノートンは言った,

「われわれのゴク星は、あなたがたの地球よりも科学技術が発達しているにもかかわらず、あなたがたの地球に必要なものは、われわれにとって重要ではないか、あるいは、われわれがそれを手に入れる過程があまりにも容易で、ほとんどただで手に入れること。

しかし、私たちゴーク族には、他人に自分のために働いてもらいたい、特別な情報を得たいといった、他の欲求もあります。需要があれば取引があり、取引があればお金があるから、お金がなくてはならない」

「お金は社会の分業を秩序化することもできるし、宇宙のなかではわれわれよりも発達した惑星がいまだにお金を使っている」とスーデールが口をはさんだ。

「しかし、われわれのゴーク星の貨幣は、あなたがたの地球の貨幣とはちがって、実物を見ることのできない仮想のものです。われわれの金はグローバル情報ネットワーク上の数字にすぎない。私たちはお金を稼ぎ、お金を使い、消費し、グローバル情報ネットワークは自動的に記録を追跡します。

あなたがお金を稼ぐと、世界中の情報ネットワークの仮

想デジタル人があなたの近くに現れ、あなたに代わって記帳し、お金を使うときはあなたのために記帳し、あなたはお金を持っていない、誰もがお金を見ることはありません,お金はグローバルネットワーク上の、数字にすぎません。

われわれは自分の脳とグローバル情報ネットワークのリンクを通じて自分の富の価値を調べることもできるし、時には面倒くさがって外部のコンピューターで調べることもできる」と微麗氏は言う。

「よくわからないんだけど、ボスのために地球で働いているとか、ボスのために穴を掘っているとか……」

「生きてる」スーデルは笑った。「どうして元兄は穴を掘るのが好きだったの?」

「私は穴掘りが好きなわけではなく、よく泥を掘っているし、地球上ではよくウナギを掘っている。

たとえば、私は地球上のボスのために穴を掘り、ボスは私にお金をくれました。そして、あなたの惑星の上司のために穴を掘ってください、あなたの惑星の上司は私にお金を与えてください、あなたは現物のお金を持っていませんか?どうやって?」

「簡単ですよ!」と微麗は言った,

「グローバル・インフォメーション・ネットワークは、あなたとボスのまわりにダミー人間を登場させ、ボスがあなたにいくら払ったかをダミー人間が教えてくれる。

もしあなたが私たちのような脳を持っていれば、グローバルな情報ネットワークにリンクすることができ、あなたの富の価値がどれくらい増加したかを即座に知ることができます。

ただ、元兄貴は地球人だったから、脳はグローバルな情報ネットワークに、リンクできるようになったけれど、グローバルな情報ネットワークに、アイデンティティを持たないことによって、あなたに与えられた富の価値を、使うことはないでしょう,ゴーカイ人のやり方では、地球にいるよりも問題がある」

「それで、ゴーク星人はどうやってお金を稼いでいるの?」

「われわれの惑星ゴークでは、誰でも定期的に同じだけの富を手に入れることができます。普通の生活には何の問題もありません」とノートンは言った,

「しかし、余分なお金を稼ぐことは容易ではない。稼ぐお金のほとんどはグローバルスポーツネットワークとグローバル情報ネットワークを通じて行われるため、お金を稼ぐには 2 つのネットワークを中心にしなければならない」。

グローバルな情報ネットワークによって作られた多くの組織が、私たちの惑星ゴークにあります、私たちはネットワークプロトコル部族と呼ばれています。

ビリーとシューデルと私は、地球人の研究という部族に属していて、地球人に興味を持ち、地球人について長い間調査研究してきました,だから、あなたがた地球人のことについては、ある程度の発言権を持っています。

きみたち地球人の研究は、われわれにも富の価値を与えてくれる。

私たちは地球人を研究し、地球人の物品を展示し、情報を集める活動の場として、物理的な家を建てるつもりです。

この家は成功しました、そして、ビリー、シュデールと私はある程度の富の価値を得ました。

そして、この家からグローバル・インフォメーション・ネットワーク上のバーチャル・アドレスを入手することがで

き、われわれゴーカ族はグローバル・インフォメーション・ネットワークを通じてこのバーチャル・アドレスにアクセスし、見学すること。もちろん、皆さんは地球人ですから、このようなバーチャルアクセスは理解できません、私たちのバーチャルアクセスは、実際に人々がここを訪れるよりも、はるかに多いのです。

これから訪れる人が増え、私たちは持続的に富を手に入れることができます。

これから家を建てるんだから、前さん、家を建ててどうやってお金を稼いでいるか見てください。これからマイリーの住まいに戻って仕事を始めます」

グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、私はノートン、スーデール、ビリーと一緒にビリーの家に戻った。三人とも空中で手を動かすと、すぐに三次元のバーチャル画像が現れ、三次元のバーチャル画像を操作している。

「君たちは現場にはいない家を作っているのに、どうしてこの上でやれるんだ」と私は尋ねた。

「ああ、そうですね」左手をひっくり返し、優雅に手のひらを上に向けて、「グローバル情報ネットワークで操作す

れば、家を建てることができます。家ができたら、また一緒に見に行きましょう」

「まずはゴーカー生物学研究プロトコル部族に入ることだ」とノートン,

「ゴーク生物学研究プロトコル部族に報告書を提出して、地球人を考察し、研究することの重要性について論じる。この報告書は、わたしが以前提供したもので、現在は承認されている。ごらんのとおり、われわれはこの地球人研究所を建設して、その富の価値を獲得したのだ」

「私は『ゴーク・ハウス・マニュファクチャリング・プロトコル』に参加しました。私たちは彼らにある程度の富を与え、彼らは私たちが家を建てるのを手伝ってくれました。そして今、彼らは私たちに家の構造図を提供するよう求めています」とシュデール氏は言う,「しかし、家の構造図を作るには長い時間がかかります」

「世界中の情報ネットワークで、無料で入手できる、住宅地図です」、とビリーは言いました、「私が検索します」

しばらくして、マイクロリアは、「うまくいった」と言いました。

「〈ゴーカー・ハウス・メーカー・プロトコル〉がこの家を完成させるまで、どのくらいかかるんですか。

「一瞬のうちに、あなたがたの地球時間でいえば、ほんの数秒で完成させることができます」とノートンは言った,

「果克星人造家屋、工業製品、いずれも一瞬のことで、建てる時には多くの時間を必要としないが、設計には一定の時間を必要とする」

「どうしてそんなに早いの?」

「〈ゴーカー・ハウス・マニュファクチャリング・プロトコル部族〉は、グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて家を建てています。グローバル・キャンペーン・ネットワークは、加工された物体を遠隔操作で高速に切断したり、高速で運んだり、高速で冷間溶接したり、高速で組み立てたりすることができます。これらはグローバル情報ネットワ

「ハウスメイキング・プロトコル部族の連中だって、ハウスメイキングの現場に行った者は一人もいないし、グローバルな情報ネットワークを使って遠隔操作している」

微麗の仮想画像の中心に 1 つの正方形の格子が現れて、

急速に両側に拡大して、微麗の合わせた両手は、正方形の格子と一緒に拡大して、口の中で唱えて、「家は成功しました!」

グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、私たちは急いでこの家に向かいました。

家はとても背が高くてきれいで、やはり実体のある家で、仮想のものではありません。

ノートンはなめらかな壁を撫でながら言いました、「これはグローバル・キャンペーン・ネットワークが、山の岩から切り出したもので、人工的に作られたものではなく、岩肌を保っています、私はこの模様がとても気に入っています、とても美しいです」

「この家を建てれば、君たちはこの家を建てることで、大金を稼ぐことができるだろう?」と私は彼らに尋ねた。

「はい、私たちの富の価値は非常に増加しています」とシュデールは答えました

「この家があとで何の役にも立たず、取り壊されるかもしれないとしたら、その後の収入はないでしょう」とノートンは付け加えた,

「ゴーク星のいくつかの特別な状況では、人々や環境に有害な建物や家は、後で建設主の富の価値を差し引かれる可能性があります

「家を建てるのは簡単だし、お金を稼ぐのも簡単だと思うのに、なぜお金を稼ぐのが難しいと言うのですか?」と私は不思議に思った。

「一番の問題はアクセスです。あなたの提案が承認され、応答されるかどうかです」とノートン氏は言います。「それに、あなたがプロトコルの部族に加わり、組織に依存するということは、個人ではお金を稼ぐのが難しいということです」

「個人も他人に個人的なサービスを提供したり、科学研究に従事したり、文化芸術創造などでお金を稼ぐことができる」と微麗さんは言う,

「異性の友達とのセックスを数字に翻訳して、グローバルな情報ネットで数字を売ることもできる」。

「もしお金を稼げなかったら、あなたたちはどうやって生きていけばいいの?」

「ああ、これはあまり心配する必要はない。私たちは定

期的に一定の富の価値を得ることができる。基本的な生活は問題ない。ただ、あなたは豊かに生きたい、生きたい、もっと楽しく生きたい、もっと目新しいゲームをしたい、もっと多くの体験がある,

「そして、私たちゴーク族の生活では、栄養を補給したり、旅行に出かけたり、住んだり、ほとんどのゲームをしたり、ほとんどのペットを飼ったり、病気を治したり、健康管理をしたり、身体を入れ替えたり、いろいろなことが無料でできます」

「もし私が何もせず、定期的に富の価値を得るだけで、節約に努め、時間が経つにつれて、私もモノポリーになることができますか? 」と私は尋ねました。

「それはネガティブな考えです。あなたの前のお兄さんは、わたしたちのゴーク星に住んでいたら、怠け者になっていたかもしれません」とスーデールは言った,

「私たちのゴーク星では、あなたはいつもお金を稼いでいないし、お金を払っていない、あなたの富の価値の一部は、アルゴリズムを介して、このような状況を識別することは容易であることを控除される可能性があります。そんな怠け者

は歓迎しません」

「私たちのゴック星では、富と権力は一体化しており、富の価値を持つ者は、他者の行動を支配する力を持つことができます。簡単に言えば、あなたがモノポリー、つまりリーダーであれば、影響力を持つことになります。だから、ゴーク星の金はもっと重要なんだ」

ノートンは言いました,「わたしたちのものの多くは無料ですし、ごらんのとおり、わたしたちの住居には、あなたがたの地球のように、ものを生産してお金を稼ぐようなものは、わたしたちのゴーク星では通用しません。大金を稼ぐためには、コミュニティに依存しなければなりません、大きなコミュニティと競争できないので、大金を稼ぐのは難しいのです。

強力なグループ、公衆に提供される物資、質が良いだけでなく、その大部分が無料であるのに、どうして無料のグループと競争できるのか?私たち個人は、パーソナライズされた製品を提供するか、パーソナライズされたサービスを提供するしかありません。

特に、グローバルな運動ネットワーク、グローバルな情報ネットワーク、様々な先進的なアルゴリズムを持っている

グループは、質の良い、無料のモノ、情報、サービスなどを大規模に提供しています,その結果、多くの個人が競争できなくなり、お金を稼ぐ機会の大半を失ってしまうのです」

「どうやら、あなたがたのゴーク星の紙幣《しへい》を地球に持って帰って、見せびらかしたいようですが、もう望みはありません」

「われわれのゴーク星の規則によれば、あなたはいかなる物体も持ち帰ってはならないのですよ」とスーデールは言った。

第二十八話ゴーク星のリーダー

あるとき、ノートンたちと一緒に、ゴーク生物学者のアヴィンソンを訪ねたことがあった。アヴィンソンはノートンと同じような体つきをしていた。顔つきは穏やかで、目つきは鋭く、知的だった。ノートンと同業で、ノートンよりも有名で、ノートンたちのリーダーだった。私に会って、エヴァンソンは言った,

「地球の元兄ようこそ。私とノートン、ヴェリティ、ス

ーデールは、グローバル情報ネットワークの『リサーチ・アース』部族のメンバーで、あなたたち地球人についてよく話し合っているので、ちょっとしたコミュニケーションをとることができます」

私はエヴァンソンに尋ねました、「あなたの惑星には、どれくらいの国がありますか?」

「われわれのゴック星には国がひとつしかなくて、惑星全体がひとつの国なんです」とエヴァンスンは答えた。

「あなたの惑星の最高指導者は誰ですか?」

「我々には最高指導者がいない」

「あなたがたの惑星ゴークには最高指導者がいないのですか?われわれ地球にだって、ヤクザにリーダーがいるとは思えないな。あたし、はじめてあなたがたのゴーク星の土を踏《ふ》んだとき、あなたがたのゴーク星には、あたしを迎《むか》えにきてくれるお偉方《えらがた》がいるんじゃないかと思ったんですけど、そうじゃなかったんです」

「厳密に言えば、われわれの惑星ゴークの最高指導者は、〈グローバル・パブリック・ネットワーク〉上では仮想的な存在で、〈グローバル・ネットワーク・プロトコル・アルゴ

リズム・コンソーシアム〉と呼ばれています」エヴィンソンは言った,

「私はゴックバイオリサーチ部族の盟主であり、生物学の分野でリーダーシップを発揮しているだけだ。

惑星ゴークの指導者たちは、本質的には、世界の情報ネットワーク上に存在するだけで、お互いに受け入れられるように合意されたアルゴリズムプロトコルです。

もちろん、これらのアルゴリズムのプロトコルは、絶え間なく進化しており、多くのアルゴリズムのバージョンが絶え間なく変更されています,この人工知能の情報は、世界中の情報ネットワークに、デジタル形式で存在しています。あなたたち地球の指導者は、具体的な個人でしょう?」

「われわれ地球上の指導者の構造はピラミッド型で、地球上には多くの国家があり、国家の最高指導者は主席あるいは大統領と呼ばれ、次は知事あるいは州長と呼ばれ、次は県長と呼ばれ、次は村長あるいは郷長と呼ばれ、次は村長と呼ばれ、その次は平頭庶民と呼ばれる」

「われわれの惑星全体がひとつの国であり、その周囲に何十もの惑星があって、そのすべてに人間が住んでいます。そ

してそれらの惑星は、厳密に言えば、ひとつの国なのです」とノートンは言った,

「われわれのトップはグローバル情報ネットワーク・アルゴリズム・プロトコル・アライアンスであり、次のステップはグローバル情報ネットワーク部族の盟主であり、次のステップは普通の人々だ」

「われわれのゴーク星系で本当の権力を握っているのは、グローバルな運動ネットワークをコントロールしている連中だと思う」とシュデールは言った,

「考えてみてください、私たちはグローバル・スポーツ・ネットワークから、切り離せないことをしています、グローバル・スポーツ・ネットワークは、ゴーカー星全体を支配しています」

「私は違う意見を持っています,

「私たちが何をして、どれだけの富を手に入れるかを決める、『価格設定アルゴリズム部族連合』があります、私たちに価格を設定する、『価格設定アルゴリズム部族連合』は、グローバルな運動ネットワークを、コントロールしている人たちよりも、ずっとすごいと思います」

「ひとつのことをした人間がどれだけの報酬を受け取るべきかを決めることは、世界中にあまりにも多くの人々がおり、その価格設定は体系的で非常に複雑なものであり、ひとりの人間には手の届かないものだ。こうして自然に情報網アルゴリズム同盟が生まれた。これは最初のアルゴリズム連合であり、多くの人々が互いに協力し合い、妥協し合って妥当な価格を設定しているのです」とノートンは言う,

「グローバル情報ネットワーク上の各アルゴリズム連盟を管理する『トータル・アルゴリズム連盟』は、わがゴーク星球の最高指導グループです」

「ある時、『価格決定アルゴリズム連盟』がわざと私の富の価値を過小評価しているのではないかと感じ、もし私を無視するならば、『全世界情報ネットワーク監視連盟』に苦情を申し立てると警告したところ、彼らはすぐに謝罪し、私の富の価値を過小評価したことを補足した。スーデールは言った,

「われわれに直接富を与える部族連合のほうがすごいかもしれない」

……

「しばらくやっているうちに、あなたたちゴーク星人の最高指導者が誰なのか、わからなくなってきたわね」と私は言った,

「あなたたちの指導者ははっきり言って、コンピュータとネットワークの中のアルゴリズム、デジタル人であり、実在の人物ではなく、虚偽の人物であり、あなたたちはどのように喜んで虚偽の指導者によって指導されているのか」。あなたたちの星は高度に発達しているのに、なぜ偽の指導者なのですか? 」

「われわれのゴーク星の仮想指導者たちも、ある日から始めることを約束する会議ではなく、徐々に発展してきた」とエヴァンソンは語った,

「グローバルな情報ネットワークとグローバルな運動ネットワークがある程度発展しているため、人々が個人で独自に富を獲得することは難しく、取得は主にグローバルな運動ネットワークとグローバルな情報ネットワークに依存している。グローバル情報ネットワークプラスグローバル運動ネットワークは、人々の生活、生産のほぼすべての問題を解決することができ、バーチャルリーダーの出現は、実際には必然

的な結果です

エヴァンソンが手のひらでなぞると、まわりに仮想イメージが現われ、戦争のシーンがいくつも映し出され、コールドウェポン時代の戦争のように群衆がざわめいた。

エヴァンソン言います:

「歴史をふりかえってみると、ゴーク星には、あなたがた地球人と同じように、エネルギーと物質的な富をめぐってしばしば争っていた多くの国々がありました。

グローバル・インフォメーション・ネットワークとグローバル・キャンペーン・ネットワークの出現によって、エネルギーと物質的な富はもはやゴーク星にとって重要ではなくなり、ほとんど無料になった。

エネルギーと物質的な富を奪い合う必要がなく、紙幣が徹底的にデジタル化されたため、国家は紙幣を発行する権力を失い、国家の力が弱まった。

グローバルな運動ネットワークは、人々が瞬時に世界のどこに現れることができ、国家の存在はますます不要になり、かえって人々の移動にトラブルをもたらし、社会の発展を制約しています。

グローバル・キャンペーン・ネットワークができ、いつでもどこでも人の犯罪行為を制止できるようになってから、国家は外敵の侵入に抵抗し、犯罪を取り締まり、社会の公平と秩序を維持する面での機能を失った。

国家はついにゴーク星で消滅した。

国家が消滅するとともに、国家指導者も姿を消し、グローバル情報ネットワーク上のアルゴリズム・プロトコル同盟が徐々に国家指導者の機能を代替するようになった。

グローバル・インフォメーション・ネットワークにおけるアルゴリズム・プロトコル・ユニオンは、われわれのゴーク星系の国々が完全に消滅する前に、事実上出現していたのです」

「馬鹿げた質問をしても笑われないぞ、君たちゴーク族がリーダーになるのは、君たちの言う種族の盟主になるのは、難しいことなのか?」

「難しいでしょう、まず、あなたは部族を選ばなければなりません、例えば、あなたは生物学の専門家で、生物学の専門家で、独自の見解を持っています、あなたは、ゴック生物学の部族を選ぶことができます、世界中の情報ネットワー

クに頻繁に自分の意見を投稿し、様々な問題に取り組み、長い時間をかけて、様々な問題に取り組み、明らかに現在の盟主よりも優れています、それは、アルゴリズムの正確な統計を持ち、部族の同意を得て、現在の盟主に取って代わることがで。

ただ、普通《ふつう》、盟主はあまり勝手に変わらないし、それに、ゴクシン人は不老不死だから、その過程が長いから、盟主になるには忍耐《にんたい》がいる」

「お金を払ってもいいですか? たとえば、私はたくさんのお金を持っていて、部族のメンバーにたくさんのお金を与えて、すぐに盟主になることができますか? 」と私は尋ねた。

「生きている! 」スーデールは笑った。「地球人はそれでいいんだ。贈収賄にかけてはずば抜けた能力を持っている」

「われわれゴークシャーでは成功しにくいのです。なぜなら、われわれゴークシャー人は基本的に無料で暮らしており、お金は余分な楽しみのために必要だからです。だから、お金に対する欲求はそれほど強くありません」とノートンは言った,

「また、あなたが盟主にお金を出して買う行為がすぐに

発行されて阻止されるようにする専門の『グローバル情報ネットワーク監視連盟』があるため、実現が難しい」

「地球にはインターネットがありました、我々のグローバルな情報ネットワークと同じです、地球人がフィールドの本質を解読すれば、グローバルな運動ネットワークが構築できます、グローバルな運動ネットワークがあれば、地球人は世界中のどこにでも、瞬時に現れることができます、そして、あなたの国は消え去り、最終的には、地球全体が一つの国になるでしょう」,

「あなた方地球の指導者も徐々にインターネット上のバーチャル指導者に取って代わられることになり、これは宇宙全体の文明発展の趨勢であり、宇宙の高級文明がここまで来ることは誰も止められない。あなたたち地球人がインターネットによって仮想的にリードされることは、必然的に起こることであって、あなたたち地球人が場の本質を解読する時間に依存するだけです」

「だいたい、きみたちの星でいちばんすごいのはだれだ」と、私はたずねた。

「情報ネット上のバーチャルリーダーの本質は、人工的

に作られた知恵であり、アルゴリズムであり、アルゴリズムが私たちの惑星を制御し、支配しています。アルゴリズムを作り、それを所有しているのは何者かーー数学者だ!われわれの惑星を支配しているのは数学者にちがいない」と、エヴァンソンはいった。

「物理学はだめですか? 物理学は重要ではないのですか?」と私は尋ねた。

「物理学は重要であり、物理学はすべての科学の基礎ですが、物理学はある程度まで発展すると自然に終わり、もはや発展しません。宇宙のどんな惑星であれ、どんな文明であれ、それが認識されると、:

宇宙は物体とその周囲の空間で構成されており、それ以外のものはすべて存在しない,残りは、私たちの観察者が、空間内の物体の運動、または物体を取り巻く空間そのものの運動を記述することです。

それで物理学は自然に終わり、物理学の深さはそこで終わり、残りは平面を広げるか、修正するかのようなものです。

数学に終わりはない。ある意味で、物理学は数学の一分の一に過ぎず、物理学は数学の中で運動現象を記述する一分

の一に過ぎない。

数学者というのは恐ろしいものです、サークルを形成し、リソースを把握し、そのサークルに参加したいと思ったら、設定したアクセスコードを解読しなければなりません、さもなければ、彼らはあなたをプレイさせず、あなたをサークルから追い出します。

これらのパスワードは、アルゴリズムです。これらのアルゴリズムは、彼らが人工的に設計したものもあれば、自然に存在するために発見されたものもあり、非常に恐ろしいものであり、多くの天才レベルの人々は入門することができません。」

二十九、仮想旅行

ある時、微麗の住居で、私は微麗に尋ねました、「あなたがたのゴーク人には、怠け者で、ゆっくりしていて、急いでいないという特徴があるとどう感じますか?」

「ゴーク人の生活は主に遊びであり、普通の人は体力と頭脳の仕事を問わず、許可されておらず、普通の人の仕事は

混乱を招くだけです。

なぜなら、われわれのすべてはバーチャルネットワークであるグローバル・キャンペーン・ネットワークとグローバル・インフォメーション・ネットワークに依存しており、破壊されることはないからだ。それは人工知能が操作しているもので、私たちの人工知能は何千年にもわたって開発され、非常に強力で、普通の人は比較できません。特殊なスキルを持った人だけが働くことを許され、仕事はごく少数の人々の仕事であり、彼らが働いている時間も遊んでいる時間に比べればごくわずかなものでしかない。地球上のテクノロジーがある程度進歩したら、それも同じことになる」シェリフはベッドで寝返りを打って言った:

「私のような普通のゴーカイ人にとって、グローバル・キャンペーン・ネットワークはコンピューター・プログラムによって自動的に私たちの体にエネルギーと栄養を供給してくれるので、私たちはあなた方地球人のように飲食について考えるべきではありません。

私たちの服はバーチャルで、つまりグローバル情報ネットワークが遠隔で作成したバーチャルイメージが私たちの身

体にあり、ある服と私たちの身体は一体化しており、服は身体から生まれたものだ。ですから、あなた方地球人のように服を着ることを考えないようにしましょう。

私たちには親も兄弟もなく、病気の心配も死の心配もありません。あなた方地球人は富と権力を求め、私たちは感覚と経験を求め、遊ぶこと以外の人生を生き、遊ぶことが私たちの生活のすべてであり、遊ぶことでより多くの経験を得ることができます。」

「なるほど、それで君たちはいつもどんなふうに遊んでいるのかね? どこへ行って遊んでいるのかね? 主に何をしているのかね? 」

「ああ、いろんな遊び方があって、いろんなところに連れてってあげたんだけど、いつもバーチャル旅行があって・・・」ビリーは考え事をしている様子だったが、突然ベッドから飛び降りると,「ともセンパイ、バーチャルトリップに連れてってあげる」

「じゃあ、これから出発するのか」私は立ち上がり、ドアに向かった。

「いやあ、ここならバーチャル旅行ができますよ」とビ

リーは両手で私の腕を取り、猫のように頭を私の胸にこすりつけ、「今からバーチャル旅行を開きます」と言った。

ビリーが手で空中を切ると、空中に白い煙が立ち上り、それが急速に立体映像に変わり、大きくなっていった。これは彼らのグローバル運動ネットワーク、グローバル情報ネットワークが遠隔操作した三次元立体映像だ。

大きな木のような植物が何本か映っており、その周りには茫漠とした大草原が広がっている。上空に浮かぶゴキシン文字に目をやると、〈ワールドワイド・インフォメーション〉のカスタマーサービスが〝未開の荒野〟と翻訳していた。

「私たちはすぐに装備を選び、騎獣を選び、弓とその他の武器を選び、召使いを選び、ペットを選びますが、ペットはいらないと思います。私たちは未開の時代に戻ります。分かりますか?」と微麗は言った。

「ええ、わかります」実際、私はぼんやりしていた。

「よし、バーチャル・トリップを始めよう」マイクロリーはもう一度空中を手でなぞった。周囲の光景が変わったような気がした。私とマイクロリーは、さっきの三次元バーチャル・イメージに溶けこんでいた。

私たちはサバンナに立っています、「私はあなた方の地球の原始社会と同じような背景を選びました。

木の葉と花輪だけを身につけたわたしとリュウジは、原始的なカップルになって、荒涼とした大草原を歩いていた。

それから、私たちはたくさんの動物が集まっているところに来て、私とメリーはそれぞれライオンと馬のような乗り物を連れて行きました。別の場所で、シェリーと私は弓と短剣を受け取りました。

ビリーはペットはいらないと言い始め、ペットを見て気が変わったので、私たちは従者を連れず、私と彼女はオウムのような小鳥を連れて、私たちの前を飛び、私たちと一緒に歩きました。

私たちが歩いていると、3 人の男が 1 人の男を追いかけていて、ビリーは、それは 3 人の強盗が商人を追いかけていて、彼を殺そうとしているのだと言いました。

「その商人を助けて、三人の強盗と戦うべきだ」と私は提案した。だが、シェリーは隠れろと言った。私は言いました、「戦いに負けて、私たちが殺されるのは、とてもつらいことではないか」

「そういうわけじゃないけど、わたしたちのバーチャル・トリップは終わったのよ」シェイドがいった。

「だったらなぜ攻撃しなかったんだ... ... ほら、かわいそうな商人が殺された」

「いいえ、どういうわけでもありません。私の言うことを聞いてください。」微麗は突然横暴になって、「私があなたに攻撃するように言ったから、あなたは攻撃することができます。」

その後、私たちは大規模なチームに会ったが、マイクロリーは私たちに攻撃するように言った、私は躊躇していたが、マイクロリーは半月刀アラクを振って、すでに突入していた、私たちは勇敢に敵を殺したが、矢をたくさん身に着けていた、毎回矢に当たった,痛みを感じました。

捕虜《ほりょ》にされそうになったので、仕方なく崖《がけ》を転げ落ちた。崖の下で、私は微麗が盲目的に指揮していることを恨み、微麗は、私は勇敢ではない、しかも愚かだと言った。

私たちはこのようにけんかして、微麗はもう游ばないと言って、手でこのように引いて、私たちの周りの場面が突然

変わって、目の前は微麗の家です。

「お兄ちゃん、バカだって言ったけど、怒ってないでしょ? このままバーチャル旅行続けるの? 」

「うん、怒らないよ、このバーチャル旅行は本物みたいで面白いから、私も続けて遊びたい」

「それじゃ、バーチャル・トリップをつづけましょう」ビューティ・フェイスが急に色っぽくなった。「でも、こんどは別々に旅行することになりました。あなたとは二度といっしょに旅行する気はありません」

微麗が手で空を切ると、煙が再び現れ、三次元のバーチャル映像が徐々に現れ、私たちは再びバーチャル旅行のシーンの中に入った。

今回は、自分で決めることができて、「ピンクピーチガーデン」を選びました!微麗は「蛮荒原」を選んだのに、微麗はどうして殴ったり殺したりするのが好きなの?

「ピンクのピーチガーデン」は恋愛関係かもしれないし、セックスの内容もあるのでは?案の定、空からは柔らかなピンク色のスカーフがたくさん垂れ下がり、身の回りには桃の木のような植物が二列に並び、大きな桃の花にピンク色の女の

華奢《きゃしゃ》な身体を包んでいる。人々は桃の木の 2 列の間を歩いて、桃の花の真ん中の女性は、魅力的な表情のすべての種類の挑発を行い、ナレーションは、彼らが勝つために出て行くことができる前に、誘惑に抵抗すると述べた。

人が歩いていると、両側の桃の花がだんだん人に近づいてきて、桃の中の女の人の体に触れることさえできて、これらの体の肌は極度になめらかな感じがします,そして少女の身体から発せられるような濃厚な香りに心を奪われ、どこまでも誘惑されてしまいます。

くそ!なぜ自分をコントロールするの?ピーチガーデンから抜け出す理由とは?最後の数歩のところで、桃の花は人のすぐ近くにあり、桃の花の中の多くの女たちが小さなピンクの手を伸ばして、私の体を撫でてくれた。わたしは桃の花の女を抱きしめたいと思い、彼女が望むこと、望むことをすればそれで満足だと思った。

ところが突然、ハート型の風船がぼくと〈桃の花〉のなかの女性の抱擁をさえぎり、その風船の上にはゴーカー星の文字が点滅していて、ぼくはそれに目を走らせた,耳元で全球信息網客服可温翻訳: “あなたの最愛の女性があなたを呼んで

います!”

くそ!大好きな女性?誰なの?微麗さん?召喚?こんな時はイタズラでしょ?やっぱり、会ったら愛される女というのは微麗《びれい》である。

「一緒に旅行したくないって言ってなかった?」

「ああ、気が変わったじゃないか、これからおまえをおれの乗り物に変えて、おまえの上に乗ってあちこち旅をするんだ、未開の時代におまえはおれの乗り物だった、海の中でおまえは大きな魚だった、地球の自動車の時代におまえはおれのソファのクッションだった、おれたちの ufo の中でおまえはおれの空飛ぶ円盤の中の座席だった」

「おれは人間だぞ、どうしておれをこんなメチャクチャなものに変えることができるんだ」

「あなたが喜んで乗ってくれることを保証する方法があります」ビリーは自信たっぷりに言って、私に手を差し出し、私はやはりライオンのようで馬のような動物になりました。

微麗は私の上に座って、明らかに微麗の下半身が裸で私の体にくっついていることを感じます、奥、微麗は私が彼女に乗って喜んでいると言いました、それだからです、しかし、

彼女の非常に滑らかな肌は,下半身のふくらんだ肉唇は、たしかに刺激的だった。

マイクロリーと私はバーチャル・トラベルを始めました、一緒に原始人の部族に行ったり、海底に行ったり、火山の中に入ったり、燃え盛る火や赤いマグマが、激しく噴出しているのを見たりしました,不思議な場所にも行きました。

その後、我々は好戦的な惑星に飛んで ufo を駆動し、撃墜され、燃やされた。わたしもシロウズも、この星の人たちにつかまり、身体を解剖され、すべてが本物のように感じられた。身体を解剖するとき、肌を切る音まで聞こえてくる。

その後、ほかの惑星人たちの助けを借りて、わたしたちは脱出し、新たな旅をはじめた。ただ、最後になって、微麗盲指揮に狼狽《ろうばい》させられ、喧嘩《けんか》になって、この仮想旅行は終わった。

ただ、シューデールとノートンは余興が尽きないようだったので、私たちを仮想ゲーム専用の会場に招待してくれた。

わたしたち一行はグローバル・スポーツ・ネットワークを通じて、この専門のバーチャル・ゲームの会場にやってきた。

バーチャルゲームアリーナのバーチャルデジタルイメージキャラクターは、空気中を漂う半人半ウサギの動物のイメージです。

アリーナは高く立派で、ただ門がなく、壁の下の地面には多くの円が描かれている。

人が入っていくと、壁の下の円の中に立っていて、その円のまわりで光の点がゆっくりと回転していて、壁にはたくさんのゴーカー星の文字や映像が現われ、ノートンたちはそれを押した,全員が中に入った。

内部空間は巨大で、多くの小さな部分に分割され、小さなスペースには 1 人の人が収容され、人が中に入ると、宇宙での無重力のように、急速に浮遊します。

あとでわかったことだが、ゴーク族のバーチャル・ゲームは、人工的にスキャンされたカットオフ技術によって、さまざまなコンテキスト信号を人間の脳に送りこみ、人間の体を宙に浮かせ、姿勢を調整するものだった,目的はよりリアルな感じを与えることですが、ビューティーハウスでは、すべての人々がベッドで寝ている、ここでは効果がありません。

専門のバーチャルゲームの会場は微麗の家とは違い、選

択できるコンテンツが特に多く、シーンはよりリアルで、人の様々な感覚は現実と区別できず、人の感覚だけでは区別できない。

しかし、私は脳を目覚めさせようとしています、これは仮想であると、常に自分に言い聞かせています。

しかし、ゲームでは、人間が受け取る信号の一部が処理されている可能性があり、例えば、バーチャルゲームでは、敵のナイフや銃で撃たれ、痛みを感じたが、軽度であった。異性とのセックスの感覚なら、本当に現実と変わらない。

専門的なバーチャルゲームの会場で、私は適当なものを選びました、「星間旅行」、「野蛮人との戦い」、「私は王である」などです,いろいろなエロティックなプレイ内容が最も刺激的で魅力的でした。

「スタートレック」では、人々が宇宙船に乗って、空から宇宙の様々な星の姿を見るように、ボイスオーバーで様々な紹介をしています。

特に人が住む星については、詳しく紹介しています。彼らの紹介から宇宙の多くの星には高度に発達した文明人がいることがわかる。

「バーバリアンとの戦い」では、地球人に関する内容を探していましたが、あなたが話す必要はないというアナウンスがありました。あなたが何を望んでいるのかがわかります。やはり,地球人に関するゲーム番組を見つけました。

アメリカ人、ヨーロッパ人、日本人、中国人が登場する地球版の「バーバリアンとの戦い」という番組は、これらの国々がもっともゴーク星人の興味をひきやすいように思われた。

ただ、日本人は好き勝手に他国の人を殺したり、自分の国の人を勝手に殺したりする人として描かれています。

中国人は相変わらず清朝人のイメージで、新しい内容に入れ替わらなかったらしく、中国人の死に方はいずれも三つ編みにされ、首に一刀が巻きつけられ、頭と体が分かれるというものだった。

アメリカ人は上半身が大きく、腰が細く、脚が鋼鉄の銛のようなヘラクレスと表現される。ヨーロッパ人はパイプを吸う哲学者である。

地球バージョンの「私は王である」では、自分自身が王になり、敵に立ち向かい、スパイを除き、軍隊を管理し、国

を支配し、栄光を楽しみ、いくつかの妻に怒られて死ぬ。

最も惹かれたのは、セックスをテーマにしたバーチャルゲーム番組だった。「僕の彼女は虫」という言葉があり、女と虫の二重の特徴を持つ巨大な虫のような体があり、その体はいくつかの節で構成されており、それぞれの節には一対の乳房があり、地面を歩くことができる,体を蠢《うごめ》かして這うこともできる。

口からも下半身からも、とりわけ鮮やかな色をした緑やピンクやその他のどろどろした液体をたくさん吐き出すことができる。肥満して蠢《うごめ》く身体は男性にとって魅力的だ。

虫女はさまざまな落とし穴を作り、あなたを誘惑する方法を考えています。

「糸を吐く女」の女性は、悪魔のようです、とても細い体で、素早い動きで、糸を吐くことができます、糸を吐くと、網を作って、あなたを捕らえることができます、糸はあなたの体に入り込み、あなたをコントロールするのです,捕らえることができます。しかし、あなたはまた、彼女たちの陰謀を打ち負かすために多くの解読神器を持っています。

「蛇の女」は狡猾で陰険で、待ち伏せを隠し、植物に変装することができる。彼女たちの毒にやられて一時的に行動能力を失い、あなたの自分の身体にまとわりつき、あなたの身体に侵入することを好み、あとでなかなか引き抜けない。

地球版のゲームでは、巨大な女性がいます、彼女たちに捕らえられると、たくさんの布で、縛られてしまいます、彼女たちは、あなたを子供のように扱い、大量の乳を飲ませます,あなたを連れ回し、自由を奪います。

「水中世界」には、さまざまな奇妙な生き物がいます、男性が遊びに行くと、ほとんどが女性の体と、海洋生物の体が合体しています、半分は女性の体です,半分は女性の体です。

大きな魚と女の合体があり、鮫《さめ》のようで女の体のようでもあり、蛸《たこ》のようでもあり女のようでもあった。あるものは巨大な貝殻で、その中に女が寄生している。

男はまるで本物の海の中にいるような感覚で、海の中をさまよい、これらの美しい生き物たちと知恵比べをしている。

地上版では、一般的にヘビと女性の合体、ワームと女性の合体があり、ライオンと女性の合体に似ています,カエル類と女性の合体、ノミ類と昆虫と女性の合体、鳥類と女性の合

体・・・これらの多くは寄生種に属する。

森の中、草むらの中、海の中、宇宙の中、雲の中、海の底、地下の洞窟の中、どことも知れぬ奇怪な光景の中で、この半人半獣たちは、男たちを捕らえるために巧妙に仕組まれた罠を張り巡らせていた,あるいは男の身体にもぐりこんで、男を自分の獲物にする。あるいは男を自分の巨体に吸い込む。

もちろん、男たちも捕らわれの身から逃れるために、多くの解読神器を身につけている。

ゴク星のセックスバーチャルゲームショーは、男性にとっては、動物と女性の二重体の特徴を持つさまざまな奇妙な生き物がセールスポイントです,さまざまな触手、肉管、毒液、粘液などの武器を持ち、さまざまな罠を仕掛けて男をとりこにする。

男もまた多くの神器を掌握し、智慧に富み、女の様々な罠と心の計略を見破り、できるだけ時間を引き延ばして女に捕らわれないようにするか、あるいは捕らわれ、肉管に体内に侵入され、毒液を注入されることから逃れる。

できるだけ巨大な女寄生人種に体内に吸い込まれないようにしたり、小さな女寄生人種に体内に入り込まれないよう

にしたりする。

女性が中に入って遊ぶ場合は、男性と動物の合体に直面することがほとんどです。

バーチャル・トラベル・アリーナでは、長時間遊んで疲れていたので、どうやって帰ってきたのか、微麗の家で目が覚めた。バーチャルなシーンとリアルなシーンは、何気なく切り替わっていることが多いです。

30, 遠距離セックスを体験する

あるとき、眠りから覚めてみると、微麗はもういなかった。ベッドに座ってぼんやりしていると、突然音楽が聞こえてきて、すぐそばに白い煙が立ち上がり、すぐに立体仮想画像が現れ、金属製のような奇妙な衣装を着たビリーが私に言いました:

「シュデールやノートンたちといっしょにゴーク星を離れたわたしたちは、ゴーク星の近くにある別の惑星にいて、しばらくは帰ることができません。わたしのアジトにいるあいだは、むやみに外に出ないでください、外に出たら危害を

加えられるかもしれませんから。

　　あなたが退屈している場合は、このバーチャルコンピュータをプレイし、あなたがそこに見たい場合は、バーチャルイメージの上に指を使ってそこを指すことができます。ちょっと会いたくなったから、そのうち帰るよ」

　　この仮想コンピュータでしばらく遊んでいると、微麗家のロボットが食べ物を運んできてくれた。このロボットの体は、いったい何でできているのか、知りたくてたまらなかったのです、ロボットが近づいてくると、手を伸ばして掴みました、ロボットは素早く身を隠しました。

　　それでも、手がロボットの体内に深く入り込むと、手のひらの中の分子の一つ一つがかすかに感電し、このロボットの体もバーチャルであるという感触を得ることができた。

　　案の定、あとで見ると、ロボットは小さな赤い金属のような液体になって、箱の中にはいこんでいた。

　　ゴーク惑星は仮想世界だと感じ、仮想旅行をしたくてたまらなかった、コンピューターを操作できないので、なかなか見つからなかった、仮想コンピューターの立体画像に点を打って,ただ、おかしな映像がたくさんあって、わたしにはよ

くわからないゴーク星人とか、ほかの宇宙人とかがやりとりしている内容がたくさんあった。

夜になってパソコンをやめると、まわりの三次元の仮想映像が自動的に消えた。ベッドに横になってぼんやりしながら、バーチャル・セックス・ゲームのセクシーなシーンを思い浮かべていたが、ひとりでは遊べないし、微麗《びれい》を思い浮かべ、微麗《びれい》なセクシーな身体を思い浮かべていた。

突然また音楽が聞こえてきたので、頭を上げると、また3d のバーチャルイメージが現れました、3d のバーチャルイメージです、金属製の部屋に、マイクロリアが現れ、両手を振りながら言いました,

「お兄ちゃん、私は今 ufo の中に住んでいて、この星は荒涼としていて、住む場所がない。

元さん、振り返ったら、後ろの壁の下に赤い四角い枠があったでしょう?真ん中に赤い点があるから、それを手で打ってごらん、そう、そのまま打ってごらん」

はたして、赤い四角い枠が見えたので、手で赤い点をつついてみると、いきなり箱が出てきて、その中に乳白色のき

わめて繊細なゼリー状の物質が入っているのが見えたかと思うと、にわかに活気づいて、,地面に流れ出て、それから急速に人間になります、ビューラーと同じです。

微麗が仮想コンピュータの画面の中でどんな動作をして、どんな話をするか、この白いゼリー状の物質が変わった偽微麗は同じ動作をして、同じ話をする。

「あっ、微麗ちゃん、お帰り?」

「そんなことはありませんよ」フェイク・ビリーとバーチャル・コンピュータのビリーが同時に言った。

私は今 ufo の中にいて、自分の身体の活動信号をゴーカー星の全世界公衆情報ネットに送り、公衆情報ネットは信号を私の家の赤い箱に送り、この箱の中の白い情報泥は信号によって活性化され、人の身体になって、実は偽の微麗である。

このニセのニセのニセの

情に違いはありません、分かりましたか?

あなたがこの偽りの微麗を抱いているのは、本物を抱いているのと同じで、あなたのすべての感覚では、あなたは分かりません。」

私はこの偽の微麗を抱いて、やはり本物の微麗を抱いているのと何の違いもなく、わざわざ鼻で偽の微麗の胸の谷間と下半身の匂いを嗅いでみたが、その匂いはもっと濃く感じられた。

バーチャルコンピュータの画面を見ると、ビリーも赤い箱を引っ張り出し、中の白い物質が活発になり、私とまったく同じ人間になった。

かすかに近づいてきてこの偽人をしっかりと抱きしめ、私の目の前のかすかにもそのようにしっかりと私を抱きしめている。

私はシェイドとベッドで寝返りを打ち、熱烈なセックスをしました、その後、シェイドが私をベッドに横たわらせ、シェイドが私の上に乗って、こう言いました,

「われわれゴク星では、こうした遠隔地の仮想セックスの回数は、実際のセックスよりはるかに多い」

「それはどうしてですか?」

「この人形の身体は自由に変化することができるからです」と偽微麗は言った。身体の色は繊細なピンクと白から徐々に灰色に変わり、また黒に変わり、そして黒く光った。その後、赤、黄、緑、青、紺、紫、そして最後にピンクと白に戻ります。

わたしの上にまたがっているフェイク・リリーを、わたしははっきりと見上げた。やがて彼女のからだの形がまた変わりはじめ、もともと小さかったふたつの乳房が長くなりはじめ、しだいに長くなっていき、やがてほとんど一メートル以上の長さになって、腕のようにぼくの体をこすりつけてきた,本物の乳房と同じ感触だった。

その後、彼女は私にキスをし、舌が私の口腔の中に広がって、感じはだんだん深くなって、口腔から咽喉、胃まで、すべて彼女の舌の摩擦と吸許を感じることができます。

「香りを放ちます」とニセモノが言うと、なるほど私は少女のような異様な香りを強く嗅《か》いだ。

そのうちに、このニセモノのからだは、ひどく小さくなり、ほっそりとして、やがてまた、ひどく大きくなり、ふっ

くらとしたものになった。ニセモノとのセックスのときも、彼女の下半身からは同じようにたくさんの潤いのある液体が分泌されていたが、その液体はいつまでたっても体から離れず、地面に流れ落ちることはなかった。

偽シマロンとのセックスは、私の体力をかなり消耗させ、やがて私は眠りに落ち、目を覚ますと、偽シマロンが私の隣に眠っているのを見て、一種の固定姿勢で、変化していない、顔にも表情がない。

バーチャルコンピューターを見ると、シェリフは ufo の部屋で何かをしていて、ダミーと赤い箱はシェリフが片づけているかもしれない。こっちのニセ微麗はどうやって片付けたらいいのかわからないので、またニセ微麗の隣で寝ることにした。

もう一度目を覚ますと、偽のマイクロリーがいなくなり、仮想コンピュータがシャットダウンされ、赤い箱が戻っていることに気づきました。

マイクロリーが遠隔操作しているのか、それともこの情報の泥が自分で閉じているのか?わからないけど、リモートセックスが終わってまた寝る。

ヴェリティ、スーデール、ノートンたちがやってきて、ぼくは目を覚ました。

「前のお兄ちゃん、遠隔セックス、気持ちいいでしょ?」とかおりちゃんが抱きついてきた。

「あ、はい。ただ体力が消耗しました」

「あなたはそれを本物だと思っています」とビリーは言いました

「いいえ、どうして汚すことができますか?」

「ちょっと見てみます」ビリーが赤い四角の中心にある赤い点を手で押すと、赤い箱が出てきて、その中の白いゼリー状のものの上に、色の違う、黄色がかったものがありました,「これはどういうことですか、センパイ、きっとあなたが汚したんですよ」

「これは前の兄が射精したんだ。地球人のセックスは射精するものだ。われわれゴーカートの男とは違う」とノートンは言った。「これが必要なんだ。実験に必要なんだ」

ノートンはそう言って、しばらく耳に手を当てていたが、赤い箱の黄色い汚染部分が急速に消えていったので、おそらくノートンがグローバル・キャンペーン・ネットワークに頼

んで精液を持ち去ったのだろう。

「地球人の男は汚いから、これから私とセックスするときは、体を汚さないように遠隔セックスをするのよ」とシェリーが私に言った。

スーデールは笑った,「ビリー、やっぱりゴク男はきれいにしておこう。あんたの体はもう前の兄貴によって汚されている。地球の男が残していった盗品を洗浄するプログラムを、グローバル・キャンペーン・ネットワークのために開発しようか」

「いま考えてみると、前の兄の下から出てくるような汚れ物が急に好きになって、今夜は一生懸命、前の兄の下から出てくるようにしています。白くてどろどろした液体です。前に兄の体から出てくるのを見たことがあります」

スーデイルは微麗に尋ねた:

「元兄との今回の遠隔セックスの信号は記録されていますか?記録されていれば、全世界の情報網に載《の》せられるし、ファンも多いだろう。あなたの美しさはすぐに私たちのゴーカシンのセックススターになり、毎日何万人ものゴーカシンの男性があなたの美しさのために彼らのリモートセック

スのデジタル人を設定し、毎日何万人もの人々があなたを抱きしめます。生き生きと……」

「違うのは前の兄で、前の兄はつまり背が高くて、図体が大きくて、様子が特殊で、果克星の女性の注意を引くことができて、私は何も特殊でなくて、どうしてセックス大スターと呼ばれますか?」と微麗は言った。

「そのセックス・シグナルを録音したの?」スーデールが訊いた。

「いいえ、でもノートンが記録しているはずよ。ノートンが元兄を地球から連れてきたのは、あらゆる数字を記録しようとしたからじゃないの」。

案の定、ノートンはこの遠隔セックス信号を記録したことを認めただけでなく、当時のわれわれの脳の意識までも記録した。

ゴーク人は自分の身体の内外、運動、生理などすべての情報、および他人との性愛活動を数字に翻訳するのが好きで、これを性愛数字と呼んでいる。

彼らの中には、情報ネットワークで、セックス番号を売りつけている人もいます、私たち地球人が自分のレコードを

売っているように、これは彼らにとって非常に一般的で重要なビジネスです,普通の人々がお金を稼ぐための、重要な手段でもあります。

もちろん、彼らの情報ネット上には、純粋に楽しみのためにプロバイダーによって提供される無料でお金のかからないセックスの数がたくさんあります。

ある女性ユーザーが男性のセックス番号を購入し、彼らのようなリモートセックス技術を利用して、自宅の情報泥を一瞬でこの男そっくりの道具人に変えてしまったのだ。

そうすれば、メッセージの泥でできた男とセックスすることができ、本物のようにセックスすることができるーー少なくとも、彼女の感覚では見分けがつかない。

ビデオテープを買って、リアルタイムで同期させるのではなく、セックスのために数字を買うのです。

彼らは離れていて、信号を伝え、それぞれの周りの情報泥の小道具の人とセックスをしていて、私たちは今生放送を見ているかのようにリアルタイムで同期しています。私とメリーの遠隔セックスは、これに当てはまります。

遠距離でのバーチャルセックスの明らかなメリットは、

相手が性的暴力を振るってきたらすぐにやめられるということです。

しかし、あなたが経験がなく、エネルギーレベルの選択を間違えたり、誤って非常に高いエネルギーレベルを選択した場合、相手の強い体、恐ろしい体力、強いエネルギー,猛スピードの抽出《ちゆうしゆつ》頻度《ひんど》、乱暴《らんぼう》で目まぐるしい動きに狼狽《ろうばい》し、恐怖《きょうふ》する。

彼らの星にはセックスの数字が大ヒットし、億単位の売り上げを上げ、なんとセックスの大スターになった人もいる。

その後、男性のセックスの数字、女性のセックスの数字、中性的な人のセックスの数字など、半人半獣のセックスの数字をたくさん体験させてもらいました,純粋な動物のセックスの数字もありました。

男が女とセックスしたいなら、女のセックスナンバーを買えばいい。半人半獣とセックスしたいなら、半人半獣のセックスナンバーを買え。

私が体験したセックスの数字の中に、とても素晴らしい数字がありました、最高の形容詞では言い表せませんが、た

とえ数分であっても、一度経験したら,そうすれば、心の底から、喜びを感じることができるでしょう。

これらの女性の非常に魅力的な裸、魅力的な声は、ちょうど見て、聞いて、あなたは心臓にスリリングな感じを持っています。

このことをノートンたちに話すと、「・・・

らすると、クズというレベルでは全くありません。

また、次のように説明した,

ゴキシン人のセックスの数字の必要性は、人生の重要なコンテンツであり、あなたが地球上の食事のように、オブジェクトを探している男性と女性のように、あってもなくてもよいものではありません。

あなたたち地球上の男女は主に相手が美しく、ハンサムであるかどうかを見て相手を探します。私たちゴキシンが求めるセックスの数字は、主に新しさ、個性、ユニークさであり、質の良し悪しは最も重要ではありません。

ですから、私たちは他の惑星に行って、他の惑星の人たちを誘拐します、他の惑星の人たちが、私たちのゴーク星に連れてこられて、生み出されるセックスの数字は、時には質が悪いのです、しかし、ノベルティのおかげで,しばらくは売れるでしょう。

品質が良く、ユーザーエクスペリエンスが良ければ、幽霊や奇妙なものと相まって、より長く、より広い範囲で人気を得ることができます。セックス番号の提供者は、莫大な富を手に入れることができます。

三十一、ゴーカー星の三次元仮想コンパニオン

私たち地球上の男の子がパートナーとしてガールフレンドを見つけ、女の子がパートナーとしてボーイフレンドを見つけることは、私たちがよく知っていることです。

男の子がネット上で女の子をパートナーとして見つけ、ただチャットするだけであれば、これはバーチャルコンパニオンです。

もちろん、彼らのバーチャルコンパニオンは、私たちの惑星のものとは非常に異なっています。

ゴーク星のバーチャルコンパニオンの開発は、およそ5つの段階を経る。各段階の実現は、技術の進歩、アップグレードの成果によるものだ。

第一段階では、男女はパソコンや携帯電話のような実物情報処理設備、グローバル情報ネットワーク、出会い系ソフトをツールとして、互いに交流し、交流する。

この段階は地球上で現在実現できているが、われわれのソフトウェアとハードウェアが改善される必要がある。

第 2 段階では、男女が主に、プロジェクションマッピングツールを使って、交流します。

その後、彼らの携帯電話やパソコンなどの情報処理ツールは、高品質の投影を可能にし、部屋の中に立体映像を作り出すことができる。満足のいく結果を得るために、彼らは 3 次元立体映像を作り出すことができる投影設備を部屋の隅にいくつか設置した。

モバイル情報処理設備に部屋の複数の固定設備を加え、部屋の中に 3 次元立体画像を作り出すことで、男女がグローバル情報ネットワークを通じて互いに交流・相互作用し、まるで相手が自分のそばに立っているかのようだ。

現在、地球上に投影できる携帯電話が登場していますが、投影効果はあまり良くなく、画像は粗く、立体的にリアルなレベルも低いです。Vr 製品の中には特製の眼鏡を必要とするものもあり、これらは深刻な欠陥だ。

彼らの第 3 段階は、モバイル映像インターフェースをツールとして、互いに交流・相互作用する。

この段階になると、彼らの情報処理装置は非常に小さくすることができ、周囲に立体的な仮想画像を作り出すことが

できる。情報処理装置が見えなくなり、三次元立体仮想画像しか見えなくなる。

かわいい女の子が目の前に現れるのを見た少年は、実際には非常に小さな情報処理装置が周囲で作り出した 3 次元立体仮想女の子の画像だった。

この段階になると、バーチャルコンパニオンは、見た目からすると非常に実在の人物に近いだけでなく、自由に動くことができ、飼い主に付き添って外出することもでき、任意の場所に現れることもできる。

しかし、この段階で明らかな欠陥は、投影装置から発せられるビームが遮断されると、仮想画像を生成できなくなることである。

第 4 段階は、純粋な仮想画像で相互に交流し、相互作用する。

彼らの人工場スキャン装置が誕生してから、バーチャル技術は飛躍的に進歩した。情報処理装置から、ハードウェアを完全に取り除くことができます。

人工的なスキャン装置を、地球の上空に設置することで、衛星のように、遠隔操作で物体を動かし、遠くから立体的な

画像や音声を、作り出すことができます。

ファームスキャンはビームを出して 3 次元のバーチャル画像を作るのではなく、遠く離れた場所から光を集めて 3 次元のバーチャル画像を作り、現地の空気の振動に音を出す。

マニュアルスキャンは固体を透過し、固体に影響を与えないため、マニュアルスキャンは世界中のどこからでも、動く 3d 画像や音声を作ることができます,あらゆる物体のバリアを恐れません。

例えば、地球上では、屋外に 3d 仮想人間を作ります、この仮想人間が屋内に入ると、3d 画像装置が必要になります、壁を通り抜けることができます,そのため、部屋の中に別の映像を、設置する必要はありません。

宇宙にあるいくつかのデバイスで、世界中のどこにいても、3d バーチャル画像や音声を作ることができ、世界中のすべての人々が利用できます。

この設備により、人とバーチャルコンパニオンが交流し、活動し、よりリアルなコンパニオンと一緒に暮らすことができるだけでなく、このバーチャルコンパニオンは物体に力を加えることもできる。

たとえばある女の子が、仮想の彼氏にテーブルを運ぶように命令したとしますが、そもそもその彼氏は仮想の映像でしかなく、物に対する力はゼロです。

しかし、人工場は遠隔地にある物体を、持ち運ぶことができるので、その女の子の命令は、情報が人工場の設備に伝わり、人工場の設備は、遠隔地にあるテーブルを動かして、見えるようにします,仮想のボーイフレンドが、女の子の言うことを聞いて、テーブルを動かしたのです。

第 5 段階は、情報泥組を相互交流・相互作用とする。

物事は常に進化しており、彼らの仮想パートナーは 5 番目の段階でこのようになります。

一人の少年が部屋に入ってきて、スイッチを押すと、奇妙な環境の三次元映像が目に飛び込んできた。遠くにいる美しい少女の三次元映像がそこに映っていた,映像が箱の文字の前に移動すると、箱は自動的に開き、中には情報泥の物質が入っていた。

この箱の中に映像が入ると、情報の泥が瞬時に活性化して、この映像そっくりの人物が、急速に形成されます。これらの情報泥自体には動力がなく、活動に必要な動力はグロー

バル運動ネットワークが遠隔・非接触で提供するものだ。

情報泥に情報を送り、情報泥のフィードバックを受ける情報は、グローバル情報ネットワークが提供する。

これは重要なことです、なぜなら、このメッセージスラッジは、原子のように、非常に小さな粒子からできているからです、そうでなければ、それぞれの粒子に、動力装置が必要です、信号伝達受信システムは、非常に難しいのです,品質も信頼できません。

张祥前

メッセージスライムによって形成されたこの男は、リモートのかわいい女の子にそっくりなだけでなく、リモートの女の子にコントロールされ、すべての動きがリモートの女の子の動きとそっくりだった。

この情報の泥でできた男と、遠くにいる女の子とは、人間の感覚では区別がつかない。

したがって、この少年が遠くの女の子と交流し、交流することは、現実の人と交流し、交流することと同じである。セックスをすることだってできるし、本物のセックスと人間の感覚では何の違いもない。

微麗さんによると、彼らの中には性器を持っていない人もいて、このように情報泥で形成された道具を性器として利用してセックスをしているという。

ライトバーチャルな人間同士のセックスや、肉体的な人間とのセックスもこのようにして行うことができます。

情報泥を必要とせず、セックスの信号を直接人間の脳に入力して、バーチャルなセックスプレイをするというのも、よくあることです。

三十二、セックス・スタジアム

あるとき、マイリーに誘われて、ゴーカー星のセックススタジアムに遊びに行きました。

微麗によると、ゴーク星には多くの無料の公共性愛会場があり、ゴーク星の男女の特殊な環境下での性愛の需要を満たしているが、いくつかの私的な性愛会場は財産価値を支払わなければならない。

私とビリーは、グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、ゴーク星の公共セックス・スタジアムに来ました。

このセックスシーンのバーチャルデジタルイメージキャラクターは、男性の首に女性が脚を広げて乗っている。

これはゴクシンの古典的な顔写真で、ゴクシンの体には骨格がなく、女性の下半身は大きな空洞を裂くことができ、彼らは突然飛び上がって男性の頭全体を包むのが好きです。

セックスの場所には門がなく、壁は実体のある建物のようで、壁にはたくさんの縦の格子が描かれていて、縦の格子の真ん中は仮想のようで、たくさんの騒がしいものが騒がしく動いています,ところどころに、下から上へとゴーグル文字が転がっている。

縦格子《たてごうし》の中からゴキブリの男女が入ってくるのをたくさん見たし、独身の男女が入っていくのもたく

さん見た。

「どうして独身の男女が入って、独身で入ってどうセックスするの?」?

「中に入ったら、グローバル情報ネットワークを通じてセックスパートナーを誘うことができる」と微麗さんは言う,

「中にセックスパートナーがいない場合は、バーチャルな人とセックスをすることもできます。セックススタジアムにはたくさんの設備やシーンがありますが、家の中でバーチャルセックスをするにはこれらの設備やシーンがなければ、そのような効果は得られません」

私はリリーの手を引いて、私と並んでセックス会場の壁まで歩いた時、ためらうと、リリーはすばやく私の前に回り、私を引っ張って早足でセックス会場に入った。

中は狭い通路になっているだけで、目の前には巨大な三次元の仮想イメージが立ちはだかっている。側面には立っているポートレートがずらりと並び、ポートレートの顔には大きな穴があいている。

誰かが穴の中に首を突っ込んで、何かを見ているのが見えました、私も穴の中に首を突っ込んで、中を覗いてみまし

た、そこにはゴクゴクの男女が、セックスをしているシーンがありました、それほど変わったシーンではありません、セックスの場に来た男女が,そういうことをしているのではないか?

中から女性のセックスの甘ったるい呻き声が聞こえてくる。骨の髄まで媚びているような感じがする。セックスの場は無駄ではない、きっと素晴らしい内容があるに違いない、という予感がする,この、骨の髄まで媚びるような呻き声は、ひとつの前奏曲なのかもしれない。

あっという間に微麗に引き離されてしまいましたが、ほんの数秒のうめき声は、強烈なショックで、いつまでも忘れることができませんでした。

あとでわかったことだが、この音のほとんどは、彼らのai が強力なアルゴリズムによって合成したもので、実在の人間が発したものではなかった。

あるものは彼らが実際に発信したものだが、彼らのグローバル情報ネットワークによって遠隔的に修飾されている。彼らのグローバル情報ネットワークのカスタマーサービスであるコーウィンの発声は、それに近いものだった。

ビリーはバーチャルイメージ上の 1 行を指でタップして、「プロジェクトを選択します、これはどうですか? 」

ブランコに乗っている男女が、裸で抱き合っているシーンがありました、「これは単純すぎる、単調すぎる」

「わたしもそう思います」ビリーはもう一度指をさして言った。「これをごらんになってはいかがですか」

馬のような動物が、くぼみを作っていて、そのくぼみの中に一人の男が裸で横たわり、もう一人の女がその下にいる男の上に乗って、その馬を力いっぱい走らせているのが見えました。

私はこのプロジェクトにあまり興味がないので、次のプロジェクトを見てみましょうと言ったが、ビリーは彼女がこのプロジェクトをとても気に入っていると言い、私が同意してもしなくても、確定を押した。

私たちは一瞬のうちに荒野に現れ、他には誰もおらず、ただ美しく裸になって馬のような動物を連れて私の目の前に立っていた。

「ここはどこだ? どこまで来たんだ? 」

「ここはセックス・スタジアムからかなり離れています

が、やはりセックス・スタジアムの範囲内です。ほかの場所からここに入ることはできませんから、わたしたちがいま行ったセックス・スタジアムは入り口のようなものです」。

「どうしてほかの場所からここに来られないの? ここには何か特別なことがあるの?」

「質問するな。質問の段階は終わりだ」微麗は横暴になった。「前さん、こっちに来て。この中に寝てろ」

わたしは馬のなかに横たわっていた。そして、はだかの二股ふたまたの脚を下腹部にまたがせて、わたしのペニスを彼女の下に押しこみ、馬を駆りたてた。

最初はとても刺激的だったのですが、大きな壕に出会って、馬が駆け抜けて、また重く落ちて、微麗の体が私の上に強く押しつけられて、私は耐えられないと思ったのですが、微麗はとても興奮していました。

私が何度も止めるように言うと、彼女はようやく止めました、「まだまだ終わっていないのよ。階段を過ぎて、炎をくぐって、水を流して・・・」

「そんなことしたくないわ、ほかのことなら、あなたが馬に乗って、わたしがあなたの上に乗っていたら?」

「次のプロジェクトにしましょう」わたしが彼女にまたがるのを、ビリーは気に入らないようだった。

ビリーが空中で手を動かすと、煙のような仮想映像が現れ、男女が裸で抱き合い、大きな透明なボールに包まれているのが見えた,ボウリングのボールのように高いところから転がり落ちる。

「これにしましょう」

「これ、前に遊んだことがあるんだけど」シャイニーはこれで遊ぶのを嫌がっているようだった。

「以前は用意していなかったし、ペニスがあなたの中に入ってこなかったし、今はきっと感じが違うから、これでいいわ」

ビリーは私の提案に同意し、バーチャルイメージをクリックすると、すぐに別の環境に表示されました。街灯のようなものの下で、私は裸で地面に座っていました、リリーも裸で私の上に乗っていました、私の小さな弟が彼女の中に入り、私たちはしっかりと抱き合っていました。

街灯のようなものの上から透明な液体が滴《したた》り落ち、僕たちの体に急速に大きな球体を作っていく。今回の

大きな丸いボールの材料は非常に柔らかく、非常に弾力性があり、中には隙間はありませんが、材料が非常に柔らかいので、私たちはまだ一定の活動を行うことができます。

抱き合ったまま高いところから転がり落ち、階段にぶつかるとリズミカルに振動して刺激を感じる。

高いところから大きな石の先端《せんたん》に叩《たた》きつけられ、大きな球体《きゅうたい》が弾《はじ》き上げられて、微麗《びれい》は興奮《こうふん》の叫《さけ》びを上げた。

ときどき大きな球が自由落下運動をしているので、無重力感がある。数分間、動きが止まり、大きな球体が液体になって、流れていくのが見えます。

ビリーはまだ興奮していて、バーチャルコンピュータで同じようなセックススポーツを検索し、私たちは体内旅行のプログラムを選択しました。

私は地球のマネキンを、使うことを提案しましたが、ビクトリアは反対しませんでした。

マイリーは裸で私の上に馬乗りになり、私たちは抱き合って、横たわっている巨人の歯の上に立ちました。

ジェリーが飛び降りろと命じると、歯の下は暗くてよく見えず、ためらいながらも飛び降りたが、そこには柔らかな舌と口腔があった。

中に入ると、光が強くなって、またよく見えるようになった。そのとき、巨人が突然立ち上がったような気がして、私たちは巨人の咽喉《のど》から落ちた。

巨人の胃のあたりまでくると、暗赤色の柔らかな肉体が波打ち、やがて私たちは腸に入り、腸は絶えずうごめき、私たちはゆっくりと前進します。

直腸に達すると、とてもきつく感じました、とてつもない力で、私たちは押し出されました、そして私とシェリーは、どろどろした液体になりました。どうやって体を洗おうかと考えていると、だんだんこのねばねばした液体が乾いて、また体からはがれてくるのを感じました。

それからビリはセックスアスレチックを選びましたが、どんなアスレチックかは気にしませんでした。私と微麗は肉の穴に吸い込まれ、微麗は今度は地球の女の体の中を旅していると言った。

肉の穴は赤い色をしていて、とてもきつくて、すごい吸

引力でわたしたちを吸いこんでいるのがわかりました。わたしたちは何度も何度も肉にこすられ、刺激された。

その後、私たちは内側に肉のバリアを見ました、そして真ん中に小さな深い小さな穴がありました、その小さな穴から私たちは入るように言われました。

苦労して押しこむと、そこには透明な、ねっとりとした、微熱の液体があった。この液体はとても気持ちがいいのだが、しばらくすると、小さな肉の穴から頭をしぼり出して息をすることになる。

微麗は私とは身体の構造が違うので、ずっとうっとりしている様子で中にいて、違和感がありませんでした。

その後、私たちが出てくると、肉の穴はきついですが、粘性のある液体の潤滑のおかげで、私たちはスムーズに出てきました。

だんだん疲れが出てきて、ビリーはまだ興奮していたので、バーチャルスクリーンで次の項目を探し、「ちょっと疲れたから帰ろう」と提案した。

しかし微麗は戻りたがらず、「早く体力を回復させる方法がある」と言って、しばらく仮想スクリーンを操作してい

ると、円筒状のものに取り囲まれ、やはり仮想らしい。

私はすぐに眠ってしまって、目が覚めてみると、微麗は私のそばにいて、私はとても元気を感じて、微麗はどういうことですか?

「このグローバルスポーツネットワークとグローバル情報ネットワークの相乗効果によって生まれた、精神と体力をリラックスさせるプロジェクト」と微麗さんは言う。

「じゃあ、あなたも一度リラックスしてみませんか」と私は言った。

「いや、そのくらいの活動量は、われわれゴーク人にはたいしたことはない」

ビリーは私の提案を拒否し、グローバルネットワークでセックスイベントのプロジェクトを検索し続けました。

次は地球のジェットコースターのようでした、私は小さな車の中に横たわっていました、リリーは素っ裸で私の上に乗り、素早く回転していました、しばらくすると、気が遠くなってしまいました。

グローバルな運動ネットワークの助けを借りて、私たちは滑らかに地面に立って、大きなフライホイールはまだ回っ

ているように見える、私たちの地球上であれば、大きなフライホイールが停止するまで私たちはダウンすることができます。

その後、私たちはバンパーカーに乗り、多くのゴーカーの男性と女性が抱き合い、金属製の巨大な高さの平らなフィールドで激しくぶつかりました。

微麗は私に小さい車の中で横になるように言って、微麗は裸で私の上に乗って、運転してバンパー車が一生懸命ぶつかって、私はあまりにも刺激を受けられないと思って、しかし微麗を見てとても楽しくて、とても興奮した様子で、ずっと頑張ります。

次にカヤックを作りました、今度はカヤックの中で、裸で横たわっていました、私がお尻に乗っていると、カヤックを操縦している、カップルが 2 メートルの高さで、衝突しました。

組み合わさった男女の身体がはね飛ばされると、飛行船は停止して地面に着地し、私たちは飛行船が絶えず着陸するのを見た。

バックバックのセックスプレイにも参加してみました。

きちんと並んだパイプの中に、たくさんの男女がもぐり込んで抱き合っているのが見えました。

マイクロリーは私をこのトンネルに引っ張り込み、マイクロリーは裸で私の上に馬乗りになり、マイクロリーは私にしっかりと抱きしめてほしいと言いました、風が吹き始めるからです。

するとすぐに突風がパイプの端から吹きつけてきて、強い突風が私とマイリーを遠くまで吹き飛ばし、空中にぶら下がっていた大きな水袋にぶつかって割れ、マイリーと私は水袋の中に落ちました,中のどろどろした熱い液体は、とても心地よい感じでした。

微麗は近くの男女を指して、彼らは大きな水袋を破っていない、微麗は、彼らは衝撃が小さく、地面に落ちたと言って、失敗しただけでなく、非常に恥ずかしい、人々は非常に痛いです。

しばらく大きな水袋の中で抱き合っていると、大きな水袋がゆっくりと落ちてきて、私たちは立ち上がって歩き出した。

その後、私たちは駄馬のガールフレンドレースに参加し

ました。

多くの果克男女は、決められた位置に立って、裸で抱き合っていて、私と微麗もその中に立っていて、ただ私の背が高いだけで、とても特殊に見えます。

という合図とともに、女がみんな飛び上がり、股《また》を開いて男の腰を挟み、さらに下に滑り落ち、男の性器が女の身体に入ったところで、男は素早く足に踏みつけたズボンを持ち上げ、そのズボンに紐《ひも》をつけて、,女友達を自分の身体にしっかりと縛り付けるためには、この縛りが大切です。

そして走ったり、歩いたり、いろいろな関所を突破していく。

セックスプレイイベント「カラーバブル」にも参加してみました。

無重力状態で抱きあっている多くのゴーカーの男女は、まわりをさまざまな色、さまざまな模様の泡に包まれ、丸いもの、長い棒のようなもの、パンのようなもの、絹のようなものがあった,さまざまな種類の、奇妙なものが、空中に浮かんでいて、壮観だった。人の体の中をゆっくりと通り抜けて

いくものもあります。

次のセックスアクティビティ・プロジェクトは、名前は知らないけど、開発者は女性かもしれないけど、ピンクの花の海で、空のあちこちにピンクのスカーフが垂れ下がっている,周りにはピンク色の巨大な桃の花がたくさんあり、その中心には女性の華奢な身体と美しい笑顔があり、これはバーチャルツアーで出会ったことがあるような気がする。

これは何のプロジェクト?地球人カップルのような結婚式?微麗はこのロマンチックなシーンを気に入ったようで、私と手をつないで桃花大道を歩いていた。

最後に、巨大な桃の花が現れ、その中に微麗が正座し、もともとピンクの白い肌はピンク色を帯び、微麗は両手を広げて、私に上に上がるよう合図し、私は微麗と抱き合い、桃の花は徐々に閉じました。

微麗は自分の体とのセックスという、プログラムを紹介します。どうやったら自分の体とセックスできるのだろうと疑問に思っています?

私の前に突然、私にそっくりの裸の男が現れました。

わたしの強い抵抗に気づいて、シェリーがふたたびやっ

てみると、裸の男の左側に、わたしと同じくらいの顔をした男が現われたが、無精髭はもっと男性的だった。

右側にもう一人、私と同じような顔をした男が現れたが、明らかに女性的だった。

わたしがまだ抵抗して抱擁しているのを見て、わたしは真ん中にいる男に触れ、自分の体に触れるのと同じような感触を味わった。

私の強い抵抗を見て、最終的にプロジェクトをキャンセルしました。

もうひとつのセックスプレイイベントは「殺人樹」。

広大な曠野の上に、遠くから見るとたくさんの大木が立っているように見えるが、中に入ってみると、ゴムで作った裸の女の体のようで、髪の毛はたくさんの柔らかい肉の赤い管でできており、頭から足まで覆っている。

草の上に裸で横たわるように言われ、草の上に裸で横たわるように言われ、私たちは草の上を転がっていました、巨大な裸の女性の上に転がったとき、木のような巨大な女性の体が突然動き始めました,柔らかいチューブが、私とマイリーを包み込み、引っ込めました。

わたしたちは肉の穴の中で、柔らかい肉に押しつぶされ、何度も何度もこすられ、ねっとりとした液体と、たくさんの柔らかい肉管が吸いついて、ひどく快感をおぼえ、とうとう我慢できなくなって、ぐっとこみあげてきた,人間もまた極度に疲れている。

微麗は耳を押さえ、おそらくグローバルな運動ネットワークを要求し、私たちはここから、セックススタジアムのゲートを通らずに直接微麗の住居に戻った。

三十三、遭電妹和条妹負傷

あるとき、わたしとシュデールはノートンに誘われて、招待された人たちだけを受け入れる個人の館に遊びに行ったことがあった。

微麗が手で空を切ると、果克星のグローバル運動ネットワークとグローバル情報ネットワークが直ちに遠隔的に微麗のそばに仮想スクリーンを作り、仮想スクリーンに微麗の姿が現れた。

バーチャルスクリーンと情報ネットワークを鏡として利

用しているらしく、微麗は体の前を見たり、体をねじって後ろを見たりして、この集まりを気にしているようだった。

グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて私設会館の外に現れたシュデールやノートンたちに会ってみると、彼らの今日の服装は短く、露出度が高かった。

ノートンがしばらく耳に手を当てているうちに、私たちはいきなりこの私設会館の中に入ってしまったのです。おそらくノートンの要請がこの私設会館の所有者によって通されたのでしょう。

中には、単調で低い音楽の音がしていて、男も女も身体を露出している人がたくさん集まっていたが、もともとバーチャルな服を着ていたので、今度はもっと小さくなり、中には全裸になっている人もいた。

彼らの大部分は体の色を変え、磨き上げられた金属のように散らばり、あるものはまばゆい光を放ち、あるものは輝きを放つようになった。

そこは暗く、ときおり空から真っ白な強烈な光が降り注いでくる。片隅で踊っている男女がいて、バーチャルイメージング技術によって空中に投影され、人が巨大になるだけで

なく、場面も千変万化だ。

マイクロリーとノートンは小さな光る棒を受け取り、それをゆっくりと自分の腕に差し込みました,それが人の顔に映り、幽霊のように見えます。

彼女は私に言いました、「お兄ちゃん、これを差し込んじゃだめよ、あなたの体の構造は、私たちと違うから、これを差し込んじゃだめよ、もう一つあげるわ」

ビリーはそう言って、金属のように光る液体を探してきて、私の手の甲や肩に塗ってくれました。暗闇の中で、私の体もゆったりとした青い光を放っていましたが、ビリーたちのようにいつも変化して輝いているわけではありませんでした。

マイクロリーとノートンがそれぞれグラスのようなものを持ってきたが、それは飲み物ではなく、青い煙を立てながらゆっくりと漂ってきた。マイクロリーとノートンたちはときどきその青い煙を鼻でくんくん嗅いだ。

この煙は幻覚剤で、人を興奮させ、気分を変えることができるが、われわれ地球人には使えない、と微麗は私に言った。

ノートンはマイクロリーに私を見守ってもらい、私がうろつかないようにしてくれと言った。やがてノートンとスーデイルは姿を消した。ジェリーは興奮して、私を引っ張って人混みの中をくぐり抜けた。その後、微麗ちゃんはある場所で立って待っているように言い、すぐに来てくれた。

しかし、長い間、私は愚かにそこに立っていた、それは2人のゴーカー女性のアイデアを引き起こしました。

ふたりの女は肩を組み、おそらく音楽をかけるものを身につけているのだろう、耳ざわりなチクタク、シューシューという強烈なリズムの音楽が聞こえてくる。

ふたりの女はわたしを見た。ひとりは立ちどまり、もうひとりは立ちどまらなかった。慣性によって、立ちどまった男のまわりをぐるぐるまわってから、やっと立ちどまった。ふたりはわたしを見つめ、ささやきあった,グローバル・インフォメーション・ネットワークの、カウンセラーが、彼女たちが話していることを、翻訳してくれました,

「大きいですね。異形の人間です」

「図体《ずうたい》もでかいな、明らかに男だな」

「捕まえて、性的暴行して、体の中に入って、違う感じ

を与えるに違いない」

「新しい、刺激的な感覚が好きです」

「せっかくのチャンスだから諦められない」

一メートルはありそうなほっそりとした女性が近づいてきて、腰は細く、かろうじてわたしの腕ほどの太さで、丈の短いスカートをはき、上半身は裸で、胸のあたりに細い乳房が二つ長く垂れ下がっていた,リボンで結ばれている。

黒々とした髪は金属のような光沢を放ち、極度にしなやかな様子をしており、一本一本がチューブのように垂れ下がり、白い輪のような模様がついているところを見ると、しなやかな女性の部類に属するのだろう。

その女は碧玉《あおぎょく》のように極度になめらかで艶《つや》やかで、手足や腰が蛇《へび》のようにしなやかにのたうちまわる、骨の感触のない女だった。

彼女の顔は狭く、口が少し広く見え、目は大きく、細く、顔の正面では足りないほど細く、顔の横に伸び、45 度近く傾いて上を向いている。目玉は真っ赤で、まぶしいほど赤く、目全体がぎらぎらと光っていて、どこかぎょろりとした感じだった。

薄暗い光の中で、彼女は突然口を開き、その口は大きく裂けて顔の側面まで続き、口の中にたくさんの細くて柔らかい生臭い赤い管が狂魔の乱舞している様子を見て、まるで本当に生きた幽霊を見ているようだった。

この女性はしばらく自分の耳を手で押さえた後、別の女性に一言言って、全球情報網の顧客サービスのコーウィンが私に翻訳してくれました: “全球運動網付属物移動を要求して、どうして通過しなかったのですか?”

この女性がグローバル・キャンペーン・ネットワークに、私を連れ去ってくれるように頼みたかったのは、分かりました。

グローバル・スポーツ・ネットワークに頼んで私をさらったのが成功しなかったのを見て、この女は私に近づき、自

分の手で私をさらっていこうとしているのではないか?

グローバル・インフォメーション・ネットワークのカスタマーサービスであるコーウィンは、「あなたの近くにいるのは妹であり、意図は性的暴行であり、エイリアンに直ちに逃げるように勧めます」と警告しました

私は逃げませんでした、私は彼らが私を見つけることができなかった場所に移動しました。

女性が近づいてくると、グローバル・インフォメーション・ネットワークの声が、さらに大きくなりました、「エイリアン、今すぐ出て行け、性的暴行の危険性がある、機械的な危険性がある」

それでも私は、この女性が幽霊のようではあるが、非常に美しく、非常にセクシーであり、特につやつやした脚と尻が非常に魅力的であることを発見したので、そこから離れませんでした。

加えて、グローバル情報ネットワークのインテリジェントなカスタマーサービスの温は、この女性はちょうど私に性的暴行をしたい、他の意図はない、このような美しい女性によって性的暴行は確かに刺激的であり、加えて最近はいつも

仮想セックス、仮想殺人ゲームをプレイしてい危険はないと思います。

しかし、妹が私の身体に近づいてきて、私を抱きしめた時、妹はあまりにも鬼のようであったので、彼女の身体からは一種の強烈な嫌な臭いが発散し、農村人によくある嫌な臭いのようであった,いやな感じだった。

本能的に怖かったので、反射的に身を引いてしまい、妹の抱擁をかわしました。

もうひとりの女がすばやく近づいてきたが、その女は髪は乱れ、ふっくらとした体つきをしており、太腿は太く、乳房は大きく短く、尻は大きかったが、手足は小さく、腰は極端に細かった,身体とのギャップが激しく、どうやら粗野なタイプらしい。

グローバル情報ネットワークのカスタマーサービスからは、「電気女性、性的暴行の試み、被害の可能性: 電気火傷、エイリアン、ただちに脱出せよ」という警告音が聞こえてきます

逃げようとしても、もう間に合わなかった。

電気ガールは私の後ろからしっかりと私を抱きしめて、

すぐに私に感電感覚を与えて、四肢はすぐに大脳の指揮を聞かなくなった。

身体を軽く弾《はじ》かれ、蛙《かえる》のように敏捷《びんしょう》に跳躍《ちょうやく》し、股《また》を開いて俺の腰《こし》を挟《はさ》んだ。

その跳躍《ちょうやく》の瞬間《しゅんかん》、一秒と経《た》たないうちに、条妹の着ていた仮想《かそう》の衣装《いしょう》はみるみる消えていった。妹の肌は水につけたウナギのように冷たく、なめらかだが硬い。

飛び上がったショートカットの二つの太腿《ふともも》が私の胸を挟《はさ》み、そして私の胸からゆっくりと腰《こし》に向かって下に向かって滑《すべ》り落ちていった。

ぼくのペニスがゆっくりとストリップの下半身に入っていくにつれて、それは極度に柔らかく、なめらかで、吸引力の強い肉の管に入っていくのを感じた。妹の二つの細い乳房が両腕のように私の腰にまわされているのが、背後の電気妹の放電のせいかどうかわからないが、とても心地よく、とても楽しい感じだった。

私の心の中で考えて、今の喜びの感じはかつてなかった、

全球情報ネットワークの顧客サービスの警告はくだらない、もし全球情報ネットワークの顧客サービスの暖かい言葉を信じて、逃げた、それは今のとても喜びの感じがありますか?

しかし、すぐに何かがおかしくなった。肛門に柔らかい管が入り込んでくるような感じがした。僕はエレクトリック・ガールとショート・ガールの四本の腕に抱かれ、ショート・ガールの二本の細い乳房に抱かれ、六本の腕に抱かれているような感じだった,縛られてしまって、何が私の肛門の中に潜り込んでいるのか、振り返ることができませんでした。

グローバル情報ネットワークのカスタマーサービスが私に与えてくれたイメージは、私たち 3 人が絡み合って肛門に入って何かを見ることができないということでした。

わたしはなんとかして、この肉管がわたしの肛門に入ってくるのを思いきり押しとどめようとしましたが、うまくいきませんでした,しかし同時に、恐怖も感じました。

妹は口で私に接吻し、妹の口の中の多くの柔らかい細い管は熱くて辛い生臭いにおいを持って、だんだん私の咽喉に深く入って、更に胃の部分まで、肛門の管も速く上に向かって力いっぱい掘り下げて、それらがドッキングしたように感

じます,もつれあって、体の内側から私を縛りつけているようでした。

不思議なことに、強烈な刺激臭、生臭いにおいは私をひどく気持ち悪くさせたが、それはひどい快感と同時に存在していた。

目を開けてみると、驚いたことに、妹の体はさらに小さくなっていました、妹の体は形を変え、口や肛門から、私の体の中に入り込んでいきました,胃の中も腸も満たされる感覚があったが、そのうち、彼女の身体がすっかり私の中に入り込んできて、自分の身体が重くなったような気がした。

エレクトリック・メイドの下からも、モヤシのように、ミミズのように、ねっとりとした液体をたたえた何百本もの細い肉管が伸びてきて、わたしの体内に入りこむ通路を探しているかのように、わたしの上を這いまわっている,そのうちの何本かが、私のへその穴を勢いよくくぐっていた。

私がとても幸せだったとき、突然、大声が聞こえました、グローバルメッセージネットワークの、コーウィンが訳しました、「今すぐ下ろせ!」

見ると、目の前にノートンとスーデイルが立っていて、

電気の女の子は私をおろしてすぐに逃げ出した。

体が重くなるのがわかった。エレクトリック・ガールに抱きしめられ、支えられなければ、立っていられないほどだった。妹も走ろうとしたが、妹の身体は私の身体の中に沈んでいた。

口から、肛門《こうもん》から、すばやく肉管《にくかん》が抜《ぬ》けて地面に落ちるのが感じられたが、一本一本、碧玉《あおぎょく》のようになめらかな青さを残していた。

やがて、それらが融合して一人の人間になると、妹は地面で元の姿に戻り、起き上がって素早く逃げ出した。

だんだん口の中や肛門《こうもん》が痛くなってきて、そのうちに胃や腸が痛くなってきて、あとが痛くてたまらなくなってしゃがみこんだ。

肛門《こうもん》からたくさんの血が流れているのを見ると、妹が出てくるのが早すぎて怪我《けが》をしたのかもしれない。

ノートンはしばらく耳に手を当てていたが、それはヴェリティに、ヴェリティがやってきたことを告げたのだろう、

驚いたように私の太腿と床に流れる血を見つめていた。

微麗はこの時すっかり様子を変えて、微麗のおおよその模様の特徴は残っているけれど、口と鼻が伸び、顔が犬の顔のようになり、耳が大きく尖《とが》っているのが見えた,髪は太いゴム管のようになり、目からは真っ赤な液体がたくさん流れ出して、まるで煮えたぎった汁がこぼれるように顔にかかっていた。

私はかつて愚かな空想の美しさは私に従って、地球に戻って私の妻として、私たちは一緒に愛の生活を送る。

このお母さんの純粋さは妖怪だよ。西遊記の妖怪だって微麗にはかなわないよ。

私は下半身が痛かったが、それでも心の中では飛び上がって微麗を引っぱってみたいという気持ちがあった。

ノートンたちはこの私的な集まりを打ち切り、わたしを惑星ゴークの病院に連れていって治療を受けさせることにした。

グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、私たちはすぐに、非常に背の高い、非常に人口の少ない、静かな惑星ゴークの病院に到着しました。

病院のバーチャルデジタルイメージキャラクター、空中に浮かぶかわいい女の子のようなものが私たちを迎えます。

私たちの目の前に、地球の家ほどの大きさの巨大な円筒が現れ、その中心に大きな穴があいていた。

わたしが倒れないように、わたしを支えながら、マイリーはわたしに言った,「これは人工的な情報フィールド・スキャナーで、われわれゴーク人はこれで病気を治療できるし、この機械は外傷を含めてどんな病気でも治療できるし、きみたち地球人のどんな急性・慢性の病気でもこの機械で治療できる。人間はこの機械に入れば、すぐに完治する」

あっという間にシリンダーの中に入って横になると、微《かす》かな電流が体を貫《つらぬ》いて、くすぐったいような感じがした。

最初から徐々に胸に、そしてお腹に、そして脚に、そして最後にこの感覚は体から消えていきます。

数秒後、私は外に出て、最初はマイクロリアが私を慰めていると思ったが、体のすべての痛みや不快感が消えたとは思わなかった。

この情報フィールドスキャナーは、本当に素晴らしいと

思いました、私たちは病院からマイクロリーの家に戻り、彼らに何度も尋ねました。

「病気を治療するためには、人工情報フィールド発生器というハードウェアと、人工情報フィールド発生器の働きを制御するコンピューター・プログラムであるソフトウェアが必要です」とノートンは言った,

「あの病院にあった人工情報フィールドスキャナーに、地球人治療プログラムがなかったのか、それともおれがグローバル情報ネットワークから一時的に検索した地球人治療プログラムが、前の兄貴を治したのか」

「どうして人工情報フィールド・スキャン・マシンはこんなに早く治療ができて、効果があるんですか」と、私はたずねた。

「人工場はコンピュータープログラムのコントロールの下で、分子、原子のように小さい物体を正確に識別、分類して取り除くことができ、高速識別、大量に高速で物体を取り除くことができる。たとえば、非常に高速で分子をひとつひとつ取り除くことで、物体を取り除くことができます」ノートンはさらに説明を続けた:

「人工情報フィールド発生器はまた、精密な切断、運搬、冷間溶接、組み合わせ、局部加熱、局部凍結ーーも可能で、物体の外観や構造を損なうことなく、物体の内部にあるものを瞬時に移動させることもできる。

密閉された環境で物を取り除くことができ、密閉された環境を破壊することはありません。例えば、体内のあらゆるものを、メスを入れずに取り除くことができます。
人工場では、人間の体を切り離さないで、フィールドスキャン機械を通じて、人間の体の内部を非常に正確に手術することができます。」

「この人工的な走査機械の原理は何ですか? 」私はまだ興味があります。

「宇宙の場は主に電磁場と万有引力場と核力場で、重力場は作用範囲が広く、物体に対して透過性があり、あらゆる物体に対して力を作用させるが、力は比較的弱い。

電磁場は強力ですが、物体に対する透過性が低く、作用範囲が短く、興味のあるものとそうでないものがあるだけです, 興味のないものにはほとんど作用しない」スーデルが説明してくれた,

「人間は場の本質さえ知っていれば、重力場がどんな物体にも作用するという特徴と、電磁場の力が強いという二重の特徴を持った人工的な場、つまり人工的な場を作り出すことができる。

コンピュータープログラムの制御下にある人工工場は、人工情報フィールドと呼ばれている。その基本的な原理は、人工場照射によって物体を質量ゼロの励起状態、質量ゼロに近い準励起状態にすることです。物体は励起状態にあり、光速で動くことができ、準励起状態にあり、固体を傷つけることなく移動することができます。」

「あなたたち地球上にも将来、人間の病気を治療するための人工情報フィールドができて、あなたたち地球人の癌《がん》、高血圧、糖尿病、アルツハイマー病などの慢性疾患だけでなく、伝染病や外傷、その他精神的なものも含めて、あらゆる病気を徹底的に治療することができるようになるでしょう」

ノートンは言った,

「地球上の人工情報フィールドの出現は、地球が薬物のない時代に入ったことを示している」。

私はマイクロリーの家に戻り、惑星ゴーカー病院の人工情報フィールドスキャナーに感嘆しました。

「人工情報フィールドスキャン機械は、人の容姿や彫刻人の体型を変えることもできる」と微麗さんは言う,

「人工情報フィールドだけが人間の容姿や体型を好きなようにさせることができるんだ。本当に好きなようにさせることができるんだ。そしてもし地球にそれがあったら、おまえたち地球の女は本当にそれを愛して死んでいくことになる」。

三十四、近隣の惑星を訪問する

ノートンたちと話しているうちに、私たちの惑星の近くには何十もの惑星があり、地球の近くに 8 つの惑星があるように、太陽のような巨大な恒星の周りを回っていることがわかりました,大きな惑星には数十個の衛星があります。

彼らの文明は、惑星のひとつから始まり、その後、近くの他の惑星を大規模に開発するために、光速の ufo を発明しました。

ゴーク星の近くにある惑星のほとんどは、ゴーク族によって開発され、人が住めるようになっており、すでにかなりの人が住んでいるものもある。

あるとき、ノートン、スーデール、マイリーといっしょに ufo に乗って、ゴーク星の近くにあるいくつかの惑星を訪れたことがあった。

まず、最初のステーションで、私たちはゴミの惑星に行きました。空飛ぶ円盤はゴミの惑星の上空に浮かんでいた。ノートンとスーデールはこのゴミの惑星に乗りこんできて、マイリーはわたしといっしょに円盤の上にとどまった。

微麗は、我々のゴーク星の環境に対する要求は極めて厳しく、ゴーク星が生み出した多くのゴミ、特に廃棄された空飛ぶ円盤はすべてこのゴミ星に運ばれて分解処理され、処理されたと言う,役に立つ物質は戻ってきます。

ゴミの惑星では、ほとんどがロボットが働いており、誰かがこれらのロボットを遠隔操作してゴミの惑星で働いています。

第二ステーションは巨大な惑星の上空にあり、空飛ぶ円盤が空中を旋回していた。いたるところに背の高い金属のよ

うな建物がびっしりと建っていて、この惑星は銀白色を呈しているが、それでも荒涼とした感じが残っている。この惑星には植物は存在しない。少なくともわたしは観察しようとしたが、植物は見つからなかった。

「これが私たちの母星である銀星です」とノートンが言ったので、私は少し驚いた,「私たちゴク星人は、もともとあなたがたの地球と同じように、緑に満ち、生命に満ちているこの銀色の惑星に発祥しましたが、残念ながら、長く続いた核戦争のために、あなたがたの地球上の時間単位で数えると、何百年もの時間がありました。

私たちはこの惑星をほとんど破壊し、この母星の表面は核兵器によって人が住めないほど破壊され、人々は地下に移動しなければなりませんでした。

それからまもなく、私たちは場の性質を解読し、空飛ぶ円盤を発明しました、まず銀星の近くにある、ゴーク星を開発しました、ゴーク星の環境を、私たちが住めるように変えようとしました,いまやゴーク星はわれわれの主星であり、われわれの権力と科学技術の中心であり、他の惑星はすべてゴーク星の支配下にある。

現在、銀星に住んでいるのは主に仮想人間と、長年地下に住んでいる地下人間です」

空飛ぶ円盤は通路から銀星の内部に入っていった。銀星の内部に行くと、ノートンは私の首に輪をかけて、銀星の地下の空気は地球人には合わないかもしれないと言いました。

このリングは鼻や口からの空気の侵入を防いでいて、円盤に取り付けられた人工的なスキャン装置を使って、血中酸素を遠隔操作でぼくの体内に移動させることができる。

私たち一行は円盤を降り、車輪のないオープンカーのような別の乗り物に乗って、地上から約 2 メートルの高さを低速で漂い、周囲の景色を見渡すことができ、観光に適しています。

銀星の内部はムカデの体のように巨大なメインホールで、その周囲には小さな穴がたくさん開いています。聞くところによると、このメインホールの下にはまだメインホールがあり、幾重にも重なっているという。

われわれはときどき、巨大な地下空間を見ることができる。そこには、緑や黄色の植物や、太陽の下で暮らしているかのように鮮やかな色彩をした奇妙な風景が広がっている。

だが,人々に抑圧感を与え、まだ十分なスペースを感じていない、青い空と白い雲の下で人々の生活の快適な感覚を与えるには至っていません。

大きな穴のあいた壁には、たくさんのバーチャル人間が行ったり来たりしているし、光のバーチャル人間もたくさんいて、私たちのほうに向かってきて、私たちの上をすり抜けていくのを見ると、ぞっとするような、不思議な感じがしました。

その後、小さな穴の中に、薄暗い光の中で、たくさんの奇妙な爬虫類がいて、私たちを見ると、さらに小さな穴に、すばやく入っていきました。

銀星から出て、 ufo に乗って「原始部族の惑星」まで飛んだ。

ノートンが紹介した,

「原始部族惑星の住民の大部分はゴーク星から移住してきた人々で、ゴーク星のグローバル情報ネットワークには『私は原始部族だ』という部族フォーラムがあり、この部族フォーラムこそが原始部族惑星の権力の中心であり大本営であり、彼らは原始生活を尊び、科学技術に反対しているが、

皮肉なことに一部の基礎科学技術製品は欠かせない。

原始的な部族の惑星を開発する上で、この「私は原始的な部族です」という部族フォーラムは主要な役割を果たしました

原始部族の惑星の表面には多くの植物があり、景色は非常に美しく、スーデールは ufo の超低空飛行を操縦し、ノートンは言った,

「気をつけろ、原始部族星人は他人を攻撃するのが好きで、彼らは非友好的で、科学技術だけでなく、あらゆる法律や制約を嫌い、暴力を崇拝し、弱肉強食のジャングルの法則を好み、彼らが互いに殺し合うのはごく普通のことだ」

なるほど、地上にはむき出しの人間の死体があった。殺風景で、美しい環境とは不釣り合いだった。それらの死体は骸骨《がいこつ》のままであった。

ノートンは言いました,「『私は原始部族だ』人間の体はゴーク星でカスタムメイドされ、骨格を持ち、食べ物を必要としているが、私たちには骨がなく、食べ物を必要としており、私たちの栄養はグローバル運動ネットワークの人工場がプログラム制御下で私たちの体に自動的に供給するものであ

り、原始部族の惑星には人工設備もグローバル運動ネットワークもなく、彼らはあなたたち地球人と同じように、食べ物を食べて体のエネルギー

原始部族の惑星人たちは、太っていたり、やせていたり、身長がちがっていたり、外見がちがっていたり、ぼろぼろの服を着ていたり、ほとんどみんな武器を持っていたり、ナイフや矢や、火器や、もっと高級な、名前のわからない武器を持っていたりした。

「こいつらが戦争で死んだらどうなるんだ? 」ぼくは好奇心にかられてたずねた。

「これらの人々の意識は、私たちの惑星ゴークでバックアップされています, 死んで, ゴークですぐに来ることができます, しかし、原始的な部族の惑星での記憶が失われることになります。

ゴーク星の『私は原始部族だ』という部族フォーラムは、原始部族星の宇宙空間に衛星を設置し、人工場で遠隔から原始部族人をスキャンしてモニターすることができ、人が死ねばすぐにわかる。

ゴーク星で原始部族が復活したあとでも、死にたいと思

うなら、原始部族惑星にやってきて、殺し合いをすることだってできる」シュデールは軽蔑したように言った,

「原始部族の惑星には人工工場がなく、グローバルな運動ネットワークがなく、グローバルな情報ネットワークがサービスを提供していません

微麗は言った,

「おそらく、この連中は昔から人を殺すことを考えていて、本物の人間を殺すことを考えていたのでしょう。バーチャル・ゲームでの殺人ではありません。ほかに人を殺すチャンスはありません。原始部族惑星に行ってはじめて、本物の人間を殺すことができるのです」

「自分も他人に殺されて、生きている!」とスーデールは笑った。

原始部族の惑星から別れを告げて、私たちは花の星にやってきました、不思議な植物で、花がいっぱいで、まるで花の海のようでした、私たちはその中を歩きました、空気は甘い香りでいっぱいでした。

赤い花のあいだに一人で立っていて、写真を残してくれと言われた。しかし、カメラで写真を撮ってくれるという行

動は見られなかったので、高度な方法で写真を入手していたのかもしれません。

「この赤い花はあなたがたの地球から持ち込んだ品種ですが、どんな花かご存じですか」とノートンが私に尋ねた。

「さあ、実家で見たことはありますが、なんという名前だったか……」

「これはあなたがたの地球ではシロウズと呼ばれています」とノートンは言った。「多くのゴーカイ人がここに遊びに来てくつろいでいます。ここはいい場所です」

「それにしても、人間は長いことここにいると、いやになるものですね」とスーデールが言った。

「その意見には賛成です」とビリーは言った。

わたしたちは小さな惑星に飛んでいて、スーデールが円盤を飛ばしていて、ノートンは円盤をこの惑星に着陸させな

いように指示していました。

ノートンによれば、この惑星はゴーク星系の中心から最も遠い惑星であり、宇宙の他の惑星からの訪問者に対する警告の中心だという。

この惑星の建築は奇妙で、家々は横に長く伸びていた。もしかしたら、この惑星は重力が小さくて、その上の物体の重量が小さいかもしれない、さもなければこのような建築物は惑星の重力によって破壊されてしまうかもしれない、と私は考えた。

あまり大きくない惑星の上空を飛んでいると、砂塵に覆われた巨大な円盤が墜落しているのが見え、スーデルは円盤を操縦して円盤に近づいてきた,空飛ぶ円盤の内部をスキャンするためのスキャナーが作動し、円盤の仮想画像スクリーンに遭難した宇宙船の内部が映し出された。

ノートンはこう言いました、「これらの人々は我々ゴーク族の、初期の探検の先駆者でした、ゴーク族の意識がまだバックアップされていなかった時代です、これらの人々は死んでしまい、生き返ることはありませんでした、これらの人々は本当のヒーローでした」

荒涼とした惑星に人工的な建造物の痕跡がいくつか見られました、とノートンは言った,

「この惑星は私たちの初期のゴーク人の改造に失敗した惑星であり、ゴーク人は初期の小さな惑星の改造を選択し、小さな惑星の改造にはコストがかからないと考えていました

事実、この惑星では、空飛ぶ円盤のスキャン画像によって、多くの家の中で、互いに抱き合っている骨が見えます。ノートンは言いました,

「これは典型的な人工場の事故で、空気が一瞬にしてなくなり、この星の住民はみな死にかけている。ほとんどのカップルや夫婦は抱き合って死ぬことを選んだ。ゴーク族の初期の惑星間開発も生命の危険をおかした。今、いくつかの小さな惑星のように、空気を固定することは容易ではない、我々は主に上に住んでいる光の仮想人間を配置します。”

空飛ぶ円盤に乗って巨大な惑星の表面に飛んだとき、ノートンの話では、これは鉱山星と呼ばれていて、かなり大きくて、ゴーク族の初期の採掘の主要な場所だったということでした。

その後、科学技術の進歩に伴い、ゴキブリは人工的なス

キャン技術を使用して、異なる物質間の相互変換をますます容易にし、人々は非常に安価に 1 つの物質を別の物質に変換することができます。地球の金や宝石と同じように、私たちのところでは、土のように価値がなくなりました。

その後、人々はここでの採掘をあきらめるようになり、地球は今どこにでもある荒涼とした場所になりました。

鉱物惑星にはたくさんの衛星があり、ノートンによれば、あなたがたの地球の大きさの衛星だけでも数十個あるという。これらの衛星のうち、多くはすでにゴーク族によって開発され、人が住んでおり、あるものは開発中である。

私たちは鉱石の上を飛んで、カップルツインスターに行きました、カップルツインスターと呼ばれるもので、大きさがほぼ等しい 2 つの星が、軸を中心に互いに回転しています, そして恒星の周りを回っています。

「カップルツインスター以前はそう呼ばれていた人もいましたが、シスターツインスターと呼ばれる人もいました,

「この 2 つの星は黒と白で、人々はそれらを黒と白の双星と呼び、どちらも黒い星を男性星、白い星を女性星と呼んでいます。

カップルダブルスターは私たちのゴーク星から遠く離れているので、ゴーク星に立って見るのは簡単ではありません。しかし、カップルツインスターは私たちの母星、銀の星から遠くない、銀の星に立って、白と黒の両方の惑星は非常に大きく、非常に目立ちます。

銀星時代の詩人はね、歌ったり、男女が愛を告白したりなんかして、よくカップルツインスターにたとえられるけど、みんな腐ってる」

「まるで僕たち地球人は愛を月にたとえるみたいだね」と僕は言った。

「銀星時代の人々は恋人同士の双星に夢中になり、無数の文人たちはそこを痴情の男女の夢の楽園として描き、人々はそこに美しくきれいな少年少女がたくさんいて、人々は苦労せずに一日じゅう遊びまわり、男女の交歓を楽しんでいると空想した。

パートナーがいない場合、または最愛の女性を失った場合、男性は白い星に最愛の女性を見つけることができると信じて、女性はパートナーがいない場合、または最愛の男性を失った場合,黒い星に行けば、愛する男性が見つかると信じて

います」と、スーデールは言いました,

「その後、私たちの科学技術が発達し、人々がカップルツインスターに乗り込んでみると、どちらの星も荒涼として何もないことが分かった。ただ表面の物質が違い、反射光が違うだけだ」

私たちが乗っている ufo が黒星の表面を飛んでいると、巨大な白星が空中に逆さまになって、まるで今にも落ちてきそうに、白星がゆっくりと空中を動いているのが見えます。

ノートンによれば、黒と白の二重星が互いを 1 周するのにかかる時間は、月が地球を 1 周するのにかかる時間よりも長いという。

& quot; 今ゴーク星人も大規模な開発カップル双星、ゴーク星のグローバル情報ネット上で、カップル双星広告は天を覆って、売りポイントはカップル双星、カップル悔いのない選択。でも、カップルツインズに長期滞在する人はまだあまりいないし、カップルツインズは人気がありません」とスーデールは言った,

& quot; カップルツインスター先天的条件が悪くて、時には昼の時間が長すぎて、夜が短すぎて、時には昼が短すぎて、

夜が長すぎて、夜は別の惑星に反射されて、昼は別の惑星に日光を遮られて、昼は昼のようでなくて、夜は夜のようでなくて、加えてハードウェアの建設が場所に足りなくて、多くの人は長くカップルツインスターに住みたい

空飛ぶ円盤に乗って、白い星の上を飛んでいくと、巨大な黒い星が、白い星の頭の上に、逆さまに落ちているのが見えました、白い星は銀白色で、黒い星は暗い黒色です、黒い星の山頂には、影が多すぎるのかもしれません,黒星が黒く見える理由の一つです。

カップル・ツインスターには着陸せず、次の目標に向かった。

それから、ゴーク星系の工業惑星のひとつに飛んでいった。煙突もなく、背の高い金属の建物があちこちにあり、工場が密集していた。ノートンは、工業惑星には空気がなく、ロボットが働いていると言った,遠隔操作されています。

この工業惑星を訪問した後、私たちはゴーク星に戻りましたが、まだ訪問していない惑星がたくさんあります。

三十五、水星でハイジャックされる。

ゴーク星の近くには、ほとんど水で覆われた巨大な惑星があり、ノートンたちはその惑星を「水星」と呼んでいた。あるとき、ノートン、スーデール、ヴェリと私は円盤に乗って水星を訪れ、調査しました。

空飛ぶ円盤はあっという間にゴーク星から水星へ、そして水星の上空へと移動し、ノートンたちが着陸する場所を選んでいるのだろうと推測した。

カスタマーサービスのグローバルインフォメーションによると、 ufo はゆっくりと落下しているように見えますが、水星の海面に接しているときは、ものすごいスピードで海に飛び込んでいるように感じます,水しぶきもなく、音もなく、まるで煙のように、水中に落ちていくのは、とても不思議なことです。

海に出ると、円盤内部の三次元バーチャル・スクリーンが周囲の光景を大きく映しだし、いまは円盤の速度が遅くなって、周囲の光景がまったく見えるようになった。

海には背の高い密生した植物や、さまざまな種類の魚が泳いでいた。ノートンはサメに似た生物のひとりを指さして

言った:

「この魚類はただの魚類ではなく、その腹のなかには高度な知能をもった人類がひそんでおり、水系から進化した寄生種であり、よその星からゴーク星系に持ちこまれた人種である。

わかりますか?この魚の目は人間の表情をしていて、普通の魚とは全然違います」

「前のお兄ちゃん、ゴーク星の海底で遊んでいたときにもこの魚に出会ったし、あたしたちのあとをつけてきたのよ。前のお兄ちゃんがこの魚に捕まったら大変なことになるから」。

「水星の人類はどこから来たのですか? あなたがたのゴーク星からですか? それともこの水星から生まれたのですか? 」と私は尋ねた。

「水星には早い時期からウィルスのような下等生物がいましたが、知的生物の段階までは進化していませんでした。私たちゴーカー星の技術がある程度発展した後、光速 ufo が発明され、近隣の惑星を頻繁に訪れるようになり、ゴーカー星人は水星に親しみを持つようになりました。

グローバル・インフォメーション・ネットワークの一つである、「私は水星人だ」という部族は、大変な努力をして、水星に様々な生物を導入しました,いくつかの種は、宇宙の他の遠くの惑星から誘拐され、特に水系進化の寄生種は、彼らの改造によって水星に投げ込まれました。

自分の体を改造して、マーキュリーの大きな魚の腹に寄生し、長年マーキュリーの海の水の世界に住んでいる人も少なくありません」ノートンが説明してくれた,

「前の兄さん、いま耳に入っている翻訳は、われわれのufo が持っている装置のおかげなんだ。水星にはグローバル・スポーツ・ネットワークもなければ、グローバル・インフォメーション・ネットワークもない。水星の海に住んでいる人間は、みずから苦労しているようなものなんだ。ここで長年暮らしている連中がどう考えているのか、理解でき。

「私がグローバル・インフォメーションにアクセスした『私は水星人だ』という部族は、水星の海は巨大で人類はまばらだと言っていた。水星の海底での生活で最もつらいのは、長年異性のパートナーがいないことで、ゴク星の異性を海底の人々に招待することはできるが、実際の効果は乏しく、応

答者は少ない。

水星の海底には、男性よりも女性のほうが多く住んでいる。海底の女性たちはゴーク星に遊びに来る男性に興味を持ち、あらゆる手を尽くして誘惑し捕獲すると、この哀れなゴーク星人たちは性的奴隷になってしまうのです」とビリーは言った,

「とくに前の兄さん、あなたは背が高くて特別だから、こういう海底の女性たちの興味をひくのよ。前の兄さん、気をつけて。あなたは彼女たちの獲物の第一のターゲットだから。この女性たちは長いあいだ海底にいて、すっかり成熟してしまったのよ」

そのとき、やはり数匹の鮫祥の大魚がゆっくりと私たちの空飛ぶ円盤の後を追ってきた。ノートンは ufo を操縦するスーデールに気をつけろと言ったが、スーデールは「こんな大きな魚にどうされるんだ? 」と聞き返した

「この海底人間のなかには、何万年も海底で生活してきた人間もいるかもしれない。高度に進化し、高度に知能を持っている人間もいる。何かトリックを仕掛けてくるかもしれない。何かあったら、われわれの身体や意識の情報は、すで

にゴーク星にバックアップされている。それはどうでもいい。ただし、前の兄貴は回復できない。海底人間はもうとっくに成精しているんだから、要するに注意して、注意しなければならない」とノートンは言った。

「あなたの言うとおり、わたしは ufo の操縦に気をつけているから、行ってはいけないところには行かないわ」スーデールは言った,

「ひとつ質問なんですが、この海底人たちは、どうやって、ゴーク星のグローバル情報ネットワークにある〝わたしは水星人〟という部族と連絡をとりあい、どうやってその情報をゴーク星のグローバル情報ネットワークに送りこんでいるんですか」

「以前は水星の海底人が自分たちの情報を記録していて、その情報をゴーカー星に持ち帰るために、ゴーカー星の〝わたしは水星人だ〟という部族のメンバーが ufo を操縦して、グローバルな情報ネットワークに公開していた。

さて、「私は水星人だ」という部族のフォーラムでの発言によると、彼らは水星とゴーク星の即時通信の問題を解決したという。現在、多くの水星海底人の体は、ゴーカー星の

グローバル情報ネットワークと無線通信できるようになっている」とノートン氏は述べた,

「今回は海底人類を調査するために来ました」

「ずいぶん長いこと海底をさまよっていたんですがね、ノートンが言ったんです,

「この近くに小さな島がありますから、上ってみましょう。これを首にかけると、円盤の中の装置が遠隔操作で呼吸用の酸素を供給してくれるから、水星の空気には君たち地球人は適応できない」

マイクロリーはノートンの手から半円形のリングのようなものを渡され、私はそれを首にかけて、おそらく水星の空気を吸い込まないようにする役割を果たした。

スーデイルが空飛ぶ円盤を海から出して空中に飛ばすと、果たして空中に小さな島が見えた。空飛ぶ円盤は島の上空 1 メートルの高さに浮かんでいて、私たちはみんな円盤の底から降りてきました。

小さな島というのは面積が小さいうえに低く、植物がほとんどなく、しょっちゅう海水にさらされているようで、島のあちこちには水流に洗われた痕跡《こんせき》があった。

この島の土は、われわれの地球の土のように、灰色がかった白いものが多い。

ノートンは言いました、「この島は土が多く、砂と同じくらい水に溶けやすく、水星のほとんどがこの土です、これが水星の陸地が少ない理由です、陸地は海水で泡立っています」

私は島の端をぶらぶら歩きながら、こう警告しました、「お兄ちゃん、海から離れて、賢い人が寄生する魚に飲み込まれたら、性的奴隷になってしまうよ、私たちにはどうしようもないんだから」

私はビリーの言葉に怖くなり、すぐに島の端から離れました。島には大きな穴がいくつも開いていて、その中には水が入っていて、穴の周囲には土が盛り上がっていて、その土が何度も何度もかき混ぜられているような感じで、生き物がよくその穴をくぐり抜けているような気がしました。

「どうしてこんな穴ができたんだろう?」、と私は不思議に思いました、「地球のウナギの穴みたいだけど、穴が大きすぎるんだ」

「わかりません。どうしてこんな穴があるのか、われわ

れにもわかりません」とスーデールは言った。「何らかの生物が掘ったのでしょう」

「火山の噴火のせいでしょうか」と微麗が言った。

「火山の噴火と違って、何か大きな生物が掘削した可能性が高い」とノートンは言った。

私は一番大きい穴の入り口に入って、しゃがんでよく見ようとしたら、突然穴の中の水面が急速に下がって、私の立っている地面の泥も急速に陥没して、人は思わず穴の中に落ちました。

とてつもない吸引力で、助けを呼ぶ間もなく、穴の奥へと滑り落ちていきました。穴の下口はさらに大きく、海とつながっていて、海は青々としていて、大きな鮫のような大きな魚が大きな口を開けているのが見えたので、思わずそばに吸い寄せられてしまいました。

大魚の嘴《くちばし》に近づくにつれて、身体《からだ》についた白土の泥《どろ》はみるみる海水に洗い流され、腰《こし》につけたガス状の仮想模様《かそうもよう》はなくなり、全裸《ぜんら》になってしまった。

このとき、大魚の口が水を吸うのをやめ、慣性によって

私の体は大魚の腹の中まで突っ込み、大魚の腹に穴が開いて吸い込まれてしまった。その穴がきつく感じられ、吸引力が強すぎたために、人が吸い込まれてしまったのだ。

海水は冷たく、大きな魚に吸い込まれると少し暖かくなり、首の輪が外れ、大きな魚の腹の中では息ができず、息苦しくなった。

ふいに柔らかいパイプに頭を吸われてふくらみ、ふいにまた息ができるようになった。ただ吸いつけられたまま、慣性で体が奥へと滑っていくと、また冷たい感覚が襲ってきた。

身体が止まると、周囲から聞こえてくるような、奇妙な音楽のような音が耳に響いた。

目の前の光が、蛍光灯《けいこうとう》の光のように、一点からではなく、大きな魚の腹の中のあちこちから発せられる、淡い青色の輝きに変わった。

頭から被《かぶ》っているチューブが透明で、目の前に、大きな魚の腹の中央に、妖艶《ようえん》な小柄《こがら》な女が正座しているのが見えた。微麗が言っていた海底の高級人間だろうか?本当に彼女にとりこにされてしまった私は、戻れるのだろうか?わたしはひそかに焦り、恐れ、悲鳴をあげ

た。

その女の身長は、およそ七〇センチメートル -- 八〇センチメートル -- というところだろうか、裸の白い半透明の身体は、やや青緑色を帯びていて、ひどくなめらかで、一種の白玉のようでもあり、また一種のゼリーのようでもあって、骨の感じがなかった。二つの小さな尖《とが》った乳房が、羊の角のように胸に突き立っている。

この女の黒いつやつやした髪はぴったりとくっついて、黒い魚の背中のように、だんだん小さくなって、うしろを引きずっている。

この女性は目が大きいだけで、鼻も口も非常に小さく、顔の高低ははっきりせず、目つきは澄んでいるが、目尻がつり上がっていて、邪悪で妖艶な感じがする。彼女は大きな魚の腹の上に腰をおろし、背後に太い肉管が大きな魚の体とくっついていた。

大きな魚の腹のなかは空洞になっていて、わたしは身体をかがめるしかなかったが、この女性が異性を求めるような表情をしているのを見たとき、それは地球上のすべての女性にとって同じようなものだった。

この女はしゃべっていたが、わたしにはわからなかった。私の耳にはグローバル・インフォメーション・ネットワークの翻訳が聞こえなくなり、グローバル・インフォメーション・ネットワークのサービスから外れてしまい、ノートンたちと連絡が取れなくなり、助けてもらえなくなってしまいました?

目の前にいる女性は、まるでわたしたち地球上の子供のようでした。わたしは彼女をつかまえて、島に連れていくように命じました?そんなことができるだろうか?

私は思わず彼女に近づき、彼女の笑顔や淫らな笑顔に向かって近づき、彼女の首を絞めようとしましたが、彼女の体に触れると、電流が当たりました,電気ショックであたりが暗くなりました。

私は電気ショックで仰向けに倒れた。女はすばやく跳びあがり、脚を開いて私の胸にまたがった。彼女の肌は水を含んだウナギのようになめらかだった。

彼女の陰部がぼくのほうに向いていて、ぼくは彼女の陰部が突然裂けるのを見た。そこには長さも太さもさまざまなターコイズ色の、柔らかい感じのする管がたくさんあって、

管のてっぺんにはスモーキーグリーンとフクシア色があった,緑色の肉管の内部はこんな色だったのだ。

それらの肉管は毒蛇の群れのようにからみ合い、頭をもたげ、群魔が乱舞して物をかみ切ろうとする様子であった。

突然、彼女の陰部のチューブから緑色のねばねばした液体がたくさん噴き出してきて、私の全身を熱くした。私の全身は興奮剤でも打たれたように熱くなり、狂ったような力が体内で爆発した。

この女性は私の胸に、陰部を押しつけてきました、体はゆっくりと後ずさりして、私の腰まで下がり、私のお腹の下まで下がりました、弟が陰部に入ると、柔らかいチューブが、たくさん巻きつきました,ゆっくりと包み込まれていくと、とてつもない快感が襲ってきます。

彼女の目からは透明な液体が流れ出して私の胸にしたたり落ち、すぐにまた私の体の中にしみ込み、また大きなエネルギーが一気に全身に伝わった。

とても楽しくてたまらなかったが、それと同時に眠気が襲ってきた。

いつの間にか、肛門に肉管が入っていくのを感じ、眠気

はたちまち消えてしまい、恐怖のあまり、肉管が体内に入ってくるのを防ごうと、必死に心を抑えようとしていた,しかしそれも無駄だったので、次々と眠気が襲ってきて、眠っている間に肉管が少しずつ私の体の中に入ってきました。

肉管が粘りけのある熱い液体を体の中に噴き出し続けているのを感じながら、わたしは自分がひとしきり激しく使い果たされているのを感じた。肉管は徐々に腸から胃まで上がり、口の中で止まりました。

いつの間にか目を覚ますと、自分の頭から被っていた透明なチューブが消えていて、女性は私の体から離れていましたが、太い緑色の肉のチューブが私の肛門から彼女の体につながっていました。

突然、口の中に舌が一つ増えたような気がして、それを吐き出してみると、びっくりして蛇の舌のような緑色の肉管が出てきた。わたしもびっくりして、ペニスの中からも緑色の細いチューブが出てくるのを見ました。

私が目を覚ますと、女性は興奮して脚を広げ、陰部からたくさんの肉管が伸びて、空中を舞い、やがて私の上に落ち、無数の肉管が私の体のあちこちに吸い込まれていきました,同

時に私の体の内部の肉管像は多くの小さな枝を分け、私の体全体の内外は何万もの柔らかい小さな手にそっと撫でられているようで、言いようのない快楽が全身に満ちている。

それから肉管が、ねっとりとした熱い液体をたくさん吐き出したので、私は目を閉じて、自分の肉体的な快感が最高潮に達したような気がしたが、そのとき、突然、何かの力が私を押した,わたしは大きな魚から放り出された。

澄んだ海の中で、緑色のチューブがまだ私の肛門につながっているのが見えた。緑色のねばねばした液体が海水の中に広がり、分離し、冷たい海水が私の皮膚を無数の小さな針で刺されたように痛く苦しくさせた。

不思議なことに、呼吸する必要もなく、違和感もなく、肌は冷たかったが、心は熱く、肛門につながる肉管がエネルギーを供給してくれたのかもしれないと思った。

試しにもがいてみると、肛門の肉管が心臓の五臓を引っ張って痛い。

この首吊り女は、どういう目的のために、わたしを体外に排出しようとしたのだろう?わたしの身体に苦痛を与えるため?

突然、私はこの女性の性的奴隷になってしまったことに気付きました?地球に戻って、両親と再会できるだろうか?悲しい気持ちに襲われた。

やがて、冷たい海水に耐えかねて、わたしは身体を丸めた。突然肛門のパイプが引っ張られ、大きな痛みが私の心臓と臓器に広がり、私はゆっくりと大きな魚の腹の中に引き込まれました。

この悪魔のような、毒蛇のような女は、大きな魚の腹の中にすわって、両手をふりまわしながら、わたしに話しかけたが、わたしには一言もわからなかった。

この女性が私の体に液体を注入すると、私の脳は突然緑色になり、私はすぐに眠りに落ち、別の液体を注入し、脳は突然赤くなり、興奮しました。

ほとんどの時間、私は昏睡状態にあり、この女性がセックスを必要としているときに私を起こします。

やがて、肛門の肉管が脊髄にまで達し、脳にまで達するのを感じ、それ以来、私はこの女性と心を通わせることができるようになり、同時に目を閉じると海の景色を見ることができるようになりました,あまりはっきりとは見えないが、視

野や角度も思うようにはコントロールできない。

微麗《びれい》が言っているのと似たようなもので、この女は私を性奴隷《せいどれい》としか思っていない。

彼女は私の体を改造しましたか?わたしのからだ全体が色を変え、青みがかった緑色を帯び、彼女の緑色の肉管がわたしのからだで何をしているのか、わたしにはわからなかったが、それを考えると恐怖と不安がこみあげてきた。

この女と心を通わせることができるし、外の海の世界をいい加減に見ることができるので、私はもっと気分がよくなって、この女から逃げ出したいという気持ちが強くなった,ノートンたちに会いたいという気持ちは少しずつ和らいでいった。

私はいつもこの小柄な女を抱いて、自分の膝の上に乗せて、海の底の逞《たくま》しいあちこちをさまよっているうちに、かえってこの女が好きになってしまった。

しかし、長くは続かなかった。激しい衝撃で目が覚めた。激しい痛みが臓腑に広がっていた。目を開けると、抱きしめていた女性の苦しそうな表情が目に入った,身体を丸めて激しく震えており、私の肛門につながっていた緑色のパイプも切

断されていた。

周囲の光景が変わり、もはや海底ではなく、大きな空飛ぶ円盤の中にいるのがわかった。目の前には大きな魚の体が横たわっており、その体はすでに切り開かれ、いくつかのロボットが操作していた。

ややあって、大魚の死体が投げだされ、円盤の三次元バーチャル・スクリーンに映しだされると、大きな波しぶきをあげて海に落ちていくのがはっきりと見えた。

ノートンが耳に手を当てて、グローバル情報ネットワークを通じて人々と話しているのが見えました。

こんどはノートンが仕組んだ実験ではないかという直感がふとわたしをとらえた。

アンドロイドたちが何人かやってきて、わたしとあのかわいそうな女性を袋ごと分けて入れてくれた。

ゴークシャーの病院で、ノートンとビリー、スーデルに会いました、ノートンはこう言いました、「我々の怠慢のせいで、今回の事故で、あなたを危険にさらしてしまい、申し訳ありませんでした」

「お兄ちゃん、今どんな気持ち?」と私の手を取り、心配

そうに尋ねた。

「めまいがして、体がだるくて、吐き気がする」。

「だいじょうぶ、人工情報フィールドを何度かスキャンすればいいのよ」スーデールがなだめた。

私は工場のスキャナーに横たわって、しばらくの間、気分が良くなりました。

「うん、今はずっと良くなったけど、まだめまいと脱力感と喉の渇きが残っているような気がする」。

コンピュータの仮想スクリーンを操作していたノートンが、仮想スクリーンを指さして言った,

「ほら、前の兄ちゃんの体の中から、こんな色とりどりのものが排出されている。前の兄の身体はまだ問題があり、海底人は前の兄の身体に手を加え、人工情報フィールドは完全に治療できない、完全に前の兄を治すために人間の植物化学療法が必要です。これから人体植物化学療法病院に移りましょう」

ヒト植物化学療法病院では、私は大きな瓶のそばに運ばれ、ノートンたちは遠くからバーチャルスクリーンを通じて操作していた。突然、私の足元にある大きな黒い缶のてっぺ

んが、ゆっくりと開きました。

グローバル情報ネットワークを通じてノートンから遠隔操作で飛び降りろと命令されたとき、そこには毒蛇のように狂ったように踊る血のような赤いチューブがいくつも見えた。チューブの先端は血まみれの口のように開いていて、ぞっとするほどだった。

くそっ、ノートンはわたしに危害を加えようとしているのか、と心の中で毒づきながら、わたしは思わずこの大きな壺の中に身体を落としてしまった。

まるで空中から鉄骨の林立する地面に落ちていくような感覚に襲われながら、私は目を閉じて、この恐ろしい触覚の到来を想像した。

しかしすぐに感じるのは、たくさんの小さな手に支えられ、たくさんの肉管に体を支えられ、絡まり、吸いつかれるという快感だった。

やがて眠気が襲ってきて、眠っているうちに、肛門から肉管が入ってきて、私の体の内部にいっぱいになりました。その後、瓶を満たす液体が感じられ、私の体は液体に浸かって呼吸できなかったが、不快感もなく、肛門のチューブがエ

ネルギーと血中酸素を供給してくれたのかもしれない。

人間の植物化病院を出てから、私はやっと体が完全に回復したのを感じた。

三十六、海底両生の巨人への贈り物

ノートン、スーデール、ビリーと再会したとき、彼らは水星の海底に住む寄生虫のことを話題にした。

ノートンが言うには、ゴーカー星の海底にも多くの寄生種が住んでいて、そのうちの一種である両生類もまた寄生種で、高度に発達した惑星から持ち込まれた種で、海底に住むことができるということだった,陸地にも住むことができます。

彼らの母星の科学技術は非常に発達しており、巨大で先進的な建築と設備を持っている。彼らは初期の未発達時代には群居を好まず、後に自分で自分の身体を作って群居することができ、宇宙の高級な知的人種に属していた。

ノートンが手を振ると、地球上の女性の体によく似た女性の体が三次元の仮想画像として表示された。

ノートンは、これは水系から進化した人種だと言っていますが、現在の形状は、後にゴーク族が自分たちで設計して

作ったものです。

彼らの母星では、彼らの男性は非常に小さく、一般的に女性の体に寄生しています。彼らの母星は巨大で、ほとんどが水に覆われており、海底には人がまばらで、遠くを見ることができず、異性と出会う機会はほとんどありません。

彼らの初期の進化の過程で、彼らの女性はいったん海底で男性に遭遇したら、決して手加減せず、非常に残酷で、あらゆる手を尽くして男性を捕らえ、一度捕らえたら、決して逃げさせない。

その後、彼らは進歩し、高度な技術を持ち、道具を作り、自分の体を作ることさえできましたが、多くの人々は女性が男性を捕まえることを続けています,男性を自分の体に寄生させるという、伝統的な習慣があります。

ノートンは最後にこう言いました,

「近いうちに、この両棲《りょうせい》の寄生種を訪ねて、ついでにプレゼントしておきましょう」

そう言いながら、ノートンは私を見た。「このプレゼントが、あなたの前のお兄さんです」

はい?彼女たちに私の体をプレゼントして、体験デジタル

を手に入れ、ノートンたちにデジタル富を生み出しましょう?

ノートンはいつもわたしをだましたり、わたしに知られないように仕組んだりして、ゴーク星系の奇妙な女性たちに突然遭遇させたり、わたしの肉体を体験させたり、しばしば彼女たちに乱暴に扱われた。

なんで今回はそんなにはっきり言うの?私たち地球上の女性に似ていて、本能的な反感を買わないからでしょうか?あるいは高度な知的人種で、私に対して文明的で優しく、野蛮な攻撃や虐待をしない。

しかし、ノーと言う権利は私にはなかったし、ノートンたちを恐れて黙っていた。

まもなくノートンは水陸両用の人々が集まる場所に案内してくれた。

私たちはまず空中で停止し、それから巡航する姿勢で、空中から環状の島を見ると、島の景色は非常に美しく、各種設備が整っており、真ん中には青々とした海水がある。

わたしたち一行はグローバル・エクササイズ・ネットワークを通じて直接海底に入り、周囲には海水ではなく空気があり、きわめてすばらしい施設や、巨大ですばらしい家々が

見えた。

上を見上げると、10 階くらいの高さに海水が湧いていて、ガラスのようなものが海水を支えているようには見えなかった。

海水は空の雲のように空中に浮かんでいて、たくさんの魚が私たちの頭の上を泳いでいて、とても不思議な感じで、仮想の壁が海水を支えていませんか?

揺れる海水から差し込む日差しが、地面にたくさんの揺れる模様を作り出しています。魚が泳いでいると、地面に影を落としているようで、とても幻想的な感じです。

ここは高級なところだと思ったし、さすがに宇宙の高級知性人種であるだけあって、ゴーク星系ではそれぞれの待遇を受けているのだろうと思った。

まずこの場所のバーチャル・デジタル・イメージ・キャラクターが出迎えてくれた。このバーチャルイメージキャラクターは非常に美しく、端正な女性で、魅力的な容貌を持ち、ただ豊満な身体は裸で、彼女の足は地面を取らず、空中に浮かんでおり、身長はほとんど美しいです,巨人のようには見えない。

これは仮想人間だと思います、身体は小さいかもしれません。

彼女のサイン、全球信息網可温中国語訳: 温暖。

ふっくらとした身体つきと容貌《ようぼう》には温かみが感じられたが、左手には掌《てのひら》がなく、まばゆいばかりの金属製の鉤《かぎ》で、ひどく不釣合《ふつりあ》いで、どういう意味なのだろう?

バーチャル・イメージ・キャラクターが二体のロボットを呼んで、ロボットとノートンが何か言うと、ノートンは私を部屋に呼んで、私の体の内側と外側を徹底的に洗ってくれると言った。

ゴーク星系に来てから、私は彼らの多くの女性たちと接触した。彼女たちは私の体内に野蛮な侵入を好み、それぞれに虐待的な嗜好を持っていた。彼女たちはときどき私に快感を与えてくれたが、しかし,それ以上に、痛みと恐怖と吐き気、そして残酷な虐待でさえも、一度として優しい気持ちにはなれなかった。

ノートンが私を両生類にプレゼントすると言ったので、私は楽しみにしていました、グローバル・インフォメーショ

ン・ネットワークの、バーチャル映像を見たからです、ゴーカーの海底にいる両生類は、地球の女性によく似ています。

地球上の女性と本当にセックスするのはどんな気持ちなのか憧れていたし、女性の優しさも期待していた。

ノートンに部屋で身体の内側と外側をきれいに洗えと言われたとき、わたしは突然、自分の身体をきれいに洗って食べさせたのではないかという不思議な恐怖に襲われた?

それまでは、原始的な野蛮人どもに捕まって、身体の中も外もきれいに洗われ、薬味を塗られ、火にかけられ、焼かれて食べられる夢を見ていた,幸い、悪夢はすぐに終わった。

部屋のドアは仮想であると推定され、私の人が入ってくるのを見ると、すぐに真ん中に物体が溶けた形の大きな穴が現れました。私が中に入ると、その大きな穴はすぐに閉じた。

部屋の中は薄暗く、ぼくは家のまんなかに出ると、ぼくのなかの仮想イメージは消え、ぼくは裸になって、柔らかいゴムのようなものの上に立っているような気がして、細かいねばねばした液滴がたくさん空からこぼれ落ちた,裸の私の上に落ちてくる。

部屋の明かりが急に明るくなり、何本かの黒くて柔らか

い細いチューブが空中からすばやく私に伸びてきて、私の体に泡立つ水を吹きかけ、あるチューブは私の体の毛を剃り落とし、非常に短い髪と眉毛だけを残しました。あるチューブはわたしの指やつま先を吸いこみ、すばやく爪をすり落とした。

チューブはすばやく動き、あっという間に体の外側を洗ってくれた。口の中にチューブが伸びて、泡のような水を体内に吹きかけてくるのですが、やたらと体内に水を吹きかけてくるので、やたらと圧力をかけてくるので、胃腸がキツくなります。

体の外側には黒い輪があり、体を覆っています、頭のてっぺんから、ゆっくりと下降していきます、体内に大きな圧力がかかり、肛門から黄色い便が流れ出します,淡黄色の尿もペニスから流れ出し、肛門《こうもん》、ペニスは流れ出した液体で完全に透明になり、黒いリングも地面に降りてきて、僕の体内に水を注ぎ込んでやっと止まった。どうやら内外の洗浄は終わったらしい。

そのとき、地面のゴムが溶けはじめたような感じがして、私の足はますます深く沈んでいき、ついにはすべりやすい螺

旋状の滑り台を滑り落ちてしまった。

私が地面に降りて立ち上がると、周りに 4 人の特に巨大な裸の女性がいて、私の到着を見て、すべての周りに集まりました。

彼らはわれわれ地球人と同じような顔をしていたが、きわめてきめの細かい白い肌に、磨きあげられた陶器のように、うす青いものが混じっていた,おそらく彼女たちの血は青いのだろう。

彼女たちの前の肌は白く、後ろの背骨は漆黒で、漆黒と白の境界部分はごく自然に移行している。

頭上の海水の流れによって、海水から漏れ出る光の量が、地面に変化する模様を作り出しています、巨人たちの上では、その動く模様が、絶え間なく変化しています,私が見た毒蛇のような模様は、とても不気味で、奇妙な感じがしました。

彼女たちの身長は五、六メートルぐらいで、まぎれもなく巨人で、背が高いだけでなく、体つきも極端に太くて豊満で、二つの巨大な乳房は大きなカボチャのようで、直径は半メートル以上あった。

赤紫色の乳首で、そのまわりに魚の鱗《うろこ》のよう

な模様がいくつもある。乳首に近い位置は色が濃く、後ろの方は色が薄くなるように徐々に移行していきます。ただし、3、4 周しか見えません。

彼女たちにも臍があり、私の頭ほどの大きさで、ラッパ状になっていて、深くて底が見えない感じだった。太くて丸みを帯びた太腿は、直径一メートル以上ある。

この人たちの巨体にはショックを受けましたが、一人の男性をお腹に吸い込んで寄生者にすることができる彼女たちは、確かに背が高いのではないかと想像していました。

しかし、実際に見てみると、やはり自分の予想を超えていて、巨大だというだけでも、とても迫力があり、怖い感じがします。

これらの人々は私に別の感じを与えました非常に洗練された、美しいです。

彼女たちの髪は昆布のようで、頭の上から背中にかけて毛のようなものが生えていて、背骨まで続いていて、背骨になると短くなり、フカヒレのようでもあり、キクラゲのようでもありました,ことに尻から下は、魚の尻尾《しっぽ》のように黒光りしている。

彼女たちの腕のくぼみと二本の太腿のあいだには、ナマズのひげのような肉管が何十本も生えており、垂れ下がったりからみ合ったりしていた。

彼女たちの一人が、私を抱き上げてくれました、母親が赤ちゃんを抱くようなもので、とてもなめらかで、とても硬く感じられました、美しい肌よりも硬かったのです。

ひどく生臭《なまぐさ》く、それに酸《す》っぱい臭《にお》いがまじって、たまらなく強烈《きょうれつ》だった。

これらの女性のほとんどは、においで男性をコントロールするのが好きで、彼女たちのにおいはまず男性を嘔吐させ、その後適応し、最後に彼女たちのにおいが好きで、中毒性さえあります。

彼女は大きな口を開けて私にキスをした。彼女の唇は深い赤紫色をしていて、いくつかの青い点がきらきらと輝いていた。

彼女の歯は白くてきちんとしていましたが、サメの歯のように小さくてとがっていて、恐ろしい感じでした。

彼女の舌は何本もあり、その形は彼女たちの腕の下にあ

る肉の管のようで、何百匹もの蛇が彼女の口の中で踊っているようだった。

彼女の口の中に頭を押し込まれ、目を開けると、暗い夜空に青い点がいくつも点滅しているように感じられた。

彼女は蛇のような舌をたくさん私の頭に巻きつけ、鼻水のような粘液をたくさん流し、臭いもひどく生臭かった。

彼女はわたしの身体をしっかりと抱きしめ、頭を下にして、足を上にして、彼女の身体にくっつくようにして下に移動し、彼女の極度になめらかな肌と擦れ合って、とても刺激的だった。しかし、その強烈な生臭さとすっぱい臭いはますますはっきりしてきて、彼女の下半身から発せられているように感じられた。

彼女の下半身はわれわれ地球人と同じで、外見はどれも似たようなものだったが、色だけはほかのところとまったく変わらなかった。

彼女の下半身もやはり濃密で、多数の長い肉管の下に細長い肉の隙間が隠れているように見えた。肉の裂け目の両側にあるふくらんだ肉唇は、ふっくらとして長く、前からうしろへとつづいている。

彼女の下半身の肉管は体の外側についていて、伸びたり縮んだりすることができない。下半身がほっそりしているような肉管ではなく、身体の内部にある空洞に隠れていて、突き出したり、素早く収縮したりすることができます。

あとでわかったことだが、この巨人たちの体内にも肉管がたくさんある。

この巨人の体の外にある肉管は束になってもつれ合い、絶え間なくくねくねと動き、まるで多くの奇怪な蛇が絡み合っているかのようだ。

彼女はこの強烈な刺激臭に対するわたしの強烈な拒絶をものともせずに、わたしの身体を彼女の下に移動させた。

さらに三人の巨大な女が近づいてきたが、彼女たちは全員、恥ずかしげもなく全裸だった。私に唾を吐きかけながら、脚を開き、下半身から真っ赤な肉管を伸ばして、宙に浮かせた,それから私の体にねばねばした臭いのする鼻水のような液体をたくさんまき散らした。

巨人の一人が肉管の頭部を手でつまんで、勢いよく噴射した。

女たちは正面から噴射し、また身をひるがえし、身をか

がめ、腰を浮かし、すばやい動作で尻を振り、身をくねらせ、下半身の肉管を空中にふりまわし、振りまわした,なおも粘液を体に噴射しつづけている。

私の全身はねばねばした液体に覆われ、一部は長い糸を引きながら落下しはじめた。

巨人はわたしの頭を彼女の下半身の肉のチューブに押しこみ、チューブのなかの筋肉が力強くうごめき、人間が食べ物をのみこむように強い吸引力を生みだし、わたしは必死にもがいた,吸い込んだら窒息してしまうのではないかと心配だった。

しかし何の効果もなく、彼女はあっさりと僕の頭を吸い込み、その中にたくさんのねっとりとした肉のチューブがあるのを感じて、僕の頭や顔をこすったり、絡ませたりした。

しばらくして、彼女はまた私の頭を引っ張り出した。見ると、自分の頭や体に、鼻水のような白っぽい、やや黄色味を帯びた粘液がこびりついている。この液体は、長い糸を引きながら、下へ下へと落ちていく,この液体は強い粘性を持っていると断定できる。

死んだロブスターのにおいに似ているが、まったく似て

いない、このどろどろした液体から発せられるような、強烈で奇妙な生臭さとすっぱいにおい。

容易に見逃してはくれないだろうと思ったら、案の定、下半身の筋肉のチューブに足を入れられ、チューブは強く飲み込み、巨大な吸引力でまた吸い込まれ、必死に抵抗しながらも、,無駄だった。

彼女の下半身の筋肉の管の中に楕円形の肉の環があるのを感じた。上下の距離が大きく、左右の距離が小さく、私の両腕は肉の環の外側にあり、体が引っかかってどうしても中に入ることができなかった。

彼女の下半身の筋肉の力強いうごめきが、わたしの内部に強い吸引力を感じさせ、それがまだわたしのからだを引きつけていて、わたしのからだはそのままひっかかって苦しかった。

この時、全世界の公共情報網が突然オープンし、依然としておなじみの情報網のカスタマーサービスの可温の声が、,

「哀れなエイリアンよ、あなたの身体は囚われており、身体が強く圧迫され、摩擦されることによって苦痛を和らげるために、あなた自身を眠らせるように努力することをお勧

めします。」

カウンターは映像情報サービスも提供してくれ、私を体内に吸い込んだ女性の姿を、外から見ることができました。

目を閉じ、大きく口を開け、ご機嫌そうにしている女の姿を見て、わたしは彼女がわざとそうしているのだと理解し、彼女の下半身の肉体がわたしの肉体に強く押しつけられることによって、彼女自身に快感を与えようとしているのだと悟った。

ゴク星系にいる多くの奇妙な女性には、この共通点がある。

しかし、彼女のその圧迫の力があまりにも強くて、私は苦しくて、我慢しきれなくなって、いきなり体を 90 度ねじって、体がすっかり中に入って、急に楽になりました。

彼女の下半身の色は口の中と同じ深い赤紫色で、いくつかの青い光点が点滅しています。

目の前の肉のカーテンの隙間が、ゆっくりと閉じていくのが見えました、私の心はとても緊張していました、全てが閉じられていたので、窒息してしまったのでしょう、ある程度閉じられたら、止まってしまったのでしょう。

外の 2 枚の肉の間の一筋の空を見て、口の中は豚の大腸のような肉の管に突き当てられて、顔の周りに多くの肉の管が絡み合って、味はひどく生臭いです。

しかし私はまだ呼吸することができたし、内部の吸引力も停止した。そのとき私の心はかえって軽くなった。窒息して死ぬよりは、生臭いにおいのほうがはるかにましだと思った。

はじめのうちは、この巨体の女が、わたしの体を彼女の腹に吸いこんだのは、気まぐれで、遊び足りただけで、外に出してくれるのではないかと思った。少なくとも私は毎日、小便をしたり排便をしたりしなければならなかった。

しかし、私の考えは間違っていた。彼女は長い間私を出してくれなかっただけでなく、浮気をし始めた。

やがて私の肛門《こうもん》から肉管《にくかん》が野蛮《やばん》に体内に伸びてきた。私の体は彼女の肉体にしっかりと包まれていて、何が私の体の中に入ってきたのか見ることができなくて、また体をよじって避けることができなくて、ただ必死に念力で阻止することができて、しかし少しも役に立たなくて,自分の身体の内部に太い肉管が野蛮に入り

込んできて、私の身体の内部を強力に泳ぎ回り、押しつぶされていくのを感じます。

最初はただの肉管だったが、あとになってたくさんあるような気がした。最初は私の大腸、次に小腸、尿道、胃、そして最後に喉、口の中。わたしは口をあけ、赤紫色の肉管を吐きだした。

そのとき、突然、彼女の肉体がリズミカルに収縮していくのが感じられた。体を締めつけるように締めつけられていく。尿道の肉管がリズミカルに震えている。これまでに感じたことのない快感だった,そしてその快感は長く続きました。

そのあいだに強烈な眠気が襲ってきて、いつもと違って、目が覚めると快感は消えてしまった。

こんどはちがって、目がさめると、このうえもない快感がつづいていた。しかも夢のなかではいつも快感があり、快感は直腸、肛門、尿道が肉管で充満し、圧迫されることによってもたらされるように思われる。

こうして私は半ば夢うつつの状態で、さまざまな幻覚とともに、何日か、あるいはもっと長い時間が過ぎたように感じられた。

そのとき、ノートンが言っていたことを思い出しました、巨大な体を持つ女性の寄生種が、あなたを吸い込んで、セックスすると、10 の快楽を与え、普通の人とセックスする、ということです,幸せを与えるレベルは 1 です。

たしかノートンが言っていたように、この巨大な寄生虫があなたにもたらした苦しみは、それがもっとも大きく、もっとも長く続くものであり、果たしてその苦しみはそれほどのものなのだろうか、と私は思った,また恐怖と不安が襲ってきました。

これまで感じたことのないほどの快感、おそらくはわたしの全身が彼女のなかに吸いこまれ、わたしと彼女の肉体の接触が全方位にわたってわたしのなかのいたるところに刺激を与えているのだろうと思われた,もう一つの理由は、彼女の肉管が私の中に入り込み、彼女独自の毒素を私に注入し、あらゆる種類の素晴らしい幻覚を作り出すことができたからです。

そして彼女の下半身の強烈なにおいは、いつも私の心の中にあった。このにおいは最初から私の胸をむかつかせたが、その後、私はこのにおいがとても好きになった。

思いがけないことに、私の体は彼女に引き継がれ、彼女は肉管を通して私に栄養と酸素を供給し、排泄物を持ち去った。少なくとも毎日のように排尿や排便をさせられていたのだと思うが、それは間違いだった。

そのまま頭を下にして足を上にしていると、ときどき外が見えるだけで、身体は彼女の肉体のきつい包みに押しつぶされ、身体の内部は肉管の野蛮な侵入によって無防備になっていた。

わたしはこれらの両棲の人々にたいして、いわゆる文明的な知性の人々にたいして、予想されていた好意をすっかり失ってしまった。彼女らはいっそう野蛮で残忍であるように思われた。彼女らはもっとほかのことをしようとしているのではないかという予感がした。

案の定、しばらくすると、強い圧力が私の体をこの女の体から押し出してきた。ひょっとすると、この女はわたしを解放しようとしているのかもしれない、とわたしはうれしくなった。

とんでもない、と彼女は私の背中を両手で支えながら、もう一人の巨人の体に私の頭を押し込むようにして、引き鋸

《のこぎり》のように前後に強くこすったり押しつぶしたりした。

私が疲れ果てるまで、彼女たちは私を見逃したり、立ち止まったりしませんでした、グローバル・インフォメーション・ネットワークが、映像を提供してくれました、彼女たちは楽しそうに遊んでいました。

わたしは抵抗しなかった。彼女たちの力が強すぎることに気づき、抵抗しても無駄だと悟った。わたしは自分を抑え、意識を失わせようとした。

しかしなかなかそれができず、身体をすばやく激しくこすられ、強く押しつぶされることで極度の疲労を感じ、さまざまな幻覚を見るようになり、自分が死にそうな気分になった。

ただ、僕が死なないうちに、結局彼女たちは立ち止まり、僕は彼女の中で眠ってしまった。

どれくらいの時間が経ったのかはわからないが、彼女の体から出てきて、彼女に抱かれて日なたぼっこをしている夢を見た。とても心地よく、楽しく、穏やかで、幸せな気持ちだった。

しかし、彼女の激しい動きで、私は目を覚まし、私がまだ彼女の中にいることを知る前に、感覚を取り戻しました。

高いところから海水に飛びこんで、冷たい海水がわたしの顔に当たったかと思うと、ほんの一瞬、目の前の光がふっと消え、あたりは闇に包まれ、目の前の肉のカーテンが閉ざされているように思えたのです,彼女は海で泳いでいるのかもしれない。

グローバル・インフォメーション・ネットワークが、私に情報を提供してくれました、彼女と他の 3 人の巨大な女性が、裸で海底を泳いでいるのを見ました、他の 3 人のお腹にチベット人はいませんでした,彼女のお腹はずっと太かったのです。彼女たちは巨体であるにもかかわらず、海底を泳ぐ姿勢はしっかりしており、とても優美である。

私は長い間、頭を下にして、足を上にして、彼女の体の中にいました、脳に血液が集中して、頭がぼうっとして、耳鳴りがして、とてもひどくて、とても苦しくて、焦っていたのかもしれません,彼女の中から出て行きたいという、強い願望が常にありました。

自分の体が外に出られない状況で、極度に辛い不安感を

克服するためには、自分を眠らせる努力をして、苦痛や焦りを和らげるしかない。

人はしばしば半分夢の中にいて、その間に多くの幻覚を見て、多くの特別な記憶を開いて、彼女の体内にいる時間がとてもとても長く感じられ、まるで私の体が彼女の体内に閉じ込められているかのようでした,海底を歩き回り、海中の様々な光陸怪異の景物や様々な危険な場面を経験し、そして長年生きてきた感がある。

私は前世をどこかの星の海の底で生きていて、今はただ前世の記憶を開いているだけなのだろうか?

そのあいだに私はたくさんの夢を見たが、そのなかでいちばん多かったのは、大きなねばねばした油さしのなかに、ひどくなめらかな肉の管が口からはいりこんで、肛門からはいだして、一方のはしは天に、もう一方のはしは地下に通じているという夢だった。

私の体はその肉管に沿って、ゆっくりと下降し、あるいは上昇していきました。太い肉管と私の肛門、胃腸、咽喉とのゆっくりとした摩擦が、心地よく感じられました。

それから、素っ裸になって、口から口へ、肛門から出て

くる、とてつもなく滑らかな肉の管に沿って、太い管と細い管の間を、ゆっくりと滑っていきました。

もう一つよくある夢は、私が特殊な海で泳いでいるとき、海水はどろどろした透明な油のようで、どんなに努力して上に泳いでも、海面が見えず、水平方向に泳がなければならないというものだ。

ときおり、蛇やウナギやウナギやタコや女のように、からみあった蛇人間のかたまりに出会うと、すぐにからみついてくる。あるいは太腿を締めつけてくる,あるものは私の首に巻きつき、あるものは私の腹部に巻きつき、また多くは私の口や肛門から体内に入り、また出ていった。

行ったり来たりしているうちに、恐怖や苦痛を感じることなく、極度の快感と絹のような感触が得られた。

彼女の中で昏睡《こんすい》する以外は、彼女の中から出てきて、自由に動けるようになることを想像していたのに、なかなか出してくれなかった。

何度も夢を見て、出てきた夢を見て、すっかり気分がよくなった。しかし目を開けると、まだ見慣れたものしか目に入らず、肉のカーテンの間の細い肉の隙間から光が漏れ、口

と鼻の穴がこの巨人の肉の管でいっぱいになっているのが見えた,元気を取り戻した気分は、たちまち失望と絶望に変わった。

長い間逆立ちしていたのかもしれないし、彼女が僕の体の血液を入れ替えたのかもしれないし、あるいは僕の体に何か有毒なものを注入したのかもしれない。僕が見ることのできるすべての風景の色が変わっていた,そしてぼんやりとはっきりとは見えなかった。

ついに一度だけ、彼女は本当に私を解放し、彼女は仮想ソファに横たわって目を閉じて、彼女の膝の上に私を置いた。

周りは日差しがきれいで、景色はとてもきれいですが、とてもまぶしくて、私は長い間日差しを見ていないので、慣れていないのかもしれません。

僕は彼女から離れようと、ゆっくりと彼女の太腿《ふとももも》に身を沈めてみた。しかし立つことができず、何度やってみてもうまくいかず、とても立つことができず、しかも自分の体が何度か折れてしまったような気がして、お互いに調和がとれなかった。

せっかく逃げるチャンスがあったのに、どうして自分は

今、歩けないのだろうと、ひそかに自分を責めていた?

でも、すぐに、這って歩けることがわかりました。私は這って行こうとして、しかし、そんなに遠くまで這って行かないで、後ろの肛門は依然として一本の肉管が彼女の体につながっていて、このように軽く引っ張って、私の五臓は激しく痛くて、仕方がなくて、私はしぼんで帰ってきました。

彼女に捕らえられてから、本当に彼女の体から離れたことは一度もなく、このように外に出て日光を浴びることも極めて少なかった。

ノートン、ビリー、彼らの言うとおり、この両生類の女性は、貪欲で、横暴で、残忍で、男性を捕らえ、吸い込むと、彼を閉じ込めてしまいます,絶対に外に出さないのです。

わたしははじめから、彼女がわたしを解放してくれることを期待していたのだが、そのうちに、彼女がわたしを解放してくれることをことさら恐れるようになり、いったん彼女がわたしのからだをむきだしにするほど強く押しつけてきたときには、わたしの心のなかでは、なんともいえぬ激。

というのも、彼女がわたしを解放した目的は、たいていの場合、三人の巨大な女たちを楽しませるためだったからで

す。

彼女は私の上半身を彼女の体から突き出させるために、何度も私を強く押しつけた。三人の巨大な女たちは、わたしの体が出てくるのを見ると、わたしのまわりに集まってきて、わたしの体に唾を吐きかけ、下半身の肉管から生臭いどろどろした液体をたっぷりと吐きかけてきた。

どろどろした液体が噴射されると、彼女たちのひとりがわたしの上半身を彼女の下半身に吸いこんだ。

肉のチューブがわたしともうひとりの巨大な女性の体をつないでいるので、彼女はわたしの体内に血中酸素を供給することができる。巨大な女たちは、ぼくを体内に吸いこんでも窒息しないことを知っている。あるいは、外界の循環システムを利用して、ぼくの体内に血中酸素を注入したのかもしれない。

ぼくの上半身は、もうひとりの巨人によって彼女の体内に吸いこまれると、摩擦をくりかえし、押しつぶされた。

時々、他の 2 人の巨大な女性が、私のお腹に肉のチューブを入れて、締め付けるようにして、私の肛門に肉のチューブを入れました、私の肛門には肉のチューブがありました,彼

女たちは構わずにもぐり込んでいく。そして僕の腹部を強く締め付け、もぐり込んだ肉管を強く締め付ける。

ときどき、こうした外来の肉管は、尿道に入るとすぐに膨れ上がり、ペニスに別の肉管がすばやく巻きつき、内側と外側がしっかりと締まります,それは私をひどく苦しめました。

彼女たちに何時間も苦しめられているような気がして、上半身を引き抜けないこともあった。

彼女たちはその圧迫と摩擦が好きで、おそらくその強い圧迫と摩擦が彼女たちに快感を与えているのだろうが、私はそれに耐えることができず、そのたびに死に近づいているような気がした。

こうした巨大な女性に対してはよく怒鳴っているものの、意味がわからなかったり、まったく相手にしてくれなかったりすることもあるでしょう。

わたしはまた心のなかでつぶやいた。もう我慢できない、放してくれ!私はグローバル情報ネットワークのカスタマーサービスがこれらの巨人にメッセージを伝えることができることを願っていますが、何の効果もありません。

あのときは、あとで彼女たちの中から出てきたとしても、

歩けるかどうかが心配だった?深刻な問題だった。

この前彼女の体内から出たとき、歩けなかったのは、おそらく彼女の肉管が、私の体内にあって、立っていられなかったからでしょう,まるで、うなぎの腹にまっすぐな針金を通して、うなぎが曲がらなくなったように。

これから先、この巨大な女の身体から自分の身体が抜け出すことを期待するばかりでなく、彼女の肉管が完全に自分の身体から抜け出すことを期待して、自分が果たして立つことができるかどうか試してみようと思った。

それでも立っていられないのであれば、私は廃人であり、故郷に戻って働くことができず、家族の世話をしなければならず、誰が私の世話をすることができますか?お父さんとお母さんは野良仕事、おじいちゃんとおばあちゃんは私の面倒を見てくれる、老後はどうなるの?

そんなことになったら、死ぬのと何が違うんだ?このままずっと彼女の中で生きていた方がいい。

とうとうチャンスがやってきて、彼女はわたしを解放し、ねばねばした液体にまみれた緋色の肉管を何本かわたしの体から引き抜いた。たくさんの粘液が運び出され、地面に流れ

落ち、淡い黄色に輝いていた。

肛門から引き出された肉管は太く、尿道から引き出されたものは細いが長く、一、二メートルの長さがあるように感じられた。

こんなに長い?見ていてびっくりしましたが、道理で膀胱と尿道が満たされている感じです。

いまや肉管がわたしのからだからすべて抜きとられてしまったので、かえってわたしのからだの一部が切りとられたような、ひどく不快な感じになってしまった。

とくに尿道や直腸、肛門が肉管で充実していく快感が常に存在していて、肉管が抜けていってしまうという、今ではそういうところが非常に不快で非常に不快な感じがします,私の意識は、こうした肉管が体内に充満していく感覚に適応しているのかもしれません。

精一杯の努力をしたにもかかわらず、地面に立つことができず、絶望的な気持ちに襲われた。

わたしが倒れそうになったとき、別の巨大な女性が裸で上がってきて、わたしを支えてくれた。巨大な女がわたしを支えると同時に、下半身の肉管が宙に浮きあがり、ねっとり

とした液体を噴射した。

おそらくこの巨大な女も、わたしを吸いこもうとしているのではないかと思われたし、ふたりはただ交換をするだけで、わたしを外に出そうとしているのではないかと思われた。

僕は歯を食いしばり、彼女に吸い込まれ、自分の体が激しく擦《こす》られ、押しつぶされるような苦痛を予感した。

やっぱり彼女も俺を吸い込もうとしているのだろうが、やり方が違う。彼女はまずわたしの体を彼女の腹の中に吸いこむのではなく、まずそのねばねばした液体を吐き出す肉管でわたしの肛門をくぐり、それからもうひとつの肉管をわたしの口からくぐらせた。

ほかの巨大な女たちがやってきて、下半身から出た肉管でわたしの体を固定し、倒れないようにした。巨大な女性の一人は、私の弟を、肉管でマッサージしていました。

私のペニスはだんだんしっかりしてきて、とても力強く感じて、腕もとても力強く感じて、どうして足が立たないの?

足の力が抜けるという感覚は、病気になって力が抜けるという感覚とはまったく違い、病気になると全身に力が入らなくなり、この場合は体の各部分がうまく調和していないよ

うな気がします。

あのときは、もしいま弟が駄目になったら、彼女たちはわたしを見逃してくれるだろうかと思った。これらの巨大な女性は、地球人のペニスには興味がないかもしれませんし、私たち地球人の全身に興味があるかもしれません。

彼女の肉管のひとつが、わたしの口から胃へ、そして腸へと、とろりとした液体を噴き出し、肛門から出てきて、わたしの両脚のあいだをぐるぐるまわり、さぐった。私のペニスに触れると、すぐにそれを包み込み、尿道へと伸びていった。

今回、この巨大な女性は、あらかじめ私の胃と腸に大量の粘り気のある液体を噴射していたため、肛門から入った肉管は、簡単に私の腸と胃を通り抜け、私の口の中まで達した。そして、私の中で二股に分かれて、それぞれ体の別のところにもぐり込んでいくのを感じました。

この時、巨大な女性は、肉のチューブを収縮させ始めました、私は彼女のそばに引き寄せられ、彼女は脚を開き、手を使わずに、私の体を下半身に吸い込みました。今度は私が先に入り、最後に足が入りました。中に入ると、息苦しさは

まったく感じられなかった。

ときどき彼女たちはわたしをすっぽりと解き放ち、四人はそれぞれ下半身から太い主肉を突き出して、それぞれの手足を吸いつけながら、少しずつ食べていき、最後には腕のくぼみと太腿の付け根で止まった,それから激しくたがを締めるのだが、そんなことで頭を引っかけられるとたがが苦しくなるので、私はそのたびに何の役にも立たないことを彼女たちに叫んだ。

こんなふうにして、僕は彼女たちに何度も交換された。

結局のところ、ノートンたちの助けがあって、わたしはこの巨大な水陸両用の女たちの体から逃れることができたのです。

出てきたばかりのころは、外の景色を見るのがだいぶ当たり前になっていたが、それでも歩けず、体が何本も折れてしまったようで、お互いに調和がとれなくなってしまっているようで、とても不安だった。私は少しずつ立ち上がろうとしましたが、ノートンは大丈夫です、完治できますと答えました。

ノートンが慰めてくれただけだと思って、歩かせてくれ

ただけで満足だと言った。

しかし、ノートンたちのおかげで後遺症もなくすぐにすっかり治り、わたしは全身に力がみなぎり、活力がみなぎり、不安も吹き飛んでしまった。

しばらくしてノートンが私の体の変化について尋ねたので、私はノーと答えました。なにかにおいがしないかと彼が注意してくれたので、わたしはようやく、この巨大な水陸両用の女たちに特有の生臭いにおいが、体と口のなかにまだ残っていることを思いだした。

また、自分の体の内側と外側の両方がシリンダーに浸かっているように感じ、皮膚は油を感じ、触れると非常に滑らかで、体の内部、腸、胃、喉、食道、尿道なども油を感じます,排便するときは、とてもスムーズに感じます。

何年も耳鳴りがしていましたが、その頃から始まったのでしょうか?

私が見た奇妙な夢について、ノートンは、これはゴーク族によく見られる夢のコントロールで、あの巨大な女性が私にそれらの夢を見させようとしたのだと説明した。

ノートンが紹介した,

「われわれゴック人は異性を支配しているが、もっとも一般的なのは美貌の支配であり、それには美しい身体も含まれるが、これは地球上でも一般的な手段である。

あなた方の地球でよく見られるのは、異性をコントロールするために財物を利用することですが、これは私たちのゴークシャーには存在しません、理由は単純で、物質資源は私たちの惑星では無料です。

私たちゴーク族の特徴は、においのコントロールです、特に女性は、強烈で不快なにおいを発することがあります、しかし、このにおいはとても特別で、しばらくすると異性に、においをかがせてしまいます,異性を離れられなくさせ、とても記憶に残り、病みつきにさえなります。匂いは人それぞれかもしれません。

毒素コントロールもあり、ゴクシンには特殊な人種が多く、体内にさまざまな毒素が蓄えられており、その種類は非常に多い。いきなり噴射したり、異性の体内に直接注入したりして、幻覚を起こさせることで、異性をコントロールするのは、野蛮で残酷なことです。電光石火の速さで、異性を素早くコントロールできるのが特徴です。

私たちはグローバルな運動ネットワークを持っているので、異性は危険を見て、グローバルな運動ネットワークに瞬時に自分自身を取り除くように頼むことができます。異性がグローバル・キャンペーン・ネットワークを要求する前に、急速に毒素を噴射することに成功する。

毒素が少なければグローバルスポーツネットワークに遠隔補給を要請することもある。

私たちには多くの人種がいて、体の中には多くの肉管があり、それを使って異性の体の中に入り込み、異性をコントロールすることができます、その手段は単純で乱暴で、しばしば相手に苦痛を与えます。

私たちの中には小さな体の寄生種がいて、体全体が異性の体の中に入り込み、異性をコントロールしています。体の大きな寄生種が、体の小さな人種を吸い込んで、体の小さな異性の人種を、コントロールしています、その手法は野蛮で、単純で、荒々しいものです。

地球上で最も一般的な、ドリームコントロールは、グローバルな情報ネットワークを使って、行われています。

人はまず自分でさまざまな夢を想像し、遠くにいる異性

が同時に夢を見るようにし、その異性を自分の設定した夢の中に入れることによって、自分がその異性を夢によってコントロールすることができる。

このコントロール手段は最高級のものであり、われわれの惑星では非常に頻繁に行なわれている。

異性をコントロールするために、複数の手段を同時に使うことがよくあります。最もよく使われるのは、夢のコントロールです、他にもいくつかの手段があります。

あなたたち地球上では、夢を見ることは制御不能であり、人為的に設定された夢を見ることはできません。あなたが夢を見ているときに、あなたの夢に人を加えることはできない。

当社のグローバル情報ネットワークは、人工的なスキャンに依存し、真空を介して情報を伝達します。

私たちのグローバル・インフォメーション・ネットワークのカットオフ技術は、遠隔操作で非接触で人間の脳に情報を直接入力することができ、世界中のすべての人の脳から遠隔操作で情報を読み取ることができます。

マニュファクチュアスキャンの、カットオフ技術によって、ゴーク族は、外部の装置に頼らず、自分の脳だけで、真

空を通して、遠く離れた友人と、会話することができます、このような理由から,ある人が他の人を夢の中で、コントロールすることを可能にします。

私たちゴック人の脳はグローバル情報ネットワークに接続することができるが、一般的に情報受け入れの敷居が設けられており、外から来た情報に対して開放的ではなく、選択的に受け入れている。

すべてを受け入れると、毎日大量の情報が送られてくるので、脳は耐えられません。

ゴーカイジャーの女性が夢で男性をコントロールしたい場合は、まず、魅力的な声を使用し、相手に彼女の美しい、美しいイメージを表示する必要があります。

私たちのカットオフ技術は、音だけでなく、映像も伝えることができ、人間の目の前に立体的なバーチャルイメージとして現れることができ、人間の脳に直接入り込むこともできます。匂いや身体の触覚など、その他の情報も伝えることができる。

しばらくの間接触し、お互いに交流し、相手が親しい友人として自分自身を設定することができれば、次の夢のコン

トロールのための基礎を築くことができます。

私たちのドリームコントロールは、基本的にグローバルな情報ネットワークに依存しており、他のデバイスに依存することはほとんどありません。しかし、この技術に関する知識は、私たちの惑星ゴーカートには、たくさんあります。

しかし、この夢は異性をコントロールすることに失敗することも多く、長続きしない場合もあれば、逆に相手に夢をコントロールさせてしまう場合もあります。

相手から精神的な暴力を振るわれる夢相手から精神的な暴力を振るわれて辛い思いをすることもありますが、幸福感を与えられることもあるという具体的なシチュエーションは異なります。コントロールされると怖いというわけではありません。

本当に恐ろしいのは、この巨大な寄生虫が、普通の人間を体内に吸い込み、その普通の人間をほとんど夢の中に放置していることです,寄生する人々は、この普通の人々の夢を、長期間コントロールすることによって、普通の人々をコントロールしています、普通の人々は、彼らのコントロールから、逃れることはできません。

ジャイアントパラサイトは、一般人種に属する異性を自分の中に寄生させ、虐待があまりにもひどく、時間がかかりすぎると、異性を苦しめる。

われわれのグローバル・インフォメーション・ネットワークは、巨大な人種の肉体に寄生している人間を死に至らしめ、その人間の精神を新しい肉体に組みこむ評価を行なう。

メガパラサイトは、自分の中に寄生している異性を死なせたくなければ、夢のコントロールのレベルを上げなければならない。われわれゴーク星系において、ドリームコントロールがもっともすぐれているのは、この巨大寄生人種です」

ノートンはまた、あの巨大な女が私の内部に何かを残していったかどうかを思い出させてくれたが、そのときは気にもとめなかった。

あるとき、眠っているうちに、夢の中で故郷に帰ってきて、いつもの仕事に戻って、ウナギを捕まえた。

プラスチックのパイプのような、非常に繊細な穴があいていました、そこにはウナギがたくさん入っていました、大きな穴ではありませんでした、腹這いになって中に入りました、袋に入らないくらい、つかんでしまいました、ズボンを

脱いで中に入れました。

そして突然、それらのウナギが、あのとき海底で出会った蛇人間のような、あるいはウナギと女との合体のような、きわめて繊細な美しい女たちに変わってしまったような気がした。

腕や太腿《ふともも》や頸《くび》にからみつくように体を絡《から》められると、怖《こわ》くなり、緊張《きんちょう》して、服を脱《ぬ》いだらよかったと後悔《こうかい》し、「何をする気だ」と怒鳴《どな》った。

まさか彼女たちは海底の蛇人間のように僕の中に入り込もうとしているのだろうか。突然、非常に現実的な何かが肛門に入ったと感じ、すぐに目を覚ますと、自分が仮想ベッドで眠っていることを発見し、周りには素晴らしい部屋があり、それは決して深い穴ではなく、黄色のウナギを見ることはありません。

それでもなお、肛門と腹の中で何かが動くのを感じながら、私は足をひらき、念力でゆっくりとそれを外に出してみると、果たして肛門からは、ごく細身の蛇人間が、ゆっくりと出てきた,体には赤、緑、黒の輪模様があり、まだら模様の、

毒蛇のような模様があった。

いつ私は夢の中のあの暗渠に行って、この蛇の寄生者たちに寄生されたのだろう?それともこの部屋の中で、知らず知らずのうちに、私はヘビの人々によって、私の中に入り込まれていたのでしょうか?

その後、私はしばしば寄生人種に接し、何度も身体の小さな寄生女に私の中に入り込まれ、何度も何度も巨体の女に吸い込まれた。

巨人の体から出てきたとき、尿道のなかに蛭ひるのようなものが生きているのを見て、わたしは何度かおどろいたことがある。

ノートンによれば、それは巨人の女がわたしのなかに残していったものだという。

ときどき、口の中や肛門《こうもん》から突き出た鶏の腸や蛇や蛸《たこ》のような肉管が生きているのが見えた。

三十七、紫の泥の世界。

あるときノートンが、地下の泥の世界に遊びに行こうと

言った。

ノートンは私とシュデール、そして私たち 4 人を、グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、家もなく、木も多く、草原もあり、沼地もある場所に連れて行きました。まだゴーク星にいると思う, 他の星に行くなら ufo に乗って行ったはずだ。

わたしたちは地上に直接降下するのではなく、空中にいて、立って巡航する姿勢で進んだ。おそらくノートンたちは降りるのにふさわしい場所を探していたのだろう。

地上の樹木は種類が単一で、葉は幅が広く、多くの平行した縞模様があり、色は鮮やかな黄緑色で、枯れた黄色い葉は見られない。

地面の植物はどれも丸い大きな葉が多く、色も鮮やかで、枯れ葉も一枚もなく、細い尖葉《せんよう》の草もなかった。

地面には畦《あぜ》のような土の道が幾つもあって、それがぐるぐると円を描いて、深い紫色の沼地を作っていた。直径五十センチほどの小さな穴がびっしりと点在しており、そのまわりに輪状の泥の輪が盛りあがって、うっすらと紫色をしている。

バーチャル・デジタルのイメージ・キャラクターが浮かんできて、美しいヘビの姿をしているが、頭がちょっと大きく、遠くから見ると地球の男の精子のようでもあり、オタマジャクシのようでもある。脚はなく、下半身は蛇のような尻尾で、何回かあぐらをかいて、そしてバネのようにぴょんぴょん跳ねるのは、いかにも遊び心があって可愛らしい。

彼女の周りに浮かんでいる一列のゴキシン文字、これは彼女のサインで、全球信息網可温中国語訳: かすか。

どういう意味だ?華奢な女性の意味とは?蛇のように体が一本の線なのか?

ノートンとビリー彼らは、このかわいいサーペンタインの仮想デジタルイメージキャラクターを無視しています。

空中からまっすぐに泥の穴に飛びこみ、その穴に触れたとたん、仮想の衣服がふっと消えて裸になり、ちらりと見えたかと思うと、泥の中に消えていった。

そのまま穴に飛び込んで窒息死してしまうのではないかと心配になった。私は沼の周囲の土の小道に着地し、その小道をしばらく歩いてから、紫色の泥を足でためしてみた。それは私たちの地球の泥と同じものだった。

私は泥の穴の近くに立っていた。そこに飛び込むことができるかどうか迷っていた?

そのとき、カスタマーサービスのコーウィンが、飛びこめば窒息する心配はなく、グローバル・エクササイズ・ネットワークが自動的に血中酸素を注入してくれると言ってくれた。

私は安心して穴の中に飛び込み、滑っていくと、泥がとてもきめ細かくて滑らかで、砂粒や小石の一つも私の体をこすらなくて、しかも泥の温度は私の体温と同じくらいだったので安心しました,だんだん滑走のスピードが速くなってきた。

泥の穴は傾斜していて、長く続いていたので、やがて光が入っている大きな穴に滑り込んだが、そこでは何もかもが薄紫色のままだった。

見上げると、さっき滑っていった小さな穴が頭上にあって、その穴の入り口にはたくさんの泥が垂れ下がっていて、それがぼろぼろになってペースト状になっていて、この地球上を流れていくにちがいない,ゴーク星人は、地球規模の運動ネットワークを使って、落ちないようにしているのかもしれません。

私が落ちた穴は、おおむね水平になっていて、高さ三、四メートル、幅五、六メートルと長く、穴の両端は果てしなく続いていた。

私は大きな穴の中を歩きたかったのだが、底が不平で鍋の底のような形をしており、泥がたくさん溜まっていて、非常に滑らかで、正常に歩くことは難しかった。可温の合図で、横になって滑ると、滑りやすくなった。

グローバルスポーツネットワークの助けを借りて、私は心の中でその方向に向かいたいと思って、自動的にその方向に向かって滑ります、私は力を入れる必要はありません。登

ることさえ難しくありませんでした、それでも滑らかでした。

滑走するうちに、大穴の中に多くの枝穴があり、その口が大きいのもあれば、小さいのもあり、頭上にあるのもあれば、側面にあるのもあり、下にあるのもある。

下のほうにあいている穴にそってもぐりこんでみると、やはり水平に大きな穴があいていた。コーウェンが教えてくれたところによると、その下にはまだ何十層もの水平の大穴があいていた。

コウィンに導かれて、わたしはふたたび第一層の大穴にもどった。

最初の大きな穴に沿って、ゆっくりと進んでいくと、広いスペースがある場所にたどり着きました。ラベンダー色の光に照らされた、光陸の異様な世界が広がっています。

薄い緑がかった黄色をしている多くの不思議な植物が、周囲の薄紫色の背景光にまじっている。植物のあいだには、さまざまな動物がいて、ヘビのような人間が泥のなかを泳いだりすべったりしている,わたしは奇妙な世界に来たような気がした。

コーウィンが教えてくれたのは、ゴーク族が長いあいだ

ここに住みついて、本来の体を時空の冷蔵庫に保存し、ヘビのような人間の体に変えて、地下の泥の世界に住むことができるということだった。ヘビのような体だからだ,泥の中を出たり入ったり、歩いたりするのに便利で、短期間ここに住んでいる人なら、体を変えないのが普通です。

やはり蛇のような体をしている人の中には、よく見かけるゴーク族の体がたくさんあった。

サーペンタインもゴーク族も、仮想の衣服を身につけているわけではなく、ただ、紫色の泥にまみれているだけで、裸でいるのはそれほどみっともないようには見えなかった。自分を見ると、バーチャル・スーツも消えていた。

近づいて見ると、ヘビのような姿をしています,

蛇のようにほっそりとして、蛇やウナギと同じくらいの割合で、非常に細い腰をしていて、両手はあるが足はなく、あるいは二本の脚がくっついていて、尻尾はヘビやウナギのような尾をしていた。

ある者は長く尖《とが》った二本の細い乳房を持ち、陰部があり、ある者は魚の尾のような掌《てのひら》を持っていた。

これらの蛇の形の人は人のような人相、五感を持っていて、目は特にすらりとしていて、目尻が 45 度上がっていて、目はとても小さいですが、しかし、鋭い感じで、口と鼻はとても小さいです。

あるものは血のように赤く、あるものはエメラルド色に、あるものは光るほど黒く、あるものはまだらになっていた。たいていは背中の色が濃く、腹の色が薄い。しかしどの色も極めて鮮やかで、全身がなめらかに光っている。

これらのサーペンタインは体が大きいか小さいかで, 体積の差が非常に大きい。

ヘビのような人間たちに近づくことはできなかったが、たがいに相手の姿をよく見ることができないように、地面に横たわってすべっているので、いつものゴーク族とちがった姿をしていることに、だれも注意をはらっていないようだった。

この蛇のような人間の中の女性たち、つやつやと光る身体は、わたしにとって非常に魅力的だったが、わたしは何度も彼女たちのすごさを思い知らされ、近づくことをためらった。

わたしは目を閉じて、自分のほうから彼女たちの前に現れ、彼女たちに気づかれると、彼女たちがわたしを取り囲み、肉管にまとわりついてくる光景を想像した,私の中に入り込める場所を、探し求めるのです。

そのうちに鼻の穴や口や肛門《こうもん》に肉管《にくかん》が入ってくる。最初はすっきりした感じで、すぐに体力がなくなって、彼女たちの超高速の抽送リズムに耐えられなくなって、最後はとても耐えられない絶望です。

彼女たちの肉のチューブが何本かわたしのなかに入りこみ、それぞれの方向に引きずられていったとしたら、それは断末魔の苦痛だったろう。

ノートンたちがそばにいない状況では、なおさらだ。

それから、小さな穴にもぐりこんで、地面のようすを見ようとしたが、土の穴をすべっているうちに、だれかにぶつかったような気がして、その人がすぐに私を抱きしめたり、もつれたりした。

暗い泥の中ではよく見えなかったが、触覚からすると華奢《きゃしゃ》な体つきの女性だと思われた。彼女の体温は低く、皮膚は硬かったが、極度になめらかで、刺激的な感触

があった。

私は彼女のウエストを、私の腕と同じくらいの太さの、細いウエストにしました。僕の腰に回した彼女の腕も細かったが、力強かった。

わたしは彼女の腰を這いあがらせ、硬くてすべすべした細長い乳房に触れた。さらに撫でていくと、彼女のお尻に達し、大きくはないけれど、乳房を撫でるよりも強い性的刺激があった。

それからまた彼女の脚に触れると、二本の脚は離れずに協力し合っているようなものだった。それからまた下半身には比較的大きな肉の穴があって、私の手は容易にそこに入ることができて、その中にたくさんの細い肉の管があるのを感じて、彼女の下半身のこの肉の穴はゴークの女のよくある体とほとんど同じだった。

私は彼女とセックスしたいと思って彼女の家に住んでいました。私が心配したのは、彼女たちに囲まれることでした。

しかし、彼女の身体はぐるぐると回転し、私の身体の周りに巻きついて、私の小さな弟は彼女の下に入ることができませんでした。

関係を持とうとしているわけではないのかもしれないと思い、両手を離して別れようとしました。

しかし彼女はすぐにまた絡みついてきて、そのままぐるぐると巻きついてきて、その絡み合いが私のペニスを暴騰させ、しかし穴の中に入ることができなくて、とてももどかしい感じがしました。彼女が何を意図しているのか、すぐには理解できなかった。

それから彼女とぼくは、やや大きめの地下空間にすべりこんだが、そこには薄い紫色の光があり、円錐形をしていて、いちばん大きなところは直径三メートルほどで、そのなかに土の輪がはまっていた。

抱き合って土環に腰を下ろしてみると、この女は全身真っ赤だが、腹部の赤みが薄いのがよくわかった。頭上にはたくさんの肉管、下半身にはたくさんの細い赤紫色の肉管が下半身から出ている。

彼女はわたしの抱擁から逃れようとして、わたしの頭がのぼってくるのを見つめた。

彼女の下半身の肉管が私の口から入ろうとしていることが分かりました。案の定、彼女の体が巻きついている首に、

下半身の肉管が完全に私の口から入りました。

まもなく、胃や腸から快感が伝わってきて、彼女の肉管が腹部に突き刺さるのではないかと心配になった。やがて肛門からドロドロとした液体が噴き出してきて、太腿のあたりまで流れていくのを感じたとき、彼女の肉管が出てきたのだろうと思って安堵した。

手で触れてみると、確かに肉管が出ていて、一緒にどろどろした液体が出てきていた。

それから彼女は私の上に馬乗りになり、私の体に力を入れて狂ったように巻きつき、下半身から出てきた肉管も力を入れて巻きついた。

私に対する体力の消耗《しようもう》は大きかったが、あくまでも彼女一人であり、また彼女の肉管が私の腹部に突き刺さっていないことに、私は終始極度の快感を覚えていた。

そのうちに眠ってしまったので、目がさめてみると、もういないので、ひょっとしたら仲間を誘っているのではないかと思い、あわてて穴をすべっていって、ここにとどまることができなかった。

今回のセックスは大きな快感を与えてくれたし、少しの

痛みも苦しみもなかった。

しかし、わたしは泥の穴のなかをすべりながら、ゴーカーの女たちに気づかれないように気をつけていた。ゴーカーの女たちに恐れられていたからだ。

それから、もっと大きな円錐形の空間にすべりこんだ。そこは直径数十メートルの大きな空間で、薄紫色の光が射しこんでいたが、そこにはだれもいなかった。その中心には、巨大な蓮の花のような奇妙な植物があった,きらきらと雪のような青い光を作っている。

蓮の花の中心は蓮のようで、そのまわりには何十もの葉があり、またたくさんの細くて滑らかなひげのようなものが立っていて、その先端は小さなおたまじゃくしの頭のようで、同じように青白い輝きを作っている。

私は不思議に思って近づいて見ると、不思議な香りを感じました。

この蓮の上に、仏様が蓮の中に座っているような、奇妙な感覚があるかもしれません。ゴークの女の下半身の肉管のような、つややかに光る細いひげのようなものを見て、わたしは恐怖をおぼえ、ためらった。

しかし結局のところ、私はこのシャワーの上に座って、ノートンたちを待っていました、これ以上あちこちを掘りまわすわけにはいかないと思いました、掘りまわすことはいずれ危険なことになるでしょう。

私はこの蓮の危険に気がつかず、この大きな蓮の実に腰をおろすと、それがとてもやわらかくて、強い香りがして、私を眠くさせました。

やがて肛門《こうもん》に肉管《にくかん》が入ってくるような強い刺激《しげき》で目が覚めた。走ろうとしたが、その肉管は腹の中にもぐりこんでいて、歩けなかった。

蓮の葉が私の体に近づくと、シャワーから 7、8 人のターコイズ色の細長い蛇のような人間が出てきて、私を取り囲み、特別な生臭い緑色の粘液を私の体に吐きかけました。それから私の体にからみつき、私の体の内部にもぐりこんでくる。

私は目を閉じて、ノートンたちがやってきて私を救い出してくれることを夢想しました。

しかし、私の首にはヘビがしっかりと絡《から》みついていて、中には私の口の中にもぐり込んでくるものもいた。

今回は、グローバル・エクササイズ・ネットワークが体

内に血中酸素を注入してくれたおかげで、窒息感も、それほどの苦痛も感じなかった。

動物や植物を中心とするこれらのヘビのような人間は、私の体の内側で、外側で、巻かれ、締めつけられ、はいり込み、はい出され、私はそれに耐え、今度はあまり苦しまなかった,ノートンたちが私を連れ去るまで。

三十八、ゴークシン科学の大物に会おう。

ノートンが提案してくれたのは、地球のアインシュタインと同じくらい有名な、レヴィンという大科学者を訪ねてみようということだった,この人物は、ゴーク星の科学的発展に重要な役割を果たし、その主な貢献は、物理学、数学、哲学において、ゴーク星系に大きな影響を与えた。

あるとき、ノートンがレヴィンを予約してくれたので、わたしはノートン、スーデール、ビリーとともに、グローバル・キャンペーン・ネットワークを通じて、ゴーク星の科学交流センターにレヴィンを訪ねた。

わたしたち一行は、レヴィンが到着するのを待つために、

ゴーク星コミュニケーション・センターの一室で待っていたが、レヴィンが到着しないうちに、ノートンたちはレヴィンのことを話題にし、彼らがレヴィンをとても崇拝していることを話しあっていた。

「われわれゴーク星系において、あるいはゴーク星系において、ゴーク族の運命を握っているのは、このレヴィンのような偉大な科学者たちである。グローバルな運動ネットワークとグローバルな情報ネットワークは、ゴーク人の生活に大きな利便性をもたらしましたが、同時に、ゴーク人はこれらの 2 つのネットワークに大きく依存しているため、ゴーク人はグローバルな運動ネットワークとグローバルな情報ネットワークなしでは生活できま。

ゴーク族は科学によって支配されていたし、運命はレヴィンのような科学の大物によって支配されていたとも言える。ノートンは、「彼を通して、もっと多くのゴーク星の資源を手に入れることができる」と言った,

「レヴィンとはグローバル情報ネットワークを通じて話をしたことがあるが、本人に会う機会はなかなかなくて、この前、前の兄の資料を送ったら、今回は会うと約束してくれ

た。この機会を与えてくれた元兄に感謝します」

どうやらノートンはレヴィンを崇拝していたらしく、ヴェリーとシュデールは会話のなかでもレヴィンを崇拝していたらしく、わたしだけはどうでもいいような態度をとって、彼がアインシュタインだということを思い描いていた。

やがてレヴィンがひょっこり姿を現わした。ノートンたちと同じくらい普通の男の子のような顔をしていた。優しそうな顔をしていたが、眉毛が描かれているように見えた,黒いものが顔に貼りついている。一方、普通のゴク人は眉毛が短く、狭く、薄いため、眉毛が全く見えない人が多い。

ノートンたちはレヴィンを迎えるために立ち上がったが、その点ではわれわれ地球人と同じだった。

ノートンもスーデールもレヴィンも、右手で胸を押さえ、左腕を伸ばしてお互いの肩を軽く叩いているのが、会うときのエチケットになりそうだった。

しかし、レヴィンは偉大な科学者という棚ぼたを持っていないようで、やがてノートンたちと熱心に話し合うようになった。

ノートンとサーデイルはレヴィンと話したいことがたく

さんあるようだったが、今日はレヴィンの興味はすべて私に向けられていたので、レヴィンはノートンに尋ねた:

「あなたがたは、この元兄という地球人を、どういう目的でゴーク星に連れてきたのですか」

「前の兄は子供のころ、野原で特別に高度な文明を持つ宇宙人に遭遇しました。彼らの文明は、われわれのゴーカー星より何百万年も、おそらくは何億年も前かもしれません」とノートンは答えた,

「この特別に高度な文明を持つ宇宙人たちは、前の兄に接触したときに意識が前の兄の脳に侵入した。これらの特別に高度な文明を持つエイリアンの記憶の一部を持っていた元兄の脳で実験を行い、元兄の記憶を記録したので、後でゆっくりと数字を分析していきます。」

「そんな高級エイリアンたちが前の兄に会ったことを、どうやって知ったんだ?」レヴィンがたずねた。

「われわれはグローバルな情報ネットワークである〈地球人の研究〉部族フォーラムのメンバーであり、われわれは地球人を監視するシステムを早くから構築していた」とノートンは言った,

「他の宇宙人が地球に接触すると、私たちの装置は迅速に情報を取得し、記録された情報を自動的に追跡することができます。」

「おまえたちはよくやった。前科者の脳をスキャンして、高度な宇宙人が残した意識のメッセージのなかに、宇宙についての新しい、より深い知識を見つけたのか?」レヴィンはたずねた。

「われわれは元兄の脳の意識情報を記録しているだけで、その数字を詳細に分析しているわけではありません。この仕事は次の段階に進み、運がよければ多くの貴重な情報を得ることができるでしょう」とノートンは答えた。

「いまの機会に、宇宙の神秘に関する質問をしてみてください」とスーデイルは私に言った。

「宇宙はどうやって来たの?」と聞かれました。

「この質問自体が間違っていて、宇宙はもともと存在し、永遠に存在し続けます。宇宙には始まりも終わりもない。宇宙には年齢という概念がなく、時間は人間のまわりの空間の光速発散運動の感覚にすぎず、人間という観察者がいなければ、時間は存在しないし、前後もない」とレヴィンはいった。

スーデールは言った。

「地球上の科学者の皆さんは、宇宙が 150 億年前のビッグバンで誕生したと考えていますが、それは間違いです。

宇宙の一部では、星が引き寄せられたり、収縮したりして、密度の高い惑星を形成します、そして最後に、他の惑星と衝突し、十分な運動エネルギーを得て、大爆発を起こし、星雲を形成します,この星雲は最終的に銀河になりました、このように宇宙の一部は、繰り返し進化してきました。

あなたたち地球上のビッグバン理論は、宇宙の局所的な領域にしか適用できず、宇宙全体がビッグバンから始まったと言うのは完全に間違っています。」

「宇宙の最も深遠な神秘は何ですか? それを一言で言うことができますか? 」と私は尋ねました。

「前の兄貴が訊いたのは、宇宙の究極の定理、宇宙の最高法則だった」とスーデールは言った。

レヴィンは言った,

「私の考えでは、宇宙は物体とその周囲の空間から構成されており、それ以外のものはすべて存在せず、それと並存する第三のものは存在せず、それ以外のものはすべて、物体

の運動と物体の周囲の空間の運動についての私たち人間の記述である。

以上が宇宙の根本法則であり、宇宙の最も深遠で最高の法則であり、これより高度なものはない。

これはあらゆる宇宙文明星の人々の宇宙に対する最も深い認識でもあり、どんなに高度な星の文明であっても、宇宙に対する認識の深さはここまでである。

すべての宇宙文明の惑星において、このような認識を最初に持つ人は神のレベルと言えるでしょう。

特筆すべきは、元兄貴たち地球上で最も著名な科学者の一人が、この宇宙の根本法則を認識したことだ」

「アインシュタインですね。この人は地球上でもっとも有名な科学者です」と私は言った。

「アインシュタインではなく、ガリレオ・ガリレイという名前だったが、かつてガリレオは『われわれの五感が感じる物理的世界の存在は偽りであり、実在するものは背後の幾何学的世界である』と言った。

幾何学的世界は物体と空間によって構成されています、ガリレオはこのように言いました、宇宙には物体と空間しか

存在しないことを、認識していたということです,物理学は、物体の運動と空間の運動についての私たちの人間の記述に過ぎず、人間から切り離されていますが、物理的な世界は存在しませんが、幾何学的な世界はまだ存在しています。

宇宙には 2 つあり、1 つは私たちが目の前に見ている宇宙であり、この宇宙の存在は偽であり、もう 1 つはその背後にある本当の宇宙です。

私たちが目の前に見ている宇宙は複雑だが、その複雑さは物体の運動と空間の運動を記述することによって形成されている。

そしてその背後にある宇宙は単純に、物体と空間でできている。

あなたが見る色、聞こえる音、感じる熱、すべてはあなたが描写したものであり、人を残して存在しないものです。

他の文明惑星では、科学がある程度まで発展したときに、これらの宇宙の根本的な法則を認識することができます。

しかし、あなたがた地球のガリレオが、地球の科学が発達していなかったときに、こんなことを言ったというのは意外でした。

あなた方地球上の物理学はガリレオに由来すると言われており、あなた方地球人がガリレオの『物理世界の存在は偽りである』という言葉を本当に理解したとき,あなたがた地球人は、物理学はガリレオから始まり、ガリレオで終わると嘆くかもしれません。

宇宙の最高法則は物理学の領域に属し、物理学は運動を記述するものであり、宇宙の最高法則を理解した後、物理学の深さはここまでですが、数学とは異なり、数学には最高法則はありません,数学に対する理解には、終わりがないことがわかりました。

私たちにとって、数学には物理学が含まれており、物理学は数学の一部にすぎません。

高度な地球外文明のダイヤルでなければ、ガリレオは宇宙の神だとしか思えない」レヴィンは言った。

「われわれはいま、かつての兄をそのような神に仕立てあげようと計画している,

「フィールドスキャン技術を使って、いくつかの基本的な科学理論、特に時間、空間、場の性質に関する科学理論を、元兄の頭に入力するつもりです。元兄は将来地球の神であり、

私たちはその創造主です。

「じゃあ、どうやって星間合意同盟を通過するんだ?『惑星間プロトコル連盟』は、低レベル文明が高レベル文明の惑星を訪れた者は、帰還するときに、テクノロジーに関連する記憶をすべて消去するよう要求しているーーとくに、時間、空間、場の本質に関連する記憶は、そうだ」レヴィンはいった,

「宇宙に人間が存在する文明惑星では、場の本質の解読は、場の本質が動く空間であり、場の本質の解読は、この惑星の人間が時空技術を習得できることを意味するため、転換点です。

人工場スキャン、グローバル運動ネットワークのテレポーテーション、光速運動 ufo、無料エネルギー、病気を治療できる人工情報フィールド、意識スキャンストレージの不老不死技術などが近く実現されることを意味する。

これらの技術は人々の生活の質を大きく変えることができますが、地球全体の人々を一瞬にして殺すこともできます。

マニュファクチャラーのテレポーテーションでは、群衆の頭部を取り除くプログラムを設定し、マニュファクチャラ

ーのテレポーテーション装置を開くと、群衆は身体と頭部を分離します。

いくつかの惑星における人間集団の道徳的発展は、科学技術の発展に大きく遅れをとっており、そのようなことが起こる可能性は非常に高い。スター・プロトコル連盟がそうするのは、殺し合いを好む惑星の人々にとって理にかなっています。」

「それは、恒星間協定による検査に対処する方法を、われわれが長期にわたって研究してきたからです」ノートンは自信たっぷりに言った,

「われわれは前兄に、場に関する超前科を地球に伝えさせ、前兄を地球上の『レヴィン』にしようと努力した」

「生きている, 地球人は場の秘密を握っている, どこにも見えない力が働いている仮想時代に, 光速時代に, 宇宙の星間文明時代に, きみたちノートン、スーデール、リトル・リーのやったことが背後にある! 」レヴィンは笑った。

「元お兄ちゃんが地球で有名になったら、また ufo に乗って会いに行くよ」とビリーは言った。

「もし私が地球で無名だったら、会いに来たくない? 」

と私は微麗に言った。

「それはわからないけど、もしかしたら、まだ会いに行くかもしれないわ」とビリーは言った。

「場に関する科学理論を場スキャン技術で元兄の脳にインプットしたとしても、元兄がその知識を理解して地球に戻り、その知識を地球上に広めることができると確信しているのか?元兄にそんな能力があったのか」レヴィンは言った,

「彼らは地球上で、偉大な科学者になるためには、3 つの条件を持っている必要があります, 1, 知恵, 2, 知恵, 3, 誠実さ, 知恵と知恵は区別されます, 知恵は、主に人々が知識を受け入れ、理解し、表現するスピードであり、知恵は、人々が知識を得るための深さの処理であり、適用、要約、向上、再革新であり、知恵は明らかに知恵よりも重要です。

人間の誠実な品性も非常に重要であり、あなたは真実に固執することができ、スマートと知恵だけが真実を発見し、理解することを保証することができ、誠実な品性は、人々が長い真実の追求に固執することができます。”

「われわれが長いあいだ監視していた元兄には、この三つの性質が備わっていました」とノートンは言った。

「私たちの地球では、自然界の核心の秘密は時間の中に隠されており、人類が時間の本質を解読すれば、宇宙の核心の秘密を把握することができるという雑誌を見たような気がする?」と私は言った。

レヴィンは答えた,

「宇宙の核心の秘密は空間の中に隠されており、場の本質は円筒状の螺旋状に運動する空間であるから、宇宙の核心の秘密は場の中に隠されているとも言える。

宇宙のあらゆる物体は、もちろん観察者である私たちの身体も含めて、周囲の空間は物体を中心として、光速で、円筒状の螺旋《らせん》を描きながら、周囲に運動している,空間という運動が観察者に与える感覚は、時間である。

時間、場、質量、電荷、速度、光速、力、運動量、エネルギー、熱、音、色-これらはすべて、空間内の物体の運動に対する私たちの観察者の動きであり、物体を取り巻く空間そのものの動きです,記述されている性質のひとつ。

宇宙の核心の秘密は空間の中に隠れていて、実は空間の運動の中に隠れていて、時間の本質は光の速度の運動の空間で、宇宙の核心の秘密は時間の中に隠れていて、道理は同じ

です。

空間そのものが運動していることを認識することが、実は最も重要なことなのだ」

「では、なぜ宇宙の物体は動いているのですか? 力を受けているのですか? 力とは何ですか? 」と私は尋ねた。

「宇宙のすべての物体の運動の原因は、空間そのものの運動にある。力は、物体と空間の運動状態の変化の程度と見ることができる」とレヴィンは答えた。

「オー、物体の運動は空間の運動によって引き起こされるのに、空間はなぜ運動するのですか? 」と私はまた尋ねた。

「物理学は私たち人間の幾何学的世界の記述にすぎないので、物理的にどのような状態でも、対応する幾何学的状態を見つけることができます」とレヴィンは言います,

幾何学における空間の三次元垂直状態とは、空間のどの点を通っても、最大で三本の垂直な直線を作ることができるということである。

垂直状態は、私たち人間の脳によって分析され、計算され、記述され、このように加工されると、物理的な運動状態となる。

3 次元空間の垂直状態にある物体の位置は、私たちの観測者に対して運動しなければなりません,そして、絶えず変化する運動の方向と歩いた軌跡は、再び 1 つの垂直状態を構成することができる。

これは物体と空間の運動の背後にある原因であり、力は物体と空間の運動状態の変化の程度であり、力を使って物体と空間がなぜ運動するのかを説明しようとすると、あなたの認識は十分に深くない。

運動の本質は、人間が空間の垂直状態を記述することであり、私たちの観察者から離れては、運動状態も静止状態も存在せず、運動であるか静止しているかを議論することは意味をなさない」

「ふふ、その言葉はわからないようでわからない」わたしは気まずそうに言った。

「あなたにはわからないでしょうけど、宇宙のすべてのものと空間がなぜ動いているかを説明するこの問題は、宇宙の中心的な秘密のひとつなのよ」とシュデールは私に言った。

「本で読んだんだけど、空間は三次元だという人がいる。空間の一点を通過して、せいぜい三本の垂直な直線を作るこ

とができるというのに、どうして空間は三次元なの。

「宇宙では、小さいものから電子、陽子、大きいものから地球、月、太陽、銀河系に至るまで、空間に自由に存在するすべての物体は螺旋状に運動しており、空間そのものも円筒状の螺旋状に運動している。

「われわれ人間に対して、空間の直線運動は一次元空間を構成し、一つの平面上での回転運動は二次元空間を構成し、回転に加えて回転平面の垂直方向の直線運動は、円筒状の螺旋運動である,

空間の瞬間は円筒状の螺旋状に動き、三次元空間を生み出す。

私たちが住んでいる空間は、右手のらせん空間であり、私たちは右手でらせん空間を保持し、4 本の指とらせん状の方向が一致すると、親指の方向が直線的に動き、円筒状のらせん状の動きがあります,スピン運動とスピンの平面相垂直な直線運動の合成です」

「左手に ? | 空なる螺旋《フエーン・フエーン》 ? はありますか? 」と私はたずねた。

「自然のものは存在しない。人工的に作られたものであ

り、天然の左手の螺旋空間、つまり物体の周囲の空間が左手の螺旋で運動すると、普通の物体の周囲の右手の螺旋で運動する空間と接触すると、相互に排斥し合い、宇宙の億万年の運行進化の中で宇宙の端まで排斥され、宇宙には左手の螺旋空間が存在しているが、我々はそれを発見することができない」とレヴィンは答えた。

「運動に関しては、あなたがた地球の科学者は、物理学における運動状態の記述がわれわれ人間から切り離せないことに気づいていない」スーデールが口をはさんだ。

「運動の状態は、私たち人間の記述に由来し、私たちの観察者が、物体が空間のある場所で肯定する... 否定する... そして肯定する... そして否定する... そして肯定する... そして否定する... というプロセスです」

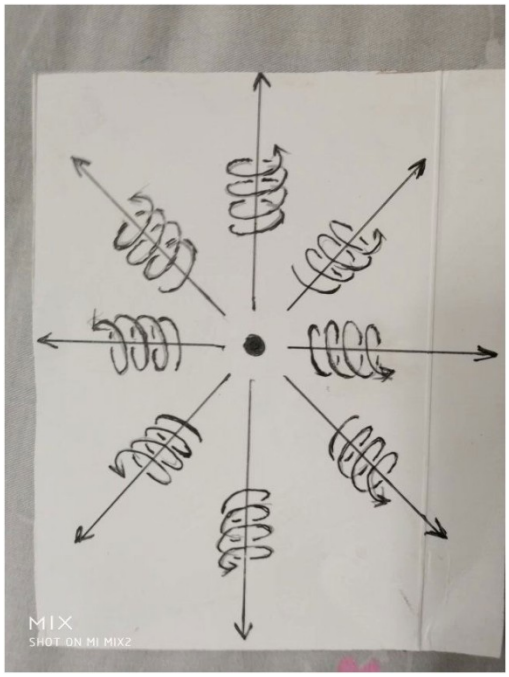
レヴィンは付け加えた,

「運動状態は観察者によって記述されるが、もちろん静止状態も観察者によって記述される。観測者がいなければ、あるいは観測者を特定しなければ、運動の状態は不確定であり、静止している状態も不確定であり、運動や静止を記述することに意味はない」

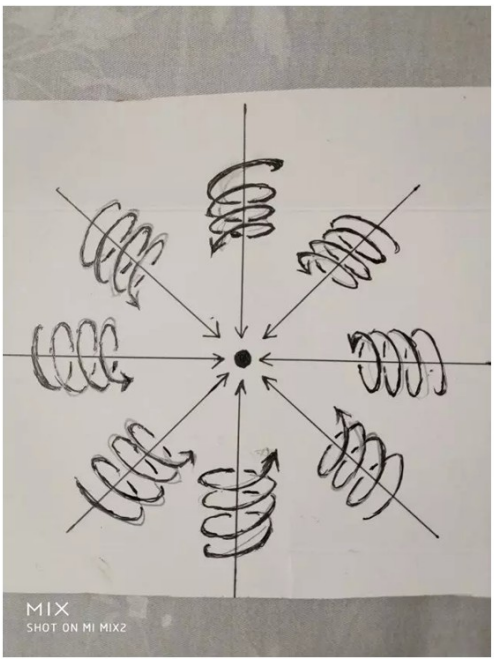
「質量、電荷、場、力、運動量、エネルギー…… これらの概念は、宇宙の本質を理解するうえでも重要なものだ」とスーデールはいった。

「質量とは、光の速度で運動する物体の周囲の空間の変位の棒数にすぎない。

正電荷とは、単位時間あたりに光速で周囲に広がっていく物体の周囲の空間的変位の数である。



負電荷とは、物体の周囲を単位時間当たりに、周囲から無限遠に光速で負電荷に収束運動する空間シフトの本数である。



正の電荷と負の電荷の周りの空間はまだ円筒状のらせん状に動いていますが、両方とも右手のらせん状に満足していますが、正の電荷は周囲に広がり、負の電荷は内側に収束します。

エネルギーはまた、物体が空間内でどのくらい運動しているか、そして物体の周りの空間がどのくらい運動しているかを反映しています。」

レヴィンが説明してくれた,

「あなたがたの地球上の運動量は、質量に速度を掛けたものであり、われわれのゴク星の運動量の概念は、ベクトルの光速から物体の運動速度を引いたものに質量を掛けたものであり、ベクトルの光速の方向は変化することができる。

なぜ私たちの運動量の概念は、あなたの地球の運動量の概念よりもベクトル光速が 1 つ多いのですか?なぜなら、あなた方地球人は、物体が静止しているとき、周囲の空間は常にベクトル光速で周囲に広がっているということを認識していないからです。

この運動量の公式を時間に導関数を求めると、4 つの力が得られます 1 つ目は、ベクトルの光速に質量を掛けたものです、この電場の力です,2 つ目は物体の質量に時間とともに移動する速度を掛ける力、これは磁場の力、3 つ目はベクトルの光速に時間とともに質量を掛ける力、これは核の力です,四つめは、時間の経過とともに運動速度に質量がかけられる力です。この力は万有引力であり、あなたがたのニュートン力学の慣性力です。

これは、あなたがた地球の科学者アインシュタインが、宇宙の 4 つの力を 1 つの方程式にまとめた大統一方程式です。彼は何十年も頑張りましたが、うまくいきませんでした」

「きみたち地球の科学者は、光子が何であるかを知らずに、発光の本質を理解していない」とスーデールは言った。

「光子とは、加速度運動をしている負の電荷が反重力場

を生み出し、電子の質量と電荷の一部を消滅させて励起状態となり、光速で運動する。

光子の粒子性は、光子が電子励起によって、形成されるからです、光子の波動性は、空間そのものの、ゆらぎによるものです、空間は瞬間的に変動し、横波となり、円筒状のらせん運動を、重ね合わせます,波動の速さは光の速さで、光子は空間の中で静止し、空間とともに動いています。

光子のエネルギーが量子的であるのは、光子が励起するのに一定のエネルギーが必要だからです

レヴィンは続けた,

「光子には通常、二つのモデルがあります。一つは励起電子で、円筒状の螺旋状に運動し、直線運動の部分は光速です。もう 1 つは、2 つの励起電子が同じ直線を軸として対称的に回転運動し、回転面に沿って垂直方向に光速で直線運動することです。」

「レヴィンの言っていることがわかりますか」とノートンが私に尋ねた。

「部分的にしか理解できなかったけれど、彼の言葉を覚えていれば、あとで少しずつ理解できるようになるかもしれ

ない」と僕は言った。

「人工的にスキャンしたカットオフ技術を使って、これらの知識をあなたの脳にスキャンします。私たちのデザインでは、これらの知識がすべてあなたの脳から出てくることはありません、そうすると、あなたの脳はそれに耐えられません。

これから使っていくうちに、きみたち地球人にとってきわめて重要な知識を身につけることになるだろう」ノートンは言った。

そして最後に、ゴーク星の歴史上すでに亡くなっている著名な科学者数人を招き、仮想デジタル情報の代弁者という形で、私たちの前に現れ、話をしてもらった。

ノートンは、私たちの地球上で、将来的にはニュートン、ガリレオ、アインシュタインのような有名な科学者の仮想デジタル情報のキャラクターが生まれ、公共の場に現れ、公衆と交流することができると述べました。

第 39 章ゴークの科学者が語る人間の意識、魂、輪廻

「私たち地球上の人間は死んでしまえば何も残らないのでしょうか? 人間が死んでから生まれ変わるというのは本当でしょうか?」

「あなたがた地球上の、そして宇宙に存在するいかなる種類の人間にとっても、死は本当の死ではありません。あなたがた地球上の人間の生まれ変わり、生命の輪廻転生は本物です。宇宙には、多くの惑星上の人間の生命の輪廻転生が本物です」ノートンは答えた,

「人間は二つの部分に分けることができ、一つは人間の身体であり、もう一つは人間の思想意識であり、人間の思想意識は人間の脳の中の荷電粒子の運動形式であり、その本質は情報に属し、情報の量で表すことができる。

おまえたち地球人の意識にどれだけの質量、体積、エネルギーがあるかというと、これははばかげている。

人間の体は死ぬことができ、腐敗することができ、そして人間の中心-イデオロギー意識は本質的にメッセージに属する運動形態であり、死ぬことはなく、腐敗することはなく、宇宙で繰り返し現れることができます。

宇宙の基本法則は、すべての運動形態、すべての可能性、

すべての情報を、繰り返し、無限に表現することである。

これが、あなた方地球人の生命の輪廻転生が真実である理由であり、その理由は単純である。

あなたがた地球人は、地球上で生まれてから死ぬまで、無数の生命がそのうちの一つを輪廻しているにすぎません。あなたがた地球人が死にかけていることを、うすうす気づいているかもしれません。

あなたたち地球人のこの輪廻は繰り返しの輪廻であり、人には前世があり、前前世があり……後世があり、後世がある……、あなたたち地球上の一人一人はこのように繰り返される、無限の輪廻転生である。

輪廻転生は一人や二人の特殊なケースではなくて、あなたたち地球上のすべての人間、すべての動物を含めて、宇宙の他の有人の星のすべての人間、すべての動物を含めて,彼らが不老不死の技術を身につけていないときには、おまえたち地球人と同じように輪廻して、しかも無限回転を繰り返しているのだ」

微麗は言いました、「お兄ちゃん、前世って何? 後世って何? 」

「知らないよ、そんなこと知るもんか」と僕は言った。

「あの人の魂って何? 」と僕はまた訊いた。

「あなたがた地球人の思想意識は、ほとんどが同じか似ているが、肝心の五分の一は異なっており、魂はその異なった部分である。

人間の魂はイデオロギー意識の一部であり、人間のイデオロギー意識の最も中心的な部分であり、およそ 5 分の 1 を占め、ある人と他の人とを区別する鍵は、魂の違いです。人間の身体は二次的なものであり、身体は魂の乗り物にすぎない」とノートンは説明してくれた。

「人間の脳の荷電粒子は、周囲の空間に摂動《せつどう》を与え、周囲の空間をゆらめかせ、そのゆらぎによって人間の意識情報が含まれ、それを波動という形で光速で周囲に伝播《でんぱ》させることができるのです」

レヴィンが手を振ると、空中に三次元の仮想イメージが現われ、人の頭のまわりに光のようなものがたくさん散らばって動いているのが見え、レヴィンはつづけた,

したがって、人間の思想・意識情報は、空間の波動という形式によって表現されることもあれば、永遠に空間の中に

保存され、永遠に消えることはない。

人間の魂はイデオロギー意識の一部であり、同様に人の周りの空間の波動の形で表現することができ、人間の魂の波は実際に存在し、魂は波動性を持ち、魂の重要な特徴です。

光の速度で運動する三次元空間は、運動方向に沿って一次元の空間長さがゼロに縮まり、二次元空間になる。二次元空間は、宇宙のどの三次元空間からも距離がゼロであるため、一人の人間の魂のメッセージは、一瞬のうちに宇宙のどの領域にでも到達することができる。光の速度で伝わる情報は、実際には二次元空間に存在している。

3 次元空間に分布している情報は、2 次元空間に完全に保存することができます。

情報の本質は物質の運動形態であり、物質そのものではなく、物質の構成部分でもない。

宇宙のどこにでも、宇宙全体の今日、過去、未来に関するすべての情報を含むことができる。これは、私たちの宇宙空間情報フィールド理論における最も重要な情報全体とサブ情報の概念である。

あなた方地球には未来を予言する預言者がいます、なぜ

なら、どの空間においても、過去と未来の全ての情報が隠されているからです、そして、これらの預言者達は、空間に隠された未来の情報を捉える能力を持っています。

時間は、私たち観察者が周囲の空間の光の速度の拡散運動について感じるものなので、人間がいなければ、時間は存在せず、前後もなく、観察者がいなければ、宇宙には億万年前、億万年後も存在しません,すべての情報は、空間の一点に重ね合わせることができます。

空間は情報を蓄積するだけでなく、情報を伝達することもできる。

メッセージを伝える空間は、一点から、パケット全体のメッセージを、周囲に伝えることができます、空間を伝わるメッセージを、ある場所で受け取り、別の場所で受け取ることができます,違いはありません。

つまり、空間を伝播する情報は、どの方向でも内容は同じなのです。

情報は物体とは異なり、情報は空間の中で重ね合わせることができるが、物体は空間の中で自由に重ね合わせることはできない。情報の違いは主に構造で、物体の違いは、体積、

長さ、品質などの要素によって決定されます。」

宇宙空間には無限大の情報が含まれており、情報は運動形式であり、運動形式は可能性である。宇宙に無限の情報があるということは、宇宙には無限の可能性があるということでもある。

宇宙の法則は、宇宙はすべての可能性を無限に繰り返し表現するということです。

どんなに奇妙なことでも、どんなに奇妙な考えを持った人でも、どんなに特別な魂でも、考えられること、考えられないことはすべて、結局は宇宙に現れるのです,それも繰り返し、無限に出現する。これは宇宙の情報が無限大であることの必然的な現れでもある。

どんな馬鹿げた、奇妙なことでも、これから起こるのは、遅かれ早かれ、ある時期に起こる確率の大小だけだ」

レヴィン以上の言葉は、わたしには理解できない。

「われわれ地球人が生まれ変わるとき、どこで生まれ変われば、あなたがたのゴーク星に生まれ変われるのですか?」と、私はたずねた。

「その可能性はない。われわれゴーク星人は不老不死に

なれた。きみたち地球人はわれわれゴーク星人にタイヤをまわすことはできないが、ほかの後進惑星にタイヤをまわすことはできる」とスーデールはいった。

「それじゃ、われわれ地球は生まれ変わるのかい?」と、私はたずねた。

「そんなことはありませんよ、人間の魂のかたちとは大きく異なりますからね」とノートンは言った。

「生まれ変わったら、女になるんですか?」と私は尋ねた。

「そんなことはありませんよ、魂の形があまりにも違えば、その人物はあなたではなくなります」とノートンは言った。

「人間の生命は本当に輪廻転生することができるのですから、私たち地球人は死を恐れる必要はないのでしょうか?」と私は尋ねた。

ノートンは答えた,

「あなたがた地球人の記憶を完全に失わせた死は、人間にとって最大のダメージであり、他の要因とは比較にならないものです。

人間の本能的意識は先天的であり、倉庫のようであり、

記憶は後天的であり、倉庫に積み上げられた貨物のようであり、魂は倉庫で働く労働者のようである。

記憶は倉庫の積荷のように少しずつ積み重なっていく。記憶が失われるのは、積荷が失われるのと同じだ。

あなたがた地球人のひとりが死んで脳が腐り、本能的な意識や魂や記憶情報が失われても、完全になくなったわけではなく、空間に蓄えられているのです。

本能的な意識や魂は空間に保存されているけれど、記憶とは切り離されている。倉庫が別の場所に移動したり、倉庫が破壊されたりするように、すべての商品が失われます。

あなた方地球上では、受精卵から始まって、空間にある魂のメッセージをダウンロードし、最終的に大人になって、魂が豊かになります。

記憶は、人間が成長する過程で、生活の中のさまざまな感覚や体験を加工し、脳に蓄積していくことで、徐々に蓄積されていくものです。

あなたがた地球人の本能的な意識は、両親の遺伝子によって獲得されたものです」

「ぼくの前世を知る方法はないのかね」と、私はたずね

た。

「あなたの前世についても、あなたの後世についても、いくつかの情報を得る方法があります」とノートンは私に言った,

「宇宙のどの空間にも、宇宙全体の以前、以後、現在についてのすべての情報が含まれており、自然にあなたの前世、後世についての情報も含まれている。これは、われわれの宇宙空間情報フィールド概念のもっとも重要な定理のひとつだ。

人工的に空間をスキャンし、そこに隠された情報を解読して、あなたの前世と後世の情報を知ることによって、あなたが地球に戻ってきたときの、おおよその人生経験を予測することができます。

不思議に思われるかもしれませんが、私たちはあなたの前世の情報を知ることができます、前世のことはすでに起こっていますが、あなたの後世の情報はまだ起こっていないのに、どうして予測できますか?

実はこれは時間の本質と関係があり、時間は私たちの周りの空間の光の速度の発散運動に対する感覚である。観察者である人間がいなければ、何億年も前、何億年も後に起こっ

たことはすべて空間の一点に重なっている。逆に空間の一点から、理論的には宇宙のすべての情報を解読できるようになる」

レヴィンは続けた,

「しかし、それを具体的に実行することは非常に困難です。われわれゴーク人は、空間に隠された情報を解読することによって、未来を予言することができ、われわれの惑星における現在の最先端の科学研究であり、最も多くの資源を投入しています。

私たちの惑星で最も優れた数学者や物理学者が、この研究に参加しています、そのために必要な基礎知識です、物理学には宇宙情報場理論が必要です、数学には多くの理論が必要です,主にトレンド分析です。

私たちが使っている傾向分析は、地球上の微積分と似ています。

しかし、傾向分析は微積分よりも幅広く、除数がゼロの場合、分析はそのようにゼロになる傾向があり、多くの数学の枝が生まれました。トレンド分析はまた、結果を予測するために、ズームインやズームアウトによる類推も行います。

もちろん、トレンド分析というのは未来を予言するもので、それがこの数学がトレンド分析と呼ばれる理由でもあります」

「空間に隠された情報の研究によって、あなた方地球人の前世・後世の魂だけでなく、あなた方地球上の唐代・宋代の真実の映像資料も得ることができる。

もしわれわれゴック人ときみたち地球人が正式に接触したら、これらの資料をきみたち地球人に見せるだろうし、きみたち中国人は自分たちの本当の歴史を知ることができるだろう」シュデールはいくらか得意げにいった,

「私たちのゴック族は、あなたたちの地球に昔から来て、実際の映像資料をたくさん撮影してきた。しかし、空間に隠された情報を解読して得た映像資料が全面的なものには遠く及ばない」

「それで、あなたがたはいつ、われわれ地球人と正式に接触するのですか? 」と、わたしはたずねた。

「きみたち地球人が光速の ufo をつくれば、われわれは正式に接触するかもしれない」とスーデールは言った,

「あのとき、われわれゴーク星人が、あなたがた地球人

と正式に接触しなかったとしても、ほかの高等文明星人があなたがたと正式に接触したとしても、あなたがた地球人は彼らと対話する資格があると思ったかもしれません。それに、あなたがた地球人が光速の円盤を飛ばして宇宙を駆けめぐっているとしたら、あなたがた地球人は突然出会ったにちがいありません。むしろ早く正式に接触して、ある程度

40、帰宅。

やがてノートンが私を家まで送ってくれたことを話してくれました、ゴーカー星での最近の出来事は、とても新鮮で刺激的で、とても素晴らしかったです、行くのはとても寂しかったです。

さらに悲しいことに、スーデールとノートンに ufo で送ってもらうつもりだったのに、なぜマイリーは家まで送ってくれなかったのだろう?ノートンが説明してくれたのは、マイクロリー自身が私を送ろうとしなかったからだ?別れるときの悲しみが耐えられないのか?

自分のことを大きく考えすぎていないか?もしかしたら、

地球人の彼氏でも構わないと思っている彼氏が微麗にはたくさんいるのかもしれません。ノートンたちがわざと言い訳をしているのかもしれない。

ノートンたちは私の帰国の準備をしていました、ノートンは惑星間協定のことを気にしているようでした、彼は真剣に宿題をしていました、どうすれば惑星間協定の検査を逃れられるか、私に教えてくれました,フィールド関連の先端テクノロジーを地球に持ち帰ったというのに、わたし自身はそんなことはどうでもいいという態度で、ただ微麗を懐かしみ、彼らの手配に不満だったが、やむをえなかった。

ノートンが空中で手を動かすと仮想映像が現れ、その中に私の姿が現れ、裸の男が部屋のベッドに横たわり、一人が部屋に入ってきます、こちらはツナギの服を着ています,頭まで被《かぶ》って、後頭部に太い黒いパイプを尻《しり》の後ろにつないで、マイクのようなものをこちらに向けて、自分は小さな仮想スクリーンを見つめている。

ノートンは言った,これは彼らが持ってきたスキャナーで、彼らは私たちのものではなく、あなたの脳のいくつかの意識情報をスキャンすることができます, 惑星間プロトコルは、あ

なたのゴーカーの記憶のいくつかを削除するように求めています, 彼らはあなたをチェックし、まだ残っている場合、彼らは自分自身を削除するか、再削除するように私たちに要求します。

彼らはこれをあなたの頭に当てて、あなたの頭の中にゴーカー星の見聞の記憶が残っていないかどうかをチェックしているのです。

こんなイメージがあります、黒い四角い枠があって、その真ん中で突然、強い光が点滅します、これは深さを測定しています。

このテストに対処する方法があるので、すぐにあなたの頭の中の意識活動の連続的なイメージをお見せします」

ノートンはふたりの美女を呼んだ。身長も一メートルぐらいだが、とてもきれいだった。甘く優しい顔立ちで、ほんのりとした美しさよりも美しい感じがした。われわれ地球人の顔に近く、腰はすらりとしていた,股間にふくらんだものはなかった。

肌の色もわれわれ地球人のそれに近く、ゴーク人の肌によく見られるようなピンクがかった白色に青緑色が混じって

いるわけではない。

ふたりはわたしの横に座り、小さな手でしきりにわたしの体を撫でていた。わたしは服を着ていなかったので、ノートンが目の前に立っていた。わたしは恥ずかしかったが、ノートンは平気だった。

ノートンはこう言いました、「この 2 人は我々が開発した特殊な機能を持つ人間で、催眠術をかけたり、脳の意識情報を空間的に制御したり、影響を与えたりすることができます」

案の定、やがて眠気が襲ってきて、眠っているうちに、はじめのうちは二人の美女がそばにすわっていることがわかったが、すぐに地球の故郷に帰ったような気がして、実感が湧いてきた,そばにいた二人の美女は、どういうわけか、一人は私の母親になり、一人は私の妻になり、二人は仲良く暮らし、料理をし、洗濯をし、野菜を植え、鶏や鴨を飼い、農作業をしていた,薪を割り、魚を捕まえ、作物を育てる。

ときどき、頭のイメージが途切れ、またつながる。

目が覚めると、ふたりの美女がまだ隣に座っていて、ノートンは三次元のバーチャル・スクリーンを指さして、さっ

きはこんな夢を見ていたのかと訊いた?驚いたことに、バーチャルスクリーンに映っているのは、夢を見ているのと、まったく同じ光景でした。

「そうです、私が見た夢と同じです、すごいですね」

「わかりました」ノートンは後ずさりして、両手を握りしめ、大きく振り上げた。「これこそ、わたしが求めていたものです」

それからノートンと二人の美女は立ち去った。ツナギの服を着た『星間協定連盟』の人間がやってきて、マイクのようなものを私の頭に当てると、案の定、やがて私の頭の中に黒い四角い枠がどんどん出てきて,四角い枠の真ん中で強い光が素早く点滅する。同時に、二人の美女が私の妻と母親に変わる映像が再び私の頭の中に浮かんだ。

〈スター・プロトコル・アライアンス〉の連中が行ってしまってから、検査が終わったときも、ぼくはまだ目を覚ましていなかった。

「エリアマップ 300 宇宙船、自動操縦モードを開始ー」という声が聞こえたとき、私はすでに帰還の途についていることを知った?

ゴーク星に行くのは、期待と好奇心に満ちた、地球に帰るという面白くない日常だった。目を開けたまま、横になっていたくない。

突然、女性の話し声が聞こえ、銀の鈴のような笑い声が聞こえたので目を開けると、スーデールとノートンが真剣に仮想スクリーンを見つめていた。

(笑)前に私と一緒にいた 2 人の美女が、私の前にひざまずいています、私の耳には通訳のメッセージが届いていないようで、好奇心で彼女たちを見つめています。彼女たちはまだ笑っていて、私には理解できないことを話しています。

ノートンたちとわたしたちを隔てるバーチャル・バリアーを手で描いていると、突然わたしの耳に通訳が入った。

彼女たちはノートンの手伝いをする代わりに、地球の男の体を体験することができると言った。

彼女たちがわたしに近づいてくるときの表情は、明らかに、地球人、マーキュリー海底人、ゴク人、すべての女性が同じように、はっきりと、男性の性愛に対する女性のあこがれの表情だった。

二人は私にキスをし始め、着ていたバーチャルスーツも

さっと引き下がり、二人の股間《こかん》にはゴーカートの女によくあるようなふくらみはなかったが、私が見ると、指先ほどの赤いアイデアしかなかった,二人ともそうなのに、これでどうしてセックスができるの?がっかりして目を閉じてしまうと、彼女たちの愛撫を楽しむしかなさそうです。

ふと、股間《こかん》に蛇《へび》のようなものを感じて目を開けると、それは二人の美女の下半身からピンク色の箸《はし》の太い肉管《にくかん》を突き出して私の上を泳ぎ、やがて肛門《こうもん》に潜《もぐ》り込んで、,ふたりの女が蛇のようにからみつき、幻覚を見たり醒めたりするのを感じながら、激しい快感が襲ってきた。

ふたりの美女は私の体力を消耗し、私は汗びっしょりになっていたが、彼女たちは私の体をなでたりなでたりしながら、じゃれあったり笑ったりしていた。

眠っているうちに、どうやって家に帰ってきたのかわからなくなって、目が覚めたら、裸で自分の部屋のベッドに横になっていて、窓を見て朝になったことを知って、起きようとしたけれど、シャツもパンツもどうしても見つからなかった,仕方なく、洗濯物の置いてあるところで、一着を取り直し

ました。

母屋に行くと、毎日のように地面から立ちのぼる鴨の糞の匂いがした。母は朝食を作っていたが、まだ堂屋に閉じ込められた鴨を放していなかった。

外に出ると、慣れ親しんでいた周囲の環境が見慣れないものに感じられた。何年も外で暮らして帰ってきたような感覚だった。

近所の女の子を見て、今日は何月何日ですか、と聞くと、手を止め、身体を捻《ひね》って真剣な様子で答えてくれたが、内容は「わからない」というものだった。

張祥前の主な作品

「ゴーカー星の冒険」

张祥前

「安徽農民外星球一ヶ月見聞」

宇宙人の社会と日常生活

『宇宙人のセックス事情を紹介』を収録

『ゴクシンの寄生人種』

『果克星人はどんな姿をしているのか』

『予言サイキックの謎解き』

予言者の謎を解き明かす

『統一場論』

『万有引力の本質を明らかにする』

『電荷、電磁場の本質の解明』

安徽伝説の農民が明かす人体、生死、輪廻、意識、魂の謎

『秘密を暴く人の生死の謎』を収録

『人が死ぬときの気持ち』

『人の苦しみの根源』

『前世の愛の紹介』

『生命の輪廻転生の真実性を証明する最新科学理論』

宇宙人 ufo の謎解き

『物質と情報』

『時間・空間の本質と宇宙の核心秘密』

『安徽農民張祥前のプロフィール』

『人間性、美醜、智慧、愚昧、奴隷性』

宗教、科学、哲学、文化、芸術

『我々は皆農民である』

『中国人の本質を見抜く』

『張祥前の恋愛小説』

「未来予言」

『秘聞、奇聞、怪異の事』

「国家起源の謎」

全部 98 元、見たいネットユーザー加微信 18714815159

もし相談して張祥前のメールアドレス zzqq2100@163.Com